

vRealize Operations Manager 構成ガイド

vRealize Operations Manager 6.5

このドキュメントは新しいエディションに置き換わるまで、ここで書いてある各製品と後続のすべてのバージョンをサポートします。このドキュメントの最新版をチェックするには、<http://www.vmware.com/jp/support/pubs> を参照してください。

JA-002410-01

vmware[®]

最新の技術ドキュメントは VMware の Web サイト (<http://www.vmware.com/jp/support/>) にあります
VMware の Web サイトでは最新の製品アップデートも提供されています。

このドキュメントに関するご意見および感想がある場合は、docfeedback@vmware.com までお送りください。

Copyright © 2017 VMware, Inc. 無断転載を禁ず。著作権および商標情報。

VMware, Inc.
3401 Hillview Ave.
Palo Alto, CA 94304
www.vmware.com

ヴァイエルムウェア株式会社
105-0013 東京都港区浜松町 1-30-5
浜松町スクエア 13F
www.vmware.com/jp

目次

構成について 7

- 1 データ ソースへの vRealize Operations Manager の接続 9
 - VMware vSphere vRealize Operations Manager のソリューション 9
 - vRealize Operations Manager での vCenter アダプタ インスタンスの構成 11
 - アクションに適したユーザー アクセスの構成 12
 - Endpoint Operations Management vRealize Operations Manager のソリューション 13
 - Endpoint Operations Management エージェントのインストールとデプロイ 13
 - vRealize Operations Manager でのロールと権限 49
 - クラスタでのエージェントの登録 50
 - オペレーティングシステム オブジェクトを手動で作成する 50
 - 構成パラメータの指定されていないオブジェクトの管理 51
 - 仮想マシンをオペレーティングシステムにマッピングする 52
 - Endpoint Operations Management によるオペレーティングシステムの監視方法のカスタマイズ 52
 - Log Insight 62
 - [Log Insight] ページ 62
 - [ログ] タブ 63
 - vRealize Operations Manager で vRealize Log Insight を構成する 63
 - ビジネス管理 64
 - vRealize Business for Cloud アダプタの構成 65
 - vRealize Operations Manager でのオプションのソリューションのインストール 66
 - ソリューションの認証情報の管理 66
 - コレクタ グループの管理 67
- 2 アラートおよびアクションの構成 69
 - アラートのタイプ 69
 - アラートの構成 69
 - vRealize Operations Manager でのアラートの定義 69
 - アラートの症状の定義 70
 - アラート定義の推奨事項の定義 73
 - 新しいアラート定義の作成 73
 - アラート定義のベスト プラクティス 74
 - vRealize Operations Manager のアラートの通知の作成および管理 75
 - 部門のオブジェクトに対するアラート定義の作成 86
 - アラート グループ 95
 - アクションの構成 97
 - vRealize Operations Manager アクションのリスト 97
 - 自動化に対応するアクション 99
 - vRealize Automation とのアクションの統合 100
 - パワーオフ可を使用するアクションのアクション 101

3 ポリシーの構成 105

ポリシー 105

ポリシーの決定事項と目的 107

ポリシーの [ポリシー ライブラリ] タブ 107

ポリシーの [アクティブなポリシー] タブ 109

運用ポリシー 111

ユーザー シナリオ：本番の vCenter Server データストア オブジェクトの運用ポリシーの作成 112

ポリシーのタイプ 120

カスタム ポリシー 120

vRealize Operations Manager におけるデフォルト ポリシー 127

vRealize Operations Manager で提供されるポリシー 128

監視ポリシー ワークスペースを使用した、運用ポリシーの作成および変更 129

vRealize Operations Manager のポリシー ワークスペース 130

4 スーパー メトリックの構成 149

スーパー メトリックの作成 150

スーパー メトリックを拡張する 153

スーパー メトリックのエクスポートとインポート 154

5 オブジェクトの構成 155

オブジェクトの検出 155

オブジェクトについて 156

環境内のオブジェクトの管理 157

VMware vRealize Operations Manager でのカスタム オブジェクト グループの管理 162

アプリケーション グループの管理 165

6 データ表示の構成 167

ウィジェット 167

ウィジェットの相互作用 168

メトリック構成の管理 168

リソース相互作用 XML ファイルの追加 169

ウィジェット定義リスト 170

ダッシュボード 172

ダッシュボードのタイプ 173

ダッシュボードの作成と構成 180

ダッシュボードの管理 183

表示 185

ビューの概要 186

ビューおよびレポートの所有権 186

ビューの作成と構成 186

ビューの編集、クローン作成、および削除 196

ユーザー シナリオ：仮想マシンを追跡するための vRealize Operations Manager 表示の作成、実行、エ

クスポートおよびインポート 196

レポート 198

[レポート テンプレート] タブ 199

[生成されたレポート] タブ 199

レポート テンプレートの作成と変更 200

vRealize Operations Manager レポート用ネットワーク共有プラグインの追加 202

ユーザー シナリオ：仮想マシンを監視するためのレポートの取り扱い 203

7 管理設定の構成 209

vRealize Operations Manager でのユーザーとアクセス コントロールの管理 209

vRealize Operations Manager のユーザー 210

vRealize Operations Manager でのロールと権限 213

ユーザー シナリオ：ユーザー アクセス コントロールの管理 213

vRealize Operations Manager でのシングル サインオン ソースの構成 216

vRealize Operations Manager のユーザーおよび環境の監査 219

vRealize Operations Manager のパスワードと証明書 220

vRealize Operations Manager 管理者パスワードの変更 220

vRealize Operations Manager パスフレーズの生成 220

vRealize Operations Manager のカスタム証明書 221

グローバル設定の変更 224

グローバル設定のリスト 225

グローバル設定 226

vRealize Operations Manager サポート バンドルの作成 227

アイコンのカスタマイズ 228

オブジェクト タイプ アイコンのカスタマイズ 228

アダプタ タイプ アイコンのカスタマイズ 228

8 OPS-CLI コマンドライン ツール 231

dashboard コマンドの動作 232

template コマンドの動作 232

supermetric コマンドの動作 233

attribute コマンドの動作 234

reskind コマンドのオブジェクト タイプに関する動作 234

report コマンドの動作 234

view コマンドの動作 235

file コマンドの動作 235

インデックス 237

構成について

VMware の『vRealize Operations Manager 構成ガイド』では、環境の構成方法と監視方法について説明します。このガイドでは、vRealize Operations Manager を外部データ ソースに接続し、その外部データ ソースから収集したデータを分析する方法、ユーザーとユーザーがサポートするインフラストラクチャの環境を適切に維持する方法、リソースを構成してオブジェクトの動作を決定する方法、および vRealize Operations Manager に表示されるコンテンツをフォーマットする方法について説明します。

ご使用の vRealize Operations Manager のインストール済み環境の保守と拡張に役立つよう、この情報では、ノードおよびクラスターの管理、NTP の構成、ログ ファイルの表示、サポート バンドルの作成、およびメンテナンス スケジュールの追加を行う方法について説明します。また、ライセンス キーおよびグループについての情報が提供されており、パスフレーズの生成、認証に使用される証明書の確認、記述プロセスの実行、および高度なメンテナンス機能の実行を行う方法についても説明しています。

対象者

この情報は、vRealize Operations Manager の管理者、仮想インフラストラクチャの管理者、および環境内におけるオブジェクトのインストール、構成、監視、管理、および保守を行う運用エンジニアを対象としています。

VMware の技術ドキュメントの用語集

VMware の技術ドキュメントには、新しい用語などを集約した用語集があります。当社の技術ドキュメントで使用される用語の定義については、<http://www.vmware.com/support/pubs> をご覧ください。

データ ソースへの vRealize Operations Manager の接続

1

vRealize Operations Manager でソリューションを構成して、環境内の外部データ ソースからデータを収集して分析します。接続後は、vRealize Operations Manager を使用して、環境内のオブジェクトを監視および管理します。

データ ソースへの接続だけを提供するソリューションもありますが、定義済みのダッシュボード、ウィジェット、アラート、ビューを含めることもできます。

vRealize Operations Manager には VMware vSphere および Endpoint Operations Management ソリューションが含まれます。これらのソリューションは、vRealize Operations Manager をインストールするとインストールされます。

その他のソリューションは、NSX for vSphere 用 VMware 管理パックなどの管理パックとして vRealize Operations Manager に追加できます。Vmware 管理パックやその他のサードパーティのソリューションをダウンロードするには、[VMware Solution Exchange](#) にアクセスしてください。

この章では次のトピックについて説明します。

- [VMware vSphere vRealize Operations Manager のソリューション \(P. 9\)](#)
- [Endpoint Operations Management vRealize Operations Manager のソリューション \(P. 13\)](#)
- [Log Insight \(P. 62\)](#)
- [ビジネス管理 \(P. 64\)](#)
- [vRealize Operations Manager でのオプションのソリューションのインストール \(P. 66\)](#)

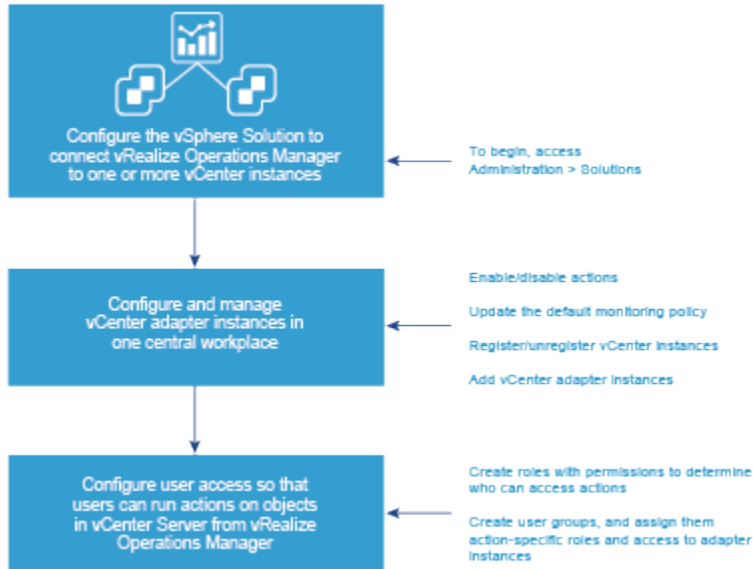
VMware vSphere vRealize Operations Manager のソリューション

VMware vSphere ソリューションは、vRealize Operations Manager を 1 つ以上の vCenter Server インスタンスに接続します。このインスタンスからデータとメトリックを収集し、インスタンスを監視してインスタンスでアクションを実行します。

vRealize Operations Manager は環境内のデータを評価することで、オブジェクト動作のトレンドを特定し、トレンドに基づいてシステム内のオブジェクトについて考えられる問題や将来のキャパシティを計算し、定義された症状がオブジェクトで生じた場合にアラートを発生します。

vSphere ソリューションの構成

vSphere ソリューションは、vRealize Operations Manager とともにインストールされます。ソリューションでは、vRealize Operations Manager を vCenter Server インスタンスに接続するのに設定する必要がある vCenter Server アダプタが提供されます。



アダプタの認証情報の仕組み

vRealize Operations Manager を vCenter Server インスタンスに接続するために使用される vCenter Server 認証情報は、vRealize Operations Manager がどのオブジェクトを監視するかを決定します。これらのアダプタの認証情報とユーザー権限がどのように連携しているかを理解し、アダプタとユーザーが正しく構成され、次の問題が生じないことを確認してください。

- 3つのホストのいずれかにのみアクセスする権限を持っている認証情報を使用して vCenter Server インスタンスに接続するようにアダプタを構成した場合、vRealize Operations Manager にログインするすべてのユーザーには、1つのホストのみが表示されます。これは、個別のユーザーが vCenter Server 内の3つのホストすべてに対する権限を持っている場合でも同じです。
- 提供した認証情報に vCenter Server 内のオブジェクトに対する限定的なアクセス権限しかない場合には、vRealize Operations Manager 管理ユーザーであっても vCenter Server 認証情報に権限が示されているオブジェクトに対してしかアクションを実行できません。
- 提供した認証情報に vCenter Server 内のすべてのオブジェクトに対するアクセス権限がある場合には、すべての vRealize Operations Manager ユーザーがこのアカウントを使用してアクションを実行できます。

アクションへのユーザー アクセスの制御

vCenter Server アダプタを使用して、vRealize Operations Manager から vCenter Server に対してアクションを実行します。アクションを実行するように選択する場合は、vCenter Server 環境のオブジェクトへのユーザー アクセスを制御する必要があります。管理者は、vRealize Operations Manager でユーザー権限をどのように構成するかに基づいて、ローカル ユーザーのユーザー アクセスを制御します。ユーザーが自分の vCenter Server アカウントを使用してログインする場合は、そのユーザーのアカウントが vCenter Server でどのように構成されているかによってそのユーザーの権限が決まります。

たとえば、vCenter Server における読み取り専用のロールが構成された vCenter Server ユーザーがいるとします。このユーザーに（比較的限定されたロールではなく）vCenter Server における vRealize Operations Manager パワー ユーザー ロールを与えた場合、このユーザーはオブジェクトに対してアクションを実行できます。これは、オブジェクトを変更する権限のある認証情報がアダプタに構成されているためです。このような予期しない結果を防ぐには、ローカル vRealize Operations Manager ユーザーと vCenter Server ユーザーに、環境内で彼らに利用させたい権限を構成します。

vRealize Operations Manager での vCenter アダプタ インスタンスの構成

vCenter Server インスタンスを vRealize Operations Manager で管理するには、vCenter Server インスタンスごとにアダプタ インスタンスを構成する必要があります。アダプタには、ターゲット vCenter Server との通信に使用する認証情報が必要です。



注意 追加したアダプタの認証情報は、他のアダプタ管理者および vRealize Operations Manager コレクタ ホストと共有されます。他の管理者がこれらの認証情報を使用して、新規のアダプタ インスタンスを構成したり、アダプタ インスタンスを新規ホストに移動する可能性があります。



vSphere ソリューションの構成 (http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_config_vsphere_solution)

開始する前に

接続およびデータを収集するのに十分な権限を持つ vCenter Server 認証情報を把握していることを確認します。提供された認証情報で vCenter Server のオブジェクトへのアクセスが制限されている場合、ユーザーが持つ vCenter Server 権限にかかわらず、すべてのユーザーに、提供された認証情報でアクセスできるオブジェクトのみが表示されます。ユーザー アカウントには最低でも読み取り権限が必要であり、読み取り権限はデータ センターまたは vCenter Server レベルで割り当てられている必要があります。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックし、[ソリューション] をクリックします。
- 2 [ソリューション] タブで [VMware vSphere] を選択して、ツールバーで [構成] ボタンをクリックします。
- 3 アダプタ インスタンスの表示名と説明を入力します。
- 4 [vCenter Server] テキスト ボックスに、接続先の vCenter Server インスタンスの FQDN または IP アドレスを入力します。

vCenter Server の FQDN または IP アドレスには、vRealize Operations Manager クラスターのすべてのノードからアクセスできる必要があります。

- 5 vCenter Server インスタンスの認証情報を追加するには、[追加] アイコンをクリックし、必要な認証情報を入力します。
- 6 アダプタは、vRealize Operations Manager から vCenter Server 内のオブジェクトのアクションを実行するように構成されます。アクションを実行しない場合は、[無効] を選択します。

vCenter Server インスタンスに対して提供される認証情報もアクションを実行するために使用されます。これらの認証情報を使用しない場合は、[代替のアクション認証情報] を展開し、[追加] アイコンをクリックして代替の認証情報を提供することができます。

- 7 [テスト接続] をクリックして、vCenter Server インスタンスとの接続を検証します。
- 8 [証明書の確認と承諾] ダイアログ ボックスで、証明書情報を確認します。
 - ◆ ダイアログ ボックスに表示される証明書がターゲットの vCenter Server の証明書と一致する場合は、[OK] をクリックします。
 - ◆ 証明書を有効として認識できない場合、[キャンセル] をクリックします。テストは失敗し、vCenter Server への接続は完了しません。アダプタの構成を完了するには、vCenter Server の有効な URL を指定するか、vCenter Server の証明書が有効であることを確認する必要があります。

- 9 コレクタ、オブジェクトの検出、または変更イベントに関する詳細なオプションを変更するには、[詳細設定]を展開します。

これらの詳細設定については、[ソリューションの管理 - VMware vSphere ソリューション ワークスペースのオプション](#)を参照してください。

- 10 vRealize Operations Manager で環境内のオブジェクトに関する情報を分析および表示するために使用されるデフォルトの監視ポリシーを調整するには、[監視目標の定義]をクリックします。

[監視目標の定義]の設定については、[ソリューションの管理 - VMware vSphere ソリューション ワークスペースのオプション](#)を参照してください。

- 11 vCenter インスタンスの登録を管理するには、[登録の管理]をクリックします。

代替の認証情報を提供するか、[収集認証情報の使用] チェック ボックスをオンにすると、この vCenter Server アダプタ インスタンスを構成するときに指定した認証情報を使用できます。

- 12 [設定の保存]をクリックします。

アダプタ インスタンスがリストに追加されます。

vRealize Operations Manager が vCenter Server インスタンスからデータの収集を開始します。管理オブジェクトの数によっては、最初の収集で 1 回の収集サイクル以上の時間がかかることがあります。標準の収集サイクルは 5 分間隔で開始します。

次に進む前に

アクションを実行するようにアダプタを構成した場合は、アクション ロールとユーザー グループを作成することによってアクションに対するユーザー アクセスを構成します。

アクションに適したユーザー アクセスの構成

ユーザーが vRealize Operations Manager で確実にアクションを実行できるようにするには、そのアクションに対するユーザーのアクセス権を構成する必要があります。

ロール権限を使用してアクションを実行できるユーザーを管理します。複数のロールを作成できます。各ロールでは、さまざまなアクション サブセットを実行するユーザー権限を付与できます。管理者ロールまたはデフォルトのスーパー ユーザー ロールを持つユーザーには、すでにアクションを実行する必要な権限があります。

ユーザー グループを作成することで、個別のユーザー権限を構成するのではなく、アクション固有のロールをグループに追加できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] - [アクセス コントロール]をクリックします。
- 2 ロールを作成するには：
 - a [ロール] タブをクリックします。
 - b [追加] アイコンをクリックして、ロールの名前と説明を入力します。
- 3 ロールに権限を適用するには、ロールを選択し、[権限] ペインで [編集] アイコンをクリックします。
 - a [環境]を展開し、[アクション]を展開します。
 - b 1 つ以上のアクションを選択して、[更新]をクリックします。
- 4 ユーザー グループを作成するには：
 - a [ユーザー グループ] タブをクリックし、[追加] アイコンをクリックします。
 - b グループの名前と説明を入力し、[次へ]をクリックします。
 - c グループにユーザーを割り当て、[オブジェクト] タブをクリックします。

- d アクションを実行する権限を付与して作成されたロールを選択し、[このロールをユーザーに割り当てます] チェック ボックスをオンにします。
- e アクション実行のためにグループがアクセスを必要とする各アダプタ インスタンスを選択して、オブジェクトの権限を構成します。
- f [終了] をクリックします。

次に進む前に

グループに割り当てたユーザーをテストします。ログアウトし、いずれかのユーザーとして再度ログインします。このユーザーが選択したアダプタ上で想定されるアクションを実行できることを確認してください。

Endpoint Operations Management vRealize Operations Manager のソリューション

Endpoint Operations Management を構成して、オペレーティングシステムのメトリックを収集し、リモート プラットフォームとアプリケーションの可用性を監視します。このソリューションは、vRealize Operations Manager とともにインストールされます。

Endpoint Operations Management エージェントのインストールとデプロイ

次のリンクにある情報を利用して、Endpoint Operations Management エージェントを環境内にインストール、デプロイできます。

Endpoint Operations Management エージェントのインストール準備

Endpoint Operations Management エージェントをインストールする前に、準備作業を行う必要があります。

開始する前に

- SSL 通信のために管理しているキーストアを使用するようエージェントを構成するには、ホストでエージェントの JKS フォーマットのキーストアをセットアップし、その SSL 証明書をインポートします。キーストアのフル パスとパスワードをメモします。このデータはエージェントの **agent.properties** ファイルに指定する必要があります。

エージェントのキーストアのパスワードとプライベート キーのパスワードが同じであることを確認します。

- エージェントの **HQ_JAVA_HOME** の場所を定義します。

vRealize Operations Manager のプラットフォーム固有のインストーラには JRE 1.8.x が含まれています。環境と使用するインストーラによっては、JRE の場所を定義して、エージェントが使用する JRE を見つけられるようにする必要があります。[「Endpoint Operations Management コンポーネントの JRE の場所の構成 \(P. 20\)」](#) を参照してください。

Endpoint Operations Management エージェントをサポートするオペレーティング システム

以下の表には、Endpoint Operations Management エージェントの展開をサポートするオペレーティングシステムを記載しています。

以下の構成は、開発と本番環境の両方でエージェントをサポートします。

表 1-1. Endpoint Operations Management エージェントをサポートするオペレーティング システム

オペレーティング システム	プロセッサ アーキテクチャ	JVM
RedHat Enterprise Linux (RHEL) 5.x、6.x、7.x	x86_64、x86_32	Oracle Java SE8
CentOS 5.x、6.x、7.x	x86_64、x86_32	Oracle Java SE8
SUSE Enterprise Linux (SLES) 11.x、12.x	x86_64	Oracle Java SE8

表 1-1. Endpoint Operations Management エージェントをサポートするオペレーティング システム (続き)

オペレーティング システム	プロセッサ アーキテクチャ	JVM
Windows 2008 Server、2008 Server R2	x86_64、x86_32	Oracle Java SE8
Windows 2012 Server、2012 Server R2	x86_64	Oracle Java SE8
Solaris 10、11	x86_64、SPARC	Oracle Java SE7
AIX 6.1、7.1	Power PC	IBM Java SE7
VMware Photon Linux 1.0	x86_64	Open JDK 1.8.0_72-BLFS
Oracle Linux バージョン 5、6、7	x86_64、x86_32	Open JDK Runtime Environment 1.7

エージェント インストーラ パッケージの選択

Endpoint Operations Management エージェントのインストール ファイルは vRealize Operations Manager インストール パッケージに含まれています。

Endpoint Operations Management エージェントは、**tar.gz** または **.zip** アーカイブから、あるいは RPM をサポートする Windows または Linux 系システム固有のインストーラからインストールできます。

JRE バージョンでない Endpoint Operations Management エージェントをインストールするときは、古いバージョンの Java に関連するセキュリティのリスクを避けるため、必ず最新の Java バージョンをインストールすることが推奨されます。

- [エージェントを RPM パッケージから Linux プラットフォームにインストールする \(P. 14\)](#)
Endpoint Operations Management エージェントは RedHat Package Manager (RPM) パッケージからインストールすることができます。**noarch** パッケージのエージェントには JRE は含まれていません。
- [エージェントをアーカイブから Linux プラットフォームにインストールする \(P. 16\)](#)
Linux プラットフォームでは、Endpoint Operations Management エージェントを **tar.gz** アーカイブからインストールすることができます。
- [エージェントをアーカイブから Windows プラットフォームにインストールする \(P. 17\)](#)
Windows プラットフォームでは、Endpoint Operations Management エージェントを **.zip** ファイルからインストールすることができます。
- [Windows インストーラを使用してエージェントを Windows プラットフォームにインストールする \(P. 18\)](#)
Windows プラットフォームでは、Windows インストーラを使って Endpoint Operations Management エージェントをインストールすることができます。
- [Windows マシンへの Endpoint Operations Management エージェントのサイレント インストール \(P. 19\)](#)
サイレント インストールまたは完全なサイレント インストールを行うことで、Windows マシンに Endpoint Operations Management エージェントをインストールできます。

エージェントを RPM パッケージから Linux プラットフォームにインストールする

Endpoint Operations Management エージェントは RedHat Package Manager (RPM) パッケージからインストールすることができます。**noarch** パッケージのエージェントには JRE は含まれていません。

エージェントだけが含まれるアーカイブは、オペレーティング システムやアーキテクチャが異なる多数のプラットフォームにエージェントをデプロイする場合に便利です。エージェントのアーカイブは Windows 環境用と UNIX 系環境用があり、それぞれ JRE が含まれるものと含まれないものがあります。

RPM は次のアクションを実行します。

- **epops** という名前のユーザーおよびグループが存在しない場合は、作成します。このユーザーはロックされたサービス アカウントであり、ログインできません。
- エージェントのファイルを **/opt/vmware/epops-agent** にインストールします。

- `init` スクリプトを `/etc/init.d/epops-agent` にインストールします。
- `init` スクリプトを `chkconfig` に追加し、実行レベル 2、3、4、5 に対して `on` を設定します。

複数のエージェントをインストールする場合は、「[複数の Endpoint Operations Management エージェントを同時にインストールする \(P. 46\)](#)」を参照してください。

開始する前に

- Endpoint Operations Management エージェントをデプロイするために必要な権限があることを確認します。
Endpoint Operations Management エージェントをインストール可能なロールを含む vRealize Operations Manager のユーザー認証情報が必要です。[「vRealize Operations Manager でのロールと権限 \(P. 49\)」](#)を参照してください。
- ICMP チェックを実行する計画がある場合は、Endpoint Operations Management エージェントを `root` 権限でインストールする必要があります。
- SSL 通信のために管理しているキーストアを使用するようエージェントを構成するには、ホストでエージェントの JKS フォーマットのキーストアをセットアップし、その SSL 証明書を使用するようにエージェントを構成します。
キーストアのフルパスとパスワードをメモします。このデータはエージェントの `agent.properties` ファイルに指定する必要があります。

エージェントのキーストアのパスワードとプライベート キーのパスワードが同じであることを確認します。

- JRE が含まれないパッケージをインストールする場合は、エージェントの `HQ_JAVA_HOME` の場所を定義します。
Endpoint Operations Management のプラットフォーム固有のインストーラには JRE 1.8.x が含まれていますが、プラットフォームに依存しないインストーラには JRE が含まれていません。環境と使用するインストーラによっては、JRE の場所を定義して、エージェントが使用する JRE を見つけられるようにする必要があります。[「Endpoint Operations Management コンポーネントの JRE の場所の構成 \(P. 20\)」](#)を参照してください。
- JRE が含まれないパッケージをインストールする場合は、最新バージョンの Java を使用していることを確認します。
古いバージョンの Java を使用するとセキュリティ上のリスクにさらされる可能性があります。
- Endpoint Operations Management エージェントのインストール ディレクトリに vRealize Hyperic エージェントのインストールが含まれていないことを確認します。
- `noarch` インストールを使用している場合は、プラットフォームに JDK または JRE がインストールされていることを確認します。
- エージェントのインストール パスを指定するときには、ASCII 文字だけを使用していることを確認してください。非 ASCII 文字を使用する場合は、Linux マシンと SSH クライアント アプリケーションのエンコーディングを UTF-8 に設定する必要があります。

手順

- 1 ターゲット マシンに合った RPM バンドルをインストールします。

オペレーティング システム	ダウンロードする RPM バンドル
64 ビット オペレーティング システム	<code>epops-agent-x86-64-linux-<version>.rpm</code>
32 ビット オペレーティング システム	<code>epops-agent-x86-linux-<version>.rpm</code>
アーキテクチャなし	<code>epops-agent-noarch-linux-<version>.rpm</code>

- 2 `root` の認証情報を使って SSH 接続をオープンします。
- 3 `rpm -i epops-agent-<Arch>-linux-<version>.rpm` を実行して、監視対象のプラットフォームにエージェントをインストールします。`<Arch>` はアーカイブの名前、`<version>` はバージョン番号です。

Endpoint Operations Management エージェントがインストールされ、起動時にサービスを開始するよう構成されます。

次に進む前に

サービスを開始する前に、プラグインがアプリケーションを検出および監視するのに必要なすべての権限が **epops** ユーザー認証情報に含まれていることを確認し、次のプロセスのいずれかを実行します。

- **service epops-agent start** を実行し、epops-agent サービスを起動します。
- Endpoint Operations Management エージェントを SuSE 12.x が実行されているマシンにインストールする場合は、**[EP Ops Home]/bin/ep-agent.sh start** コマンドを実行して Endpoint Operations Management エージェントを起動します。
- Endpoint Operations Management エージェントを開始するときに、エージェントが既に実行されていることを伝えるメッセージが表示される場合があります。エージェントを起動する前に、**./bin/ep-agent.sh stop** を実行します。
- **agent.properties** ファイルでエージェントを構成して、サービスを起動します。[\[Endpoint Operations Management エージェントから vRealize Operations Manager サーバへのセットアップ プロパティの有効化 \(P. 22\)\]](#) を参照してください。

エージェントをアーカイブから Linux プラットフォームにインストールする

Linux プラットフォームでは、Endpoint Operations Management エージェントを **tar.gz** アーカイブからインストールすることができます。

デフォルトでは、インストール中のセットアップ プロセスで構成の値を指定するよう求められます。このプロセスは、エージェントのプロパティ ファイルに値を指定しておくことで自動化できます。インストーラはプロパティ ファイルで値を検出すると、それらの値を適用します。以降のデプロイでも、エージェントのプロパティ ファイルで指定された値が使用されます。

開始する前に

- Endpoint Operations Management エージェントをデプロイするために必要な権限があることを確認します。Endpoint Operations Management エージェントをインストール可能なロールを含む vRealize Operations Manager のユーザー認証情報が必要です。[\[vRealize Operations Manager でのロールと権限 \(P. 49\)\]](#) を参照してください。
- ICMP チェックを実行する計画がある場合は、Endpoint Operations Management エージェントを **root** 権限でインストールする必要があります。
- Endpoint Operations Management エージェントのインストール ディレクトリに vRealize Hyperic エージェントのインストールが含まれていないことを確認します。
- エージェントのインストール パスを指定するときには、ASCII 文字だけを使用していることを確認してください。非 ASCII 文字を使用する場合は、Linux マシンと SSH クライアント アプリケーションのエンコーディングを UTF-8 に設定する必要があります。

手順

- 1 お使いの Linux オペレーティングシステムに合った Endpoint Operations Management エージェントのインストール用 **tar.gz** ファイルをダウンロードし、展開します。

オペレーティング システム	ダウンロードする tar.gz バンドル
64 ビット オペレーティング システム	epops-agent-x86-64-linux-<version>.tar.gz
32 ビット オペレーティング システム	epops-agent-x86-linux-<version>.tar.gz
アーキテクチャなし	epops-agent-noJRE-<version>.tar.gz

- 2 **cd <agent name>/bin** を実行し、エージェントの **bin** ディレクトリを開きます。

3 `ep-agent.sh start` を実行します。

初めてエージェントをインストールするときに、エージェントのプロパティ ファイルで必要な構成値をすべて指定していないと、セットアップ プロセスが開始されます。

4 (オプション) `ep-agent.sh status` を実行し、IP アドレスやポートなど、エージェントの現在のステータスを表示します。

次に進む前に

エージェントのクライアント証明書を登録します。[「エージェントのクライアント証明書の生成 \(P. 41\)」](#) を参照してください。

エージェントをアーカイブから Windows プラットフォームにインストールする

Windows プラットフォームでは、Endpoint Operations Management エージェントを **.zip** ファイルからインストールすることができます。

デフォルトでは、インストール中のセットアップ プロセスで構成の値を指定するよう求められます。このプロセスは、エージェントのプロパティ ファイルに値を指定しておくことで自動化できます。インストーラはプロパティ ファイルで値を検出すると、それらの値を適用します。以降のデプロイでも、エージェントのプロパティ ファイルで指定された値が使用されます。

開始する前に

- Endpoint Operations Management エージェントをデプロイするために必要な権限があることを確認します。Endpoint Operations Management エージェントをインストール可能なロールを含む vRealize Operations Manager のユーザー認証情報が必要です。[「vRealize Operations Manager でのロールと権限 \(P. 49\)」](#) を参照してください。
- Endpoint Operations Management エージェントのインストール ディレクトリに vRealize Hyperic エージェントのインストールが含まれていないことを確認します。
- Windows のエージェント インストーラを実行する前に、Endpoint Operations Management または vRealize Hyperic エージェントが環境にインストールされていないことを確認してください。

手順

- 1 お使いの Windows オペレーティングシステムに合った Endpoint Operations Management エージェントのインストール用 **.zip** ファイルをダウンロードし、展開します。

オペレーティング システム	ダウンロードする ZIP バンドル
64 ビット オペレーティング システム	epops-agent-x86-64-win-<version>.zip
32 ビット オペレーティング システム	epops-agent-win32-<version>.zip
アーキテクチャなし	epops-agent-noJRE-<version>.zip

- 2 `cd <agent name>\bin` を実行し、エージェントの **bin** ディレクトリを開きます。

- 3 `ep-agent.bat install` を実行します。

- 4 `ep-agent.bat start` を実行します。

初めてエージェントをインストールするときに、エージェントのプロパティ ファイルで構成値を指定していないと、セットアップ プロセスが開始されます。

次に進む前に

エージェントのクライアント証明書を生成します。[「エージェントのクライアント証明書の生成 \(P. 41\)」](#) を参照してください。

Windows インストーラを使用してエージェントを Windows プラットフォームにインストールする

Windows プラットフォームでは、Windows インストーラを使って Endpoint Operations Management エージェントをインストールすることができます。

エージェントのサイレントインストールを実行できます。[「Windows マシンへの Endpoint Operations Management エージェントのサイレントインストール \(P. 19\)」](#) を参照してください。

開始する前に

- Endpoint Operations Management エージェントをデプロイするために必要な権限があることを確認します。Endpoint Operations Management エージェントをインストール可能なロールを含む vRealize Operations Manager のユーザー認証情報が必要です。[「vRealize Operations Manager でのロールと権限 \(P. 49\)」](#) を参照してください。
- Endpoint Operations Management エージェントのインストール ディレクトリに vRealize Hyperic エージェントのインストールが含まれていないことを確認します。
- すでにマシンに Endpoint Operations Management エージェントをインストール済みの場合は、エージェントが実行されていないことを確認します。
- Windows のエージェント インストーラを実行する前に、Endpoint Operations Management または vRealize Hyperic エージェントが環境にインストールされていないことを確認してください。
- vRealize Operations Manager のユーザー名とパスワード、vRealize Operations Manager サーバのアドレス (FQDN)、およびサーバ証明書のサムプリント値を知っている必要があります。この手順で、証明書のサムプリントについての追加情報を確認できます。

手順

- 1 お使いの Windows プラットフォームに合った Windows のインストール用 EXE ファイルをダウンロードします。

オペレーティング システム	ダウンロードする RPM バンドル
64 ビット オペレーティング システム	epops-agent-x86-64-win-<version>.exe
32 ビット オペレーティング システム	epops-agent-x86-win-<version>.exe

- 2 ファイルをダブルクリックして、インストール ウィザードを開きます。
- 3 インストール ウィザードの手順を完了します。

ユーザーとシステムのロケールが同じであり、インストール パスにシステム ロケールのコード ページに含まれる文字だけが含まれていることを確認します。ユーザーとシステムのロケールは、地域オプションまたは地域設定のコントロール パネルで設定できます。

サーバ証明書のサムプリントの定義に関連する次の情報に注意してください。

- サーバ証明書のサムプリントは、サイレントインストールを実行するために必要です。
- サムプリントには SHA1 または SHA256 アルゴリズムを使用できます。
- デフォルトでは、クラスタ内のすべてのノードの証明書の署名に使用される自己署名 CA 証明書が vRealize Operations Manager サーバによって生成されます。この場合、エージェントがすべてのノードと通信できるようにするには、サムプリントは CA 証明書のサムプリントでなければなりません。
- vRealize Operations Manager 管理者は、デフォルトの証明書を使用する代わりにカスタム証明書をインポートできます。この場合は、その証明書に対応するサムプリントをこのプロパティの値として指定する必要があります。
- 証明書のサムプリントの値を確認するには、<https://<IP Address>/admin> の vRealize Operations Manager 管理インターフェイスにログインし、メニューバーの右側にある [SSL 証明書] アイコンをクリックします。オリジナルの証明書をカスタム証明書で置き換えていない場合は、リスト内の 2 番目のサムプリントが正しいサムプリントです。オリジナルの証明書をカスタム証明書で置き換えた場合は、リスト内の最初のサムプリントが正しいサムプリントです。

- 4 (オプション) **ep-agent.bat query** を実行し、エージェントがインストールされ、実行中であるかどうかを確認します。

Windows プラットフォーム上でエージェントの実行が開始されます。



注意 インストール ウィザードで一部のパラメータを指定しなかったり、無効な値が指定されていても、エージェントの実行は開始されます。**<product installation path>/log** ディレクトリにある **wrapper.log** ファイルと **agent.log** ファイルを調べて、インストール エラーがないことを確認してください。

Windows マシンへの Endpoint Operations Management エージェントのサイレント インストール

サイレント インストールまたは完全なサイレント インストールを行うことで、Windows マシンに Endpoint Operations Management エージェントをインストールできます。

サイレント インストールと完全なサイレント インストールは、コマンドライン インターフェイスからセットアップ インストーラの実行ファイルを使用して行います。

Windows のエージェント インストーラを実行する前に、Endpoint Operations Management または vRealize Hyperic エージェントが環境にインストールされていないことを確認してください。

次のパラメータを使用して、インストール プロセスをセットアップします。これらのパラメータの詳細については、[「Endpoint Operations Management エージェントのセットアップ プロパティの指定 \(P. 23\)」](#) を参照してください。



注意 Windows インストーラに指定したパラメータは、検証なしにエージェント構成に渡されます。誤った IP アドレスやユーザー認証情報を指定すると、Endpoint Operations Management エージェントは起動できません。

表 1-2. サイレント インストールのコマンドライン パラメータ

パラメータ	値	必須/オプション	コメント
-serverAddress	FQDN/IP アドレス	必須	vRealize Operations Manager サーバの FQDN または IP アドレス
-username	文字列	必須	
-securePort	数	任意	デフォルトは 443
-password	文字列	必須	
-serverCertificateThumbprint	文字列	必須	vRealize Operations Manager サーバ証明書のサムプリント。証明書のサムプリントは、たとえば -serverCertificateThumbprint <"31:32:FA:1F:FD:78:1E:D8:9A:15:32:85:D7:FE:54:49:0A:1D:9F:6D"> のように引用符で囲む必要があります。

インストール プロセスの他のさまざまな属性を定義するパラメータが使用できます。

表 1-3. サイレント インストールのその他のコマンドライン パラメータ

パラメータ	デフォルト値	コメント
/DIR	C:\ep-agent	インストール パスの指定。インストール パスにスペースは使用できません。 /DIR コマンドとインストール パスは、たとえば /DIR=<C:\ep-agent> のように等号でつなが必要があります。
/SILENT	なし	サイレント インストールを実行する指定。サイレント インストールでは、進捗ウィンドウだけが表示されます。
/VERYSILENT	なし	完全なサイレント インストールを実行する指定。完全なサイレント インストールでは、進捗ウィンドウは表示されません。ただし、無効にしていなければ、開始プロンプトと同じように、インストールのエラーメッセージは表示されます。

Endpoint Operations Management エージェントでの Java の前提条件

すべての Endpoint Operations Management エージェントで、Java Cryptography Extension (JCE) Unlimited Strength Jurisdiction ポリシー ファイルが Java パッケージに含まれている必要があります。

Java Cryptography Extension (JCE) Unlimited Strength Jurisdiction ポリシー ファイルは、JRE Endpoint Operations Management エージェントのインストール オプションに含まれています。

JRE ファイルが含まれていない Endpoint Operations Management エージェント パッケージをインストールすることも、後で JRE を追加するよう選択することもできます。

JRE が含まれないインストール オプションを選択した場合、Endpoint Operations Management エージェントを登録できるようにするには、Java パッケージに Java Cryptography Extension (JCE) Unlimited Strength Jurisdiction ポリシー ファイルが含まれている必要があります。JRE が含まれないオプションを選択した場合、Java パッケージに Java Cryptography Extension (JCE) Unlimited Strength Jurisdiction ポリシー ファイルが含まれていないと、エラー メッセージ「Server might be down (or wrong IP/port were used) (サーバがダウンしているか、または IP/ポートが誤っている可能性があります)」と「Cannot support TLS_RSA_WITH_AES_256_CBC_SHA with currently installed providers (現在インストールされているプロバイダでは TLS_RSA_WITH_AES_256_CBC_SHA をサポートできません)」が表示されます。

Endpoint Operations Management コンポーネントの JRE の場所の構成

Endpoint Operations Management エージェントは JRE を必要とします。プラットフォーム固有の Endpoint Operations Management エージェント インストーラには JRE が含まれています。プラットフォームに依存しない Endpoint Operations Management エージェント インストーラには JRE が含まれていません。

JRE が含まれないインストール オプションを選択した場合、Endpoint Operations Management エージェントを登録できるようにするには、Java パッケージに Java Cryptography Extension (JCE) Unlimited Strength Jurisdiction ポリシー ファイルが含まれている必要があります。詳細については、[「Endpoint Operations Management エージェントでの Java の前提条件 \(P. 20\)」](#) を参照してください。

ユーザーの環境と使用するインストール パッケージによっては、エージェント用に JRE の場所を定義しなければならないことがあります。次の環境では、JRE の場所を構成する必要があります。

- 使用する予定の独自の JRE が含まれているマシン上にプラットフォーム固有のエージェントをインストールする場合
- プラットフォームに依存しないエージェントをインストールする場合

エージェントが JRE を解決する方法

エージェントはプラットフォームのタイプに基づいて JRE を解決します。

UNIX 系のプラットフォーム	UNIX 系のプラットフォームでは、エージェントは使用する JRE を次の順序で判断します。 <ol style="list-style-type: none"> 1 HQ_JAVA_HOME 環境変数 2 組み込み JRE 3 JAVA_HOME 環境変数
Linux プラットフォーム	Linux プラットフォームでは、 <code>export HQ_JAVA_HOME=<path_to_current_java_directory></code> を使用してシステム変数を定義します。
Windows プラットフォーム	Windows プラットフォームでは、エージェントは使用する JRE を次の順序で解決します。 <ol style="list-style-type: none"> 1 HQ_JAVA_HOME 環境変数

変数で定義するパスには、スペースを含めることはできません。チルダ (") 文字を使って、パスの短縮形を使用することを検討してください。たとえば、**c:\Program Files\Java\jre7** は **c:\Progra~1\Java\jre7** のようにできます。チルダの後の数字は、そのディレクトリ内で名前が **progra** で始まるファイルのアルファベット順に依存します (a = 1、b = 2 など)。

2 組み込み JRE

システム変数は、[コンピューター] メニューから定義します。[プロパティ] - [詳細設定] - [環境変数] - [システム環境変数] - [新規] を選択します。

Windows の既知の問題により、Windows Server 2008 R2 および 2012 R2 では、システム変数の値が更新または削除されている場合でも、Windows サービスが古い値を保持することがあります。その結果、**HQ_JAVA_HOME** システム変数の更新または削除が Endpoint Operations Management エージェント サービスに反映されないことがあります。その場合、Endpoint Operations Management エージェントが **HQ_JAVA_HOME** の古い値を使用して、誤った JRE バージョンを使用することになります。

Endpoint Operations Management エージェントのシステム前提条件

localhost をループバック アドレスとして定義しない場合、Endpoint Operations Management エージェントは登録せず、次のエラーが表示されます。**Connection failed.Server may be down (or wrong IP/port were used).Waiting for 10 seconds before retrying.**

回避策として、次の手順を実行します。

手順

- 1 ホスト ファイル **/etc/hosts** (Linux の場合) または **C:\Windows\System32\Drivers\etc\hosts** (Windows の場合) を開きます。
- 2 ファイルを編集して、**127.0.0.1 localhost** を使用し、**localhost** マッピングを IPv4 **127.0.0.1** ループバック アドレスに含めます。
- 3 ファイルを保存します。

Endpoint Operations Management エージェントは IPv6 をサポートしていません。

Endpoint Operations Management エージェントから vRealize Operations Manager サーバへの通信プロパティの構成

エージェントを初めて起動する前に、エージェントが vRealize Operations Manager サーバと通信するためのプロパティやその他のエージェント プロパティをエージェントの **agent.properties** ファイルで定義できます。プロパティ ファイルでエージェントを構成すれば、複数のエージェントのデプロイを合理化できます。

プロパティ ファイルが存在する場合は、構成を変更する前にそのファイルのバックアップを作成します。エージェントにプロパティ ファイルがない場合は、作成します。

エージェントは、**AgentHome/conf** からプロパティ ファイルを参照します。これは **agent.properties** のデフォルトの場所です。

エージェントが vRealize Operations Manager サーバとの通信を確立するのに必要なプロパティをこれらのいずれかの場所で見つけることができない場合、エージェントを初めて起動したときにプロパティ値を入力するように求められます。

構成を完了するまでにいくつかの手順を実行するように求められます。

一部のエージェント プロパティは、初めて起動する前または起動した後のいずれでも定義できます。次の動作を制御するプロパティは、初めて起動する前に構成する必要があります。

- エージェントが、vRealize Operations Manager が生成したキーストアではなく、ユーザーが管理する SSL キーストアを使用する必要があるかどうか。

- エージェントがプロキシ サーバを通じて vRealize Operations Manager サーバに接続する必要があるかどうか。

開始する前に

vRealize Operations Manager サーバが実行されていることを確認します。

手順

- 1 [Endpoint Operations Management エージェントから vRealize Operations Manager サーバへのセットアップ プロパティの有効化](#) (P. 22)
agent.properties ファイル内にある、Endpoint Operations Management エージェントと vRealize Operations Manager サーバ間の通信に関するプロパティは、デフォルトで無効になっています。これらを有効にする必要があります。
- 2 [Endpoint Operations Management エージェントのセットアップ プロパティの指定](#) (P. 23)
agent.properties ファイルには、通信を管理するために構成できるプロパティが含まれています。
- 3 [Endpoint Operations Management エージェント キーストアの構成](#) (P. 24)
 エージェントは、内部通信用の自己署名証明書と、エージェント登録プロセス実行時にサーバによって署名されたもう 1 つの証明書を使用します。デフォルトでは、証明書は、**data** フォルダに生成されるキーストアに保存されます。エージェントが使用するための独自のキーストアを構成できます。
- 4 [構成ダイアログを使用した Endpoint Operations Management エージェントの構成](#) (P. 24)
 vRealize Operations Manager サーバの場所を指定する構成値が設定されていないエージェントを起動すると、シェルに Endpoint Operations Management エージェントの構成ダイアログが表示されます。このダイアログでは、vRealize Operations Manager サーバのアドレスとポート、およびその他の接続関連データを指定するように求められます。
- 5 [エージェント構成プロパティのオーバーライド](#) (P. 25)
 デフォルトのエージェント プロパティがユーザーが定義したカスタム プロパティと異なる場合に vRealize Operations Manager がそのデフォルトのプロパティをオーバーライドすることを指定できます。
- 6 [Endpoint Operations Management エージェント プロパティ](#) (P. 26)
 Endpoint Operations Management エージェントの **agent.properties** ファイルでは、複数のプロパティがサポートされています。サポートされたプロパティのすべてが、デフォルトで **agent.properties** ファイルに含まれるわけではありません。

次に進む前に

Endpoint Operations Management エージェントを起動します。

Endpoint Operations Management エージェントから vRealize Operations Manager サーバへのセットアップ プロパティの有効化

agent.properties ファイル内にある、Endpoint Operations Management エージェントと vRealize Operations Manager サーバ間の通信に関するプロパティは、デフォルトで無効になっています。これらを有効にする必要があります。

手順

- 1 **agent.properties** ファイルで、次のセクションを見つけてます。

```
## Use the following to automate agent setup
## using these properties.
##
## If any properties do not have values specified, the setup
## process prompts for their values.
##
## If the value to use during automatic setup is the default, use the string
*default* as the value for the option.
```

- 2 各行の先頭のシャープ記号を削除して、プロパティを有効にします。

```
#agent.setup.serverIP=<localhost>
#agent.setup.serverSSLPort=443
#agent.setup.serverLogin=<username>
#agent.setup.serverPword=<password>
```

Endpoint Operations Management エージェントを初めて起動したときに、**agent.setup.serverPword** が無効になっていて、プレーン テキスト値がある場合、エージェントは値を暗号化します。

- 3 (オプション) **#agent.setup.serverCertificateThumbprint=** 行の先頭のシャープ記号を削除して、サムプリント値を提供して、サーバ証明書の事前承認を有効にします。

Endpoint Operations Management エージェントのセットアップ プロパティの指定

agent.properties ファイルには、通信を管理するために構成できるプロパティが含まれています。

エージェントとサーバのセットアップには、最低限必要なプロパティのセットがあります。

手順

- 1 エージェントが vRealize Operations Manager サーバと通信するために必要な場所と認証情報を指定します。

プロパティ	プロパティ定義
agent.setup.serverIP	vRealize Operations Manager サーバのアドレスまたはホスト名を指定します。
agent.setup.serverSSLPort	デフォルト値は、標準の SSL の vRealize Operations Manager サーバ リスン ポートです。サーバに別のリスン ポートが構成されている場合は、そのポート番号を指定します。
agent.setup.serverLogin	vRealize Operations Manager サーバに接続するときにエージェントが使用するユーザー名を指定します。 username のデフォルト値を変更した場合は、ユーザーアカウントが vRealize Operations Manager サーバで正しく構成されていることを確認してください。
agent.setup.serverPword	vRealize Operations Manager サーバに接続するときに、 agent.setup.camLogin で指定したユーザー名と一緒にエージェントが使用するパスワードを指定します。パスワードが、そのユーザー アカウントに対して vRealize Operations Manager で構成されているものであることを確認してください。

- 2 (オプション) vRealize Operations Manager サーバ証明書のサムプリントを指定します。

プロパティ	プロパティ定義
agent.setup.serverCertificateThumbprint	<p>信頼できるサーバ証明書についての情報を指定します。</p> <p>このパラメータは、サイレント インストールを実行するために必要です。</p> <p>サムプリントには SHA1 または SHA256 アルゴリズムを使用できます。</p> <p>デフォルトでは、クラスタ内のすべてのノードの証明書の署名に使用される自己署名 CA 証明書が vRealize Operations Manager サーバによって生成されます。この場合、エージェントがすべてのノードと通信できるようにするには、サムプリントは CA 証明書のサムプリントでなければなりません。</p> <p>vRealize Operations Manager 管理者は、デフォルトの証明書を使用する代わりにカスタム証明書をインポートできます。この場合は、その証明書に対応するサムプリントをこのプロパティの値として指定する必要があります。</p> <p>証明書のサムプリントの値を確認するには、https://<IP Address>/admin の vRealize Operations Manager 管理インターフェイスにログインし、メニューバーの右側にある [SSL 証明書] アイコンをクリックします。オリジナルの証明書をカスタム証明書で置き換えていない場合は、リスト内の 2 番目のサムプリントが正しいサムプリントです。オリジナルの証明書をカスタム証明書で置き換えた場合は、リスト内の最初のサムプリントが正しいサムプリントです。</p>

- 3 (オプション) プラットフォーム トークン ファイルの場所とファイル名を指定します。

このファイルはインストール中にエージェントによって作成され、プラットフォーム オブジェクトの ID トークンが含まれます。

プロパティ	プロパティ定義
Windows : agent.setup.tokenFileWindows	プラットフォーム トークン ファイルの場所と名前の情報を指定します。 この値には、バックスラッシュ (\)、パーセント (%) 記号、環境変数を含めることはできません。
Linux : agent.setup.tokenFileLinux	Windows のパスを指定する際は、スラッシュ (/) を使用してください。

- 4 (オプション) 該当するコマンドを実行して、他のすべての必須プロパティを指定します。

オペレーティング システム	コマンド
Linux	<code>./bin/ep-agent.sh set-property <PropertyKey> <PropertyValue></code>
Windows	<code>./bin/ep-agent.bat set-property <PropertyKey> <PropertyValue></code>

agent.properties ファイルでは、プロパティは暗号化されています。

Endpoint Operations Management エージェント キーストアの構成

エージェントは、内部通信用の自己署名証明書と、エージェント登録プロセス実行時にサーバによって署名されたもう 1 つの証明書を使用します。デフォルトでは、証明書は、**data** フォルダに生成されるキーストアに保存されます。エージェントが使用するための独自のキーストアを構成できます。

重要 独自のキーストアを使用するには、最初にエージェントを有効にする前にこのタスクを実行する必要があります。

手順

- agent.properties** ファイルで、**# agent.keystore.path=** プロパティおよび **# agent.keystore.password=** プロパティを有効にします。

agent.keystore.path でキーストアへのフル パスを定義し、**agent.keystore.password** でキーストアのパスワードを定義します。
- プロパティ ファイルに [**agent.keystore.alias**] プロパティを追加し、それをプライマリ証明書のエイリアスに設定するか、キーストアのプライマリ証明書のプライベート キー エントリに設定します。

構成ダイアログを使用した Endpoint Operations Management エージェントの構成

vRealize Operations Manager サーバの場所を指定する構成値が設定されていないエージェントを起動すると、シェルに Endpoint Operations Management エージェントの構成ダイアログが表示されます。このダイアログでは、vRealize Operations Manager サーバのアドレスとポート、およびその他の接続関連データを指定するように求められます。

エージェント構成ダイアログは、次の場合に表示されます。

- **agent.properties** ファイルに 1 つ以上の関連するプロパティを指定せずに、初めてエージェントを起動した場合。
- 保存したサーバ接続データが破損している、またはサーバ接続データが削除されているエージェントを起動した場合。

エージェント ランチャーを実行して、構成ダイアログを再度実行することもできます。

開始する前に

サーバが実行されていることを確認します。

手順

- 1 エージェントがインストールされているプラットフォームでターミナル ウィンドウを開きます。
- 2 **AgentHome/bin** ディレクトリへ移動します。
- 3 起動またはセットアップ オプションを使用して、エージェント ランチャーを実行します。

プラットフォーム	コマンド
UNIX 系	ep-agent.sh start
Windows	<p>エージェント用の Windows サービスをインストールして、it: ep-agent.bat install ep-agent.bat start コマンドを実行します。</p> <p>Endpoint Operations Management エージェントを Windows サービスとして構成する場合は、サービスが監視対象のテクノロジーに接続するのに必要な認証情報を指定してください。たとえば、Endpoint Operations Management エージェントを Microsoft SQL Server で実行している場合、そのサーバにログインできるのが特定のユーザーだけであれば、Windows サービスのログインにもそのユーザーを使用する必要があります。</p>

- 4 プロンプトに応答し、各手順で次のことを書きとめます。

プロンプト	説明
サーバのホスト名または IP アドレスを入力してください	サーバがエージェントと同じマシン上にある場合は、 localhost と入力できます。ファイアウォールがエージェントからサーバへのトラフィックをブロックしている場合は、ファイアウォールのアドレスを指定します。
サーバの SSL ポートを入力してください	エージェントの接続先となる vRealize Operations Manager サーバ上の SSL ポートを指定します。デフォルト ポートは 443 です。
サーバは、信頼性のない証明書を提示しました	サーバは信頼できる証明書によって署名されている、またはサムプリントが含まれるように thumbprint プロパティを更新しているにもかかわらずこの警告が表示された場合、このエージェントは中間者攻撃を受ける可能性があります。表示される証明書サムプリントの詳細を注意深く確認します。
サーバのユーザー名を入力してください	agentManager 権限のある vRealize Operations Manager ユーザーの名前を入力します。
サーバのパスワードを入力してください	指定した vRealize Operations Manager のパスワードを入力します。 agent.properties ファイルにパスワードを保存しないでください。

エージェントは vRealize Operations Manager サーバへの接続を開始し、サーバはこのエージェントが通信するための認証を受けていることを確認します。

サーバはエージェント トークンが含まれたクライアント証明書を生成します。**The agent has been successfully registered** というメッセージが表示されます。エージェントは、プラットフォームおよびそこで実行されているサポート対象製品の検出を開始します。

エージェント構成プロパティのオーバーライド

デフォルトのエージェント プロパティがユーザーが定義したカスタム プロパティと異なる場合に vRealize Operations Manager がそのデフォルトのプロパティをオーバーライドすることを指定できます。

[オブジェクトの編集] ダイアログの [詳細] セクションで、[Override agent configuration data] を **false** に設定した場合、デフォルトのエージェント構成データが適用されます。[Override agent configuration data] を **true** に設定した場合、別の値を設定した場合はデフォルトのエージェント パラメータ値は無視され、設定した値が適用されます。

クラスターで実行する MSSQL オブジェクト (MSSQL、MSSQL Database、MSSQL Reporting Services、MSSQL Analysis Service、MSSQL Agent) を編集するときに [Override agent configuration data] の値を **true** に設定すると、動作に一貫性を欠く場合があります。

Endpoint Operations Management エージェント プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントの **agent.properties** ファイルでは、複数のプロパティがサポートされています。サポートされたプロパティのすべてが、デフォルトで **agent.properties** ファイルに含まれるわけではありません。

デフォルト **agent.properties** ファイルに含まれていないプロパティを使用したい場合は、それを追加する必要があります。

agent.properties ファイルのプロパティを暗号化し、サイレント インストールを有効化することができます。

Endpoint Operations Management エージェント プロパティ値の暗号化

Endpoint Operations Management エージェントをインストールした後にそれを使用して、サイレント インストールを有効にするための暗号化した値を **agent.properties** ファイルに追加できます。

たとえば、ユーザー パスワードを指定するために、**./bin/ep-agent.sh set-property agent.setup.serverPword <serverPasswordValue>** を実行して、**agent.properties** ファイルに次の行を追加できます。

```
agent.setup.serverPword = ENC(4FyUf6m/c5i+RriaNpSEQ1WKGb4y
+Dhp7213XQiyvtwI4tMlbGJfZMBPG23KnsUWu30Krw35gB+Ms20snM4TDg==)
```

値の暗号化に使用されたキーは **AgentHome/conf/agent.scu** に保存されています。他の値を暗号化する場合は、最初の値の暗号化に使用されたキーが使用されます。

開始する前に

Endpoint Operations Management エージェントが **AgentHome/conf/agent.scu** にアクセスできることを確認します。エージェントからサーバへの接続プロパティを暗号化した後は、エージェントが起動するにはこのファイルにアクセスする必要があります。

手順

- ◆ コマンド プロンプトを開いて、**./bin/ep-agent.sh set-property agent.setup.<propertyName> <propertyValue>** を実行します。

値の暗号化に使用されたキーは **AgentHome/conf/agent.scu** に保存されています。

次に進む前に

エージェントのデプロイ方法として、標準の **agent.properties** ファイルをすべてのエージェントに配布する場合は、**agent.scu** ファイルも配布する必要があります。[「複数の Endpoint Operations Management エージェントを同時にインストールする \(P. 46\)」](#) を参照してください。

agent.properties ファイルへのプロパティの追加

使用するプロパティのうち、デフォルトの **agent.properties** ファイルに含まれていないものはすべて追加する必要があります。

使用可能なプロパティのリストを次に示します。

- [agent.keystore.alias プロパティ \(P. 29\)](#)
このプロパティで、vRealize Operations Manager サーバとの単方向通信が構成されたエージェントに対し、エージェントのユーザー管理キーストアの名前を構成します。
- [agent.keystore.password プロパティ \(P. 29\)](#)
このプロパティで、Endpoint Operations Management エージェントの SSL キーストアのパスワードを構成します。
- [agent.keystore.path プロパティ \(P. 30\)](#)
このプロパティで、Endpoint Operations Management エージェントの SSL キーストアの場所を構成します。

- [agent.listenPort プロパティ](#) (P. 30)
このプロパティで、Endpoint Operations Management エージェントが vRealize Operations Manager サーバからの通信受信をリスンするポートを指定します。
- [agent.logDir プロパティ](#) (P. 30)
このプロパティを **agent.properties** ファイルに追加して、Endpoint Operations Management エージェントがログ ファイルを記録するディレクトリを指定することができます。完全修飾パスを指定しない場合は、エージェントのインストール ディレクトリへの相対パス **agent.logDir** が入力されます。
- [agent.logFile プロパティ](#) (P. 30)
エージェント ログ ファイルのパスと名前です。
- [agent.logLevel プロパティ](#) (P. 31)
エージェントがログ ファイルに記述するメッセージ詳細のレベルです。
- [agent.logLevel.SystemErr プロパティ](#) (P. 31)
System.err を **agent.log** ファイルにリダイレクトします。
- [agent.logLevel.SystemOut プロパティ](#) (P. 31)
System.out を **agent.log** ファイルにリダイレクトします。
- [agent.proxyHost プロパティ](#) (P. 31)
Endpoint Operations Management エージェントが vRealize Operations Manager サーバへの接続を確立する際に最初に接続するプロキシ サーバのホスト名または IP アドレスです。
- [agent.proxyPort プロパティ](#) (P. 31)
Endpoint Operations Management エージェントが vRealize Operations Manager サーバへの接続を確立する際に最初に接続するプロキシ サーバのポート番号です。
- [agent.setup.acceptUnverifiedCertificate プロパティ](#) (P. 32)
このプロパティでは、vRealize Operations Manager サーバが、エージェントの SSL 証明書の署名者と異なる認証機関により自己署名または署名された SSL 証明書で、エージェントのキーストアと異なるものを提示した場合に、Endpoint Operations Management エージェントが警告を発行するかどうかを管理します。
- [agent.setup.camIP プロパティ](#) (P. 32)
このプロパティで、エージェントの vRealize Operations Manager サーバの IP アドレスを定義します。Endpoint Operations Management エージェントは、データ ディレクトリで接続構成を見つけられなかった場合のみ、この値を読み取ります。
- [agent.setup.camLogin プロパティ](#) (P. 32)
インストール後初めて起動する際にはこのプロパティで、エージェントがサーバ登録を行う際に使用する、Endpoint Operations Management エージェント ユーザー名を定義します。
- [agent.setup.camPort プロパティ](#) (P. 32)
インストール後初めて起動する際には、このプロパティで、保護されていないサーバとの通信で使用する、Endpoint Operations Management エージェントのサーバ ポートを定義します。
- [agent.setup.camPword プロパティ](#) (P. 33)
このプロパティで Endpoint Operations Management エージェントが vRealize Operations Manager サーバに接続する際に使用するパスワードを定義し、初回起動時にエージェントがユーザーに対してパスワード入力のプロンプトを表示しないようにします。
- [agent.setup.camSecure](#) (P. 33)
このプロパティは、Endpoint Operations Management を vRealize Operations Manager サーバに登録し、暗号化を利用して通信する際に使用します。

- [agent.setup.camSSLPort プロパティ](#) (P. 33)
インストール後初めて起動する際に、このプロパティで、サーバとの SSL 通信に使用する Endpoint Operations Management エージェントのサーバポートを定義します。
- [agent.setup.resetupToken プロパティ](#) (P. 33)
このプロパティで Endpoint Operations Management エージェントを構成し、起動時のサーバ認証で使用する新規トークンを作成します。トークンの削除または破損によってエージェントがサーバに接続できない場合は、トークンの再生成が効果的です。
- [agent.setup.unidirectional プロパティ](#) (P. 34)
Endpoint Operations Management エージェントと vRealize Operations Manager サーバ間の単方向通信を有効化します。
- [agent.startupTimeOut プロパティ](#) (P. 34)
エージェントが正常に起動しなかったと判断するまでに Endpoint Operations Management エージェントの起動スクリプトが待機する秒数です。この秒数の間にエージェントがリクエストをリスンしていないと判明した場合、エラーがログに記録され、起動スクリプトがタイムアウトします。
- [autoinventory.defaultScan.interval.millis プロパティ](#) (P. 34)
Endpoint Operations Management エージェントがデフォルトの autoinventory スキャンを実行する頻度を指定します。
- [autoinventory.runtimeScan.interval.millis プロパティ](#) (P. 34)
Endpoint Operations Management エージェントがランタイム スキャンを実行する頻度を指定します。
- [http.useragent プロパティ](#) (P. 34)
Endpoint Operations Management エージェントにより発行される HTTP 要求内のユーザーエージェント要求ヘッダの値を定義します。
- [log4j プロパティ](#) (P. 35)
Endpoint Operations Management エージェントの **log4j** プロパティについて説明します。
- [platform.log_track.eventfmt プロパティ](#) (P. 36)
vRealize Operations Manager で Windows イベントをイベントとしてログに出力するときに、Endpoint Operations Management エージェントが格納する Windows イベントの属性の内容と形式を指定します。
- [plugins.exclude プロパティ](#) (P. 37)
起動時に Endpoint Operations Management エージェントがロードしないプラグインを指定します。これはエージェントのメモリ占有量を減らすのに役立ちます。
- [plugins.include プロパティ](#) (P. 37)
起動時に Endpoint Operations Management エージェントがロードするプラグインを指定します。これはエージェントのメモリ占有量を減らすのに役立ちます。
- [postgresql.database.name.format プロパティ](#) (P. 37)
このプロパティでは、自動検出された **PostgreSQL Database** と **vPostgreSQL Database** データベースタイプに PostgreSQL プラグインが割り当てる名前の形式を指定します。
- [postgresql.index.name.format プロパティ](#) (P. 37)
このプロパティでは、自動検出された **PostgreSQL Index** と **vPostgreSQL Index** インデックスタイプに PostgreSQL プラグインが割り当てる名前の形式を指定します。
- [postgresql.server.name.format プロパティ](#) (P. 38)
このプロパティでは、自動検出された **PostgreSQL** と **vPostgreSQL** サーバタイプに PostgreSQL プラグインが割り当てる名前の形式を指定します。

- [postgresql.table.name.format](#) プロパティ (P. 38)
このプロパティでは、自動検出された **PostgreSQL Table** と **vPostgreSQL Table** テーブルタイプに PostgreSQL プラグインが割り当てる名前の形式を指定します。
- [scheduleThread.cancelTimeout](#) プロパティ (P. 39)
このプロパティは、**ScheduleThread** により、メトリック収集プロセスがその中断を試みる前に動作できる最大時間（ミリ秒単位）を指定します。
- [scheduleThread.fetchLogTimeout](#) プロパティ (P. 39)
このプロパティは、長時間実行のメトリック収集プロセスに対して、いつ警告メッセージが発行されるかを制御します。
- [scheduleThread.poolsize](#) プロパティ (P. 39)
このプロパティは、プラグインがメトリック収集に複数のスレッドを使用できるようにします。このプロパティは、スレッドセーフであることがわかっているプラグインのメトリック スループットを向上させることができます。
- [scheduleThread.queueSize](#) プロパティ (P. 40)
プラグインのメトリック収集キュー サイズ（メトリックの数）を制限するには、このプロパティを使用します。
- [sigar.mirror.procnet](#) プロパティ (P. 40)
mirror /proc/net/tcp (Linux の場合)。
- [sigar.pdh.enableTranslation](#) プロパティ (P. 40)
このプロパティは、検出したオペレーティング システムのロケールに基づいた翻訳を有効化するのに使用します。
- [snmpTrapReceiver.listenAddress](#) プロパティ (P. 40)
Endpoint Operations Management エージェントが SNMP トラップをリスンするポートを指定します。

`agent.keystore.alias` プロパティ

このプロパティで、vRealize Operations Manager サーバとの単方向通信が構成されたエージェントに対し、エージェントのユーザー管理キーストアの名前を構成します。

例: キーストア名の定義

単方向エージェントのユーザー管理キーストアが次のようなものである場合、

```
hq self-signed cert), Jul 27, 2011, trustedCertEntry,
Certificate fingerprint (MD5): 98:FF:B8:3D:25:74:23:68:6A:CB:0B:9C:20:88:74:CE
hq-agent, Jul 27, 2011, PrivateKeyEntry,
Certificate fingerprint (MD5): 03:09:C4:BC:20:9E:9A:32:DC:B2:E8:29:C0:3C:FE:38
```

次のようにキーストア名を定義します

```
agent.keystore.alias=hq-agent
```

このプロパティの値がキーストア名と一致しない場合、エージェントとサーバ間の通信に失敗します。

デフォルト

エージェントのデフォルト動作では、**hq** キーストアを探します。

ユーザー管理キーストアを持つ単方向エージェントの場合は、このプロパティでキーストア名を定義する必要があります。

`agent.keystore.password` プロパティ

このプロパティで、Endpoint Operations Management エージェントの SSL キーストアのパスワードを構成します。

[\[agent.keystore.path](#) プロパティ (P. 30)] プロパティを使用してキーストアの場所を定義します。

デフォルトでは、インストール後に Endpoint Operations Management エージェントを初めて起動したときに、**agent.keystore.password** がコメント解除されていて、ブレーンテキスト値がある場合、エージェントは自動的にプロパティ値を暗号化します。エージェントを起動する前に、このプロパティ値を自分で暗号化することもできます。

エージェントのプライベート キーと同じパスワードをエージェント キーストアに指定することをお勧めします。

デフォルト

デフォルトでは、**agent.properties** ファイルにはこのプロパティは含まれません。

agent.keystore.path プロパティ

このプロパティで、Endpoint Operations Management エージェントの SSL キーストアの場所を構成します。

キーストアへのフル パスを指定します。**agent.keystore.password** プロパティを使用して、キーストアのパスワードを定義します。[agent.keystore.password プロパティ \(P. 29\)](#) を参照してください。

Windows でのキーストア パスの指定

Windows プラットフォームでは、次のフォーマットでキーストアのパスを指定します。

C:/Documents and Settings/Desktop/keystore

デフォルト

AgentHome/data/keystore.

agent.listenPort プロパティ

このプロパティで、Endpoint Operations Management エージェントが vRealize Operations Manager サーバからの通信受信をリスンするポートを指定します。

単方向通信の場合、このプロパティは不要です。

agent.logDir プロパティ

このプロパティを **agent.properties** ファイルに追加して、Endpoint Operations Management エージェントがログ ファイルを記録するディレクトリを指定することができます。完全修飾パスを指定しない場合は、エージェントのインストール ディレクトリへの相対パス **agent.logDir** が入力されます。

エージェント ログ ファイルの場所を変更するには、エージェントのインストール ディレクトリへの相対パス、または完全修飾パスを入力します。

エージェント ログ ファイルの名前は、**agent.logFile** プロパティで構成されています。

デフォルト

デフォルトでは、**agent.properties** ファイルにはこのプロパティは含まれません。

デフォルト動作は **agent.logDir=log** で、**AgentHome/log** ディレクトリにエージェント ログ ファイルが記録されます。

agent.logFile プロパティ

エージェント ログ ファイルのパスと名前です。

デフォルト

agent.properties ファイルには、**agent.LogFile** プロパティのデフォルト設定が変数と文字列で記述されます。

agent.logFile=\${agent.logDir}\agent.log

条件：

- **<agent.logDir>** は、同じ名前を持つエージェント プロパティの値を提供する変数です。デフォルトでは **<agent.logDir>** の値は **log** で、エージェントのインストール ディレクトリへの相対値となります。

- **agent.log** はエージェント ログ ファイルの名前です。

デフォルトでは、エージェント ログ ファイルは **agent.log** という名前が付けられ、**AgentHome/log** ディレクトリに記録されます。

agent.logLevel プロパティ

エージェントがログ ファイルに記述するメッセージ詳細のレベルです。

許可された値は、**INFO** および **DEBUG** です。

デフォルト

INFO

agent.logLevel.SystemErr プロパティ

System.err を **agent.log** ファイルにリダイレクトします。

この設定をコメントアウトすると、**System.err** が **agent.log.startup** にダイレクトされるようになります。

デフォルト

ERROR

agent.logLevel.SystemOut プロパティ

System.out を **agent.log** ファイルにリダイレクトします。

この設定をコメントアウトすると、**System.out** が **agent.log.startup** にダイレクトされるようになります。

デフォルト

INFO

agent.proxyHost プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントが vRealize Operations Manager サーバへの接続を確立する際に最初に接続するプロキシ サーバのホスト名または IP アドレスです。

このプロパティは、単方向通信が構成されたエージェントでサポートされています。

このプロパティは **agent.proxyPort** および **agent.setup.unidirectional** と組み合わせて使用します。

デフォルト

なし

agent.proxyPort プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントが vRealize Operations Manager サーバへの接続を確立する際に最初に接続するプロキシ サーバのポート番号です。

このプロパティは、単方向通信が構成されたエージェントでサポートされています。

このプロパティは **agent.proxyPort** および **agent.setup.unidirectional** と組み合わせて使用します。

デフォルト

なし

agent.setup.acceptUnverifiedCertificate プロパティ

このプロパティでは、vRealize Operations Manager サーバが、エージェントの SSL 証明書の署名者と異なる認証機関により自己署名または署名された SSL 証明書で、エージェントのキーストアと異なるものを提示した場合に、Endpoint Operations Management エージェントが警告を発行するかどうかを管理します。

デフォルトを使用する場合、エージェントは警告を発行します。

**The authenticity of host 'localhost' can't be established.
Are you sure you want to continue connecting? [default=no]:**

yes と応答する場合、エージェントはサーバの証明書をインポートし、それ以降はその証明書を信頼します。

デフォルト

agent.setup.acceptUnverifiedCertificate=no

agent.setup.camIP プロパティ

このプロパティで、エージェントの vRealize Operations Manager サーバの IP アドレスを定義します。Endpoint Operations Management エージェントは、データ ディレクトリで接続構成を見つけられなかった場合のみ、この値を読み取ります。

このプロパティやその他の **agent.setup.*** プロパティを指定して、エージェントとサーバの通信を構成するために必要なユーザーの操作を減らすことができます。

値は、IP アドレスまたは完全修飾ドメイン名として指定することができます。サーバと同じホスト上のサーバを特定するには、値を「127.0.0.1」に設定します。

エージェントとサーバの間にファイアウォールがある場合は、ファイアウォールのアドレスを指定し、ポート 7080、SSL を使用している場合はポート 7443 のトラフィックを vRealize Operations Manager サーバへ転送するようにファイアウォールを構成します。

デフォルト

コメントアウトされた **localhost**。

agent.setup.camLogin プロパティ

インストール後初めて起動する際にはこのプロパティで、エージェントがサーバ登録を行う際に使用する、Endpoint Operations Management エージェント ユーザー名を定義します。

この初期化に際してサーバ上で要求される許可は、プラットフォームに対する **Create** です。

エージェントからサーバへのログインは、エージェントの初期構成時にのみ要求されます。

エージェントは、データ ディレクトリで接続構成を見つけられなかった場合のみ、この値を読み取ります。

このプロパティやその他の **agent.setup.*** プロパティを指定して、エージェントとサーバの通信を構成するために必要なユーザーの操作を減らすことができます。

デフォルト

コメントアウトされた **hqadmin**。

agent.setup.camPort プロパティ

インストール後初めて起動する際には、このプロパティで、保護されていないサーバとの通信で使用する、Endpoint Operations Management エージェントのサーバ ポートを定義します。

エージェントは、データ ディレクトリで接続構成を見つけられなかった場合のみ、この値を読み取ります。

このプロパティやその他の **agent.setup.*** プロパティを指定して、エージェントとサーバの通信を構成するために必要なユーザーの操作を減らすことができます。

デフォルト

コメント アウトされた **7080**。

agent.setup.camPword プロパティ

このプロパティで Endpoint Operations Management エージェントが vRealize Operations Manager サーバに接続する際に使用するパスワードを定義し、初回起動時にエージェントがユーザーに対してパスワード入力のプロンプトを表示しないようにします。

ユーザーのパスワードは、**agent.setup.camLogin** で指定されたとおりです。

エージェントは、データ ディレクトリで接続構成を見つけられなかった場合のみ、この値を読み取ります。

このプロパティやその他の **agent.setup.*** プロパティを指定して、エージェントとサーバの通信を構成するために必要なユーザーの操作を減らすことができます。

インストール後に Endpoint Operations Management エージェントを初めて起動したときに、**agent.keystore.password** がコメント解除されていて、ブレーンテキスト値がある場合、エージェントは自動的にプロパティ値を暗号化します。エージェントを起動する前に、これらのプロパティ値を暗号化することもできます。

デフォルト

コメント アウトされた **hqadmin**。

agent.setup.camSecure

このプロパティは、Endpoint Operations Management を vRealize Operations Manager サーバに登録し、暗号化を利用して通信する際に使用します。

通信の暗号化には、**yes=**、**secure**、**encrypted**、**SSL** から適切なものを使用します。

暗号化されていない通信には、**no=unencrypted** を使用します。

agent.setup.camSSLPort プロパティ

インストール後初めて起動する際に、このプロパティで、サーバとの SSL 通信に使用する Endpoint Operations Management エージェントのサーバ ポートを定義します。

エージェントは、データ ディレクトリで接続構成を見つけられなかった場合のみ、この値を読み取ります。

このプロパティやその他の **agent.setup.*** プロパティを指定して、エージェントとサーバの通信を構成するために必要なユーザーの操作を減らすことができます。

デフォルト

コメント アウトされた **7443**。

agent.setup.resetupToken プロパティ

このプロパティで Endpoint Operations Management エージェントを構成し、起動時のサーバ認証で使用する新規トークンを作成します。トークンの削除または破損によってエージェントがサーバに接続できない場合は、トークンの再生成が効果的です。

エージェントは、データ ディレクトリで接続構成を見つけられなかった場合のみ、この値を読み取ります。

このプロパティの値にかかわらず、インストール後初めて起動したとき、エージェントはトークンを生成します。

デフォルト

コメント アウトされた **no**。

agent.setup.unidirectional プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントと vRealize Operations Manager サーバ間の単方向通信を有効化します。

エージェントに単方向通信を構成する場合、サーバとのすべての通信はエージェントにより開始されます。

ユーザー管理キーストアを持つ単方向エージェントの場合は、**agent.properties** ファイルでキーストア名を構成する必要があります。

デフォルト

コメントアウトされた **no**。

agent.startupTimeout プロパティ

エージェントが正常に起動しなかったと判断するまでに Endpoint Operations Management エージェントの起動スクリプトが待機する秒数です。この秒数の間にエージェントがリクエストをリスンしていないと判明した場合、エラーがログに記録され、起動スクリプトがタイムアウトします。

デフォルト

デフォルトでは、**agent.properties** ファイルにはこのプロパティは含まれません。

エージェントのデフォルト動作では、300 秒後にタイムアウトします。

autoinventory.defaultScan.interval.millis プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントがデフォルトの autoinventory スキャンを実行する頻度を指定します。

デフォルト スキャンでは、通常はプロセス テーブルまたは Windows レジストリを使用しているサーバおよびプラットフォーム サービス オブジェクトを検出します。デフォルト スキャンは、ランタイム スキャンより少ないリソースを消費します。

デフォルト

エージェントは、起動時およびそれ以降 15 分ごとにデフォルト スキャンを実行します。

86,400,000 ミリ秒 (1 日) をコメントにしました。

autoinventory.runtimeScan.interval.millis プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントがランタイム スキャンを実行する頻度を指定します。

ランタイム スキャンは、サービスを検出するために、デフォルト スキャンよりリソースの消費量が多い方法を使用する可能性があります。たとえば、ランタイム スキャンでは SQL クエリを発行したり、MBean を検索したりすることがあります。

デフォルト

86,400,000 ミリ秒 (1 日)。

http.useragent プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントにより発行される HTTP 要求内のユーザーエージェント要求ヘッダの値を定義します。

http.useragent を使用して、アップグレード間で一貫性があるユーザーエージェント値を定義できます。

デフォルトでは、**agent.properties** ファイルにはこのプロパティは含まれません。

デフォルト

デフォルトでは、エージェント要求内のユーザーエージェントには Endpoint Operations Management のバージョンが含まれるため、エージェントがアップグレードされると変わります。ターゲット HTTP サーバが不明なユーザーエージェントを含む要求をブロックするように構成されている場合、エージェント要求はエージェントのアップグレード後に失敗します。

Hyperic-HQ-Agent/Version、たとえば Hyperic-HQ-Agent/4.1.2-EE。

log4j プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントの log4j プロパティについて説明します。

```
log4j.rootLogger=${agent.logLevel}, R

log4j.appender.R.File=${agent.logFile}
log4j.appender.R.MaxBackupIndex=1
log4j.appender.R.MaxFileSize=5000KB
log4j.appender.R.layout.ConversionPattern=%d{dd-MM-yyyy HH:mm:ss,SSS z} %-5p [%t]
[%c{1}:@%L] %m%n
log4j.appender.R.layout=org.apache.log4j.PatternLayout
log4j.appender.R=org.apache.log4j.RollingFileAppender

##
## Disable overly verbose logging
##
log4j.logger.org.apache.http=ERROR
log4j.logger.org.springframework.web.client.RestTemplate=ERROR
log4j.logger.org.hyperic.hq.measurement.agent.server.SenderThread=INFO
log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.server.AgentDLListProvider=INFO
log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.server.MeasurementSchedule=INFO
log4j.logger.org.hyperic.util.units=INFO
log4j.logger.org.hyperic.hq.product.pluginxml=INFO

# Only log errors from naming context
log4j.category.org.jnp.interfaces.NamingContext=ERROR
log4j.category.org.apache.axis=ERROR

#Agent Subsystems: Uncomment individual subsystems to see debug messages.
#-----
#log4j.logger.org.hyperic.hq.autoinventory=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.livedata=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.measurement=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.control=DEBUG

#Agent Plugin Implementations
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product=DEBUG

#Server Communication
#log4j.logger.org.hyperic.hq.bizapp.client.AgentCallbackClient=DEBUG

#Server Realtime commands dispatcher
#log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.server.CommandDispatcher=DEBUG

#Agent Configuration parser
#log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.AgentConfig=DEBUG

#Agent plugins loader
#log4j.logger.org.hyperic.util.PluginLoader=DEBUG
```

```
#Agent Metrics Scheduler (Scheduling tasks definitions & executions)
#log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.server.session.AgentSynchronizer.SchedulerThread=DE
BUG
```

#Agent Plugin Managers

```
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.MeasurementPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.AutoinventoryPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.ConfigTrackPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.LogTrackPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.LiveDataPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.ControlPluginManager=DEBUG
```

platform.log_track.eventfmt プロパティ

vRealize Operations Manager で Windows イベントをイベントとしてログに出力するときに、Endpoint Operations Management エージェントが格納する Windows イベントの属性の内容と形式を指定します。

デフォルトでは、**agent.properties** ファイルにはこのプロパティは含まれません。

デフォルト

Windows ログの追跡を有効にすると、リソースの [構成プロパティ] ページで指定した基準に一致するイベントについて、エントリが形式 **[Timestamp] Log Message (EventLogName):EventLogName:EventAttributes** でログに出力されます。

属性	説明
Timestamp	イベントが発生した時刻
Log Message	テキスト文字列
EventLogName	Windows イベント ログのタイプ (System 、 Security 、または Application)
EventAttributes	Windows イベントのソース属性とメッセージ属性で構成されるコロン区切りの文字列

たとえば、ログ エントリ **04/19/2010 06:06 AM Log Message (SYSTEM): SYSTEM: Print: Printer HP LaserJet 6P was paused.** は、2010 年 4 月 19 日午前 6:06 に Windows システム イベント ログに書き込まれた Windows イベントを示しています。Windows イベントのソース属性とメッセージ属性は、それぞれ「**Print**」と「**Printer HP LaserJet 6P was paused.**」です。

構成

次のパラメータを使用して、エージェントが Windows イベントについて書き込む Windows イベント属性を構成します。各パラメータは同じ名前の Windows イベント属性に対応します。

パラメータ	説明
%user%	イベントが発生したユーザーの名前。
%computer%	イベントが発生したコンピュータの名前。
%source%	Windows イベントをログに出力したソフトウェア。
%event%	特定のイベント タイプを識別する番号。
%message%	イベント メッセージ。
%category%	イベントをグループ化するために使用されるアプリケーション固有の値。

たとえば、プロパティの設定が `platform.log_track.eventfmt=%user%@%computer% %source%:%event%:%message%` の場合、Endpoint Operations Management エージェントは Windows イベントをログに出力するときに `04/19/2010 06:06 AM Log Message (SYSTEM): SYSTEM: HP_Admistrator@Office Print: 7:Printer HP LaserJet 6P was paused.` を書き込みます。このエントリは、2010 年 4 月 19 日午前 6:06 に Windows システム イベント ログに書き込まれた Windows イベントを示しています。このイベントに関連するソフトウェアは、ホスト「Office」で「HP_Administrator」として実行されていました。Windows イベントのソース属性、イベント属性、メッセージ属性は、それぞれ「Print」、「7」、「Printer HP LaserJet 6P was paused.」です。

`plugins.exclude` プロパティ

起動時に Endpoint Operations Management エージェントがロードしないプラグインを指定します。これはエージェントのメモリ占有量を減らすのに役立ちます。

使用法

除外するプラグインをカンマで区切って指定します。例：

```
plugins.exclude=jboss,apache,mysql
```

`plugins.include` プロパティ

起動時に Endpoint Operations Management エージェントがロードするプラグインを指定します。これはエージェントのメモリ占有量を減らすのに役立ちます。

使用法

含めるプラグインをカンマで区切って指定します。例：

```
plugins.include=weblogic,apache
```

`postgresql.database.name.format` プロパティ

このプロパティでは、自動検出された **PostgreSQL Database** と **vPostgreSQL Database** データベースタイプに PostgreSQL プラグインが割り当てる名前の形式を指定します。

デフォルトでは、PostgreSQL または vPostgreSQL データベースの名前は **Database <DatabaseName>** です。
<DatabaseName> は、自動検出されたデータベースの名前です。

別の命名規則を使用するには、`postgresql.database.name.format` を定義します。使用する変数データは、PostgreSQL プラグインから入手できる必要があります。

次の構文を使用して、プラグインによって割り当てられるデフォルトのテーブル名を指定します。

```
Database ${db}
```

条件：

`postgresql.db` は、自動検出された PostgreSQL または vPostgreSQL データベースの名前です。

デフォルト

デフォルトでは、`agent.properties` ファイルにはこのプロパティは含まれません。

`postgresql.index.name.format` プロパティ

このプロパティでは、自動検出された **PostgreSQL Index** と **vPostgreSQL Index** インデックスタイプに PostgreSQL プラグインが割り当てる名前の形式を指定します。

デフォルトでは、PostgreSQL または vPostgreSQL インデックスの名前は **Index <DatabaseName.Schema.Index>** で、次の変数で構成されます。

変数	説明
DatabaseName	自動検出されたデータベースの名前。
Schema	自動検出されたデータベースのスキーマ。
Index	自動検出されたインデックスの名前。

別の命名規則を使用するには、**postgresql.index.name.format** を定義します。使用する変数データは、PostgreSQL プラグインから入手できる必要があります。

次の構文を使用して、プラグインによって割り当てられるデフォルトのインデックス名を指定します。

Index `${db}.${schema}.${index}`

条件：

属性	説明
db	PostgreSQL または vPostgreSQL サーバをホストするプラットフォームを識別します。
schema	テーブルに関連付けられているスキーマを識別します。
index	PostgreSQL のインデックス名。

デフォルト

デフォルトでは、**agent.properties** ファイルにはこのプロパティは含まれません。

postgresql.server.name.format プロパティ

このプロパティでは、自動検出された **PostgreSQL** と **vPostgreSQL** サーバタイプに PostgreSQL プラグインが割り当てる名前の形式を指定します。

デフォルトでは、PostgreSQL または vPostgreSQL サーバの名前は **<Host:Port>** で、次の変数で構成されます。

変数	説明
Host	サーバをホストするプラットフォームの FQDN。
Port	PostgreSQL リスン ポート。

別の命名規則を使用するには、**postgresql.server.name.format** を定義します。使用する変数データは、PostgreSQL プラグインから入手できる必要があります。

次の構文を使用して、プラグインによって割り当てられるデフォルトのサーバ名を指定します。

\${postgresql.host}:\${postgresql.port}

条件：

属性	説明
postgresql.host	ホストしているプラットフォームの FQDN を識別します。
postgresql.port	データベース リスン ポートを識別します。

デフォルト

デフォルトでは、**agent.properties** ファイルにはこのプロパティは含まれません。

postgresql.table.name.format プロパティ

このプロパティでは、自動検出された **PostgreSQL Table** と **vPostgreSQL Table** テーブルタイプに PostgreSQL プラグインが割り当てる名前の形式を指定します。

デフォルトでは、PostgreSQL または vPostgreSQL テーブルの名前は **Table <DatabaseName.Schema.Table>** で、次の変数で構成されます。

変数	説明
DatabaseName	自動検出されたデータベースの名前。
Schema	自動検出されたデータベースのスキーマ。
Table	自動検出されたテーブルの名前。

別の命名規則を使用するには、**postgresql.table.name.format** を定義します。使用する変数データは、PostgreSQL プラグインから入手できる必要があります。

次の構文を使用して、プラグインによって割り当てられるデフォルトのテーブル名を指定します。

Table \${db}.\${schema}.\${table}

条件：

属性	説明
db	PostgreSQL または vPostgreSQL サーバをホストするプラットフォームを識別します。
schema	テーブルに関連付けられているスキーマを識別します。
table	PostgreSQL のテーブル名。

デフォルト

デフォルトでは、**agent.properties** ファイルにはこのプロパティは含まれません。

scheduleThread.cancelTimeout プロパティ

このプロパティは、**ScheduleThread** により、メトリック収集プロセスがその中断を試みる前に動作できる最大時間（ミリ秒単位）を指定します。

このタイムアウトを超えると、**wait()**、**sleep()**、または非ブロッキングの **read()** 状態にある場合、メトリックの収集は中断されます。

使用法

scheduleThread.cancelTimeout=5000

デフォルト

5000 ミリ秒。

scheduleThread.fetchLogTimeout プロパティ

このプロパティは、長時間実行のメトリック収集プロセスに対して、いつ警告メッセージが発行されるかを制御します。

メトリック収集プロセスがこのプロパティの値（ミリ秒単位で測定される）を超えると、エージェントは **agent.log** ファイルに警告メッセージを書き込みます。

使用法

scheduleThread.fetchLogTimeout=2000

デフォルト

2000 ミリ秒。

scheduleThread.poolsize プロパティ

このプロパティは、プラグインがメトリック収集に複数のスレッドを使用できるようにします。このプロパティは、スレッドセーフであることがわかっているプラグインのメトリック スループットを向上させることができます。

使用法

プラグインの名前と、メトリック収集に割り当てるスレッド数を指定します。

scheduleThread.poolsize.PluginName=2

ここで、<PluginName> は、スレッドを割り当てるプラグインの名前です。例：

scheduleThread.poolsize.vsphere=2

デフォルト

1

scheduleThread.queueSize プロパティ

プラグインのメトリック収集キュー サイズ（メトリックの数）を制限するには、このプロパティを使用します。

使用法

プラグインの名前と、メトリック キューの長さの最大値を指定します。

scheduleThread.queueSize.PluginName=15000

ここで、<PluginName> は、メトリックを制限するプラグインの名前です。

例：

scheduleThread.queueSize.vsphere=15000

デフォルト

1000

sigar.mirror.procnet プロパティ

mirror /proc/net/tcp (Linux の場合)。

デフォルト

true

sigar.pdh.enableTranslation プロパティ

このプロパティは、検出したオペレーティング システムのロケールに基づいた翻訳を有効化するのに使用します。

snmpTrapReceiver.listenAddress プロパティ

Endpoint Operations Management エージェントが SNMP トラップをリスンするポートを指定します。

デフォルトでは、**agent.properties** ファイルにはこのプロパティは含まれません。

SNMP は一般に、トラップ メッセージに UDP ポート 162 を使用します。このポートは権限の範囲内なので、このポートでトラップ メッセージをリスンするエージェントは、**root** として、または Windows の管理ユーザーとして実行される必要があります。

権限のないポートのトラップ メッセージをリスンするようエージェントを構成すれば、非管理ユーザーのコンテキストでエージェントを実行できます。

使用法

IP アドレス（またはプラットフォーム上のすべてのインターフェイスを指定する場合は **0.0.0.0**）と UDP 通信のポートを次の形式で指定します。

snmpTrapReceiver.listenAddress=udp:IP_address/port

Endpoint Operations Management エージェントが権限のないポートの SNMP トラップを受信できるようにするには、ポート 1024 以上を指定します。次の設定では、エージェントがプラットフォームの任意のインターフェイスのトラップを UDP ポート 1620 で受信できるようになります。

snmpTrapReceiver.listenAddress=udp:0.0.0.0/1620

vRealize Operations Manager サーバでのエージェント登録を管理する

Endpoint Operations Management エージェントは、クライアント証明書を使って自らの識別情報をサーバに渡します。このクライアント証明書はエージェント登録プロセスで生成されます。

クライアント証明書には、一意の識別子として使用されるトークンが含まれます。クライアント証明書の盗難または危殆化が疑われる場合は、証明書を交換する必要があります。

エージェント登録プロセスを実行するには、AgentManager 認証情報が必要です。

データ ディレクトリを削除してエージェントを削除、および再インストールする場合、エージェント トークンが保持され、データの継続性が確保されます。[「エージェントのアンインストールと再インストールの影響について \(P. 43\)」](#) を参照してください。

エージェントのクライアント証明書の生成

Endpoint Operations Management エージェントのクライアント証明書が期限切れになったら、交換する必要があります。たとえば、破損または危殆化が疑われる証明証を交換します。

開始する前に

Endpoint Operations Management エージェントをデプロイするために必要な権限があることを確認します。Endpoint Operations Management エージェントをインストール可能なロールを含む vRealize Operations Manager のユーザー認証情報が必要です。[「vRealize Operations Manager でのロールと権限 \(P. 49\)」](#) を参照してください。

手順

- ◆ 登録プロセスを開始するには、エージェントが実行されているオペレーティング システムに応じた **setup** コマンドを実行します。

オペレーティング システム	実行するコマンド
Linux	<code>ep-agent.sh setup</code>
Windows	<code>ep-agent.bat setup</code>

エージェント インストーラにより、セットアップが実行され、サーバに対して新しい証明書が要求され、新しい証明書がキーストアにインポートされます。

サーバとの通信のセキュリティ

Endpoint Operations Management エージェントから vRealize Operations Manager サーバへの通信は一方ですが、両方が認証される必要があります。通信は、トランスポート レイヤ セキュリティ (TLS) を使用して常にセキュリティ保護されます。

インストール後にエージェントが vRealize Operations Manager サーバに初めて接続したときに、サーバは SSL 証明書をエージェントに提示します。

サーバが提示した証明書をエージェントが信頼すると、エージェントはサーバの証明書をキーストアにインポートします。

エージェントは、サーバの証明書またはその発行者 (CA) のいずれかがエージェントのキーストアにすでに存在する場合、サーバの証明書を信頼します。

デフォルトでは、サーバが提示した証明書をエージェントが信頼しない場合、エージェントは警告を表示します。証明書を信頼するか、構成処理を終了するかを選択できます。警告プロンプトに **yes** と応答しない限り、vRealize Operations Manager サーバとエージェントは、信頼性のない証明書をインポートしません。

vRealize Operations Manager サーバの証明書のサムプリントを指定することで、エージェントが警告なしで特定のサムプリントを受け入れるように構成できます。

デフォルトでは、クラスタ内のすべてのノードの証明書の署名に使用される自己署名 CA 証明書が vRealize Operations Manager サーバによって生成されます。この場合、エージェントがすべてのノードと通信できるようにするには、サムプリントは発行者のサムプリントでなければなりません。

vRealize Operations Manager 管理者は、デフォルトの証明書を使用する代わりにカスタム証明書をインポートできます。この場合は、その証明書に対応するサムプリントをこのプロパティの値として指定する必要があります。

サムプリントには SHA1 または SHA256 アルゴリズムを使用できます。

コマンド ラインからのエージェントの起動

Linux オペレーティングシステムと Windows オペレーティングシステムの両方でコマンド ラインからエージェントを起動できます。

使用しているオペレーティングシステムに適したプロセスを使用してください。

data ディレクトリを削除する場合に、Windows サービスを使用して Endpoint Operations Management エージェントを停止/開始しないようにします。**epops-agent.bat stop** を使用してエージェントを停止します。**data** ディレクトリを削除し、**epops-agent.bat start** を使用してエージェントを開始します。

Linux コマンド ラインからのエージェント起動ツールの実行

AgentHome/bin ディレクトリ内の **epops-agent.sh** スクリプトを使用して、エージェント起動ツールおよびエージェント ライフサイクル コマンドを開始できます。

手順

- 1 コマンド シェルまたはターミナル ウィンドウを開きます。
- 2 **sh epops-agent.sh <command>** の形式を使用して、必要なコマンドを入力します。ここで、**command** は次のうちのいずれかです。

オプション	説明
start	エージェントをデーモン プロセスとして起動します。
stop	エージェントの JVM プロセスを停止します。
restart	エージェントの JVM プロセスを停止してから起動します。
status	エージェントの JVM プロセスのステータスを問い合わせます。
dump	エージェント プロセスのスレッド ダンプを実行し、その結果を AgentHome/log 内の agent.log ファイルに書き込みます。
ping	エージェント プロセスに対して ping を実行します。
setup	既存のトークンを使用して証明書を再登録します。

Windows コマンド ラインからのエージェント起動ツールの実行

AgentHome/bin ディレクトリ内の **epops-agent.bat** スクリプトを使用して、エージェント起動ツールおよびエージェント ライフサイクル コマンドを開始できます。

手順

- 1 ターミナル ウィンドウを開きます。
- 2 **epops-agent.bat <command>** の形式を使用して、必要なコマンドを入力します。ここで、**command** は次のうちのいずれかです。

オプション	説明
install	エージェント NT サービスをインストールします。 install を実行した後に start を実行する必要があります。
start	エージェントを NT サービスとして起動します。

オプション	説明
stop	NT サービスとしてのエージェントを停止します。
remove	エージェントのサービスを NT サービス テーブルから削除します。
query	エージェント NT サービスの現在のステータスを問い合わせます (status)。
dump	エージェント プロセスのスレッド ダンプを実行し、その結果を AgentHome/log 内の agent.log ファイルに書き込みます。
ping	エージェント プロセスに対して ping を実行します。
setup	既存のトークンを使用して証明書を再登録します。

クローン作成した仮想マシンの Endpoint Operations Management エージェントを管理する

データを収集する Endpoint Operations Management エージェントを実行している仮想マシンのクローンを作成した場合、データの継続性を確保するために実行する必要があるプロセスがあります。

元の仮想マシンを削除するために仮想マシンのクローンを作成した場合

仮想マシンのクローンを作成して、元の仮想マシンを削除できるようにする場合は、新しいオペレーティングシステムと仮想マシンの関係が作成できるように、元のマシンが vCenter Server および vRealize Operations Manager から削除されていることを確認する必要があります。

元のマシンと独立して実行するために仮想マシンのクローンを作成した場合

2 台のマシンをそれぞれ独立して実行するために仮想マシンのクローンを作成した場合は、1 つのエージェントで監視できるマシンは 1 台だけのため、クローン作成したマシンに新しいエージェントを設定する必要があります。

手順

- ◆ クローン作成されたマシン上で、そのマシンのオペレーティングシステムに従って、Endpoint Operations Management トークンと **data** フォルダを削除します。

オペレーティング システム	プロセス
Linux	Endpoint Operations Management トークンと data フォルダを削除します。
Windows	<ol style="list-style-type: none"> 1 epops-agent remove を実行します。 2 エージェント トークンと data フォルダを削除します。 3 epops-agent install を実行します。 4 epops-agent start を実行します。

vCenter Server インスタンス間での仮想マシンの移動

仮想マシンを別の vCenter Server に移動する場合、vRealize Operations Manager から元のマシンを削除し、作成される仮想マシンとの新しいオペレーティング システム関係を有効にする必要があります。

エージェントのアンインストールと再インストールの影響について

Endpoint Operations Management エージェントをアンインストールまたは再インストールすると、さまざまな要素が影響を受けます。たとえば、エージェントが収集した既存のメトリックや、再インストールされたエージェントがサーバで以前検出されたオブジェクトについてレポートできるようにするための識別トークンなどです。データの継続性を確保するために、エージェントのアンインストールや再インストールの影響を知ることが重要です。

エージェントをアンインストールしたときに保持されるエージェント関連の重要な場所は 2 つあります。エージェントを再インストールする前に、それらのファイルを保持するか削除するかを決める必要があります。

- **/data** フォルダは、エージェントのインストール中に作成されます。このフォルダには、別の場所を選択しないかぎり、キーストアと、現在インストールされているエージェントに関連するその他のデータが含まれます。

- プラットフォーム トークン ファイル **epops-token** は、エージェントの登録の前に作成され、以下の場所に保存されます。
 - Linux : `/etc/vmware/epops-token`
 - Windows : `%PROGRAMDATA%/VMware/EP Ops Agent/epops-token`

エージェントをアンインストールしたら、`/data` フォルダを削除する必要があります。これにより、データの継続性に影響が及ぶことはありません。

ただし、データの継続性を有効にするには、**epops-token** ファイルを削除しないようにすることが重要です。このファイルには、プラットフォーム オブジェクトの識別トークンが含まれています。エージェントの再インストール後、このトークンによって、エージェントはサーバ上で以前検出されたオブジェクトと同期をとることができます。

エージェントを再インストールすると、既存のトークンが見つかったかどうか通知され、その識別子が提供されます。トークンが見つかった場合、そのトークンが使用されます。トークンが見つからなかった場合、新しいトークンが作成されます。エラーが発生した場合は、既存のトークン ファイルまたは新しいトークン ファイルの場所とファイル名を指定するようメッセージが表示されます。

エージェントのアンインストールに使用する方法は、そのエージェントをどのようにインストールしたかによって異なります。

- [アーカイブからインストールしたエージェントのアンインストール \(P. 44\)](#)
アーカイブから環境内の仮想マシンにインストールしたエージェントは、この手順でアンインストールできます。
- [RPM パッケージを使ってインストールしたエージェントのアンインストール \(P. 45\)](#)
RPM パッケージを使って環境内の仮想マシンにインストールしたエージェントは、この手順でアンインストールできます。
- [Windows の実行可能ファイルを使ってインストールしたエージェントのアンインストール \(P. 45\)](#)
Windows の EXE ファイルから環境内の仮想マシンにインストールしたエージェントは、この手順でアンインストールできます。
- [エージェントの再インストール \(P. 45\)](#)
vRealize Operations Manager サーバの IP アドレス、ホスト名、またはポート番号を変更した場合、エージェントを一度アンインストールしてから再インストールする必要があります。

アーカイブからインストールしたエージェントのアンインストール

アーカイブから環境内の仮想マシンにインストールしたエージェントは、この手順でアンインストールできます。

開始する前に

エージェントが停止していることを確認します。

手順

- 1 (オプション) Windows オペレーティングシステムの場合は、**ep-agent.bat remove** を実行してエージェント サービスを削除します。
- 2 状況に合ったアンインストール オプションを選択します。
 - エージェントをアンインストールした後に再インストールしない場合は、エージェントのディレクトリを削除します。
デフォルトのディレクトリ名は **epops-agent-<version>** です。
 - エージェントをアンインストールした後に再インストールする場合は、`/data` ディレクトリを削除します。

- 3 (オプション) エージェントをアンインストールした後に再インストールしない場合、またはデータの継続性を維持する必要がない場合は、プラットフォーム トークン ファイル **epops-token** を削除します。

オペレーティング システムに応じて、削除するファイルは以下のいずれかです (プロパティ ファイルで別の定義をしていない場合)。

- Linux : `/etc/epops/epops-token`
- Windows : `%PROGRAMDATA%/VMware/EP Ops Agent/epops-token`

RPM パッケージを使ってインストールしたエージェントのアンインストール

RPM パッケージを使って環境内の仮想マシンにインストールしたエージェントは、この手順でアンインストールできます。

Endpoint Operations Management エージェントをアンインストールする際は、サーバの不必要な負荷を軽減するため、エージェントの動作を停止することをお勧めします。

手順

- ◆ エージェントを削除する仮想マシンで、コマンド ラインを開き、**rpm -e epops-agent** を実行します。

エージェントが仮想マシンからアンインストールされます。

Windows の実行可能ファイルを使ってインストールしたエージェントのアンインストール

Windows の EXE ファイルから環境内の仮想マシンにインストールしたエージェントは、この手順でアンインストールできます。

Endpoint Operations Management エージェントをアンインストールする際は、サーバの不必要な負荷を軽減するため、エージェントの動作を停止することをお勧めします。

手順

- ◆ エージェントのインストール先ディレクトリにある **unins000.exe** をダブルクリックします。

エージェントが仮想マシンからアンインストールされます。

エージェントの再インストール

vRealize Operations Manager サーバの IP アドレス、ホスト名、またはポート番号を変更した場合、エージェントを一度アンインストールしてから再インストールする必要があります。

開始する前に

データの継続性を維持するには、エージェントのアンインストール時にプラットフォーム トークン ファイル **epops-token** を保持しておく必要があります。[「アーカイブからインストールしたエージェントのアンインストール \(P. 44\)」](#) を参照してください。

仮想マシン上に Endpoint Operations Management エージェントを再インストールした場合、以前に検出されたオブジェクトは監視されなくなります。こうした状況を回避するために、プラグインの同期が完了するまで、Endpoint Operations Management エージェントを再起動しないでください。

手順

- ◆ オペレーティング システムに合ったエージェント インストール手順を実行します。

[「エージェント インストーラ パッケージの選択 \(P. 14\)」](#) を参照してください。

次に進む前に

エージェントを再インストールすると、MSSQL リソースがデータを受信しなくなる場合があります。その場合は、問題のあるリソースを編集し、[OK] をクリックします。

複数の Endpoint Operations Management エージェントを同時にインストールする

一度に複数の Endpoint Operations Management エージェントをインストールする場合は、すべてのエージェントが使用可能な標準の **agent.properties** ファイルを 1 つ作成します。

複数のエージェントのインストールには、いくつかの手順が必要です。リストの順番に従って手順を実行します。

開始する前に

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- 1 インストール サーバをセットアップします。

インストール サーバは、ターゲット プラットフォームにアクセス可能な、リモート インストールを実行するサーバです。

このサーバには、各ターゲット プラットフォームにパスワードなしで SSH 接続できる権限を持ったユーザー アカウントを構成する必要があります。

- 2 Endpoint Operations Management エージェントのインストール先の各ターゲット プラットフォームに、次の項目があることを確認します。

- インストール サーバに作成したものと同一ユーザー アカウント。
- 同じ名前のインストール ディレクトリ (`/home/epomagent` など)。
- 信頼できるキーストア (必要に応じて)。

手順

- 1 [標準の Endpoint Operations Management エージェント プロパティ ファイルの作成 \(P. 46\)](#)

複数のエージェントが使用するプロパティ値が含まれた 1 つのプロパティ ファイルを作成できます。

- 2 [複数のエージェントを 1 つずつデプロイおよび起動する \(P. 47\)](#)

リモート インストールを実行して、1 つの **agent.properties** ファイルを使用する複数のエージェントを 1 つずつデプロイできます。

- 3 [複数のエージェントを同時にデプロイおよび起動する \(P. 47\)](#)

リモート インストールを実行して、1 つの **agent.properties** ファイルを使用する複数のエージェントを同時にデプロイできます。

標準の Endpoint Operations Management エージェント プロパティ ファイルの作成

複数のエージェントが使用するプロパティ値が含まれた 1 つのプロパティ ファイルを作成できます。

複数のエージェントをデプロイできるようにするには、エージェントが起動して vRealize Operations Manager サーバと接続するのに必要なエージェント プロパティを定義する **agent.properties** ファイルを作成します。必要な情報をプロパティ ファイルに指定すると、各エージェントは起動時にセットアップ構成の場所を探し、場所を入力するように求められなくなります。エージェント プロパティ ファイルをエージェント インストール ディレクトリまたはインストールされているエージェントが使用可能な場所にコピーできます。

開始する前に

[「複数の Endpoint Operations Management エージェントを同時にインストールする \(P. 46\)」](#) の前提条件を満たしていることを確認します。

手順

- 1 ディレクトリに **agent.properties** ファイルを作成します。

このファイルを後で別のマシンにコピーします。

- 2 必要に応じてプロパティを構成します。

最小限の構成は、IP アドレス、ユーザー名、パスワード、サムプリント、vRealize Operations Manager インストール サーバのポートです。

- 3 構成を保存します。

エージェントは、初めて起動したときに、**agent.properties** ファイルを読み込んでサーバ接続情報を識別します。エージェントはサーバに接続して、自らを登録します。

次に進む前に

リモート エージェント インストールを実行します。[「複数のエージェントを1 つずつデプロイおよび起動する \(P. 47\)」](#) または [「複数のエージェントを同時にデプロイおよび起動する \(P. 47\)」](#) を参照してください。

複数のエージェントを1 つずつデプロイおよび起動する

リモート インストールを実行して、1 つの **agent.properties** ファイルを使用する複数のエージェントを1 つずつデプロイできます。

開始する前に

- [「複数の Endpoint Operations Management エージェントを同時にインストールする \(P. 46\)」](#) の前提条件を満たしていることを確認します。
- 標準のエージェント プロパティ ファイルを構成し、それをエージェント インストールまたはエージェント インストールが使用可能な場所にコピーしたことを確認します。

手順

- 1 SSH を使用する権限を設定した、インストール サーバのユーザー アカウントにログインします。これにより、パスワードの入力が求められずに各ターゲット プラットフォームに接続することができます。
- 2 SSH を使用してリモート プラットフォームに接続します。
- 3 エージェント アーカイブをエージェント ホストにコピーします。
- 4 エージェント アーカイブを展開します。
- 5 **agent.properties** ファイルをリモート プラットフォームの展開したエージェント アーカイブの **AgentHome/conf** ディレクトリにコピーします。
- 6 新しいエージェントを起動します。

エージェントは vRealize Operations Manager サーバへの登録を行い、自動検出スキャンを実行して、ホスト プラットフォームと、プラットフォームで実行されているサポートと管理の対象となる製品を検出します。

複数のエージェントを同時にデプロイおよび起動する

リモート インストールを実行して、1 つの **agent.properties** ファイルを使用する複数のエージェントを同時にデプロイできます。

開始する前に

- [「複数の Endpoint Operations Management エージェントを同時にインストールする \(P. 46\)」](#) の前提条件を満たしていることを確認します。
- 標準のエージェント プロパティ ファイルを構成し、それをエージェント インストールまたはエージェント インストールが使用可能な場所にコピーしたことを確認します。[「標準の Endpoint Operations Management エージェント プロパティ ファイルの作成 \(P. 46\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 エージェントをインストールする各プラットフォームの IP アドレスにホスト名をマップする **hosts.txt** ファイルをインストール サーバに作成します。
- 2 インストール サーバでコマンドライン シェルを開きます。
- 3 シェルに次のコマンドを入力します。export コマンドには適切なエージェント パッケージ名を指定します。

```
$ export AGENT=epops-agent-x86-64-linux-1.0.0.tar.gz
$ export PATH_TO_AGENT_INSTALL=</path/to/agent/install>
$ for host in `cat hosts.txt`; do scp $AGENT $host:$PATH_TO_AGENT_INSTALL && ssh
$host "cd $PATH_TO_AGENT_INSTALL; tar xzfp $AGENT &&
./epops-agent-1.0.0/ep-agent.sh start"; done
```

- 4 (オプション) ターゲット ホストの名前が連続した名前 (例: host001、host002、host003) の場合は、**hosts.txt** をスキップして、**seq** コマンドを使用できます。

```
$ export AGENT=epops-agent-x86-64-linux-1.0.0.tar.gz
$ for i in `seq 1 9`; do scp $AGENT host$i: && ssh host$i "tar xzfp $AGENT &&
./epops-agent-1.0.0/ep-agent.sh start"; done
```

エージェントは vRealize Operations Manager サーバへの登録を行い、自動検出スキャンを実行して、ホスト プラットフォームと、プラットフォームで実行されているサポートと管理の対象となる製品を検出します。

Endpoint Operations Management エージェントのアップグレード

vRealize Operations Manager 管理インタフェースから、6.3 または 6.4 バージョンの Endpoint Operations Management エージェントを 6.5 バージョンにアップグレードできます。

開始する前に

- Endpoint Operations ManagementPAK ファイルをダウンロードします。
- PAK ファイルを vRealize Operations Manager インストールするか、インスタンスをアップグレードする前に、カスタマイズしたコンテンツを保存するためにクローンを作成します。カスタマイズしたコンテンツには、アラートの定義、シンプトムの定義、推奨事項、およびビューを含めることができます。そして、ソフトウェアのアップデート時に、[インストール済みの場合でも PAK ファイルをインストールします] オプションおよび [初期状態のコンテンツのリセット] オプションを選択します。

手順

- 1 クラスタの vRealize Operations Manager 管理インターフェイス (<https://IP-address/admin>) にログインします。
- 2 左パネルの [ソフトウェア アップデート] をクリックします。
- 3 メイン パネルの [ソフトウェア アップデートのインストール] をクリックします。
- 4 [ソフトウェア アップデートの追加] ダイアログボックスから、[参照] をクリックして、PAK ファイルを選択します。
- 5 [アップロード] をクリックして、ウィザードの手順に従い、PAK ファイルをインストールします。
- 6 インストールの手順 4 を完了したら、Endpoint Operations Management 管理インタフェースの [ソフトウェア アップデート] ページに戻ります。
- 7 メイン ペインに、更新が正常に完了したことを示すメッセージが表示されます。

エージェントが正常にインストールされなかった場合は、アップグレード手順に戻り、[ソフトウェア アップデートの追加 - ソフトウェア アップデートの選択] ページで [PAK ファイルがインストール済みでもインストールします] を選択していることを確認します。

次に進む前に

ログ ファイルは、vRealize Operations Manager 管理インターフェイス > [サポート] ページから表示できます。

ログ ファイルのアクセスおよび表示

ログ ファイルにアクセスして表示し、エージェント アップグレードの障害をトラブルシューティングできます。アップグレード プロセス中およびアップグレード プロセス後にエージェントのステータスを確認して、エージェントが正常にアップグレードされたかどうかを確認できます。

アップグレード中のエージェントのステータスは、**epops-agent-upgrade-status.txt** ファイルから表示できます。正常にアップグレードされたエージェントの数とアップグレードに失敗したエージェントの数の最終レポートは、**epops-agent-bundle-upgrade-summary.txt** ファイルから表示できます。

手順

- 1 クラスタの vRealize Operations Manager 管理インターフェイス (<https://IP-address/admin>) にログインします。
- 2 左パネルの [サポート] をクリックします。
- 3 右側のペインの [ログ] タブをクリックし、[EPOPS] をダブルクリックします。
- 4 ログ ファイルをダブルクリックして、内容を表示します。

vRealize Operations Manager でのロールと権限

vRealize Operations Manager では、権限をユーザーに割り当てる事前定義済みロールが複数用意されています。独自の役割を作成することもできます。

vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイス内の特定の機能にアクセスするための権限が必要です。ユーザー アカウントに関連付けられたロールによって、アクセスできる機能および実行できるアクションが決まります。

各事前定義済みロールには、ダッシュボード、レポート、管理、容量、ポリシー、問題、症状、アラート、ユーザー アカウント管理、アダプタなどのコンポーネントに対し、ユーザーが作成、読み取り、更新あるいは削除アクションを行うための権限一式が含まれています。

システム管理者	vRealize Operations Manager のすべての機能、オブジェクトおよびアクションに対する権限が含まれています。
PowerUser	ユーザーには、ユーザー管理とクラスタ管理権限を除く、管理者ロールのアクションを実行する権限があります。vRealize Operations Manager は、vCenter Server ユーザーをこのロールにマップします。
PowerUserMinusRemediation	ユーザーには、ユーザー管理、クラスタ管理および修正アクション権限を除く、管理者ロールのアクションを実行する権限があります。
ContentAdmin	ユーザーは、vRealize Operations Manager のすべてのコンテンツ（ビュー、レポート、ダッシュボード、カスタム グループなど）を管理できます。
AgentManager	ユーザーは、Endpoint Operations Management エージェントを展開および構成することができます。
GeneralUser-1 から GeneralUser-4	これらの事前定義済みテンプレート ロールは、最初に ReadOnly ロールと定義されます。vCenter Server 管理者は、これらのロールを構成して、ユーザーに複数タイプの権限を与えるロールの組み合わせを作成することができます。ロールは、登録中に一度 vCenter Server と同期されます。
ReadOnly	ユーザーは、読み取り専用でアクセスし、読み取りアクションを実行できますが、作成、更新または削除といった書き込みアクションは実行できません。

クラスタでのエージェントの登録

クラスタの DNS 名を定義し、メトリックをループで順番に共有するようにクラスタを構成すると、エージェントの登録プロセスを効率化できます。

エージェントは、クラスタ内の各マシンの IP アドレスではなく DNS で登録できます。クラスタ内の各ノードにエージェントを登録した場合、環境のスケールに影響が生じます。

受信したメトリックをループで順番に共有するようクラスタを構成すると、エージェントが DNS サーバに IP アドレスを照会するたびに、クラスタ内のいずれかの仮想マシンのアドレスが返されます。エージェントが次に DNS に照会をかけたときは、クラスタ内の次の仮想マシンの IP アドレスが順番に返されます。クラスタ内のマシンにはループ構成が設定され、それぞれが順番にメトリックを受信して負荷分散されるようにします。

DNS の構成後は、クラスタにマシンを追加したり削除したりしたときに、それによってマシンの IP アドレス情報が更新されるよう保守することが重要です。

オペレーティング システム オブジェクトを手動で作成する

エージェントは、監視対象の一部のオブジェクトを自動で検出しますが、ファイル、スクリプト、プロセスなどのその他のオブジェクトを手動で追加し、詳細を指定して、エージェントがそれらを監視するようにできます。

[OS オブジェクトの監視] アクションは、親オブジェクトとして使用できるオブジェクトの [アクション] メニューにのみ表示されます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、作成する OS オブジェクトの親となるエージェント アダプタ オブジェクトを選択します。
- 2 [アクション]-[OS オブジェクトの監視] を選択します。
メニューに、親オブジェクトに応じたオブジェクトのリストが表示されます。
- 3 以下のいずれかのオプションを選択します。
 - リストからオブジェクト タイプをクリックし、このオブジェクト タイプの [OS オブジェクトの監視] ダイアログを開きます。
リストに表示されるのは、よく選択される 3 つのオブジェクト タイプです。
 - 選択したいオブジェクト タイプがリストにない場合は、[その他] をクリックして [OS オブジェクトの監視] ダイアログを開き、[オブジェクト タイプ] メニューで選択可能なすべてのオブジェクトのリストからオブジェクトを選択します。
- 4 OS オブジェクトの表示名を指定します。
- 5 その他のテキスト ボックスに適切な値を入力します。
メニューのオプションは、選択した OS オブジェクトに従ってフィルタされています。
一部のテキスト ボックスにはデフォルト値が表示されており、必要に応じて上書きできます。デフォルト値に関する次の情報をメモします。

オプション	値
プロセス	<p>次の形式で PTQL クエリを指定します。Class.Attribute.operator=value</p> <p>たとえば、Pid.PidFile.eq=/var/run/sshd.pid など。</p> <p>ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Class は、Proc プリフィックスを除いた Sigar クラス名です。 ■ Attribute は、指定したクラスの属性であり、Map クラスのアレイまたはキーへのインデックスです。 ■ operator は次のいずれかです（文字列値）。 <ul style="list-style-type: none"> ■ eq は、値に等しい ■ ne は、値に等しくない ■ ew は、値で終わる ■ sw は、値で始まる ■ ct は、値を含む（部分文字列） ■ re は、正規表現値が一致 <p>クエリはカンマで区切ります。</p>
Windows サービス	<p>Windows のサービスとして実行されるアプリケーションを監視します。</p> <p>これを構成する場合は、Windows でのサービス名を指定します。</p> <p>サービス名を確認するには、以下を行います。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 Windows の [スタート] メニューから、[ファイル名を指定して実行] を選択します。 2 ファイル名を指定して実行ダイアログで services.msc と入力し、[OK] をクリックします。 3 表示されたサービスのリストから監視するサービスを右クリックして、[プロパティ] を選択します。 4 [全般] タブでサービス名を検索します。
スクリプト	vRealize Operations Manager を構成して、システムまたはアプリケーションのメトリックを収集するスクリプトを定期的に行います。

6 [OK] をクリックします。

入力必須のテキスト ボックスすべてに値を入力するまで、[OK] はクリックできません。

親オブジェクトの下に OS オブジェクトが表示され、監視が始まります。



注意 OS オブジェクトを作成したときに無効な情報を入力した場合、オブジェクトは作成されますが、エージェントはそのオブジェクトを検出できず、メトリックは収集されません。

構成パラメータの指定されていないオブジェクトの管理

vRealize Operations Manager により初めて検出されたオブジェクトでは、必須構成パラメータの一部の値が未設定であることが検出される場合があります。オブジェクトのパラメータを編集して未設定の値を入力できます。

vRealize Operations Manager の [環境の概要] 表示で [カスタム グループ] - [Objects with Missing Configuration (EP Ops)] の順に選択すると、未設定の必須構成パラメータがあるすべてのオブジェクトのリストが表示できます。また、そのような未設定パラメータのあるオブジェクトは、収集ステータス データでエラーを返します。

vRealize Operations Manager ユーザー インターフェイスで未構成パラメータのあるオブジェクトを選択すると、赤い未設定構成状態アイコンがメニュー バーに表示されます。そのアイコンをポイントすると、個々の問題の詳細が表示されます。

未設定パラメータの値を追加するには、[アクション] - [オブジェクトの編集] の順にメニューを選択します。

仮想マシンをオペレーティング システムにマッピングする

仮想マシンをオペレーティング システムにマッピングして、仮想マシンに対してトリガーされたアラートの根本原因を判断するのに役立つ追加情報を提供できます。

vRealize Operations Manager は、ESXi ホストと、そのホスト上の仮想マシンを監視します。Endpoint Operations Management エージェントをデプロイすると、仮想マシンとそこで実行されているオブジェクトが検出されます。Endpoint Operations Management エージェントによって検出された仮想マシンと vRealize Operations Manager によって監視されるオペレーティング システムを関連付けることで、トリガーされたアラートの原因を正確に判断するための詳細情報を取得することができます。

vCenter Adapter に、仮想マシンを管理する vCenter Server が構成されていることを確認します。また、各仮想マシンに vCenter Server と互換性のある VMware Tools がインストールされていることを確認する必要があります。

ユーザー シナリオ

vRealize Operations Manager は稼働していますが、まだ Endpoint Operations Management エージェントを環境にデプロイしていません。CPU の問題が発生したときにアラートを送るよう、vRealize Operations Manager を構成してあります。Linux オペレーティング システムを実行している仮想マシンのいずれかで CPU キャパシティが足りなくなったため、ダッシュボードにアラートが表示されます。仮想 CPU をさらに 2 つデプロイしましたが、アラートは消えません。問題の原因がわからず困っています。

同じ状況で Endpoint Operations Management エージェントをデプロイしていた場合、仮想マシン上のオブジェクトを確認することができ、アプリケーションタイプのオブジェクトが使用可能な CPU キャパシティをすべて使っていることがわかります。CPU キャパシティを追加しても、それも使われてしまいます。そのオブジェクトを無効にすると、CPU の可用性の問題は解消されました。

仮想マシン上のオブジェクトを表示する

仮想マシンに Endpoint Operations Management エージェントをデプロイした後、そのマシンがオペレーティング システムにマップされ、マシン上のオブジェクトが表示されるようになります。

vRealize Operations Manager 環境内の他のオブジェクトに使用可能なすべてのアクションとビューが、新しく検出されたサーバ、サービス、アプリケーション オブジェクト、およびデプロイされたエージェントに対しても使用できるようになります。

[環境] - [vSphere ホストおよびクラスタ] ビューでマシンを選択すると、仮想マシン上のオブジェクトがインベントリに表示されます。オブジェクトとデプロイされたエージェントは、オペレーティング システムの下に表示されます。

オブジェクトを選択すると、ユーザー インターフェイスの中央のペインにそのオブジェクトに関連するデータが表示されます。

Endpoint Operations Management によるオペレーティング システムの監視方法のカスタマイズ

Endpoint Operations Management は、エージェントベースの収集を使用してオペレーティング システムのメトリックを収集します。Endpoint Operations Management の初期構成後に使用可能になる機能に加えて、リモート監視を有効にしたり、追加の監視のためのプラグインを有効または無効にしたり、Endpoint Operations Management ログをカスタマイズしたりできます。

リモート監視の構成

リモート監視では、リモート チェックを構成することによって、オブジェクトの状態を遠隔地から監視できます。

リモート監視は、HTTP、ICMP、TCP の方法を使用して構成できます。

リモートの HTTP、ICMP、または TCP チェックを構成すると、それは、監視しているテスト対象のオブジェクトと監視エージェントの子オブジェクトとして作成されます。

リモートで監視することを選択したオブジェクトにアラートがまだ構成されていない場合は、**Remote <check type> failed on a <object type>.** という形式のアラートが自動的に作成されます。そのオブジェクトに既存のアラートがある場合は、それが使用されます。

オブジェクトのリモート監視の構成

この手順を使用して、オブジェクトのリモート監視を構成します。

構成オプションは、[\[HTTP 構成オプション \(P. 53\)\]](#)、[\[ICMP 構成オプション \(P. 56\)\]](#)、および [\[TCP 構成オプション \(P. 57\)\]](#) に定義されています。この手順を実行するときに、これらの情報を参照しなければならないことがあります。

手順

- 1 vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイスで、監視するリモート オブジェクトを選択します。
- 2 オブジェクトの詳細ページで、[アクション] メニューから [このオブジェクトをリモートで監視] を選択します。
- 3 [リモートオブジェクトの監視] ダイアログで、オブジェクトをリモート監視する Endpoint Operations Management エージェントを [監視元] メニューから選択します。
- 4 リモート オブジェクトを監視する方法を、[チェック方法] メニューから選択します。
選択したオブジェクト タイプに該当するパラメータが表示されます。
- 5 すべての構成オプションの値を入力して、[OK] をクリックします。

HTTP 構成オプション

HTTP リソースの構成スキーマ内のオプションを以下に示します。

HTTP リソースに対する **netservices** プラグイン記述子の値は次のとおりです。

- port: 80
- sslport: 443

HTTP 構成オプション

表 1-4. ssl オプション

オプション情報	値
説明	ssl の使用
デフォルト	偽
任意	真
ファイルタイプ	boolean
メモ	該当なし
親スキーマ	ssl

表 1-5. hostname オプション

オプション情報	値
説明	ホスト名
デフォルト	localhost
任意	偽
ファイルタイプ	該当なし

表 1-5. hostname オプション (続き)

オプション情報	値
メモ	監視するサービスをホストするシステムのホスト名。例： mysite.com
親スキーマ	sockaddr

表 1-6. port オプション

オプション情報	値
説明	ポート
デフォルト	ポートのデフォルト値は、 <code>netservices</code> プラグイン記述子のプロパティで、ネットワーク サービスの各タイプに対して設定されています。
任意	偽
ファイルタイプ	該当なし
メモ	サービスがリスンするポート。
親スキーマ	sockaddr

表 1-7. sotimeout オプション

オプション情報	値
説明	ソケットのタイムアウト (秒)
デフォルト	10
任意	真
ファイルタイプ	int
メモ	エージェントがリモート サービスへの要求に対する応答を待機する最大時間。
親スキーマ	sockaddr

表 1-8. path オプション

オプション情報	値
説明	パス
デフォルト	/
任意	偽
ファイルタイプ	該当なし
メモ	サイト上の特定のページまたはファイルを監視するための値を入力します。例：/Support.html
親スキーマ	url

表 1-9. method オプション

オプション情報	値
説明	要求方法
デフォルト	HEAD
任意	偽
ファイルタイプ	enum

表 1-9. method オプション (続き)

オプション情報	値
メモ	<p>可用性をチェックするための方法。</p> <p>使用可能な値: HEAD、GET</p> <p>HEAD はネットワーク トラフィックが少なくなります。</p> <p>要求応答の本文を戻して応答内で突き合わせるためのパターンを指定するには GET を使用します。</p>
親スキーマ	http

表 1-10. hostheader オプション

オプション情報	値
説明	ホスト ヘッダ
デフォルト	なし
任意	真
ファイルタイプ	該当なし
メモ	<p>要求内に Host HTTP ヘッダを設定するにはこのオプションを使用します。これは、名前ベースの仮想ホスティングを使用する場合に有効です。Vhost のホストのホスト名を指定します。例: blog.mypost.com</p>
親スキーマ	http

表 1-11. follow オプション

オプション情報	値
説明	リダイレクトをフォロー
デフォルト	有効
任意	真
ファイルタイプ	boolean
メモ	<p>生成される HTTP 要求がリダイレクトされる場合に有効にします。</p> <p>このリダイレクト構成が設定されていない場合は、HTTP サーバがリダイレクトに対して異なるコードを返し、vRealize Operations Manager は HTTP サービス チェックがリダイレクトである場合はそれが使用不可能であると判断するため、これは重要です。</p>
親スキーマ	http

表 1-12. pattern オプション

オプション情報	値
説明	応答マッチ (サブストリングまたは正規表現)
デフォルト	なし
任意	真
ファイルタイプ	該当なし
メモ	<p>vRealize Operations Manager が HTTP レスポンスの内容との突き合わせを試行するためのパターンまたはサブストリングを指定します。これにより、使用可能であることのチェックに加え、リソースが期待どおりの内容を提供していることのチェックが可能になります。</p>
親スキーマ	http

表 1-13. proxy オプション

オプション情報	値
説明	プロキシ接続
デフォルト	なし
任意	真
ファイルタイプ	該当なし
メモ	HTTP サービスへの接続がプロキシ サーバを経由する場合、プロキシ サーバのホスト名とポートを指定します。例：proxy.myco.com:3128
親スキーマ	http

表 1-14. requestparams オプション

オプション情報	値
説明	要求引数。例： <code>arg0=val0</code> 、 <code>arg1=val1</code> など
デフォルト	該当なし
任意	真
ファイルタイプ	文字列
メモ	テスト対象 URL に追加される要求パラメータ。
親スキーマ	http

表 1-15. Credential オプション

オプション情報	値
説明	ユーザー名
デフォルト	該当なし
任意	真
ファイルタイプ	該当なし
メモ	ターゲット サイトがパスワードで保護されている場合、ユーザー名を指定します。
親スキーマ	認証情報

ICMP 構成オプション

ICMP リソース用の構成スキーマを示します。

ICMP 構成は Windows 環境ではサポートされません。Windows プラットフォーム上で実行されているエージェントからリモート監視の ICMP チェックを実行しても、データが返されません。

表 1-16. hostname オプション

オプション情報	値
説明	ホスト名
デフォルト	localhost
任意	該当なし
タイプ	該当なし

表 1-16. hostname オプション (続き)

オプション情報	値
メモ	監視するオブジェクトをホストするシステムのホスト名。例： mysite.com
親スキーマ	netservices プラグイン記述子

表 1-17. sotimeout オプション

オプション情報	値
説明	ソケットのタイムアウト (秒)
デフォルト	10
任意	該当なし
タイプ	整数
メモ	リモート サービスへの要求への応答をエージェントが待つ最大時間。
親スキーマ	netservices プラグイン記述子

TCP 構成オプション

TCP チェックを有効にする構成スキーマを示します。

表 1-18. port オプション

オプション情報	値
説明	ポート
デフォルト	ポートのデフォルト値は、netservices プラグイン記述子のプロパティで、ネットワーク サービスの各タイプに対して設定されています。
任意	false
タイプ	該当なし
メモ	サービスがリスンするポート。
親スキーマ	sockaddr

表 1-19. hostname オプション

オプション情報	値
説明	ホスト名
デフォルト	localhost
任意	該当なし
タイプ	該当なし
メモ	監視するオブジェクトをホストするシステムのホスト名。例： mysite.com
親スキーマ	netservices プラグイン記述子

リモート チェックを実行するマシンのホスト名でなく、IP アドレスを指定していることを確認してください。

表 1-20. sotimeout オプション

オプション情報	値
説明	ソケットのタイムアウト (秒)
デフォルト	10

表 1-20. sotimeout オプション (続き)

オプション情報	値
任意	該当なし
タイプ	整数
メモ	リモート サービスへの要求への応答をエージェントが待つ最大時間。
親スキーマ	netsservices プラグイン記述子

エージェント プラグインの操作

Endpoint Operations Management エージェントには、監視するオブジェクト、監視方法、収集するメトリックなどを決定するプラグインがあります。一部のプラグインは、Endpoint Operations Management エージェントのインストールにデフォルトで含まれていますが、その他のプラグインは、vRealize Operations Manager 監視プロセスを拡張するためにインストールする管理バック ソリューションの一部として追加する必要があります。

コンテンツ ビューの [プラグイン] タブを使用して、ソリューション インストールの一部として環境にデプロイされたエージェント プラグインを無効または有効にすることができます。たとえば、一時的にプラグインを無効にして、監視対象の仮想マシン上でのそのプラグインの影響を分析することができます。

すべてのデフォルト プラグインと、1 つまたは複数のソリューションをインストールしたときにデプロイされたプラグインが、タブにアルファベット順に表示されます。

プラグインを有効または無効にするには、プラグインの管理権限が必要です。

プラグインを無効にすると、プラグインが存在するすべてのエージェントからそのプラグインが削除され、エージェントはそのプラグインに関連するメトリックおよびその他のデータを収集しなくなります。プラグインは vRealize Operations Manager サーバ上で無効としてマークされます。

vRealize Operations Manager のインストール時にインストールされたデフォルトのプラグインは無効にできません。

歯車アイコンをクリックして表示されるアクション メニューを使用してプラグインを無効または有効にできます。

新しいバージョンのプラグインをデプロイする前に、シャットダウン方式を実装する必要があります。シャットダウン方式を実装しないと、既存のプラグインがシャットダウンされないで、新しいインスタンスが作成され、静的スレッドなどの割り当てられているリソースがリリースされません。次のプラグインでシャットダウン方式を実装します。

- サードパーティ ライブラリを使用するプラグイン
- ネイティブ ライブラリを使用するプラグイン
- 接続プールを使用するプラグイン
- ファイルをロックするプラグイン (Windows オペレーティング システムで問題の原因となる)

プラグインでは、スレッド、サードパーティ ライブラリ、または静的コレクションを使用しないようにすることをお勧めします。

プラグインのロードの構成

起動時に、Endpoint Operations Management エージェントはすべてのプラグインを **AgentHome/bundles/agent-x.y.z-nnnn/pdk/plugins** ディレクトリ内にロードします。使用するプラグインのみをロードするように **agent.properties** ファイル内のプロパティを構成することにより、エージェントのメモリ フットプリントを削減できます。

プラグインは、ソリューションがインストールされたときにすべてのエージェントにデプロイされます。特定のマシンから 1 つ以上のプラグインを削除する必要がある状況では、ここで説明されているプロパティを使用することが必要になる場合があります。除外するプラグインのリストを指定するか、またはロードするプラグインのリストを構成することができます。

`plugins.exclude`

Endpoint Operations Management エージェントが起動時にロードしてはいけないプラグインを指定するには、このプロパティを使用します。

除外するプラグインをカンマで区切って指定します。たとえば、`plugins.exclude=jboss,apache,mysql` など。

`plugins.include`

Endpoint Operations Management エージェントが起動時にロードする必要があるプラグインを指定するには、このプロパティを使用します。

含めるプラグインをカンマで区切って指定します。たとえば、`plugins.include=weblogic,apache` など。

非同期エージェント グループについて

非同期エージェントは、プラグインに関して vRealize Operations Manager サーバと同期していないエージェントです。このエージェントは、サーバに登録されているが見つからないプラグイン、サーバに登録されていないプラグイン、またはサーバに登録されているのとは異なるバージョンのプラグインなどである可能性があります。

各エージェントは vRealize Operations Manager サーバと同期している必要があります。エージェントがサーバと同期していない期間は、非同期エージェントのリストにそのエージェントが表示されます。そのリストは、vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイスの環境ビューの [グループ] タブにあります。

エージェントが初めて起動されると、ステータス メッセージがサーバに送信されます。サーバは、エージェントが送信したステータスを、サーバ上のステータスと比較します。サーバは、検出した差異での必要に応じて、プラグインを同期、ダウンロード、または削除するためのコマンドをエージェントに送信します。

管理パック ソリューション更新の一部としてプラグインがデプロイ、無効化、または有効化されると、vRealize Operations Manager サーバはその変更を検出し、同期させるための新しいコマンドをエージェントに送信します。

プラグインがデプロイ、無効化、または有効化される場合、通常は同時に複数のエージェントが影響を受けます。すべてのエージェントが均等に更新される必要があり、多数のエージェントすべてが同時に同期される場合に発生する可能性があるサーバの過負荷およびパフォーマンスの低下を避けるために、同期はバッチ処理で 1 分間隔ですらして実行されます。時間が経過すると、非同期エージェントのリストが減っていくことがわかります。

エージェント ログの構成

Endpoint Operations Management エージェント ログの名前、場所、およびログ レベルを構成できます。また、システム メッセージをエージェント ログにリダイレクトしたり、エージェント サブシステムのデバッグ ログ レベルを構成したりすることもできます。

エージェント ログ ファイル

Endpoint Operations Management エージェント ログファイルは `AgentHome/log` ディレクトリに格納されています。

エージェント ログ ファイルには次のファイルがあります。

agent.log

agent.operations.log

このログ ファイルは Windows ベースのエージェントのみに適用されます。

これは、エージェントで実行されたコマンドを、そのアクションにエージェントが使用したパラメータと共に記録している監査ログです。

wrapper.log

Java サービス ラッパ ベースのエージェント起動ツールは `wrapper.log` ファイルにメッセージを書き込みます。JRE を使用しないエージェントでは、このファイルは `agentHome/wrapper/sbin` にあります。

`agent.logDir` プロパティで値が変更された場合、このファイルは `agentHome/wrapper/sbin` にも置かれます。

エージェント ログの名前または場所の構成

エージェント ログ ファイルの名前または場所を変更するには、次のプロパティを使用します。

agent.logDir

このプロパティを **agent.properties** ファイルに追加すると、Endpoint Operations Management エージェントがログ ファイルを書き込むディレクトリを指定できます。完全修飾パスを指定しない場合、**agent.logDir** は、エージェントのインストール ディレクトリを基準として評価されます。

このプロパティは、明示的に追加しない限り **agent.properties** ファイルには存在しません。デフォルトの動作は **agent.logDir=log** の設定と同じであり、エージェント ログ ファイルが **AgentHome/log** ディレクトリに書き込まれます。

エージェント ログ ファイルの場所を変更するには、**agent.logDir** を **agent.properties** ファイルに追加し、エージェントのインストール ディレクトリを基準としたパスか、または完全修飾パスを入力します。

エージェント ログ ファイルの名前は、**agent.logFile** プロパティを使用して構成されます。

agent.logFile

このプロパティは、エージェント ログ ファイルのパスと名前を指定します。

agent.properties ファイル内で、**agent.LogFile** プロパティのデフォルト設定は、変数と文字列 **agent.logFile=\${agent.logDir}\<agent.logDir>** で構成されます。

- **<agent.logDir>** は、同じ名前のエージェント プロパティの値を指定する変数です。デフォルトでは、**<agent.logDir>** の値は **log** であり、エージェントのインストール ディレクトリを基準として解釈されます。
- **agent.log** は、エージェント ログ ファイルの名前です。

デフォルトでは、エージェント ログ ファイルは **agent.log** という名前であり、**AgentHome/log** ディレクトリに書き込まれます。

ログを別のディレクトリに記録するようにエージェントを構成するには、**agent.logDir** プロパティを **agent.properties** ファイルに明示的に追加する必要があります。

エージェントのログ レベルの構成

Endpoint Operations Management エージェントがエージェント ログ ファイルに書き込むメッセージの重大度レベルを制御するには、このプロパティを使用します。

agent.logLevel

このプロパティは、Endpoint Operations Management エージェントがログ ファイルに書き込むメッセージの詳細レベルを指定します。

agent.logLevel プロパティ値を **DEBUG** レベルに設定することは推奨されません。すべてのサブシステムにこのログ レベルを設定すると、オーバーヘッドが発生します。また、ログ ファイルが頻繁にロールオーバーされるため、目的のログ メッセージが失われる可能性もあります。デバッグ レベルのログ記録は、サブシステム レベルでのみ構成することを推奨します。

このプロパティに対する変更は、プロパティ ファイルを保存してから約 5 分後に有効になります。変更を反映するためにエージェントを再起動する必要はありません。

エージェント ログへのシステム メッセージのリダイレクト

このプロパティで、システムが生成するメッセージを Endpoint Operations Management エージェント ログ ファイルにリダイレクトすることができます。

`agent.logLevel.SystemErr`

このプロパティで **System.err** を **agent.log** にリダイレクトします。この設定をコメントアウトすると、**System.err** が **agent.log.startup** にダイレクトされるようになります。

デフォルト値は **ERROR** です。

`agent.logLevel.SystemOut`

このプロパティで **System.out** を **agent.log** にリダイレクトします。この設定をコメントアウトすると、**System.out** が **agent.log.startup** にダイレクトされるようになります。

デフォルト値は **INFO** です。

エージェント サブシステムのデバッグ レベルの構成

トラブルシューティング用に、個々のエージェント サブシステムのログ レベルを増やすことができます。

個々のエージェント サブシステムのログ レベルを増やすには、**agent.properties** ファイルで **Agent Subsystems: Uncomment individual subsystems to see debug messages** というラベルが付いているセクションの該当する行をコメント解除します。

エージェントの log4j プロパティ

agent.properties ファイルの **log4j** プロパティを以下に示します。

```
log4j.rootLogger=${agent.logLevel}, R
```

```
log4j.appender.R.File=${agent.logFile}
```

```
log4j.appender.R.MaxBackupIndex=1
```

```
log4j.appender.R.MaxFileSize=5000KB
```

```
log4j.appender.R.layout.ConversionPattern=%d{dd-MM-yyyy HH:mm:ss,SSS z} %-5p [%t]
[%c{1}@%L] %m%n
```

```
log4j.appender.R.layout=org.apache.log4j.PatternLayout
```

```
log4j.appender.R=org.apache.log4j.RollingFileAppender
```

```
##
```

```
## Disable overly verbose logging
```

```
##
```

```
log4j.logger.org.apache.http=ERROR
```

```
log4j.logger.org.springframework.web.client.RestTemplate=ERROR
```

```
log4j.logger.org.hyperic.hq.measurement.agent.server.SenderThread=INFO
```

```
log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.server.AgentDLListProvider=INFO
```

```
log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.server.MeasurementSchedule=INFO
```

```
log4j.logger.org.hyperic.util.units=INFO
```

```
log4j.logger.org.hyperic.hq.product.pluginxml=INFO
```

```
# Only log errors from naming context
```

```
log4j.category.org.jnp.interfaces.NamingContext=ERROR
```

```
log4j.category.org.apache.axis=ERROR
```

```
#Agent Subsystems: Uncomment individual subsystems to see debug messages.
```

```
#-----
```

```
#log4j.logger.org.hyperic.hq.autoinventory=DEBUG
```

```
#log4j.logger.org.hyperic.hq.livedata=DEBUG
```

```
#log4j.logger.org.hyperic.hq.measurement=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.control=DEBUG

#Agent Plugin Implementations
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product=DEBUG

#Server Communication
#log4j.logger.org.hyperic.hq.bizapp.client.AgentCallbackClient=DEBUG

#Server Realtime commands dispatcher
#log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.server.CommandDispatcher=DEBUG

#Agent Configuration parser
#log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.AgentConfig=DEBUG

#Agent plugins loader
#log4j.logger.org.hyperic.util.PluginLoader=DEBUG

#Agent Metrics Scheduler (Scheduling tasks definitions & executions)
#log4j.logger.org.hyperic.hq.agent.server.session.AgentSynchronizer.SchedulerThread=DE
BUG

#Agent Plugin Managers
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.MeasurementPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.AutoinventoryPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.ConfigTrackPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.LogTrackPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.LiveDataPluginManager=DEBUG
#log4j.logger.org.hyperic.hq.product.ControlPluginManager=DEBUG
```

Log Insight

vRealize Operations Manager が Log Insight と統合されている場合、[Log Insight] ページ、[Log Insight] ダッシュボード、および [ログ] タブを表示できます。ログ フィードを収集して分析できます。ログ メッセージをフィルタリングして検索できます。カスタマイズしたクエリに基づいて、ログ メッセージからフィールドを動的に抽出することもできます。

[Log Insight] ページ

vRealize Operations Manager が vRealize Log Insight と統合されている場合、ログ イベントを検索およびフィルタリングできます。[Log Insight] ページの [インタラクティブ分析] タブから、ログ イベントのタイムスタンプ、テキスト、ソース、およびフィールドに基づいてイベントを抽出するクエリを作成できます。vRealize Log Insight では、クエリ結果のチャートが表示されます。

vRealize Operations Manager から [Log Insight] ページにアクセスするには、次のいずれかの操作を実行する必要があります。

- vRealize Operations Manager インターフェイスから vRealize Log Insight アダプタを構成する
- vRealize Operations Manager を vRealize Log Insight に構成する。

構成の詳細については、[「vRealize Operations Manager で vRealize Log Insight を構成する \(P. 63\)」](#) を参照してください。

vRealize Log Insight インタラクティブ分析については、[vRealize Log Insight のドキュメント](#) を参照してください。

[ログ] タブ

vRealize Operations Manager が vRealize Log Insight と統合されている場合、選択したオブジェクトのログを [ログ] タブから表示できます。ログの情報とメトリックを相関させて、環境の問題をトラブルシューティングできます。これにより、問題の根本原因を判断できる可能性が最も高くなります。

[ログ] タブの機能

[ログ] タブには、デフォルトで直近 1 時間のさまざまなイベント タイプが表示されます。vSphere オブジェクトの場合は、選択した特定のオブジェクトのイベント タイプが表示されるようにログがフィルタリングされます。フィルタリングおよびクエリの各種機能の詳細については、[vRealize Log Insight のドキュメント](#)を参照してください。

[ログ] タブの場所

左側のペインから、[環境] を選択し、インベントリ オブジェクトを選択します。[ログ] タブをクリックします。[ログ] タブを表示するには、vRealize Operations Manager を vRealize Log Insight に構成する必要があります。詳細については、[vRealize Operations Manager で vRealize Log Insight を構成する \(P. 63\)](#)を参照してください。

vRealize Operations Manager で vRealize Log Insight を構成する

vRealize Operations Manager で [Log Insight] ページ、[Log Insight] ダッシュボード、および [ログ] タブを使用するには、vRealize Operations Manager で vRealize Log Insight を構成する必要があります。

vRealize Operations Manager で vRealize Log Insight アダプタを構成する

vRealize Operations Manager から [Log Insight] ページと [Log Insight] ダッシュボードにアクセスするには、vRealize Operations Manager で vRealize Log Insight アダプタを構成する必要があります。

vRealize Operations Manager は、構成されている vRealize Log Insight アダプタの最初のインスタンスにアクセスします。

[前提条件]

- vRealize Log Insight および vRealize Operations Manager がインストールされていることを確認します。
- インストールした vRealize Log Insight インスタンスの IP アドレス、ユーザー名、およびパスワードを把握していることを確認します。

[手順]

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックし、[ソリューション] をクリックします。
- 2 [ソリューション] ページから、VMware vRealize Log Insight をクリックします。
- 3 [構成] アイコンをクリックします。[ソリューションの管理 - VMware vRealize Log Insight] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 4 [ソリューションの管理] ダイアログ ボックスで、次の手順を実行します。
 - [表示名] テキスト ボックスに名前を入力します。
 - インストール済みで統合する vRealize Log Insight の [Log Insight サーバ] テキスト ボックスに IP アドレスを入力します。
 - [テスト接続] をクリックし、接続が成功していることを確認します。
 - [設定の保存] をクリックします。
 - [閉じる] をクリックします。

- 5 vRealize Operations Manager ホーム ページから、[Log Insight] アイコンをクリックします。ページの下部にステートメントが表示されたら、リンクをクリックして、vRealize Log Insight の証明書例外を承認するか、IT サポートに連絡して詳細を確認してください。
- 6 vRealize Operations Manager ホーム ページから、[Log Insight] アイコンをクリックし、インストールした vRealize Log Insight インスタンスのユーザー名とパスワードを入力します。

vRealize Log Insight に vRealize Operations Manager を構成する

vRealize Operations Manager は、次のシナリオで vRealize Log Insight に構成します。

- vRealize Operations Manager の [ログ] タブにアクセスする
- vRealize Operations Manager から [Log Insight] ダッシュボードと [Log Insight] ページにアクセスする

[前提条件]

- vRealize Log Insight および vRealize Operations Manager がインストールされていることを確認します。
- 統合する vRealize Operations Manager インスタンスの IP アドレス、ホスト名、およびパスワードを把握していることを確認します。

[手順]

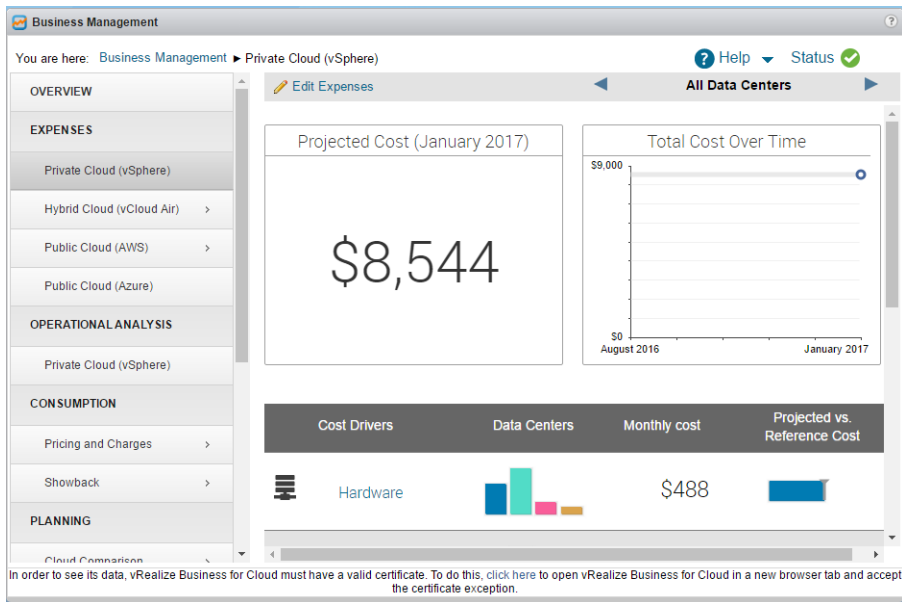
- 1 vRealize Log Insight の [管理] ページの左側のペインから、[vRealize Operations] アイコンをクリックします。
[vRealize Operations の統合] ペインが表示されます。
- 2 [ホスト名] および [ユーザー名] テキスト ボックスに、統合する vRealize Operations Manager インスタンスの IP アドレスとホスト名を入力します。
- 3 [パスワード] テキスト ボックスで、[パスワードの更新] を選択し、統合する vRealize Operations Manager インスタンスのパスワードを入力します。
- 4 [コンテキストでの起動を有効にする] オプションを選択します。
- 5 [テスト接続] をクリックし、接続が成功していることを確認します。
- 6 [保存] をクリックします。

これで、vRealize Operations Manager のオブジェクトのログの詳細を表示できます。

ビジネス管理

vRealize Operations Manager が vRealize Business for Cloud と統合されている場合、[ビジネス管理] ページと [ビジネス管理] ダッシュボードにインフラストラクチャ パフォーマンスとコスト情報を表示できます。

インフラストラクチャ パフォーマンスとコスト情報を表示するには、vRealize Business for Cloud アダプタを構成する必要があります。このアダプタの構成については、[\[vRealize Business for Cloud アダプタの構成 \(P. 65\)\]](#) を参照してください。



vRealize Business for Cloud アダプタの構成

VMware vRealize Business for Cloud と vRealize Operations Manager を統合し、インフラストラクチャ パフォーマンス、コスト情報、およびトラブルシューティングのヒントを表示します。

vRealize Operations Manager を vRealize Business for Cloud の単一インスタンスに接続できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] - [ソリューション] の順にクリックします。
- 2 [VMware vRealize Business for Cloud] を選択し、[構成] アイコンをクリックします。
- 3 アダプタ インスタンスの名前を入力します。
- 4 [vRealize Business for Cloud Server] フィールドに、接続先の vRealize Business for Cloud サーバの IP アドレスを入力します。
- 5 [テスト接続] をクリックし、接続が成功していることを確認します。
- 6 [詳細設定] をクリックし、[コレクタ/グループ] フィールドに、アダプタ プロセスの管理に使用する vRealize Operations Manager コレクタを指定します。

アダプタ インスタンスが 1 つの場合は、[デフォルトのコレクタ グループ] を選択します。環境に複数のコレクタがあり、ワークロードを分散してパフォーマンスを最適化する場合は、このインスタンスのアダプタ プロセスを管理するコレクタを選択します。

- 7 [設定の保存] をクリックして、アダプタの構成を完了します。

次に進む前に

コスト情報を [「ビジネス管理ダッシュボード \(P. 174\)」](#) または [「ビジネス管理 \(P. 64\)」](#) ページに表示します。

vRealize Operations Manager でのオプションのソリューションのインストール

VMware またはサードパーティからのオプションのソリューションをインストールして、vRealize Operations Manager の監視機能を拡張できます。

VMware ソリューションには、ストレージ デバイス、Log Insight、NSX for vSphere、ネットワーク デバイス、VCM 用のアダプタなどがあります。サードパーティの追加ソリューションには、AWS、SCOM、EMC Smarts をはじめ、多数あります。追加ソリューションのソフトウェアおよびドキュメントをダウンロードするには、[VMware Solution Exchange](#) にアクセスしてください。

ソリューションには、ダッシュボード、レポート、アラートおよびその他のコンテンツ、アダプタが含まれる場合があります。アダプタは、vRealize Operations Manager が、通信の管理、およびその他の製品、アプリケーション、機能との統合の管理を行う手段です。管理パックのインストール時およびソリューション アダプタの構成時に、vRealize Operations Manager の分析ツールとアラート ツールを使用して環境内のオブジェクトを管理することができます。

vRealize Operations Manager の以前のバージョンからアップグレードする場合、管理パック ファイルが、日時のフォルダ名の付いたフォルダ内の `/usr/lib/vmware-vcops/user/plugins/.backup` ファイルにコピーされます。新しい vRealize Operations Manager インスタンスにデータを移行する前に、[管理] - [ソリューション] ワークスペースで新しいアダプタを構成する必要があります。アダプタをカスタマイズしている場合、アダプタのカスタマイズ内容は移行に含まれず、再構成する必要があります。

vRealize Operations Manager の管理パックを新しいバージョンに更新し、アダプタをカスタマイズしている場合、アダプタのカスタマイズ内容はアップグレードに含まれず、再構成が必要になります。

ソリューションの認証情報の管理

認証情報とは、1 つまたは複数のソリューションおよび関連付けられたアダプタを有効にし、ターゲット データ ソースとの通信を確立するために vRealize Operations Manager が使用するユーザー アカウントです。認証情報は、各アダプタの構成時に提供します。認証情報オプションを使用して、環境の変化に合わせてアダプタ構成プロセス以外の設定の追加または変更を行います。

パスワード ポリシーに基づいて変更を反映させる場合など、既存の認証情報を変更すると、それらの認証情報で構成されたアダプタは vRealize Operations Manager とターゲット システムの間の通信に対して新しいユーザー名とパスワードを使用し始めます。

認証情報管理のもう 1 つの使用法は、正しく構成されていない認証情報を削除することです。アダプタによってアクティブに使用されている有効な認証情報を削除すると、2 つのシステム間の通信が無効になります。

環境の変化に合わせて構成済み認証情報を変更する必要がある場合、ターゲット システムに応じて新しいアダプタ インスタンスを構成しなくても、名前、ユーザー名とパスワード、またはパスコードやキー フレーズなどの設定を編集できます。認証情報の設定を編集するには、[管理] をクリックし、[認証情報] をクリックします。

追加した、あらゆるアダプタの認証情報は、他のアダプタ管理者および vRealize Operations Manager コレクタ ホストと共有されます。他の管理者がこれらの認証情報を使用して、新規のアダプタ インスタンスを構成したり、アダプタ インスタンスを新規ホストに移動する可能性があります。

認証情報の管理

アダプタ インスタンスの有効化に使用する認証情報を構成または再構成するには、ユーザー名やパスワードなど、ターゲット システムで有効な収集構成設定を行う必要があります。既存の認証情報インスタンスの接続設定を変更することもできます。

[認証情報の管理] を確認できる場所

左側のペインで、[管理] アイコンをクリックした後、[認証情報] をクリックします。プラス記号をクリックして新しい認証情報を追加するか、鉛筆をクリックして選択した認証情報を編集します。

[認証情報の管理] オプション

[認証情報の管理] ダイアログ ボックスを使用して、新しいアダプタ認証情報を追加したり、既存のアダプタ認証情報を変更したりすることができます。このダイアログ ボックスは、アダプタのタイプや、追加と編集のどちらを行うかによって異なります。次のオプションは基本オプションを示しています。基本オプションを除き、ソリューションに応じてオプションの内容は異なります。



注意 追加したアダプタの認証情報は、他のアダプタ管理者および vRealize Operations Manager コレクタ ホストと共有されます。他の管理者がこれらの認証情報を使用して、新規のアダプタ インスタンスを構成したり、アダプタ インスタンスを新規ホストに移動する可能性があります。

表 1-21. [認証情報の管理] の追加または編集オプション

オプション	説明
アダプタ タイプ	認証情報を構成するアダプタのタイプ。
認証情報の種類	アダプタに関連付けられた認証情報。アダプタと認証情報のタイプの組み合わせによって、追加の構成オプションが異なります。
認証情報名	認証情報の管理に使用する分かりやすい名前。
ユーザー名	vRealize Operations Manager をターゲット システムに接続するためにアダプタ構成で使用するユーザー アカウント認証情報。
パスワード	指定された認証情報のパスワード。

コレクタ グループの管理

vRealize Operations Manager はコレクタを使用して、オブジェクトからのメトリックの収集などのアダプタ プロセスを管理します。アダプタ インスタンスの構成時には、コレクタまたはコレクタ グループが選択できます。

環境内にリモート コレクタがある場合は、新規コレクタ グループを作成してリモート コレクタをそのグループに追加できます。アダプタをコレクタ グループに割り当てると、そのアダプタはグループ内の任意のコレクタで使用できます。コレクタでネットワーク割り込みが発生したり、コレクタが使用できなくなったりした場合は、コレクタ グループを使用するとアダプタを回復できます。この場合、コレクタがグループの一部であれば、全体の作業負荷がグループ内のすべてのコレクタに再分散され、コレクタごとの作業負荷が軽減されます。

アラートおよびアクションの構成

VMware vRealize Operations Manager では、アラートとアクションがオブジェクトの監視で重要な役割を果たします。

この章では次のトピックについて説明します。

- [アラートのタイプ \(P. 69\)](#)
- [アラートの構成 \(P. 69\)](#)
- [アクションの構成 \(P. 97\)](#)

アラートのタイプ

さまざまなタイプのアラートが特定のオブジェクトでトリガされます。

アラートは次の 3 つのタイプがあります。

- 健全性アラート
- リスク アラート
- 効率アラート

アラートの構成

環境で問題が発生すると常にアラートが生成されます。アラート定義は、生成されたアラートから監視対象環境内の問題が把握できるように作成できます。

vRealize Operations Manager でのアラートの定義

アラート定義は 1 つ以上の症状定義から構成され、問題の解決に役立つ一連の推奨事項とアクションに関連付けられます。アラート定義には、トリガーする症状定義と実行可能な推奨事項が含まれます。アラート定義は、生成されたアラートから監視対象環境内の問題が把握できるように作成します。アラート定義が作成されていると、その推奨事項に示された効果的な解決手段でアラートに対応できます。

vRealize Operations Manager には、構成済みアダプタの一部として、定義済みのアラートが含まれています。アラート定義は、環境のニーズに合わせて追加または変更できます。



vRealize Operations Manager のアラート定義の作成
(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_create_alerts_vrom)

アラート定義内の症状

症状の定義は、条件が **true** になる場合に症状をトリガーしてアラートを生成する可能性がある環境内の条件を評価したものです。症状の定義は、メトリックまたはスーパー メトリック、プロパティ、メッセージ イベント、障害イベント、またはメトリック イベントに基づいて追加できます。症状の定義は、アラート定義を作成するときに追加することも、適切な症状の定義リスト内の個々のアイテムとして追加することもできます。

アラート定義に症状の定義を追加するときに、その症状の定義は症状セットの一部になります。症状セットは、定義された症状と、症状条件が **true** になるタイミングを決定する引数の組み合わせです。

症状セットは、**Any** 条件または **All** 条件を適用して 1 つ以上の症状の定義を組み合わせたものです。症状セットを使用することで、特定症状の存在または非存在を選択できます。症状セットが「自己」ではなく関連オブジェクトに関係している場合は、ポピュレーション句を適用して、含まれている症状の定義を示す関連オブジェクトの割合または具体的な数を特定できます。

アラート定義は、1 つ以上の症状セットから構成されます。すべての症状セットがトリガーされないとアラートを生成しないアラート定義の場合、症状セットが 1 つしかトリガーされないときにはアラートは生成されません。いくつかの症状セットのうちの 1 つがトリガーされる必要がある症状の定義の場合、他の症状セットがトリガーされなかった場合でもアラートは生成されます。

アラート定義内の推奨事項

推奨事項は、生成されたアラートが示す問題を解決する手段としてユーザーに提供する修正オプションです。

監視対象環境内のオブジェクトに関する問題を示すアラート定義を追加する場合は、関連する推奨事項を追加する必要があります。推奨事項は、ユーザーへの指示、他の情報や指示へのリンク、ターゲット システム上で実行される vRealize Operations Manager アクションなどの形で指定できます。

アラート定義の変更

アラート定義のアラート影響タイプを変更すると、既に生成されているアラートはすべて前の影響レベルになります。新しいアラートは新しい影響レベルになります。すべての生成済みアラートを新しいレベルに設定し直すには、それらの古いアラートをキャンセルします。キャンセル後にそれらを生成すると、新しい影響レベルになります。

アラートの症状の定義

症状は環境内の問題を示す条件です。アラート定義に追加する症状は、監視対象オブジェクトの問題が発生するタイミングがわかるように定義する必要があります。

監視対象オブジェクトからデータが収集されると、そのデータが定義済みの症状条件と比較されます。条件が真の場合、症状がトリガーされます。

症状は、メトリックとスーパー メトリック、プロパティ、メッセージ イベント、障害イベント、およびメトリック イベントに基づいて定義できます。

環境内の定義済み症状は、[症状の定義] で管理されます。アラート定義に追加されている症状がトリガーされると、それらの症状を原因として「生成されたアラート」が生じます。アラート定義に追加されていない症状はこれまでどおり評価され、条件が真と評価される場合には [トラブルシューティング] タブの [アラートの詳細症状] タブに表示されます。

可能性のある重要度と条件をすべて含めた症状の定義

増分的な懸念レベルを説明するには、一続きの症状を使用します。たとえば、**容量限度に近いボリューム**は重要度の値が [警告] で、**容量限度に達したボリューム**は重要度レベルが [重大] というケースが考えられます。最初の症状は緊急的な脅威ではありません。2 番目の症状は緊急的な脅威です。

メトリック症状およびスーパー メトリック症状について

メトリック / スーパー メトリック症状は、vRealize Operations Manager が環境のターゲット オブジェクトから収集した運用およびパフォーマンス値に基づいています。この症状は、静的しきい値または動的しきい値を評価するように構成できます。

メトリックに基づく症状を定義しておけば、環境内のオブジェクトのパフォーマンスが悪影響を受ける場合に知らせてくれるアラート定義を作成できます。

固定しきい値

静的しきい値に基づくメトリック症状では、収集された現在のメトリック値を症状の定義に設定された固定値と比較します。

たとえば、仮想マシンの CPU ワークロードが 90 を超えた場合に、重大な症状がトリガーされる静的なメトリック症状を構成できます。

動的しきい値

動的しきい値に基づくメトリック症状では、収集された現在のメトリック値を vRealize Operations Manager によって特定された傾向と比較して、現在値が傾向の範囲を上回っている、下回っている、または全体として傾向の範囲外にあるのいずれに該当するのかを評価します。

たとえば、仮想マシンの CPU ワークロードが傾向の通常値を超えた場合に、重大な症状がトリガーされる動的なメトリック症状を構成できます。

プロパティ症状

プロパティ症状は、vRealize Operations Manager が環境のターゲット オブジェクトから収集した構成プロパティに基づいています。

プロパティに基づく症状を定義しておけば、監視対象オブジェクトのプロパティの変更によって環境内のオブジェクトの動作が悪影響を受ける場合に知らせてくれるアラート定義を作成できます。

メッセージ イベント症状

メッセージ イベント症状は、vRealize Operations Manager のコンポーネントからメッセージとして受信したイベント、または外部の監視対象システムからそのシステムの REST API を介してメッセージとして受信したイベントに基づいています。メッセージ イベントに基づいて症状を定義し、アラート定義に含めると、それらの症状が使用できるようになります。設定した症状条件が true になると、その症状がトリガーされます。

外部の監視対象システムのアダプタと REST API は、外部ソースからイベントを収集するための受信チャネルです。アダプタと REST サーバはどちらも vRealize Operations Manager システム内で実行されます。外部システムがメッセージを送信し、vRealize Operations Manager がそれらのメッセージを収集します。

サポートされているイベントタイプについてのみ、メッセージ イベント症状を作成できます。次に、サポートされているイベントタイプとイベントの例を示します。

- システム パフォーマンスの低下。このメッセージ イベントタイプは、vRealize Operations Manager API SDK の `EVENT_CLASS_SYSTEM` および `EVENT_SUBCLASS_PERFORM_DEGRADATION` タイプとサブタイプに対応しています。
- 変更。VMware アダプタは、仮想マシンの CPU 制限が無制限から 2 GHz に変更されると、変更イベントを送信します。症状を作成することにより、このように構成が変化した場合として発生した CPU 競合の問題を検出できます。このメッセージ イベントタイプは、vRealize Operations Manager API SDK の `EVENT_CLASS_CHANGE` および `EVENT_SUBCLASS_CHANGE` タイプとサブタイプに対応しています。
- 環境のダウン。vRealize Operations Manager アダプタは、コレクタ コンポーネントが他のコンポーネントと通信していない場合、環境のダウン イベントを送信します。ユーザーは、内部の健全性の監視に使用する症状を作成できます。このメッセージ イベントタイプは、vRealize Operations Manager API SDK の `EVENT_CLASS_ENVIRONMENT` および `EVENT_SUBCLASS_DOWN` タイプとサブタイプに対応しています。

- 通知。このメッセージ イベントタイプは、vRealize Operations Manager API SDK の `EVENT_CLASS_NOTIFICATION` および `EVENT_SUBCLASS_EXTENT` タイプとサブタイプに対応しています。

障害症状

障害症状は、監視対象のシステムによって公開されたイベントに基づいています。vRealize Operations Manager は、これらのイベントのサブセットの相関関係を作成し、障害として配信します。障害（症状）の目的は、環境内のオブジェクトの可用性を低下させるような監視対象システムのイベントを知らせることです。障害に基づいて症状を定義し、アラート定義に含めると、それらの症状が使用できるようになります。設定した症状条件が `true` になると、その症状がトリガーされます。

サポートされている公開済み障害について、障害症状を作成できます。オブジェクトタイプによって、複数の障害が定義されておりその中から選択できる場合もあれば、障害がまったく定義されていない場合もあります。

アダプタによって、あるオブジェクトタイプの障害定義が公開されている場合は、症状を定義する際に、その障害の 1 つ以上の障害イベントを選択できます。選択したいずれかのイベントによって障害がアクティブになると、症状がトリガーされます。障害イベントを選択しない場合は、任意の障害イベントによって障害がアクティブになると、症状がトリガーされます。

メトリック イベント症状

メトリック イベント症状は、選択したメトリックが指定の方法でしきい値に違反している監視対象システムから伝達されたイベントに基づいています。外部システムは、vRealize Operations Manager ではなく、しきい値を管理します。

メトリック イベント症状は、外部の監視対象システムから選択したメトリックについて報告された条件に基づいています。これは、vRealize Operations Manager がアクティブに監視しているしきい値に基づいているメトリック症状と対照的です。

メトリック イベントしきい値は、受信メトリック イベントに指定されたタイプとサブタイプの組み合わせとして表現されます。このしきい値と、メトリックと監視対象システムに設定されたしきい値を比較したとき、メトリックがしきい値を上回っている、下回っている、両者が等しい、等しくないのいずれに該当するのかが判定されます。

- しきい値を超過。vRealize Operations Manager API SDK に定義されているタイプ / サブタイプ定数 `EVENT_CLASS_HT` と `EVENT_SUBCLASS_ABOVE` に対応します。
- しきい値未満。vRealize Operations Manager API SDK に定義されているタイプ / サブタイプ定数 `EVENT_CLASS_HT` と `EVENT_SUBCLASS_BELOW` に対応します。
- しきい値と等しい。vRealize Operations Manager API SDK に定義されているタイプ / サブタイプ定数 `EVENT_CLASS_HT` と `EVENT_SUBCLASS_EQUAL` に対応します。
- しきい値と等しくない。vRealize Operations Manager API SDK に定義されているタイプ / サブタイプ定数 `EVENT_CLASS_HT` と `EVENT_SUBCLASS_NOT_EQUAL` に対応します。

vRealize Operations Manager アラートのネガティブなシンプトムについて

アラートシンプトムは環境における問題を示す状態です。アラートを定義するときには、環境で発生したときにアラートを生成するシンプトムを含めます。ネガティブなシンプトムは、シンプトムの状態の欠如に基づきます。シンプトムが発覚していない場合に、シンプトムがトリガされます。

アラート定義でシンプトムの欠如を使用するには、シンプトムセットでそのシンプトムを取り消します。

すべての定義済みシンプトムには構成された重要度があります。ただし、アラート定義でシンプトムを取り消している場合、アラートの生成時にシンプトムには関連付けられた重要度がありません。

すべてのシンプトムの定義には構成された重要度があります。条件が真であるためにシンプトムがトリガされる場合、シンプトムの重要度は、構成された重要度と同じになります。ただし、アラート定義でシンプトムを取り消した場合、および取り消しが真の場合、シンプトムに重要度は関連付けられません。

ネガティブなシンプトムがトリガされ、アラートが生成される場合、アラートの重要度に対する影響はアラート定義の構成方法によって異なります。

生成されたアラートに対するネガティブなシンプトムの影響の例を次の表に示します。

表 2-1. 生成されたアラートの重要度に対するネガティブなシンプトムの影響

アラートの定義の重要度	ネガティブなシンプトムの構成された重要度	標準のシンプトムの構成された重要度	トリガされたアラートの重要度
警告	1つのクリティカルなシンプトム	1つの緊急なシンプトム	警告。アラートの重要度は、定義したアラートの重要度に基づきます。
シンプトム・ベース	1つのクリティカルなシンプトム	1つの警告のシンプトム	警告。ネガティブなシンプトムには関連付けられた重要度がなく、生成されたアラートの重要度は標準のシンプトムの重要度によって決定します。
シンプトム・ベース	1つのクリティカルなシンプトム	標準のシンプトムを含まない	情報。アラートには重要度があることが必須である一方で、ネガティブなアラートには関連付けられた重要度がないため、生成されたアラートは最も低い重要度レベルである情報の重要度になります。

アラート定義の推奨事項の定義

推奨事項は、アラートの対処を担当するユーザーに対する指示です。推奨事項を vRealize Operations Manager のアラートに追加することにより、ユーザーは、必要なレベルのパフォーマンスで、使用環境内でオブジェクトを保持することができます。

推奨事項により、ネットワーク エンジニアまたは仮想インフラストラクチャ管理者に対して、アラートを解決するための情報を提供します。

ユーザーの知識レベルに応じて情報量を調整し、以下のオプションを任意に組み合わせて、情報に含めることができます。

- 一行の指示。
- ターゲット オブジェクトでのアラートを解決するための手順。
- Web サイト、ランブック、wiki、またはその他のソースへのハイパーリンク。
- ターゲット オブジェクトでの変更を行うアクション。

アラートを定義するときには、できるだけ多くの関連アクションの推奨事項を含めてください。複数の推奨事項が存在する場合は、優先順位に従って配列し、影響が最小で最大限の効果が得られるソリューションがリストの最初に表示されるようにします。アクション推奨事項が存在しない場合は、テキスト推奨事項を追加します。アラートを修正するために管理者が行うべき事柄について説明する場合は、可能な限り正確なものとしてください。

新しいアラート定義の作成

問題の根本原因と問題の修正に使用した解決策に基づき、vRealize Operations Manager がアラートを表示するための新しいアラート定義を作成できます。ホスト システムでアラートが起動されると、vRealize Operations Manager はアラートを表示するとともに、その問題の解決方法についての推奨事項を提示します。

ホストシステムでクリティカルなキャパシティの問題が発生する前にアラートが表示され、vRealize Operations Manager によって前もって問題が通知されるようにするため、アラート定義を作成してシンプトムの定義を追加できます。

手順

- 1 左側のペインで、[内容 > アラートの定義] をクリックします。
- 2 検索テキスト ボックスに、**capacity** と入力します。

利用可能なキャパシティ アラート定義のリストを確認します。ホスト システムにキャパシティ アラート定義が存在しない場合は、キャパシティ アラート定義を作成できます。

- 3 プラス記号をクリックし、ホストシステムの新しいキャパシティ アラート定義を作成します。
 - a アラート定義ワークスペースで、[名前と説明] に **Hosts – Alert on Capacity Exceeded** と入力します。
 - b [ベース オブジェクト タイプ] で、[vCenter アダプタ > ホスト システム] を選択します。
 - c [アラートの影響] で次のオプションを選択します。

オプション	選択内容
影響	[リスク] を選択します。
重要度	[緊急] を選択します。
アラート タイプとアラート サブタイプ	[アプリケーション： 容量] を選択します。
待機サイクル	[1] を選択します。
キャンセル サイクル	[1] を選択します。

- d [シンプトムの定義の追加] で次のオプションを選択します。

オプション	選択内容
定義対象	[自己] を選択します。
シンプトムの定義のタイプ	[メトリック / スーパーメトリック] を選択します。
クイック フィルタ (名前)	capacity と入力します。

- e [シンプトムの定義] リストで、[ホストシステムの残りキャパシティが若干少なくなっています] をクリックし、これを右側のペインにドラッグします。

[シンプトム] ペインで、[基本オブジェクトの表示基準] がデフォルトで [すべて] に設定されていることを確認します。
- f [推奨事項の追加] で、[クイック フィルタ] テキスト ボックスに **virtual machine** と入力します。
- g [リストされたシンプトムを確認し、仮想マシンから推奨される数の vCPU を削除します] をクリックし、これを右側のペインの推奨事項領域にドラッグします。

この推奨事項は優先度 1 に設定されています。

- 4 [保存] をクリックし、このアラート定義を保存します。

アラート定義のリストに作成した新しいアラートが表示されます。

ホストシステムのキャパシティが不足し始めたときに vRealize Operations Manager にアラートを表示させるアラート定義の追加が完了しました。

アラート定義のベスト プラクティス

環境用にアラート定義を作成するときには、監視対象オブジェクトのアラート動作を最適化するために一貫したベスト プラクティスを適用します。

アラート定義の名前付けと説明

アラート定義名は、次の場所に現れる短い名前です。

- アラートが生成されるときにデータ グリッド内
- 送信アラート通知内（環境内で送信アラートと通知が構成されるときに送信される電子メール通知など）

報告された問題を明瞭に示す具体性のある名前を指定してください。ユーザーは、アラート定義名からアラートを判断できます。

アラート定義の説明は、アラート定義詳細と送信アラートに現れるテキストです。アラートを生成した問題をユーザーが把握するのに役立つような説明を入力してください。

待機サイクルとキャンセル サイクル

待機サイクルの設定により、お使いの環境の感度を調整できます。アラート定義の待機サイクルは、シンプトムの定義の待機サイクルにより「トリガーされたシンプトム」が生じた後で有効になります。ほとんどのアラート定義では、感度はシンプトムレベルに構成し、アラート定義の待機サイクルは1に構成します。このように構成することで、その適切なシンプトム感度レベルですべてのシンプトムがトリガーされた後、そのアラートがただちに生成されます。

キャンセル サイクル設定により、お使いの環境の感度を調整できます。アラート定義のキャンセル サイクルは、シンプトムの定義のキャンセル サイクルにより「キャンセルされたシンプトム」が生じた後で有効になります。ほとんどの定義では、感度はシンプトムレベルに構成し、アラート定義のキャンセル サイクルは1に構成します。このように構成することで、その適切なシンプトムキャンセル サイクルですべてのシンプトム条件が消滅した後、そのアラートがただちにキャンセルされます。

最少のアラートを生成するアラート定義の作成

アラート リストを制御し、管理しやすいようにサイズを変更できます。アラートが多数のオブジェクトについてトリガーされる可能性がある一般的な問題に関するものである場合は、個々のオブジェクトではなく、階層内の比較的高いレベルのオブジェクト1つに関してアラートが生成されるようにその定義を構成します。

アラート定義にシンプトムを追加するときには、1つのアラート定義に2次シンプトムを追加し過ぎないようにしてください。シンプトムの組み合わせは、できるだけシンプルで単刀直入となるようにしてください。

一続きのシンプトムの定義を使用して、増分的な懸念レベルを表現することもできます。たとえば、**容量限度に近いボリューム**は重要度の値が[警告]で、**容量限度に達したボリューム**は重要度レベルが[重大]というケースが考えられます。最初のシンプトムは緊急的な脅威ではありませんが、2つ目の症状は緊急的な脅威です。この場合、Any 条件を使用して警告のシンプトムの定義と重大なシンプトムの定義を単一のアラート定義に含め、アラート重要度を[シンプトムベース]に設定できます。これらの設定を行うと、シンプトムのどちらか一方がトリガーされるときに正しい重要度でアラートが生成されます。

複数アラート間の重複とギャップの回避

重複があると、基になる同一の条件に対して2つ以上のアラートが生成されます。ギャップは、重要度が比較的低い未解決のアラートはキャンセルされているが、重要度が比較的高い関連アラートがトリガーできないという場合に発生します。

ギャップは、1つ目のアラート定義では値が50%以下で、2つ目のアラート定義では値が75%以上という場合に発生します。ギャップが発生するのは、使用度の高いボリュームの割合が50%～75%の場合に最初の問題はアラートをキャンセルするが2つ目の問題はアラートを生成しないためです。ギャップに対応するためにアクティブになるアラート定義が1つも存在しないため、この条件は問題をはらんでいます。

実行可能な推奨事項

アラート定義で特定されている問題の解決に役立つテキストベースの操作説明をユーザーに提供する場合は、アラートを解決するためにエンジニアや管理者がどのような方法で問題を修正すればよいかを正確に説明してください。

操作説明を提供する手段として、wiki やランダムブックなどの情報源にリンクを追加し、ターゲット システム上の vRealize Operations Manager から実行するアクションを追加できます。

vRealize Operations Manager のアラートの通知の作成および管理

vRealize Operations Manager でアラートが生成されると、アラートは、アラート詳細とオブジェクト詳細に表示されますが、vRealize Operations Manager を構成することで、1つ以上の送信アラート オプションを使用してアラートをアプリケーションの外部に送信することもできます。

通知オプションを構成し、標準のEメール、REST、SNMP、およびログ ファイル送信アラート プラグイン用いどのアラートを送信するかを指定します。他のプラグイン タイプについては、ターゲットの送信アラート プラグインが有効になっている場合、すべてのアラートが送信されます。

最も一般的な送信アラート プラグインは、標準のEメール プラグインです。通知設定で指定した条件に一致するアラートが生成された場合に、1人以上のユーザーに通知を送信するように標準のEメール プラグインを構成します。

vRealize Operations Manager の送信プラグインのリスト

vRealize Operations Manager では、送信プラグインが提供されます。このリストには、プラグインの名前と、通知設定に基づいて送信データをフィルタリングできるかどうかを示されています。

プラグインで通知ルールの構成がサポートされている場合、メッセージをターゲット システムに送信する前にフィルタリングできます。プラグインで通知がサポートされない場合、すべてのメッセージがターゲット システムに送信されます。そのメッセージをターゲット システムのアプリケーションで処理できます。

他のプラグイン オプションが含まれる他のソリューションをインストールしている場合、それらは 1 つのプラグイン オプションとして他のプラグインとともに表示されます。

メッセージとアラートが送信されるのは、プラグインが有効になっている場合のみです。

表 2-2. 送信プラグインの通知サポート

送信プラグイン	通知ルールの構成
自動アクション プラグイン	不可 自動アクション プラグインはデフォルトで有効になっています。自動アクションが停止した場合は、自動アクション プラグインをチェックして、必要に応じて有効化します。自動アクション プラグインを編集する場合、指定する必要があるのはインスタンス名だけです。
ログ ファイル プラグイン	可 ログ ファイルのアラートをフィルタするには、 TextFilter.xml という名前のファイルを構成するか、または通知ルールを構成します。
スマート SAM 通知プラグイン	不可
REST 通知プラグイン	可
ネットワーク共有プラグイン	不可
標準の電子メール プラグイン	可
SNMP トラップ プラグイン	可

vRealize Operations Manager での送信通知プラグインの追加

ユーザーにアラートを通知したり、vRealize Operations Manager の外側でアラート データを取得したりできるように、送信プラグイン インスタンスを追加します。

アラート情報を複数のターゲット システムに送信する必要がある場合は、同じプラグイン タイプの 1 つ以上のインスタンスを構成できます。

自動アクション プラグインはデフォルトで有効になっています。自動アクションが停止した場合は、自動アクション プラグインをチェックして、必要に応じて有効化します。自動アクション プラグインを編集する場合、指定する必要があるのはインスタンス名だけです。

■ [vRealize Operations Manager 送信アラートの標準の電子メール プラグインの追加](#) (P. 77)

標準の電子メール プラグインを追加すると、簡易メール転送プロトコル (SMTP) を使用して、vRealize Operations Manager のアラート通知を仮想インフラストラクチャの管理者、ネットワーク操作エンジニア、および他の関係者にメールで送信できます。

■ [vRealize Operations Manager 送信アラート用の REST プラグインの追加](#) (P. 78)

REST プラグインを追加すると、vRealize Operations Manager のアラートを、そのメッセージを受け入れるための REST Web サービスが構築された別の REST 対応アプリケーションに送信できます。

- [vRealize Operations Manager 送信アラート用のログ ファイル プラグインの追加](#) (P. 80)
各 vRealize Operations Manager ノード上のファイルにアラートのログを出力するように vRealize Operations Manager を構成する場合は、ログ ファイル プラグインを追加します。vRealize Operations Manager を複数ノード クラスタとしてインストールした場合、各ノードは監視しているオブジェクトのアラート进行处理し、そのログを記録します。各ノードは、処理しているオブジェクトのアラートのログを記録します。
- [vRealize Operations Manager レポート用ネットワーク共有プラグインの追加](#) (P. 80)
vRealize Operations Manager でレポートが共有の場所へ送られるように構成するには、ネットワーク共有プラグインを追加します。
- [vRealize Operations Manager 送信アラートの SNMP トラップ プラグインの追加](#) (P. 81)
環境内の既存の SNMP トラップ サーバにアラートを記録するように vRealize Operations Manager を構成する場合、SNMP トラップ プラグインを追加します。
- [vRealize Operations Manager 送信アラート用の Smarts Service Assurance Manager 通知プラグインの追加](#) (P. 82)
vRealize Operations Manager を構成してアラート通知を EMC Smarts Server Assurance Manager へ送る場合は、Smarts SAM 通知プラグインを追加します。

vRealize Operations Manager 送信アラートの標準の電子メール プラグインの追加

標準の電子メール プラグインを追加すると、簡易メール転送プロトコル (SMTP) を使用して、vRealize Operations Manager のアラート通知を仮想インフラストラクチャの管理者、ネットワーク操作エンジニア、および他の関係者にメールで送信できます。

開始する前に

アラート通知の接続アカウントとして使用できる電子メール ユーザー アカウントがあることを確認します。認証を要求するには、このアカウントのパスワードも把握しておく必要があります。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。
- 2 [送信設定] をクリックし、プラス記号をクリックしてプラグインを追加します。
- 3 [プラグイン タイプ] ドロップダウン メニューで、[標準の電子メール プラグイン] を選択します。
ダイアログ ボックスが展開し、SMTP 設定が表示されます。
- 4 [インスタンス名] を入力します。
これは、このインスタンスを識別する名前です。このインスタンスを、後で通知ルールを構成するときに選択します。
- 5 環境に合わせて適切な SMTP オプションを構成します。

オプション	説明
セキュリティ保護された接続を使用	SSL/TLS を使用するセキュリティ保護された通信の暗号化を有効にします。このオプションを選択すると、[安全な接続タイプ] ドロップダウン メニューで暗号化方式を選択する必要があります。
認証を要求	この SMTP インスタンスを構成するために使用する電子メール ユーザー アカウントに対して、認証を有効にします。このオプションを選択すると、ユーザー アカウントのパスワードを指定する必要があります。
SMTP ホスト	電子メール ホスト サーバの URL または IP アドレス。
SMTP ポート	サーバと接続するために SMTP で使用されるデフォルト ポート。
安全な接続タイプ	環境で使用する通信の暗号化方式として、ドロップダウン メニューから SSL または TLS のいずれかを選択します。[セキュリティ保護された接続を使用] を選択する場合は、接続タイプを選択する必要があります。
ユーザー名	電子メール サーバに接続するために使用する電子メール ユーザー アカウント。

オプション	説明
パスワード	接続ユーザー アカウントのパスワード。[認証を要求] を選択する場合は、パスワードが必要です。
送信者の電子メール アドレス	通知メッセージに表示される電子メール アドレス。
送信者名	送信者の電子メール アドレスの表示名。

- 6 [保存] をクリックします。
- 7 このプラグインの送信アラート サービスを開始するには、リスト内のインスタンスを選択し、ツールバーの [有効化] をクリックします。

送信 SMTP アラートに標準の電子メール プラグインのインスタンスが構成され、実行されます。

次に進む前に

標準の電子メール プラグインを使用して、注意を要するアラートに関するメッセージをユーザーに送信する通知ルールを作成します。 [\[ユーザー シナリオ : vRealize Operations Manager の電子メール アラート通知の作成 \(P. 84\)\]](#) を参照してください。

vRealize Operations Manager 送信アラート用の REST プラグインの追加

REST プラグインを追加すると、vRealize Operations Manager のアラートを、そのメッセージを受け入れるための REST Web サービスが構築された別の REST 対応アプリケーションに送信できます。

REST プラグインは統合の有効化をサポートしますが、統合は提供しません。ターゲットのアプリケーションによっては、REST アラート出力に含まれるアラートおよびオブジェクト識別子をターゲットのアプリケーションの識別子に関連付ける、REST 中継サービスなどのメカニズムが必要になる場合があります。

ターゲット アプリケーションに配信するコンテンツ タイプを特定します。application/json を選択した場合、送信される POST または PUT 呼び出しの本文は次のような形式があります。これにはサンプル データが含まれます。

```
{
  "startDate":1369757346267,
  "criticality":"ALERT_CRITICALITY_LEVEL_WARNING",
  "Risk":4.0,
  "resourceId":"sample-object-uuid",
  "alertId":"sample-alert-uuid",
  "status":"ACTIVE",
  "subType":"ALERT_SUBTYPE_AVAILABILITY_PROBLEM",
  "cancelDate":1369757346267,
  "resourceKind":"sample-object-type",
  "alertName":"Invalid IP Address for connected Leaf Switch",
  "attributeKeyID":5325,
  "Efficiency":1.0,
  "adapterKind":"sample-adapter-type",
  "Health":1.0,
  "type":"ALERT_TYPE_APPLICATION_PROBLEM",
  "resourceName":"sample-object-name",
  "updateDate":1369757346267,
  "info":"sample-info"
}
```

application/xml を選択した場合、送信される POST または PUT 呼び出しの本文は次のような形式があります。

```
<alert>
  <startDate>1369757346267</startDate>
  <criticality>ALERT_CRITICALITY_LEVEL_WARNING</criticality>
  <Risk>4.0</Risk>
  <resourceId>sample-object-uuid</resourceId>
```

```

<alertId>sample-alert-uuid</alertId>
<status>ACTIVE</status>
<subType>ALERT_SUBTYPE_AVAILABILITY_PROBLEM</subType>
<cancelDate>1369757346267</cancelDate>
<resourceKind>sample-object-type</resourceKind>
<alertName>Invalid IP Address for connected Leaf Switch</alertName>
<attributeKeyId>5325</attributeKeyId>
<Efficiency>1.0</Efficiency>
<adapterKind>sample-adapter-type</adapterKind>
<Health>1.0</Health>
<type>ALERT_TYPE_APPLICATION_PROBLEM</type>
<resourceName>sample-object-name</resourceName>
<updateDate>1369757346267</updateDate>
<info>sample-info</info>
</alert>

```

注意 アラートがメトリック以外の違反によってトリガされた場合、**attributeKeyID** は REST 出力から省略され、送信されません。

JSON または XML の要求が POST として処理された場合、Web サービスは HTTP ステータス コード 201 を返します。これは、アラートがターゲットで正常に作成されたことを示します。要求が PUT として処理された場合は、HTTP ステータス コード 202 が返されます。これは、アラートがターゲットで正常に受け入れられたことを示します。

開始する前に

REST プラグインを使用して送信されるアラートが環境内でどのようにして、また環境内のどの場所で使用および処理されるかを理解し、適切な接続情報を使用できることを確認します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。
- 2 [送信設定] をクリックし、プラス記号をクリックしてプラグインを追加します。
- 3 [プラグイン タイプ] ドロップダウン メニューで、[通知プラグインの停止] を選択します。
ダイアログ ボックスが展開して REST 設定が表示されます。
- 4 [インスタンス名] を入力します。
これは、このインスタンスを識別する名前です。このインスタンスを、後で通知ルールを構成するときに選択します。
- 5 環境に適した Rest オプションを構成します。

オプション	説明
URL	アラートの送信先となる URL。この URL は HTTPS をサポートする必要があります。アラートを REST Web サーバに送信するときに、プラグインは <code>/alertID</code> を POST または PUT 呼び出しに付加します。
ユーザー名	ターゲットの REST システムのユーザー アカウント。
パスワード	ユーザー アカウントのパスワード。
コンテンツ タイプ	アラート出力の形式を指定します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ application/json。人間が解読可能なテキストとして、JavaScript Object Notation を使用してアラート データを送信します。 ■ application/xml。人間およびマシンが解読可能なコンテンツである XML を使用してアラート データを送信します。
証明書のサムプリント	HTTP サービス用のパブリック証明書のサムプリント。
接続カウント	ターゲットの REST サーバに同時に送信されるアラートの数を制限します。この数を使用して、REST サーバが要求を処理しきれなくなるのを防ぎます。

- 6 [保存] をクリックします。
- 7 このプラグインの送信アラート サービスを開始するには、リスト内のインスタンスを選択し、ツールバーの [有効化] をクリックします。

送信アラート用の REST プラグインのこのインスタンスが構成され、実行中になります。

次に進む前に

REST プラグインを使用して環境内の REST 対応アプリケーションまたはサービスにアラートを送信する通知ルールを作成します。[「ユーザー シナリオ : vRealize Operations Manager REST アラート通知の作成 \(P. 85\)」](#) を参照してください。

vRealize Operations Manager 送信アラート用のログ ファイル プラグインの追加

各 vRealize Operations Manager ノード上のファイルにアラートのログを出力するように vRealize Operations Manager を構成する場合は、ログ ファイル プラグインを追加します。vRealize Operations Manager を複数ノード クラスタとしてインストールした場合、各ノードは監視しているオブジェクトのアラートを処理し、そのログを記録します。各ノードは、処理しているオブジェクトのアラートのログを記録します。

ログ ファイルにすべてのアラートが追加されます。他のアプリケーションを使用してログのフィルタリングや管理を実行できます。

開始する前に

ターゲットの vRealize Operations Manager ノードのファイル システム パスに対する書き込みアクセスがあることを確認します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。
- 2 [送信設定] をクリックし、プラス記号をクリックしてプラグインを追加します。
- 3 [プラグイン タイプ] ドロップダウン メニューで、[ログ ファイル] を選択します。
ダイアログ ボックスが拡張され、ログ ファイルに関する設定が行えるようになります。
- 4 [アラート出力フォルダ] テキスト ボックスで、フォルダ名を入力します。
ターゲット場所にフォルダが存在しない場合は、プラグインによってターゲット場所にフォルダが作成されます。デフォルトのターゲット場所は、`/usr/lib/vmware-vcops/common/bin/` です。
- 5 [保存] をクリックします。
- 6 このプラグインの送信アラート サービスを開始するには、リスト内のインスタンスを選択し、ツールバーの [有効化] をクリックします。

ログ ファイル プラグインのインスタンスが構成され、稼働状態になります。

次に進む前に

プラグインが開始されると、アラートのログがファイルに記録されます。アラートが生成、更新、またはキャンセルされたときに、ログ ファイルがターゲット ディレクトリに作成されたことを確認します。

vRealize Operations Manager レポート用ネットワーク共有プラグインの追加

vRealize Operations Manager でレポートが共有の場所へ送られるように構成するには、ネットワーク共有プラグインを追加します。

開始する前に

ネットワーク共有の場所に対する読み取り、書き込み、削除の権限があることを確認します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。
- 2 [送信設定] をクリックし、プラス記号をクリックしてプラグインを追加します。
- 3 [プラグイン タイプ] ドロップダウン メニューから [ネットワーク共有プラグイン] を選択します。
ダイアログ ボックスが展開し、プラグイン インスタンス設定が表示されます。
- 4 [インスタンス名] を入力します。
これは、このインスタンスを識別する名前です。このインスタンスを、後で通知ルールを構成するときに選択します。
- 5 環境に適したネットワーク共有オプションを構成します。

オプション	説明
ドメイン	共有ネットワーク ドメイン アドレス。
ユーザー名	ネットワークとの接続に使用されるドメイン ユーザー アカウント。
パスワード	ドメイン ユーザー アカウントのパスワード。
ネットワーク共有ルート	レポートの保存先となるルート フォルダへのパス。発行のスケジュールを構成する際に各レポートのサブフォルダを指定できます。 IP アドレスを入力する必要があります。たとえば、 <code>\\<IP_address>\ShareRoot</code> のように指定します。 vRealize Operations Manager ホストからアクセスされるときにホスト名が IPv4 に解決される場合は、IP アドレスの代わりにホスト名を使用できます。 注意 ターゲットとなるルート フォルダが存在していることを確認します。このフォルダがない場合、試行が 5 回失敗するとネットワーク共有プラグインによりログにエラーが記録されます。

- 6 指定されたパス、認証情報、権限を確認するには、[テスト] をクリックします。
テストには数分かかることがあります。
- 7 [保存] をクリックします。
このプラグインの送信サービスは自動的に開始されます。
- 8 (オプション) 送信サービスを停止するには、インスタンスを選択し、ツールバーの [無効] をクリックします。

ネットワーク共有プラグインのインスタンスが構成され、実行中になります。

次に進む前に

レポート スケジュールを作成し、レポートが共有フォルダに送信されるよう構成します。

vRealize Operations Manager 送信アラートの SNMP トラップ プラグインの追加

環境内の既存の SNMP トラップ サーバにアラートを記録するように vRealize Operations Manager を構成する場合、SNMP トラップ プラグインを追加します。

SNMP トラップとして送信されたアラートのすべてのフィルタリングはターゲット ホストで発生する必要があります。

開始する前に

SNMP トラップ サーバが環境に構成済みであること、使用する IP アドレスまたはホスト名、ポート番号、およびコミュニティを知っていることを確認します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。
- 2 [送信設定] をクリックし、プラス記号をクリックしてプラグインを追加します。

- 3 [プラグイン タイプ] ドロップダウン メニューで、[SNMP トラップ] を選択します。
ダイアログ ボックスが展開して SNMP トラップ設定が表示されます。
- 4 [インスタンス名] を入力します。
- 5 環境に適切な SNMP トラップ設定を構成します。

オプション	説明
ターゲット ホスト	アラートの送信先の SNMP 管理システムの IP アドレスまたは完全修飾ドメイン名。
ポート	SNMP 管理システムへの接続に使用されるポート。デフォルト ポートは 162 です。
コミュニティ	統計情報へのアクセスを許可するテキスト文字列。SNMP コミュニティの文字列は、SNMPv1 と SNMPv2c プロトコルをサポートするデバイスでのみ使用されます。

- 6 [保存] をクリックします。

SNMP トラップ プラグインのインスタンスが構成され、実行中になります。

次に進む前に

プラグインが追加されたら、SNMP トラップを受信するための「[通知の構成 \(P. 84\)](#)」します。

vRealize Operations Manager 送信アラート用の Smarts Service Assurance Manager 通知プラグインの追加

vRealize Operations Manager を構成してアラート通知を EMC Smarts Server Assurance Manager へ送る場合は、Smarts SAM 通知プラグインを追加します。

この送信アラート オプションは、Server Assurance Manager と vRealize Operations Manager で同一のオブジェクトを管理しており、EMC Smart 管理パックを追加済みで、vRealize Operations Manager でソリューションを構成済みの場合に役立ちます。vRealize Operations Manager では Service Assurance Manager に送信されるアラートをフィルタリングすることはできませんが、アラートを Smarts Open Integration サーバに送信するように Smarts プラグインを構成することは可能です。次に、vRealize Operations Manager からのアラートをフィルタリングするように Open Integration サーバを構成し、フィルタ テストを通過したアラートのみを Smarts Service Assurance Manager サービスに送信します。

開始する前に

- EMC Smarts ソリューションを構成したことを確認します。EMC Smarts 統合に関するドキュメントについては、<https://solutionexchange.vmware.com/store> を参照してください。
- EMC Smarts Broker と Server Assurance Manager インスタンスのホスト名または IP アドレス、ユーザー名、およびパスワードがあることを確認します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。
- 2 [送信設定] をクリックし、プラス記号をクリックしてプラグインを追加します。
- 3 [プラグイン タイプ] ドロップダウン メニューから、[Smarts SAM 通知] を選択します。
ダイアログ ボックスが展開し、Smarts 設定が表示されます。
- 4 [インスタンス名] を入力します。
これは、このインスタンスを識別する名前です。このインスタンスを、後で通知ルールを構成するときに選択します。

- 5 ご使用の環境に合わせて Smarts SAM 通知設定を構成します。

オプション	説明
ブローカー	通知の送信先となる Server Assurance Manager インスタンスのレジストリを管理する EMC Smarts Broker のホスト名または IP アドレスを入力します。
ブローカーのユーザー名	Smarts Broker をセキュア ブローカーとして構成する場合、ブローカーのアカウントのユーザー名を入力します。
ブローカーのパスワード	Smarts Broker をセキュア ブローカーとして構成する場合、ブローカーのユーザーアカウントのパスワードを入力します。
SAM サーバ	通知の送信先となる Server Assurance Manager サーバのホスト名または IP アドレスを入力します。
ユーザー名	Server Assurance Manager サーバインスタンスのユーザー名を入力します。SAM サーバで指定されているように、このアカウントは Smarts サーバ上の通知に対する読み取り権限と書き込み権限を所有している必要があります。
パスワード	Server Assurance Manager サーバアカウントのパスワードを入力します。

- 6 [保存] をクリックします。
- 7 スマート SAM プラグイン プロパティ ファイルを修正します。
- `/usr/lib/vmware-vcops/user/plugins/outbound/vcops-smartsalert-plugin/conf/plugin.properties` のプロパティ ファイルを開きます。
 - プロパティ ファイルに次の文字列を追加します。

```
#
sendByType=APPLICATION::AVAILABILITY,APPLICATION::PERFORMANCE,APPLICATION::CAPACITY,APPLICATION::COMPLIANCE,VIRTUALIZATION::AVAILABILITY,VIRTUALIZATION::PERFORMANCE,VIRTUALIZATION::CAPACITY,VIRTUALIZATION::COMPLIANCE,HARDWARE::AVAILABILITY,HARDWARE::PERFORMANCE,HARDWARE::CAPACITY,HARDWARE::COMPLIANCE,STORAGE::AVAILABILITY,STORAGE::PERFORMANCE,STORAGE::CAPACITY,STORAGE::COMPLIANCE,NETWORK::AVAILABILITY,NETWORK::PERFORMANCE,NETWORK::CAPACITY,NETWORK::COMPLIANCE
```
 - プロパティ ファイルを保存します。
- 8 このプラグインの送信アラート サービスを開始するには、リスト内のインスタンスを選択し、ツールバーの [有効化] をクリックします。

Smarts SAM 通知プラグイン のインスタンスが構成済みで、実行中です。

次に進む前に

Smarts Service Assurance Manager で、vRealize Operations Manager からのアラートをフィルタリングするように通知ログ コンソールを構成します。Service Assurance Manager のフィルタリングを構成するには、EMC Smarts Service Assurance Manager のドキュメントを参照してください。

TextFilter.xml ファイルによる送信メッセージのログ ファイルのフィルタリング

vRealize Operations Manager のログ ファイル送信プラグインは、アラート データを取得します。ログ ファイル データをフィルタリングするため、**TextFilter.xml** ファイルを更新して、フィルタ条件に一致するアラートだけを取得することができます。

vRealize Operations Manager 管理者は、アラート タイプとサブタイプに基づいて、送信アラートのログ ファイルをフィルタリングする必要がある場合があります。

フィルタは **TextFile.xml** ファイルに構成されます。ファイルは次の場所にあります。

- vApp または Linux の場合。`/usr/lib/vmware-vcops/user/plugins/outbound/vcops-textfile-plugin/conf`

ファイルでは、フィルタ ルールに次の形式を使用します。

```
<FilterRule name="AlertType">
  <AlertTypes>
    <AlertType key="AlertType1:AlertSubType1 " />
    <AlertType key="AlertType2:AlertSubType2 " />
  </AlertTypes>
</FilterRule>
```

たとえば、アプリケーション タイプと可能性サブタイプに基づいてフィルタリングするルールでは、この形式を使用します。

```
<FilterRule name="AlertType">
  <AlertTypes>
    <AlertType key="ALERT_TYPE_APPLICATION_PROBLEM:ALERT_SUBTYPE_AVAILABILITY_PROBLEM
" />
  </AlertTypes>
</FilterRule>
```

通知の構成

通知とは、通知ルール内のフィルタ基準に一致するアラート通知を指し、この一致した通知が vRealize Operations Manager の外部に送信されます。サポートされる送信アラートの通知ルールを構成すると、選択した外部システムに送信するアラートをフィルタリングできます。

通知リストを使用して、ルールを管理します。次に、通知ルールを使用して、外部システムに送信するアラートを制限します。通知を使用するには、サポートされる送信アラート プラグインが追加され、実行されている必要があります。

通知ルールを使用して、次の外部システムに送信するデータを制限できます。

- 標準の電子メール。1 つ以上の選択フィルタに基づいて、さまざまな E メール受信者に対して複数の通知ルールを作成できます。受信者を追加し、選択フィルタを追加しなかった場合、生成されるすべてのアラートがその受信者に送信されます。
- REST。ターゲットの REST システムに送信するアラートを制限するルールを作成できるため、そのターゲット システムでフィルタリングを実装する必要はありません。
- SNMP トラップ。環境内の既存の SNMP トラップ サーバのアラートのログを出力するように vRealize Operations Manager を構成できます。
- ログ ファイル。各 vRealize Operations Manager ノードのファイルにアラートのログを出力するように vRealize Operations Manager を構成できます。

ユーザー シナリオ：vRealize Operations Manager の電子メール アラート通知の作成

トランザクション アプリケーションを実行する多くの仮想マシンのホストである mmbhost オブジェクトに対して重大なアラートが生成され、そのアラートの所有権を取得しているユーザーがいない場合、あなたは、仮想インフラストラクチャ管理者として、vRealize Operations Manager を使用し、電子メール通知を上級ネットワーク エンジニアに送信する必要があります。

開始する前に

- 通知の送信の対象となるアラート定義が 1 つ以上あることを確認します。アラート定義の例については、「[部門のオブジェクトに対するアラート定義の作成 \(P. 86\)](#)」を参照してください。
- 標準の電子メール プラグインのインスタンスが 1 つ以上構成され、実行されていることを確認します。 [「vRealize Operations Manager 送信アラートの標準の電子メール プラグインの追加 \(P. 77\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックします。
- 2 [通知] をクリックし、プラス記号をクリックして、通知ルールを追加します。

- 3 [名前] テキスト ボックスに、**Unclaimed Critical Alerts for mmbhost** のような名前を入力します。
- 4 [方法] 領域のドロップダウン メニューから [標準の電子メール プラグイン] を選択し、構成済みの電子メール プラグイン インスタンスを選択します。
- 5 電子メールのオプションを構成します。
 - a [受信者] テキスト ボックスに、上級エンジニアリング チームのメンバーの電子メール アドレスを入力します。各アドレスはセミコロン (;) で区切ります。
 - b 指定した時間が経過してもアラートが以前としてアクティブになっている場合に 2 番目の通知を送信するには、[再度通知する] テキスト ボックスに時間 (分) を入力します。
 - c ユーザーに送信する通知の数を、[最大通知数] テキスト ボックスに入力します。
- 6 フィルタ基準の範囲を構成します。
 - a [スコープ] ドロップダウン メニューから、[オブジェクト] を選択します。
 - b [クリックしてオブジェクトを選択] をクリックし、オブジェクトの名前を入力します。
この例では、**mmbhost** と入力します。
 - c リスト内でオブジェクトを見つけて選択し、[選択] をクリックします。
- 7 通知トリガーを構成します。
 - a [通知トリガー] ドロップダウン メニューから、[影響] を選択します。
 - b 隣にあるドロップダウン メニューから、[健全性] を選択します。
- 8 [重要度] 領域で、[最重要] をクリックします。
- 9 [詳細フィルタ] を展開し、[アラート状態] ドロップダウン メニューから、[オープン] を選択します。
[オープン] 状態は、アラートの所有権を取得しているエンジニアまたは管理者がいないことを示します。
- 10 [保存] をクリックします。

これで、通知ルールが作成されます。これにより、mmbhost オブジェクトに関する最重要のアラートが生成され、そのアラートがエンジニアによって要求されていない場合、上級ネットワーク エンジニアリング チームのメンバーに電子メール メッセージが送信されます。この電子メールは、アラートを確認し、このアラートの所有権を取得して、トリガーとなった症状を解決するよう上級ネットワーク エンジニアリング チームのメンバーに通知するものです。

次に進む前に

電子メール アラート通知への応答 vRealize Operations Manager ユーザー ガイド を参照してください。

ユーザー シナリオ：vRealize Operations Manager REST アラート通知の作成

仮想インフラストラクチャの管理者として、あなたは vRealize Operations Manager を使用して、JSON または XML 形式のアラートを、そのようなメッセージを受け入れる REST Web サービスを搭載した REST 対応アプリケーションに送信する必要があります。可用性アラート タイプに影響する仮想化アラートのみをこの外部アプリケーションに送ります。その後、そのアプリケーション内で、提供された情報を使用して修正処理を開始し、アラートに示された問題に対処することができます。

送信アラート インスタンスに送信されるアラートは、通知構成によって、通知基準に一致するアラートに限定されます。

開始する前に

- 通知の送信の対象となるアラート定義が 1 つ以上あることを確認します。アラート定義の例については、[「部門のオブジェクトに対するアラート定義の作成 \(P. 86\)」](#) を参照してください。
- REST プラグインのインスタンスが 1 つ以上構成され、実行されていることを確認します。 [「vRealize Operations Manager 送信アラート用の REST プラグインの追加 \(P. 78\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックします。
- 2 [通知] をクリックし、プラス記号をクリックして、通知ルールを追加します。
- 3 [名前] テキスト ボックスに、**Virtualization Alerts for Availability** のような名前を入力します。
- 4 [方法] 領域のドロップダウン メニューから [REST プラグイン] を選択し、構成済みの電子メール プラグイン インスタンスを選択します。
- 5 通知トリガーを構成します。
 - a [通知トリガー] ドロップダウン メニューで、[アラート タイプ] を選択します。
 - b [クリックしてアラートのタイプとサブタイプを選択] をクリックし、[仮想化アラートまたはハイパーバイザーアラートの可用性] を選択します。
- 6 [重要度] 領域で、[警告] をクリックします。
- 7 [詳細フィルタ] を展開し、[アラート ステータス] ドロップダウン メニューから、[新規] を選択します。
この [新規] ステータスは、アラートがシステムの新しいアラートであり、更新されたものではないことを示します。
- 8 [保存] をクリックします。

これで、ターゲットの REST 対応システムにアラート テキストを送信する通知ルールが作成されました。構成されたアラートの影響が仮想化またはハイパーバイザーの可用性であり、アラートが警告として構成されている場合にのみ、アラートは REST プラグインを使用してターゲット インスタンスに送信されます。

部門のオブジェクトに対するアラート定義の作成

仮想インフラストラクチャ管理者は、会計部門で使用される仮想マシンとホストについて管理責任があります。アラートを作成して、会計部門のオブジェクトを管理できます。

会計アプリケーションの使用時に発生する遅延についてユーザーからいくつかの苦情を受け取ったとします。vRealize Operations Manager を使用して、その問題が CPU の割り当てとワークロードに関連することを識別しました。問題を適切に管理するため、症状に関するより厳密なパラメータを使用してアラート定義を作成し、さらに問題が発生する前にアラートを追跡して問題を特定できるようにします。

このシナリオを使用して、会計オブジェクトを監視し、問題が発生したときにすぐ通知を送信する監視システムを作成します。

アラート定義への説明および基本オブジェクトの追加

会計部門の仮想マシンの CPU を監視し、その仮想マシンが動作するホストのホスト メモリを監視するアラートを作成するには、まずそのアラートについて記述することから始めます。

アラート定義に名前を付け、アラートの影響情報を定義するときには、そのアラートに関する情報を vRealize Operations Manager で表示する方法を指定します。基本オブジェクトは、アラート定義の作成のベースになるものです。症状は、基本オブジェクトと関連オブジェクトについて定義できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックします。
- 2 [アラートの定義] をクリックします。
- 3 プラス記号をクリックして定義を追加します。
- 4 名前と説明を入力します。

このシナリオでは、問題の概要が一目で分かるように、アラート名として **Acct VM CPU early warning** と入力します。説明は、詳細な概要になりますので、できるだけ有用な情報を含めてください。アラートが生成されると、この名前と説明がアラート リストと通知に表示されます。

- 5 [基本オブジェクトタイプ] をクリックします。

- 6 ドロップダウン メニューから、[vCenter アダプタ] を展開し、[ホスト システム] を選択します。

会計部門で使用されている仮想マシン上の CPU 過負荷の可能性を早期警告する目的でアラートが必要とされているため、このアラートはホストシステムに基づいています。ホストシステムを基本オブジェクトタイプとして使用することにより、各仮想マシンのアラートに応答するのではなく、バルク アクションによって仮想マシンのアラート症状に応答することができます。

- 7 [アラートの影響] をクリックし、このアラート定義のメタデータを構成します。

- a [影響] ドロップダウン メニューから、[リスク] を選択します。

このアラートは、潜在的な問題を示し、近い将来に注意が必要になります。

- b [重要度] ドロップダウン メニューから、[緊急] を選択します。

将来的な問題であることを示すリスク アラートについては、高い重要度を付与し、適切な処理が施されるようにランク付けできます。早期警告として設計されているため、この構成には組み込みバッファが含まれており、リスク アラートは重大リスクではなく緊急リスクとされます。

- c [アラートタイプとアラート サブタイプ] ドロップダウン メニューから、[仮想化/ハイパーバイザー] を展開し、[パフォーマンス] 選択します。

- d 症状が true になった後の最初の収集サイクル中にアラートが生成されるようにするには、[待機サイクル] を **1** に設定します。

- e 症状がトリガーされなくなったらすぐにアラートが削除されるようにするには、[キャンセル サイクル] を **1** に設定します。

症状が true でなくなると、アラートは次の収集サイクルでキャンセルされます。

これらのアラートの影響オプションにより、生成されるときにアラートを識別して優先順位付けすることができます。

アラートの定義は、名前と説明を入力し、ホストシステムを基本オブジェクトタイプとして選択し、アラートの生成時に表示されるデータを定義することから開始しました。

次に進む前に

続いて、ワークスペースでアラート定義に症状を追加します。[「アラート定義への仮想マシンの CPU 使用量症状の追加 \(P. 87\)」](#) を参照してください。

アラート定義への仮想マシンの CPU 使用量症状の追加

会計部門の仮想マシンでの CPU 使用量に関連したアラートを生成するには、アラートに関する基本的な説明を入力した後に、症状を vRealize Operations Manager のアラート定義に追加します。追加する最初の症状は、仮想マシンでの CPU 使用量に関連する症状です。後でポリシーおよびグループを使用して、会計部門の仮想マシンにアラートを適用します。

このシナリオには、会計部門の仮想マシンの症状と、仮想マシンが実行されているホストを監視するための症状の、2 つの症状を構成します。

開始する前に

アラート定義の構成を開始します。[「アラート定義への説明および基本オブジェクトの追加 \(P. 86\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 [アラートの定義のワークスペース] ウィンドウで、[名前と説明]、[基本オブジェクトタイプ]、および[アラートの影響] を構成した後、[症状の定義の追加] をクリックして症状を構成します。

- 2 仮想マシンの CPU 使用量に関連する症状設定の構成を開始します。
 - a [定義対象] ドロップダウン メニューで、[子] を選択します。
 - b [オブジェクト タイプによるフィルタリング] ドロップダウン メニューで、[仮想マシン] を選択します。
 - c [症状の定義のタイプ] ドロップダウン メニューで、[メトリック/スーパーメトリック] を選択します。
 - d [追加] ボタンをクリックして、[症状の定義の追加] ワークスペース ウィンドウを開きます。
- 3 [症状の定義の追加] ワークスペース ウィンドウで、仮想マシンの CPU 使用量の症状を構成します。
 - a [基本オブジェクト タイプ] ドロップダウン メニューから、[vCenter アダプタ] を展開し、[仮想マシン] を選択します。
仮想マシンについて収集されたメトリックがリストに表示されます。
 - b メトリック名を検索するためのメトリック リストの [検索] テキスト ボックスに、**使用率** と入力します。
 - c リストで [CPU] を展開し、[使用率 (%)] を右側のワークスペースにドラッグします。
 - d しきい値ドロップダウン メニューで、[動的しきい値] を選択します。
動的しきい値では、vRealize Operations Manager 分析を使用してオブジェクトの傾向メトリック値を識別します。
 - e [症状の定義の名前] テキスト ボックスに、**VM CPU Usage above trend** のような名前を入力します。
 - f 重要度のドロップダウン メニューで、[警告] を選択します。
 - g しきい値ドロップダウン メニューで、[しきい値を超過] を選択します。
 - h [待機サイクル] と [キャンセル サイクル] は、デフォルト値 3 のままにします。
[待機サイクル] 設定では、症状がトリガーされるまでに、3 収集サイクルに渡って症状条件が true となる必要があります。この待機により、CPU 使用量が短期間急増した場合には、症状がトリガーされないようにします。
 - i [保存] をクリックします。
使用量が追跡済みの傾向を上回ったときを識別する動的な症状が、症状リストに追加されます。
- 4 [アラートの定義のワークスペース] ウィンドウで、症状定義リストから右側の症状のワークスペースに [VM CPU Usage above trend] をドラッグします。
子 - 仮想マシン症状セットが、症状のワークスペースに追加されます。
- 5 この症状セットで、このアラート定義が適用されるグループの仮想マシンの半分で症状が true になった場合に症状セットが true になるように、トリガー条件を構成します。
 - a [値演算子] ドロップダウン メニューで、[>] を選択します。
 - b [値] テキスト ボックスに、**50** と入力します。
 - c [値タイプ] ドロップダウン メニューで、[パーセント] を選択します。

アラート定義の最初の症状セットが定義されました。

次に進む前に

ホストのメモリ使用量症状をアラート定義に追加します。[「アラート定義へのホスト メモリ使用率症状の追加 \(P. 89\)」](#)を参照してください。

アラート定義へのホスト メモリ使用率症状の追加

会計部門の仮想マシンでの CPU 使用量に関連したアラートを生成するには、最初の症状を追加した後に、2 つ目の症状を vRealize Operations Manager のアラート定義に追加します。2 つ目の症状は、会計部門の仮想マシンが実行されているホストのホスト メモリ使用量に関連しています。

開始する前に

仮想マシンの CPU 使用量の症状を追加します。[「アラート定義への仮想マシンの CPU 使用量症状の追加 \(P.87\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 [アラートの定義のワークスペース] ウィンドウで、[名前と説明]、[基本オブジェクト タイプ]、および [アラートの影響] を構成した後、[症状の定義の追加] をクリックします。
- 2 仮想マシンのホスト システムに関連する症状を構成します。
 - a [定義対象] ドロップダウン メニューで、[自己] を選択します。
 - b [症状の定義のタイプ] ドロップダウン メニューで、[メトリック/スーパーメトリック] を選択します。
 - c [追加] ボタンをクリックして、新しい症状を構成します。
- 3 [症状の定義の追加] ワークスペース ウィンドウで、ホスト システムの症状を構成します。
 - a [基本オブジェクト タイプ] ドロップダウン メニューで、[vCenter アダプタ] を展開して [ホスト システム] を選択します。
 - b メトリック リストで、[メモリ] を展開して、[使用率 (%)] を右側のワークスペースにドラッグします。
 - c しきい値ドロップダウン メニューで、[動的しきい値] を選択します。
動的しきい値では、vRealize Operations Manager 分析を使用してオブジェクトの傾向メトリック値を識別します。
 - d [シンプトムの定義の名前] テキスト ボックスに、**Host memory usage above trend** のような名前を入力します。
 - e 重要度のドロップダウン メニューで、[警告] を選択します。
 - f しきい値ドロップダウン メニューで、[しきい値を超過] を選択します。
 - g [待機サイクル] と [キャンセル サイクル] は、デフォルト値 3 のままにします。
[待機サイクル] 設定では、シンプトムがトリガーされるまでに、3 つの収集サイクルに渡ってシンプトム条件が true となる必要があります。この待機により、ホスト メモリ使用量が短期間急増した場合には、シンプトムがトリガーされないようにします。
 - h [保存] をクリックします。
動的なシンプトムにより、会計部門の仮想マシンが実行されているホストで、メモリ使用量の追跡済みの傾向を上回ったときを識別します。
動的な症状は症状リストに追加されます。
- 4 [アラートの定義のワークスペース] ウィンドウで、症状リストから右側の症状のワークスペースに [Host memory usage above trend] をドラッグします。
自己 - ホスト システム症状セットが、症状のワークスペースに追加されます。
- 5 自己 - ホスト システムシンプトムセットで、[このシンプトムセットは、次の場合に true です] の [値タイプ] ドロップダウン メニューから [任意] を選択します。
この構成では、会計仮想マシンが実行されているホストのいずれかでメモリ使用量が分析済みの傾向を上回ると、症状条件が true になります。

- 6 症状セット リストの上部にある [次の症状のうち {operator} と一致] ドロップダウン メニューで、[任意] を選択します。

この構成では、2 つの症状セット（仮想マシンの CPU 使用量またはホスト メモリ）のいずれかがトリガーされると、そのホストについてのアラートが生成されます。

アラート定義の 2 つ目の症状セットが定義され、2 つの症状セットを評価してアラートの生成時期を決定する方法が構成されました。

次に進む前に

アラート定義に推奨事項を追加して、自分とエンジニアが、生成されるアラートを解決する方法について知ることができるようにします。[「アラート定義への推奨事項の追加 \(P. 90\)」](#) を参照してください。

アラート定義への推奨事項の追加

会計部門の仮想マシンについて生成されたアラートを解決するため、推奨事項を作成して、ユーザー側でパフォーマンス問題が発生する前に自分または他のエンジニアがアラートを解決するために必要な情報を提供します。

アラート定義の一環として、vRealize Operations Manager から実行するアクションや vCenter Server に変更を加える場合の指示など、生成されたアラートを解決するための推奨事項を追加します。

開始する前に

アラート定義に症状を追加します。[「アラート定義へのホスト メモリ使用率症状の追加 \(P. 89\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 [アラートの定義のワークスペース] ウィンドウで、[名前と説明]、[基本オブジェクト タイプ]、[アラートの影響]、および [症状の定義の追加] を構成した後、[推奨事項の追加] をクリックして推奨されるアクションおよび指示を追加します。
- 2 [追加] をクリックし、仮想マシンのアラートを解決するためのアクション推奨事項を選択します。
 - a [新しい推奨事項] テキスト ボックスに、**Add CPUs to virtual machines** のようなアクションの説明を入力します。
 - b [アクション] ドロップダウン メニューから、[仮想マシン用 CPU 数の設定] を選択します。
 - c [保存] をクリックします。
- 3 [追加] をクリックし、この例を参考にして、ホスト メモリの問題を解決するための推奨事項としての指示を追加します。

このホストが DRS クラスタの一部である場合は、DRS を確認して、ロード バランシングの設定が正しく構成されていることを検証します。必要な場合は、仮想マシンの vMotion を手動で行います。
- 4 [追加] をクリックし、ホスト メモリのアラートを解決するための推奨事項としての指示を追加します。
 - a この例のような推奨事項の説明を入力します。

スタンドアロン ホストの場合は、ホストにメモリを追加します。
 - b 指示中の URL をハイパーリンクにするには、URL（例、<https://www.vmware.com/support/pubs/vsphere-esxi-vcenter-server-pubs.html>）をクリップボードにコピーします。
 - c テキスト ボックスでテキストをハイライト表示して、[ハイパーリンクの作成] をクリックします。
 - d [ハイパーリンクの作成] テキスト ボックスに URL を貼り付け、[OK] をクリックします。
 - e [保存] をクリックします。

- 5 [アラートの定義のワークスペース] で、[Add CPUs to virtual machines]、[If this host is part of a DRS cluster]、および [If this is a standalone host] の各推奨事項を、表示されている順序でリストから推奨事項ワークスペースにドラッグします。
- 6 [保存] をクリックします。

これで、生成されるアラートを解決するために推奨されるアクションおよび指示が作成されました。作成した推奨事項のうちの1つは仮想マシンのCPU使用率問題の解決に使用でき、もう一方はホストのメモリ問題の解決に使用できます。

次に進む前に

オブジェクトのグループを作成して、会計オブジェクトの管理に使用します。[「カスタム会計部門グループの作成 \(P. 91\)」](#)を参照してください。

カスタム会計部門グループの作成

グループとして会計オブジェクトを管理、監視、ポリシーの適用を行うには、カスタム オブジェクト グループを作成します。

開始する前に

このシナリオのアラート定義を完了していることを確認します。[「アラート定義への推奨事項の追加 \(P. 90\)」](#)を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] アイコンをクリックします。
- 2 [グループ] タブをクリックします。
- 3 [新規グループ] をクリックします。
- 4 **Accounting VMs and Hosts** のような名前を入力します。
- 5 [グループタイプ] ドロップダウン メニューから [部門] を選択します。
- 6 [ポリシー] ドロップダウン メニューから [デフォルト ポリシー] を選択します。
ポリシーを作成する場合は、新規ポリシーを会計グループに適用します。
- 7 [メンバーシップ基準の定義] 領域の [以下の基準に適合するオブジェクトタイプを選択する] ドロップダウン メニューで、[vCenter アダプタ] を展開し、[ホストシステム] を選択して、動的グループ基準を構成します。
 - a [基準] ドロップダウン メニューから [関係] を選択します。
 - b [関係オプション] ドロップダウン メニューから、[親] を選択します。
 - c [演算子] ドロップダウン メニューから [含む内容] を選択します。
 - d [オブジェクト名] テキスト ボックスに、**acct** と入力します。
 - e ナビゲーション ツリーのドロップダウン リストで、[vSphere ホストおよびクラスタ] を選択します。

仮想マシン名に acct を含む仮想マシンのホストであるホストオブジェクトが含まれる、動的グループが作成されました。オブジェクト名に acct を含む仮想マシンをホストに追加または移動すると、そのホストオブジェクトがグループに追加されます。
- 8 ワークスペースの左下にある [プレビュー] をクリックし、オブジェクト名に acct を含む仮想マシンが実行されているホストが [グループのプレビュー] ウィンドウに表示されることを確認します。
- 9 [閉じる] をクリックします。
- 10 [別の基準セットの追加] をクリックします。
2つの基準セットの間に新しい基準セットがOR演算子を使用して追加されます。

- 11 [以下の基準に適合するオブジェクトタイプを選択する] ドロップダウン メニューで、[vCenter アダプタ] を展開し、[仮想マシン] を選択して、動的グループ基準を構成します。
 - a [基準] ドロップダウン メニューで、[プロパティ] を選択します。
 - b [プロパティの選択] ドロップダウン メニューで、[構成] を展開し、[名前] をダブルクリックします。
 - c [演算子] ドロップダウン メニューから [含む内容] を選択します。
 - d [プロパティ値] テキスト ボックスに、**acct** と入力します。

オブジェクト名に **acct** を含む仮想マシン オブジェクトが含まれている動的グループが作成されました。このグループは、それらの仮想マシンが存在することに依存します。名前に **acct** を含む仮想マシンを使用環境に追加すると、その仮想マシンはグループに追加されます。
 - 12 ワークスペースの左下にある [プレビュー] をクリックし、オブジェクト名に **acct** を含む仮想マシンが、ホストシステムも含まれるリストに追加されていることを確認します。
 - 13 [閉じる] をクリックします。
 - 14 [OK] をクリックします。
- Accounting VMs and Hosts グループがグループ リストに追加されます。

名前に **acct** を含む仮想マシンが使用環境内で追加、削除、および移動されるのに伴って変化する、動的オブジェクトグループが作成されました。

次に進む前に

vRealize Operations Manager でアラート定義を使用して使用環境を監視する方法を判別するポリシーを作成します。[「会計アラートのポリシーの作成 \(P. 92\)」](#) を参照してください。

会計アラートのポリシーの作成

使用環境内の会計アラート定義を vRealize Operations Manager で評価する方法を構成するには、動作を決定するポリシーを構成して、そのポリシーをオブジェクト グループに適用できるようにします。ポリシーにより、アラート定義の適用を選択したオブジェクト グループのメンバーに限定します。

作成したアラート定義は、デフォルトのポリシーに追加されて有効化されます。これにより、作成するすべてのアラート定義が環境内で確実にアクティブになります。このアラート定義は会計部門のニーズを満たすよう意図されているため、デフォルトのポリシーでは無効にして、監視する会計仮想マシンと関連ホストを含め、環境内でこのアラート定義を評価する方法を決定する新しいポリシーを作成します。

開始する前に

- このシナリオのアラート定義を完了していることを確認します。[「アラート定義への推奨事項の追加 \(P. 90\)」](#) を参照してください。
- 会計オブジェクトの管理に使用するオブジェクトのグループが作成されていることを確認します。[「カスタム会計部門グループの作成 \(P. 91\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。
- 2 [ポリシー] をクリックし、[ポリシー ライブラリ] をクリックします。
- 3 [新規ポリシーの追加] をクリックします。
- 4 **Accounting Objects Alerts Policy** のような名前を入力し、次の例に示すような分かりやすい説明を入力します。

This policy is configured to generate alerts when Accounting VMs and Hosts group objects are above trended CPU or memory usage.

- 5 [基本ポリシーの選択] をクリックし、[以下で始まる] ドロップダウン メニューで [デフォルト ポリシー] を選択します。
- 6 左側で、[アラートの定義および症状の定義のカスタマイズ] をクリックし、新しい Acct VM CPU early warning アラート以外のすべてのアラート定義を無効にします。
 - a [アラートの定義] 領域で、[アクション] をクリックし、[すべて選択] を選択します。
現在のページのアラートが選択されます。
 - b [アクション] をクリックし、[無効化] を選択します。
アラートの [状態] 列に [無効] と表示されます。
 - c アラート リストの各ページでこのプロセスを繰り返します。
 - d リストで、[Acct VM CPU early warning] を選択し、[アクション] をクリックして [有効化] を選択します。
Acct VM CPU early warning が有効になります。
- 7 左側で、[グループへのポリシーの適用] をクリックして、[Accounting VMs and Hosts] を選択します。
- 8 [保存] をクリックします。

会計部門の仮想マシンとホストにのみ適用されるカスタム ポリシー内に会計アラート定義が存在するポリシーが作成されました。

次に進む前に

電子メール通知を作成し、vRealize Operations Manager をアクティブに監視していないときでもアラートについて知ることができるようにします。[「部門のアラートに関する通知の構成 \(P. 93\)」](#) を参照してください。

部門のアラートに関する通知の構成

vRealize Operations Manager で会計部門のオブジェクトを全般的に監視する自分の能力に頼るのではなく、会計部門のアラートが生成されたときに電子メール通知を受け取るようにするには、通知ルールを作成します。

会計アラート発生時の電子メール通知の作成はオプションのプロセスですが、vRealize Operations Manager で現在作業していない場合でもアラートを受け取ることができます。

開始する前に

- このシナリオのアラート定義を完了していることを確認します。[「アラート定義への推奨事項の追加 \(P. 90\)」](#) を参照してください。
- システムで標準の電子メール送信アラートが構成済みであることを確認します。[「vRealize Operations Manager 送信アラートの標準の電子メール プラグインの追加 \(P. 77\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックします。
- 2 [通知] をクリックし、プラス記号をクリックして、通知ルールを追加します。
- 3 通信オプションを構成します。
 - a [名前] テキスト ボックスに、**Acct Dept VMs or Hosts Alerts** のような名前を入力します。
 - b [プラグイン タイプの選択] ドロップダウン メニューで、[StandardEmailPlugin] を選択します。
 - c [インスタンスを選択] ドロップダウン メニューで、メッセージを送信するように構成された標準の電子メール インスタンスを選択します。

- d [受信者] テキスト ボックスに、自分の電子メール アドレスと、会計部門のアラートを担当する他の受信者のアドレスを入力します。受信者間はセミコロンで区切ります。
- e [再度通知する] テキスト ボックスは空白のままにします。

値を入力しない場合、電子メール通知は一度だけ送信されます。このアラートはリスク アラートであり、緊急の対応を要求するのではなく、早期警告を発することを意図しています。

送信される際の通知名と、メッセージの送信に使用される方法を構成しました。

- 4 [フィルター基準] 領域で、会計アラートの通知トリガーを構成します。
 - a [通知トリガー] ドロップダウン メニューで、[アラートの定義] を選択します。
 - b [クリックしてアラートの定義を選択] をクリックします。
 - c [Acct VM CPU early warning] を選択し、[選択] をクリックします。
- 5 [保存] をクリックします。

会計部門のアラート定義に従ってアラートが生成されたときに、自分と指名されたエンジニアに電子メール メッセージを送信する通知ルールが作成されました。

次に進む前に

アラート関連ウィジェットでダッシュボードを作成して、会計オブジェクト グループのアラートを監視できるようにします。[「部門のオブジェクトを監視するためのダッシュボードの作成 \(P. 94\)」](#) を参照してください。

部門のオブジェクトを監視するためのダッシュボードの作成

会計部門のオブジェクト グループに関連するすべてのアラートを監視するには、アラート リストとその他のウィジェットを含むダッシュボードを作成します。関連するすべてのオブジェクトのアラート データをまとめてダッシュボードに表示します。

会計仮想マシンと関連ホストを監視するダッシュボードの作成は任意ですが、これにより会計オブジェクト グループ アラートおよびオブジェクトがまとめて表示されます。

開始する前に

会計部門の仮想マシンと関連オブジェクトのオブジェクト グループを作成します。[「カスタム会計部門グループの作成 \(P. 91\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックして、[ダッシュボード] をクリックします。
- 2 [[Add]] をクリックします。
- 3 [ダッシュボードの構成] 定義領域で、**Accounting VMs and Hosts** のようなタブ名を入力し、レイアウト オプションを構成します。
- 4 [ウィジェット リスト] をクリックし、次のウィジェットをワークスペースにドラッグします。
 - [アラート リスト]
 - [効率]
 - [健全性]
 - [リスク]
 - [トップアラート]

■ [アラート ボリューム]

空白ウィジェットがワークスペースに追加されます。表示順を変更するには、ワークスペースの別の場所へウィジェットをドラッグします。

- 5 アラート リスト ウィジェットのタイトル バーで、[ウィジェットの編集] をクリックし、設定を構成します。

- a [タイトル] テキスト ボックスで、タイトルを **Acct Dept Alert List** に変更します。

- b [内容の更新] オプションで、[オン] を選択します。

- c [検索] テキスト ボックスに **Accounting** と入力し、[検索] をクリックします。

Accounting という値は、会計部門の仮想マシンと関連ホストのオブジェクト グループ名に対応します。

- d フィルタリングされたリソース リストで、[Accounting VMs and Hosts] グループを選択します。

Accounting VMs and Hosts グループが [選択したリソース] テキスト ボックスで強調表示されます。

- e [OK] をクリックします。

Accounting VMs and Hosts グループ オブジェクトのアラートを表示するように Acct Dept Alert List が構成されます。

- 6 [ウィジェットの相互作用] をクリックし、次の相互作用を構成します。

- a Acct Dept Alert List では、選択したリソースを空白にしておきます。

- b [トップアラート]、[健全性]、[リスク]、[効率]、および [アラート ボリューム] について、[選択したリソース] ドロップダウン メニューで [Acct Dept Alert List] を選択します。

- c [相互作用の適用] をクリックします。

ウィジェットの相互作用をこのように構成すると、Acct Dept Alert List の選択アラートは、その他のウィジェットにおけるデータのソースになります。このアラート リストでアラートを選択すると、[健全性]、[リスク]、および [効率] ウィジェットには当該オブジェクトのアラートが表示され、[トップ アラート] には当該オブジェクトの健全性に影響する上位の問題が表示され、[アラート ボリューム] にはアラート トレンド チャートが表示されます。

- 7 [保存] をクリックします。

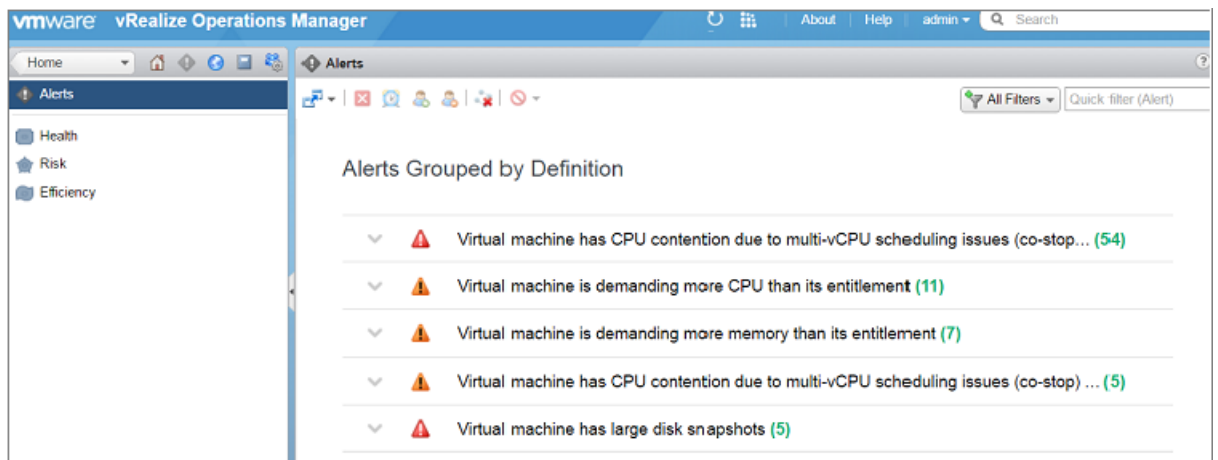
作成したリスク アラートを含む、会計仮想マシンとホスト グループに関連するアラートを表示するダッシュボードが作成されました。

アラート グループ

アラートを簡単かつ効率的に管理するため、必要に応じてグループとして整理することができます。

大規模な環境では、さまざまな種類のアラートを受け取るために問題の特定は複雑になります。アラートを簡単に管理するには、アラートをその定義でグループ化します。



たとえば、システムに 1,000 個のアラートが存在する場合を考えてください。さまざまなタイプのアラートを識別するために、アラートの定義に基づいてアラートをグループ化します。また、グループで最も高い重要度のアラートを容易に確認できます。



アラートをグループ化した場合、同じアラート定義のアラートがトリガした回数を確認できます。アラートをグループ化することによって、次のタスクを素早く簡単に実行できます。

- 最もノイズが多いアラートの確認：トリガした回数が最も多いアラートは、ノイズが多いアラートと呼ばれています。このようなノイズを確認した後、以降のノイズを回避するために無効にできます。
- アラートのフィルタ：アラートの定義の部分文字列に基づいてアラートをフィルタできます。この結果、この部分文字列を含むアラートのグループが表示されます。


注意

- アラート グループをキャンセルまたは無効にすると、アラートは即座にはキャンセルされません。グループが大規模な場合、ある程度時間がかかることがあります。
- 一度に 1 つのグループのみを展開できます。
- グループの横に示された番号は、その特定のグループ内のアラート数です。
-  重要度の記号  は、グループ内で最高レベルのアラートの重要度を示します。

アラートのグループ化

アラートをグループ化するには、次の手順に従います。


手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインの [アラート] をクリックします。
- 2  をクリックして、アラートをグループ化します。

アラートのグループ解除

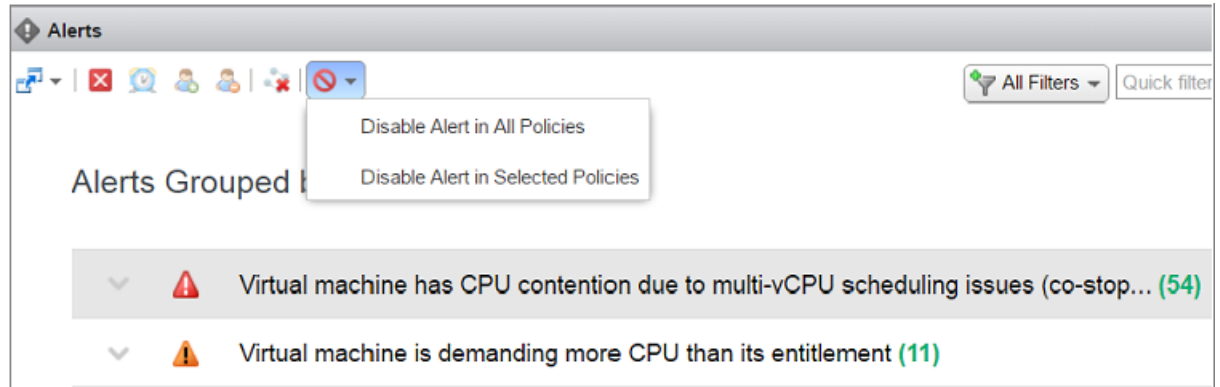
あらあとのぐるうぶかいじょ

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインの [アラート] をクリックします。
- 2  をクリックして、アラートのグループを解除します。

アラートの無効化

アラート グループで、1 回クリックしてアラートを無効にできます。



アラートは次の 2 つの方法で無効にできます。

- すべてのポリシーでアラートを無効化：すべてのポリシーのすべてのオブジェクトでアラートを無効にします。
- 選択したポリシーでアラートを無効化：選択したポリシーが含まれるオブジェクトでアラートを無効にします。この方法は、アラートを設定したオブジェクトのみで機能することに注意してください。

アクションの構成

アクションを使用すると、監視対象システムのオブジェクトを更新したり、オブジェクトに関するデータを読み取ることができます。アクションは通常、ソリューションの一部として vRealize Operations Manager で提供されています。ソリューションによって追加されたアクションは、オブジェクトの [アクション] メニュー、リストおよび表示メニュー（一部のダッシュボード ウィジェットを含む）で使用できます。また、アラートの定義の推奨に追加することもできます。

アクションには、読み取りアクションと更新アクションがあります。

読み取りアクションは、ターゲット オブジェクトからデータを取得します。

更新アクションは、ターゲット オブジェクトを変更します。たとえば、アラート定義を構成して、仮想マシンでメモリに関する問題が発生したときにその通知を受け取ることができます。仮想マシン用メモリの設定アクションを実行するアクションを推奨に追加します。このアクションによって、メモリが増加し、アラート発生と考えられる原因を解決します。

vCenter Server オブジェクトのアクションを表示または使用するには、監視対象の各 vCenter Server インスタンスについて、vCenter Adapter でアクションを有効にする必要があります。必要な権限がある場合にのみ、アクションを表示およびアクセスできます。

vRealize Operations Manager アクションのリスト

アクションのリストには、アクションの名前、各アクションで変更されるオブジェクト、アクションを実行できるオブジェクトレベルが含まれています。この情報を使用して、アラートの推奨事項に従ってアクションを正しく確実に適用し、アクションが [アクション] メニューに表示されるタイミングを確認します。

アクションと変更されるオブジェクト

vRealize Operations Manager アクションでは、管理対象の vCenter Server インスタンス内のオブジェクトを変更します。

vRealize Operations Manager でユーザーにアクションのアクセス権を与えると、そのユーザーは、vRealize Operations Manager 以外でアクセス可能なオブジェクトだけでなく、vRealize Operations Manager が管理するすべてのオブジェクトへのアクションが許可されます。

アクションのオブジェクト レベル

さまざまなオブジェクト レベルで作業するときにアクションを利用できますが、アクションによって変更されるのは特定のオブジェクトだけです。クラスタ レベルで作業しており、[仮想マシンのパワーオン] を選択すると、アクセス権限を持つクラスタ内のすべての仮想マシンでアクションを実行できます。仮想マシン レベルで作業しているときは、選択した仮想マシンのみを利用できます。

表 2-3. vRealize Operations Manager アクションで影響を受けるオブジェクト

操作	変更されたオブジェクト	オブジェクト レベル
コンテナのリバランス	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ データセンター ■ カスタム データセンター
アイドル状態の仮想マシンの削除	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
DRS 自動化の設定	クラスタ	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ
仮想マシンの移動	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシン
仮想マシンのパワーオフ	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
仮想マシンのゲスト OS のシャットダウン	仮想マシン このアクションを実行するには、VMware Tools がインストールされ、ターゲット仮想マシン上で実行されている必要があります。	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
仮想マシンのパワーオン	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
パワーオフ状態の仮想マシンの削除	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
仮想マシン用メモリの設定 および パワーオフ可の仮想マシンのメモリの設定	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
仮想マシン用メモリ リソースの設定	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
仮想マシン用 CPU 数の設定 および パワーオフ可の仮想マシンの CPU 数の設定	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
仮想マシン用 CPU リソースの設定	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
仮想マシン用 CPU 数およびメモリの設定 および パワーオフ可の仮想マシンの CPU 数とメモリの設定	仮想マシン	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン

表 2-3. vRealize Operations Manager アクションで影響を受けるオブジェクト (続き)

操作	変更されたオブジェクト	オブジェクト レベル
仮想マシンの未使用スナップショットの削除	スナップショット	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ ホスト システム ■ 仮想マシン
データストアの未使用のスナップショットの削除	スナップショット	<ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ ■ データストア ■ ホスト システム

自動化に対応するアクション

推奨事項は、アラートによって示された問題を修正する方法を特定できます。これらの推奨事項の一部を、vRealize Operations Manager インスタンスで定義されているアクションに関連付けることができます。推奨事項がそのアラートで優先順位が最も高いものである場合は、アラートに対する複数の修正アクションを自動化できます。

実行可能なアラートはポリシーで有効にします。デフォルトでは、自動化はポリシーで無効化されています。ポリシーで自動化を構成するには、[自動化] - [ポリシー] - [ポリシー ライブラリ] を選択します。次に、ポリシーを編集し、[アラート/シナリオ定義] ワークスペースにアクセスし、[アラートの定義] ペインの [自動化] 設定で [ローカル] を選択します。

アクションが自動化されている場合は、[管理] - [最近のタスク] の [自動化] 列と [アラート] 列を使用して、自動化アクションを特定し、そのアクションの結果を確認できます。

- vRealize Operations Manager は [automationAdmin] ユーザー アカウントを使用して、自動化アクションをトリガします。アラートによってトリガされるこれらの自動化アクションでは、[送信者] 列に [automationAdmin] ユーザーが表示されます。
- [アラート] 列にはそのアクションをトリガしたアラートが表示されます。推奨事項に関連付けられているアラートがトリガされると、ユーザーによる操作なしにアクションがトリガされます。

次のアクションは自動化に対応しています。

- パワーオフ状態の仮想マシンの削除
- アイドル状態の仮想マシンの削除
- 仮想マシンの移動
- 仮想マシンのパワーオフ
- 仮想マシンのパワーオン
- 仮想マシン用 CPU 数およびメモリの設定
- パワーオフ可の仮想マシンの CPU 数とメモリの設定
- 仮想マシン用 CPU 数の設定
- パワーオフ可の仮想マシンの CPU 数の設定
- 仮想マシン用 CPU リソースの設定
- 仮想マシン用メモリの設定
- パワーオフ可の仮想マシンのメモリの設定
- 仮想マシン用メモリ リソースの設定
- 仮想マシンのゲスト OS のシャットダウン



アラートとアクションを使用して自動化する方法
http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_vrealize_alerts_actions_automation



関連アクションのあるアラートを自動化する方法
(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_vrom_automate_alert_with_action)



シンptom定義とアクションにより新規アラートを作成して自動化する方法
(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_vrom_create_alert_automate_symptom_definition)

アクションの自動化に必要なロール

アクションを自動化するには、ロールに次の権限が必要です。

- [管理] - [ポリシー管理] でポリシーを作成、編集、インポートします。
- [コンテンツ] - [アラート定義管理] でアラート定義を作成、クローン作成、編集、インポートします。
- [コンテンツ] - [推奨事項管理] で推奨事項定義を作成、編集、インポートします。

重要 アクションをアラートおよび推奨事項定義とは別に実行する場合に使用する権限を設定します。アラート、推奨事項、およびポリシーを変更できるユーザーであれば、アクションを実行する権限がない場合でも、アクションを自動化することもできます。

たとえば、仮想マシンのパワーオフ アクションにアクセスできないが、アラートと推奨事項を作成および変更できる場合は、仮想マシンのパワーオフ アクションを表示し、そのアクションをアラートの推奨事項に割り当てることができます。その後、アクションをポリシーで自動化すると、vRealize Operations Manager で、**automationAdmin** ユーザーを使用してアクションが実行されます。

自動化に対応するアクションの例

「仮想マシンの CPU ワークロードが慢性的に高く、CPU ストレスの原因になっています」という名前のアラート定義では、「仮想マシン用 CPU 数の設定」という名前のアクションを自動化できます。

仮想マシンの CPU ストレスがクリティカル、緊急、または警告のレベルを超えている場合、そのアラートはユーザーによる操作なしに推奨アクションをトリガします。

vRealize Automation とのアクションの統合

vRealize Operations Manager では vRealize Automation が管理するオブジェクトへのアクションが制限され、vRealize Automation で設定された制約にアクションが違反しないようにされています。

環境内のオブジェクトを vRealize Automation で管理する場合は、これらのオブジェクトに対して vRealize Operations Manager のアクションは使用できません。たとえば、ホストまたは親オブジェクトを vRealize Automation で管理する場合、そのオブジェクトへのアクションは使用できません。

この動作は、[仮想マシンのパワーオフ]、[仮想マシンの移動]、[コンテナのリバランス]など、すべてのアクションに適用されます。

vRealize Automation で管理されるオブジェクトに対するアクションの除外をオン/オフにすることはできません。

アクションによる管理対象オブジェクトの判別

アクションは vRealize Automation で管理されるリソース コンテナのオブジェクトをチェックして、どのオブジェクトが vRealize Automation で管理されているかを判別します。

- コンテナのリバランスなどのアクションは、データセンター コンテナまたはカスタム データセンター コンテナの子オブジェクトをチェックして、オブジェクトが vRealize Automation で管理されているかどうかを判別します。オブジェクトが管理対象であれば、これらのオブジェクトに対してアクションは表示されません。

- 仮想マシンの移動アクションは、移動する仮想マシンが vRealize Automation で管理されているかどうかを判別します。

仮想マシンが管理対象か	仮想マシンの移動アクションの結果
対象の場合	vRealize Operations Manager ユーザー インターフェイスにはその仮想マシンに対して仮想マシンの移動アクションは表示されません。
対象でない場合	仮想マシンの移動アクションにより、仮想マシンが新しいホスト、データストア、または新しいホスト/データストアに移動されます。仮想マシンの移動アクションでは、新しいホスト/データストアが vRealize Automation の管理対象であるかどうかはチェックされません。

- スナップショットの削除アクションは、仮想マシンやデータストアが vRealize Automation で管理されているかどうかを判別します。

vRealize Automation の管理対象でないオブジェクトへのアクション

vRealize Automation で管理されないホストや親オブジェクトについては、vRealize Automation の管理対象でない仮想マシンだけがアクション ダイアログに表示され、vRealize Automation で管理されない仮想マシンにだけアクションを実行できます。すべての子オブジェクトが vRealize Automation で管理されている場合は、ユーザー インターフェイスに「**選択したアクションで使用可能なオブジェクトはありません**」のメッセージが表示されます。

複数のオブジェクトにアクションを試みた場合

複数のオブジェクトを選択して、仮想マシンのパワーオフなどのアクションを実行しようとする、仮想マシンのパワーオフ アクション ダイアログ ボックスには、vRealize Automation の管理対象にないオブジェクトだけが表示されます (仮想マシンのサブセットが含まれることがあります)。

パワーオフ可を使用するアクションのアクション

vRealize Operations Manager に備わっている一部のアクションを実行するには、ターゲット マシンの構成に応じて仮想マシンをシャットダウンまたはパワーオフする必要があります。その場合は、アクションを実行する前に [パワーオフ可] オプションの影響を理解して、ターゲット仮想マシンに最適な方法を選択する必要があります。

パワーオフとシャットダウン

vCenter Server インスタンス上で実行できるアクションには、仮想マシンをシャットダウンするアクションと仮想マシンをパワーオフするアクションがあります。仮想マシンをパワーオフ状態にしないと実行できないアクションもあります。仮想マシンをシャットダウンするかパワーオフするかは、仮想マシンの構成方法とアクションの実行時に選択するオプションによって決まります。

シャットダウン アクションは、ゲスト OS をシャットダウンしてから仮想マシンをパワーオフします。

vRealize Operations Manager から仮想マシンをシャットダウンするには、ターゲットオブジェクト上に VMware Tools がインストールされており、稼働している必要があります。

パワーオフ アクションは、ゲスト OS の状態に関係なく、仮想マシンをオフにします。その際、仮想マシンがアプリケーションを実行していると、データが失われる可能性があります。アクション (たとえば CPU 数の変更) が終了すると、仮想マシンはアクション開始時のパワー状態に戻ります。

パワーオフ可と VMware Tools

一部のオペレーティングシステムでは、仮想マシン上にホット プラグが構成されている場合に限り、仮想マシンの CPU 数やメモリ容量を増やすアクションがサポートされています。一方、仮想マシンがパワーオフ状態でなければ構成を変更できないオペレーティングシステムもあります。VMware Tools が稼働していない場合にこうしたニーズに対応するため、CPU 数の設定、メモリの設定、CPU 数およびメモリの設定アクションには [パワーオフ可] オプションが用意されています。

[パワーオフ可] が選択されており、なおかつ仮想マシンが実行中であるとき、上記のアクションは、VMware Tools がインストールされており、稼働しているかどうかを確認します。

- VMware Tools がインストールされており、稼働している場合は、仮想マシンがシャットダウンされた後、アクションが完了します。
- VMware Tools が、稼働していないか、インストールされていない場合、オペレーティングシステムの状態に関係なく、仮想マシンがパワーオフ状態です。

[パワーオフ可] を選択しないで、CPU 数またはメモリを減らす場合、または CPU 数またはメモリを増やすためのホットプラグが有効化されていない場合、アクションは実行されず、[最近のタスク] でエラーが報告されます。

CPU 数またはメモリ変更時の [パワーオフ可]

CPU 数とメモリ容量を変更するアクションを実行する場合は、[パワーオフ可] オプションを使用するかどうかを決定するためにさまざまな要因を考慮する必要があります。具体的な要因として、CPU 数またはメモリ容量を増やすのか減らすのか、ターゲット仮想マシンはパワーオン状態かどうか、といった点があります。CPU またはメモリ値を増やす場合は、ホット プラグが有効化されているかどうかによっても、アクション実行時のオプションの適用方法が変わります。

CPU 数またはメモリ容量を減らすときに [パワーオフ可] を使用する方法は、ターゲット仮想マシンのパワー状態によって異なります。

表 2-4. オプションに基づく CPU 数とメモリ量削減の動作

仮想マシンのパワー状態	[パワーオフ可] が選択されている	結果
オン	可	VMware Tools がインストールされ実行されている場合は、アクションによって仮想マシンのシャットダウン、CPU またはメモリの削減、マシンの再パワーオンが実行されます。 VMware Tools がインストールされていない場合は、アクションによって仮想マシンのパワーオフ、CPU またはメモリの削減、マシンの再パワーオンが実行されます。
オン	不可	アクションは仮想マシンで実行されません。
オフ	該当なし。仮想マシンがパワーオフ状態である。	アクションによって値が削減され、仮想マシンはパワーオフ状態のままです。

CPU 数またはメモリ容量を増やすときに [パワーオフ可] を使用する方法は、ターゲット仮想マシンの状態やホット プラグが有効かどうかなど、いくつかの要因によって異なります。次の情報を使用して、ターゲットオブジェクトに適用されるシナリオを決定します。

CPU 数を増やす場合は、[パワーオフ可] を適用するかどうかを決めるときに、仮想マシンのパワー状態、CPU ホット プラグが有効かどうかを検討する必要があります。

表 2-5. CPU 数を増やす動作

仮想マシンのパワー状態	CPU ホット プラグが有効	[パワーオフ可] が選択されている	結果
オン	可	不可	アクションによって CPU 数が指定した数に増加します。
オン	不可	可	VMware Tools がインストールされ実行されている場合は、アクションによって仮想マシンのシャットダウン、CPU 数の増加、マシンの再パワーオンが実行されます。 VMware Tools がインストールされていない場合は、アクションによって仮想マシンのパワーオフ、CPU 数の増加、マシンの再パワーオンが実行されます。
オフ	該当なし。仮想マシンがパワーオフ状態である。	不要。	アクションによって CPU 数が指定した数に増加します。

メモリを増やす場合は、[パワーオフ可] を適用する方法を決定するときに、仮想マシンのパワー状態、メモリ ホット プラグが有効かどうか、ホット メモリの上限が存在するかどうかを検討する必要があります。

表 2-6. メモリ量を増やす動作

仮想マシンのパワー状態	メモリ ホット プラグが有効	ホット メモリの制限	[パワーオフ可] が選択されている	結果
オン	可	新しいメモリ値 ≤ ホット メモリの上限	不可	アクションによって、指定したメモリ量が増加します。
オン	可	新しいメモリ値 > ホット メモリの制限	可	VMware Tools がインストールされ実行されている場合は、アクションによって仮想マシンのシャットダウン、メモリの増加、マシンの再パワーオンが実行されます。 VMware Tools がインストールされていない場合は、アクションによって仮想マシンのパワーオフ、メモリの増加、マシンの再パワーオンが実行されます。
オン	不可	該当なし。ホット プラグは有効化されていない。	可	VMware Tools がインストールされ実行されている場合は、アクションによって仮想マシンのシャットダウン、メモリの増加、マシンの再パワーオンが実行されます。 VMware Tools がインストールされていない場合は、アクションによって仮想マシンのパワーオフ、メモリの増加、マシンの再パワーオンが実行されます。
オフ	該当なし。仮想マシンがパワーオフ状態である。	該当なし。	不要	アクションによって、指定したメモリ量が増加します。

ポリシーの構成

新しいポリシーを作成する場合、既存のポリシーから設定を継承できます。また、適切な権限がある場合は、既存のポリシーの設定を変更できます。新しいポリシーを作成または既存のポリシーを編集したら、1 つ以上のオブジェクトのグループにポリシーを適用できます。

この章では次のトピックについて説明します。

- [ポリシー \(P. 105\)](#)
- [運用ポリシー \(P. 111\)](#)
- [ポリシーのタイプ \(P. 120\)](#)
- [監視ポリシー ワークスペースを使用した、運用ポリシーの作成および変更 \(P. 129\)](#)

ポリシー

ポリシーは、環境内のオブジェクトに関する情報の分析と表示に使用するために vRealize Operations Manager に定義する一式のルールです。ポリシーを作成、変更、および管理し、vRealize Operations Manager がダッシュボード、ビュー、およびレポートにどのようにデータを表示するかを決定できます。

ポリシーが環境とどのように関連するか

vRealize Operations Manager ポリシーは、IT インフラストラクチャやビジネス ユニットに確立されている運用上の決定事項をサポートします。ポリシーを使用することで、環境内の特定のオブジェクトのために vRealize Operations Manager が収集と報告を行うデータを制御できます。各ポリシーは他のポリシーの設定を引き継ぐことができますが、環境に確立されるサービス レベル アグリーメントやビジネス上の優先事項をサポートする処置として、特定のオブジェクトタイプのさまざまな分析設定、アラート定義、症状の定義をカスタマイズして上書きすることもできます。

ポリシーを管理する際には、ビジネスに使用されている最重要アプリケーションの要件を満たすために、まず環境の運用上の優先事項や、アラートと症状の許容値などを把握する必要があります。その次に、本番およびテスト環境に正しいポリシーとしきい値設定が適用されるように、ポリシーを構成できます。

ポリシーは、環境からデータを収集するときに vRealize Operations Manager がオブジェクトに適用する設定を定義したものです。vRealize Operations Manager は、新たに検出されるオブジェクト（オブジェクト グループ内のオブジェクトなど）にポリシーを適用します。たとえば、現在 VMWare アダプタ インスタンスが存在し、World というグループに特定のポリシーを適用するとします。この vCenter Server インスタンスにユーザーが新しい仮想マシンを追加すると、VMWare アダプタはこの仮想マシン オブジェクトを vRealize Operations Manager に報告します。このオブジェクトは World オブジェクト グループのメンバーであるため、VMWare アダプタはこのオブジェクトに同じポリシーを適用します。

容量ポリシーの設定を実装するには、環境に対する要件と許容値（CPU 使用量など）を理解しておく必要があります。その後で、環境に応じたオブジェクト グループとポリシーを構成できます。

- 本番環境ポリシーに対しては、より高いパフォーマンス設定を構成し、ピーク時間を考慮することをお勧めします。

- テスト環境ポリシーに対しては、より高い使用率の設定を構成することをお勧めします。

vRealize Operations Manager は、[アクティブなポリシー] タブに表示されている優先順位でポリシーを適用します。ポリシーの優先順位を確立すると、vRealize Operations Manager は、ポリシー内の構成済みの設定をポリシー順位に従って適用し、オブジェクトの分析とレポート作成を実行します。ポリシーの優先順位を変更するには、ポリシー行をクリックしてドラッグします。デフォルト ポリシーは常に優先順位リストの一番下に置かれます。残りのアクティブなポリシーのリストは、最高優先順位のポリシーを示す優先順位 1 から始まります。複数のオブジェクト グループのメンバーとなるようにオブジェクトを割り当てて、各オブジェクト グループに異なるポリシーを割り当てた場合、vRealize Operations Manager はそのオブジェクトに最高ランクのポリシーを関連付けます。

表 3-1. ポリシー ルール要素の構成

ポリシー ルール要素	しきい値、設定、定義
ワークロード	メモリ、CPU、およびディスク容量の要求を有効または無効にします。ネットワーク I/O およびデータストア I/O の比率を有効または無効にし、vSphere 構成制限を設定します。[ワークロード] バッジ スコアの症状しきい値を構成します。
アノマリ	[異常] バッジ スコアの症状しきい値を構成します。
障害	[障害] バッジ スコアの症状しきい値を構成します。
残り容量と残り時間	メモリ、CPU、およびディスク容量の要求と割り当てを有効または無効にします。ネットワーク I/O およびデータストア I/O の比率を有効または無効にし、vSphere 構成制限を設定します。ピーク時間とコミット済みプロジェクト（これらは残り時間に影響を与える）に適合させるとともに、プロビジョニング時間バッファを設定します。[残りの容量と時間] バッジ スコアのしきい値を構成します。
負荷	メモリと CPU の要求を有効または無効にします。ネットワーク I/O およびデータストア I/O の比率を有効または無効にし、vSphere 構成制限を設定します。負荷 バッジ スコアの症状しきい値を構成します。
解放可能な容量	推奨される過剰サイズの割合、アイドル時間の割合、およびパワーオフ時間の割合を設定します。[解放可能な容量] バッジ スコアの症状しきい値を構成します。
密度	[密度] バッジ スコアの症状しきい値を構成します。
時刻	オブジェクトの使用を追跡し、メンテナンス スケジュールを選択します。
属性	属性は、収集可能なデータ コンポーネントです。メトリック属性、プロパティ属性、およびスーパー メトリック属性の収集は、有効または無効にすることができます。これらの属性は、主要なパフォーマンスインジケータ (KPI) に設定できます。KPI は、その属性が自己の環境内で重要であることを示すために指定される属性です。 vRealize Operations Manager は、他の属性の扱いとは異なる方法で KPI を扱います。KPI のしきい値違反により、KPI 以外の属性の場合とは異なるタイプのアラートが生成されます。 KPI のしきい値違反が検出された場合、vRealize Operations Manager はその違反の前に発生したイベントを調べます。関連する十分な情報が検出された場合、vRealize Operations Manager は違反に先立つ一連のイベントをフィンガープリントとして取得します。将来、類似する一連のイベントが検出された場合は、KPI 違反が発生する可能性があることを警告する予測アラートを発行できます。
アラートの定義	症状と推奨事項の組み合わせを有効または無効にし、問題として分類される条件を特定します。
症状の定義	プロパティ、メトリック、またはイベントのテスト条件を有効または無効にします。

ポリシーの作成、変更、優先付けを行う権限

vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイス内の特定の機能にアクセスするための権限が必要です。ユーザー アカウントに関連付けられたロールによって、アクセスできる機能および実行できるアクションが決まります。

ポリシーの優先順位を設定するには、[アクティブなポリシー] タブで、ポリシー行をクリックし、リスト内の対象の優先順位の位置にドラッグします。デフォルト ポリシーの優先順位には、文字 D が常に指定されています。

ポリシーに及ぶアップグレードの影響

以前のバージョンから vRealize Operations Manager をアップグレードした後、新規のアラートやシンプトムなど、ポリシーのデフォルト設定が新たに追加または更新されます。したがって、現在の環境に応じて最適化するために、この設定を分析および変更する必要があります。以前のバージョンの vRealize Operations Manager で使用されたポリシーを適用すると、手動で変更されたポリシーの設定は未変更のままになります。

ポリシーの決定事項と目的

vRealize Operations Manager でのポリシーの決定事項の実装は、通常、インフラストラクチャ管理者または仮想インフラストラクチャ管理者の責任ですが、権限のあるユーザーもポリシーを作成および変更できます。

IT インフラストラクチャ内のリソースを分析および監視するために設定されているポリシーを認識している必要があります。

- IT インフラストラクチャの管理とトラブルシューティングを行う仮想インフラストラクチャ管理者の場合は、オブジェクトと関連付けられているポリシーが vRealize Operations Manager に表示されるスコアにどのように影響するかを理解しておく必要があります。これにより、企業の決定と要件に基づいて承認済みポリシーを構成できます。
- ネットワーク運用エンジニアは、オブジェクトについて vRealize Operations Manager がレポートするデータに対するポリシーの影響、およびオブジェクト レポートのアラートおよび問題に割り当てられているポリシーを理解している必要があります。
- ポリシーに対して初期設定を推奨する役割を持つユーザーの場合は、通常、vRealize Operations Manager でポリシーを編集および構成します。
- 主に環境で発生する問題の評価を担当していて、ポリシー変更は担当外であっても、オブジェクトに適用されるポリシーが vRealize Operations Manager に表示されるデータにどのように影響するかを理解しておく必要があります。たとえば、特定のアラートに関連付けられたオブジェクトに適用されるポリシーを知っておく必要があります。
- vRealize Operations Manager からレポートを受け取る一般的なアプリケーション ユーザーの場合は、報告されるデータ値を理解できるように、運用ポリシーに関する高度な知識が必要です。

ポリシーの [ポリシー ライブラリ] タブ

[ポリシー ライブラリ] タブには、vRealize Operations Manager に含まれる、基本設定、デフォルト ポリシー、およびその他のベスト プラクティス ポリシーが表示されます。ライブラリ ポリシーを使用して、独自のポリシーを作成できます。ポリシー ライブラリには、ワークロード、異常、障害、容量、残りの容量と時間、負荷、解放可能な容量、密度、使用可能な容量、時間などのポリシー要素の構成可能な設定すべてが含まれます。

ポリシー ライブラリの仕組み

[ポリシー ライブラリ] タブのオプションを使用して、既存のポリシーから独自のポリシーを作成したり、既存のポリシー テンプレートの設定をオーバーライドして、新しい設定をオブジェクトのグループに適用できます。ポリシーのインポートとエクスポートも実行できます。

選択したポリシーの詳細を表示するには、分割バーをクリックしてペインを展開します。ポリシーの [詳細] および [関連アイテム] タブとオプションが下のペインに表示されます。[関連アイテム] タブでは、選択したポリシーをオブジェクトグループに適用することもできます。

ポリシーを追加または編集する場合は、ポリシー ワークスペースにアクセスします。ここで、ベース ポリシーを選択し、分析、メトリック、プロパティ、アラートの定義、症状の定義の設定をオーバーライドします。このワークスペースでは、ポリシーをオブジェクトグループに適用することもできます。オブジェクトグループへのポリシーの関連付けを更新するには、ユーザー アカウントに割り当てられたロールにおいて、関連付けの管理権限をポリシー管理に対して有効にする必要があります。

ポリシー ライブラリを管理する場所

ポリシー ライブラリを管理するには、[管理] をクリックし、[ポリシー] をクリックします。[ポリシー ライブラリ] タブが表示され、環境で利用できるポリシーのリストが表示されます。

表 3-2. [ポリシー ライブラリ] タブのオプション

オプション	説明
ツールバー	<p>ツールバーの選択肢を使用して、ポリシー ライブラリでアクションを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [新規ポリシーの追加]。既存のポリシーから新しいポリシーを作成します。 ■ [選択したポリシーの編集]。vRealize Operations Manager の設定をオーバーライドするためにポリシーをオーバーライドし、関連オブジェクトのデータを分析および報告します。 ■ [デフォルト ポリシーの設定]。任意のポリシーをデフォルト ポリシーとして設定できます。デフォルト ポリシー内の設定は、ポリシーが適用されていないすべてのオブジェクトに適用されます。ポリシーをデフォルト ポリシーとして設定すると、優先順位が D に設定されます。これにより、そのポリシーに最高の優先順位が与えられます。 ■ [ポリシーのインポート] および [ポリシーのエクスポート]。XML 形式でのポリシーのインポートやエクスポートが可能です。ポリシーをインポートまたはエクスポートするには、ユーザーアカウントに割り当てられたロールにおいて、インポート権限またはエクスポート権限をポリシー管理に対して有効にする必要があります。 ■ [選択したポリシーの削除]。リストからポリシーを削除します。
[ポリシー ライブラリ] タブのデータグリッド	<p>vRealize Operations Manager では、ポリシーの高レベル詳細が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 名前。[監視ポリシーの追加 / 編集] ウィザード、およびポリシーをオブジェクトに適用する領域（カスタム グループなど）に表示されるポリシーの名前。 ■ 説明。ポリシーのわかりやすい説明。たとえば、継承されるポリシーや、そのポリシーと 1 つ以上のオブジェクト グループとの関係を理解するためにユーザーが必要とする個別情報。 ■ 最終更新日時。ポリシーが最後に変更された日時。 ■ 更新者。ポリシー設定を最後に更新したユーザー。

表 3-2. [ポリシー ライブラリ] タブのオプション (続き)

オプション	説明
[ポリシー ライブラリ] タブ > [詳細] タブ	<p>[詳細] タブには、設定の継承元であるポリシーの名前と説明、ポリシーの優先順位、ポリシーの最終変更者、ポリシーに関連付けられているオブジェクト グループの数が表示されます。[詳細] タブでは、ローカルで定義されたポリシー内の設定と、設定の完全グループ (カスタマイズされた設定と、ポリシーの作成時に選択されたベース ポリシーから継承された設定を含む) を確認できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ローカルで定義された設定。ローカルで変更されたポリシー要素の設定をポリシー内のオブジェクトタイプごとに表示します。たとえば、[クラスタ コンピューティング オブジェクトの負荷] ポリシー要素の [メモリ需要] 設定を変更した場合、ローカルで定義された設定のリストで、ローカル ポリシーへの更新を確認できます。 ■ 継承を含むすべての設定。ローカルで変更された設定および継承された設定を含め、すべてのポリシー要素設定をポリシー内のオブジェクトタイプごとに表示します。有効化および無効化されたアラート定義、症状の定義、および属性の概要が表示され、ポリシー内の変更の数が示されます。ポリシー要素の設定は、バッジ スコアの症状しきい値を含んでおり、ワークロード、異常、障害、残りの容量と時間、負荷、解放可能な容量、密度、使用可能な容量、および時刻の各設定に加えられた変更を示します。たとえば、[クラスタ コンピューティング オブジェクトの使用可能容量] ポリシー要素の設定を変更した場合、設定の完全リストおよび高可用性構成の設定で、ローカル ポリシーへの更新を確認できます。vRealize Configuration Manager アダプタなど、複数の異なるアダプタをインストールしている場合、アダプタ用の特定のポリシー要素も表示されます。たとえば、vRealize Configuration Manager の場合、[コンプライアンス] ポリシー要素の設定およびバッジ スコアの症状しきい値が表示されます。
[関連オブジェクト] タブ	<p>関連するグループとオブジェクトの概要、および選択したオブジェクト グループとオブジェクトの詳細を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ グループ。選択したアクティブなポリシーに関連付けられたオブジェクトのグループを表示し、関連付けを追加または解除するためのオプションを提供します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ [関連付けの追加]。[ポリシーをグループに適用します] ダイアログ ボックスが開きます。ここで、選択したポリシーに関連付けるオブジェクト グループを選択します。 ■ 関連付けの解除。確認ダイアログ ボックスが開きます。ここで、選択したポリシーに関連付けられたオブジェクト グループの解除を確認します。 ■ データ グリッド。このポリシーに割り当てられたグループ、グループに関連付けられたオブジェクトタイプ、およびグループ内のオブジェクト数を表示します。 ■ 選択したオブジェクト グループの詳細。選択したポリシーに関連付けられたオブジェクトグループの名前、タイプ、およびメンバー数と、ポリシーとの関連付けのタイプを表示します。オブジェクト グループは、ポリシーとの直接的な関連付けを持つことができます。また、ローカル ポリシーの作成時に選択したベース ポリシーに基づいて、継承されたポリシー関連付けを持つこともできます。たとえば、継承された関連付けを持つ [基本設定] ポリシーがリストに表示されている場合、そのポリシーの作成時に選択したベース ポリシーに [基本設定] ポリシーが含まれていました。 ■ 影響を受けるオブジェクト。環境内のオブジェクトの名前、そのオブジェクトタイプ、および関連付けられたアダプタを表示します。オブジェクトの親グループが存在する場合、その親グループはこのデータ グリッドに表示されます。

ポリシーの [アクティブなポリシー] タブ

[アクティブなポリシー] タブには、オブジェクトのグループと関連付けられているポリシーが表示されます。環境内でオブジェクトのアクティブなポリシーを管理し、vRealize Operations Manager でそのオブジェクトに関する特定のデータを分析し、ダッシュボード、ビュー、レポートに表示できるようにできます。

[アクティブなポリシー] タブの仕組み

ポリシーをオブジェクト グループと関連付けてデフォルト ポリシーを設定するには、[アクティブなポリシー] タブを使用します。ローカルに定義したポリシーの設定を表示したり、[ポリシーの追加] または [ポリシーの編集] ワークスペースで選択したベース ポリシーから継承した設定が含まれる、設定の完全なリストを表示したりできます。どのポリシーもデフォルト ポリシーに割り当てることができます。

vRealize Operations Manager は、[アクティブなポリシー] タブに表示されている優先順位でポリシーを適用します。ポリシーの優先順位を確立すると、vRealize Operations Manager は、ポリシー内の構成済みの設定をポリシー順位に従って適用し、オブジェクトの分析とレポート作成を実行します。ポリシーの優先順位を変更するには、ポリシー行をクリックしてドラッグします。デフォルト ポリシーは常に優先順位リストの一番下に置かれます。残りのアクティブなポリシーのリストは、最高優先順位のポリシーを示す優先順位 1 から始まります。複数のオブジェクト グループのメンバーとなるようにオブジェクトを割り当てて、各オブジェクト グループに異なるポリシーを割り当てた場合、vRealize Operations Manager はそのオブジェクトに最高ランクのポリシーを関連付けます。

選択したポリシーの詳細を表示するには、分割バーをクリックしてペインを展開します。ポリシーの [詳細] および [関連アイテム] タブとオプションが下のペインに表示されます。[関連アイテム] タブでは、選択したポリシーをオブジェクトグループに適用することもできます。

[アクティブなポリシー] タブの右端の列を使用して、ポリシーを新しい位置にドラッグして並べ替えて優先順位を変えることができます。ただし、カスタム ポリシーをデフォルト ポリシーの下にドラッグできるように見えても実際はできません。ビューを更新すると、デフォルト ポリシーが常にリストの最後のポリシーになります。

ポリシーの優先順位を設定する方法

ポリシーの優先順位を設定するには、[アクティブなポリシー] タブで、ポリシー行をクリックし、リスト内の対象の優先順位の位置にドラッグします。デフォルト ポリシーの優先順位には、文字 D が常に指定されています。

アクティブなポリシーを管理できる場所

アクティブなポリシーを管理するには、[管理] をクリックし、[ポリシー] をクリックします。[アクティブなポリシー] タブが表示され、環境内でオブジェクトに対してアクティブになっているポリシーのリストが表示されます。

表 3-3. [アクティブなポリシー] タブのオプション

オプション	説明
ツールバー	<p>ツールバーの選択肢を使用して、アクティブなポリシーでアクションを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [関連付けの追加]。[関連アイテム] タブが開き、ポリシーをグループと関連付けることができます。 ■ [デフォルト ポリシーの設定]。任意のポリシーをデフォルト ポリシーとして設定できます。デフォルト ポリシー内の設定は、ポリシーが適用されていないすべてのオブジェクトに適用されます。ポリシーをデフォルト ポリシーとして設定すると、優先順位が D に設定されます。これにより、そのポリシーに最高の優先順位が与えられます。
[アクティブなポリシー] タブのデータ グリッド	<p>vRealize Operations Manager では、アクティブなポリシーの優先順位と高レベルな詳細が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [優先順位]。ポリシーの優先順位のランキング。デフォルト ポリシーには、[デフォルト] 列にチェック マークが付けられます。 ■ 名前。[監視ポリシーの追加 / 編集] ウィザード、およびポリシーをオブジェクトに適用する領域 (カスタム グループなど) に表示されるポリシーの名前。 ■ 説明。ポリシーのわかりやすい説明。たとえば、継承されるポリシーや、そのポリシーと 1 つ以上のオブジェクト グループとの関係を理解するためにユーザーが必要とする個別情報。 ■ グループ。ポリシーが割り当てられたオブジェクト グループの数を示します。 ■ 影響を受けるオブジェクト。アクティブなポリシーが割り当てられているオブジェクトの名前、タイプ、およびアダプタと、直接の親グループ (該当する場合) を表示します。 ■ 最終更新日時。ポリシーが最後に変更された日時。 ■ 更新者。ポリシー設定を最後に更新したユーザー。

表 3-3. [アクティブなポリシー] タブのオプション (続き)

オプション	説明
[アクティブなポリシー] タブ > [詳細] タブ	<p>[詳細] タブには、設定の継承元であるポリシーの名前と説明、ポリシーの優先順位、ポリシーの最終変更者、ポリシーに関連付けられているオブジェクト グループの数が表示されます。[詳細] タブでは、ローカルで定義されたポリシー内の設定と、設定の完全グループ (カスタマイズされた設定と、ポリシーの作成時に選択されたベース ポリシーから継承された設定を含む) を確認できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ローカルで定義された設定。ローカルで変更されたポリシー要素の設定をポリシー内のオブジェクト タイプごとに表示します。たとえば、[クラスタ コンピューティング オブジェクトの負荷] ポリシー要素の [メモリ需要] 設定を変更した場合、ローカルで定義された設定のリストで、ローカル ポリシーへの更新を確認できます。 ■ 継承を含むすべての設定。ローカルで変更された設定および継承された設定を含め、すべてのポリシー要素設定をポリシー内のオブジェクト タイプごとに表示します。有効化および無効化されたアラート定義、症状の定義、および属性の概要が表示され、ポリシー内の変更の数が示されます。ポリシー要素の設定は、バッジ スコアの症状しきい値を含んでおり、ワークロード、異常、障害、残りの容量と時間、負荷、解放可能な容量、密度、使用可能な容量、および時刻の各設定に加えられた変更を示します。たとえば、[クラスタ コンピューティング オブジェクトの使用可能容量] ポリシー要素の設定を変更した場合、設定の完全リストおよび高可用性構成の設定で、ローカルポリシーへの更新を確認できます。vRealize Configuration Manager アダプタなど、複数の異なるアダプタをインストールしている場合、アダプタ用の特定のポリシー要素も表示されます。たとえば、vRealize Configuration Manager の場合、[コンプライアンス] ポリシー要素の設定およびバッジ スコアの症状しきい値が表示されます。
[アクティブなポリシー] タブ > [関連オブジェクト] タブ	<p>関連するグループとオブジェクトの概要、および選択したオブジェクト グループとオブジェクトの詳細を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ グループ。選択したアクティブなポリシーに関連付けられたオブジェクトのグループを表示し、関連付けを追加または解除するためのオプションを提供します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ [関連付けの追加]。[ポリシーをグループに適用します] ダイアログ ボックスが開きます。ここで、選択したポリシーに関連付けるオブジェクト グループを選択します。 ■ 関連付けの解除。確認ダイアログ ボックスが開きます。ここで、選択したポリシーに関連付けられたオブジェクト グループの解除を確認します。 ■ データ グリッド。このポリシーに割り当てられたグループ、グループに関連付けられたオブジェクト タイプ、およびグループ内のオブジェクト数を表示します。 ■ 選択したオブジェクト グループの詳細。選択したポリシーに関連付けられたオブジェクトグループの名前、タイプ、およびメンバー数と、ポリシーとの関連付けのタイプを表示します。オブジェクト グループは、ポリシーとの直接的な関連付けを持つことができます。また、ローカル ポリシーの作成時に選択したベース ポリシーに基づいて、継承されたポリシー関連付けを持つこともできます。たとえば、継承された関連付けを持つ [基本設定] ポリシーがリストに表示されている場合、そのポリシーの作成時に選択したベース ポリシーに [基本設定] ポリシーが含まれていました。 ■ 影響を受けるオブジェクト。環境内のオブジェクトの名前、そのオブジェクト タイプ、および関連付けられたアダプタを表示します。オブジェクトの親グループが存在する場合、その親グループはこのデータ グリッドに表示されます。

運用ポリシー

vRealize Operations Manager におけるオブジェクトの監視方法と、オブジェクトで発生する問題の通知方法を決定します。

vRealize Operations Manager 管理者は、サービス レベル アグリーメント (SLA) とビジネスの優先順位をサポートするために、オブジェクト グループとアプリケーションにポリシーを割り当てます。オブジェクト グループにポリシーを使用する場合は、ポリシーに定義されたルールが環境内のオブジェクトに対して速やかに適用されるように対策する必要があります。

ポリシーを使用すると、ユーザーは次のことが可能になります。

- アラートの有効化と無効化。
- 環境内のオブジェクトに対してメトリックを持続させることによって、またはメトリックを持続させないことによって、データ収集を制御する。
- 製品の分析としきい値を構成する。

- オブジェクトとアプリケーションをさまざまなサービス レベルで監視する。
- ポリシーの優先順位を決定し、最も重要なルールがデフォルトをオーバーライドするようにする。
- 分析に影響を与えるルールについて把握する。
- どのポリシーがオブジェクト グループに適用されるかを把握する。

vRealize Operations Manager には、使用できるようにすでに定義されている組み込みアクティブ ポリシーのライブラリが含まれています。これらのポリシーは、vRealize Operations Manager によって優先順位に従って適用されます。



運用ポリシーの作成 (http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_create_policies_vrom)

オブジェクト グループにポリシーを適用すると、vRealize Operations Manager はそのポリシーで有効化されているしきい値、メトリック、スーパーメトリック、属性、プロパティ、アラート定義、問題定義に基づいてオブジェクト グループ内のオブジェクトからデータを収集します。

次に、一般的な IT 環境に存在する可能性のあるポリシーの例を示します。

- メンテナンス：継続的な監視用に最適化されている。しきい値やアラートは存在しない。
- 本番（重大）：本番環境向けで、重要度の高いアラート生成を伴うパフォーマンス用に最適化されている。
- 本番（重要）：本番環境向けで、中程度のアラート生成を伴うパフォーマンス用に最適化されている。
- バッチ ワークロード：ジョブ処理用に最適化されている。
- テスト、ステージング、および QA：比較的重要度の低い設定。アラートは比較的少ない。
- 開発：比較的重要度の低い設定。アラートは生成されない。
- 低優先順位：リソースが効率良く使用されるようにする。
- デフォルト ポリシー：デフォルトのシステム設定。

ユーザー シナリオ：本番の vCenter Server データストア オブジェクトの運用ポリシーの作成

仮想インフラストラクチャの管理者として、あなたは vRealize Operations Manager に使用されるポリシーを管理して、環境内のオブジェクトを分析し、それらのオブジェクトからデータを収集し、ダッシュボード、ビュー、およびレポートにデータを表示させます。IT 担当者が環境に新しいデータストア オブジェクトを追加した場合、あなたにはこの新しいデータストア オブジェクトがテスト環境および本番環境用のインフラストラクチャの VP によって規定されたポリシー要件に準拠していることを確認する責任があります。

このシナリオでは、vRealize Operations Manager に本番のデータストア オブジェクトのディスク領域の使用を監視させるポリシーを作成します。データストア オブジェクトのグループ タイプとカスタム オブジェクト グループを作成し、ポリシーをオブジェクト グループに適用します。ポリシーの設定に従い vRealize Operations Manager により環境内のデータストア オブジェクトのデータが収集されたら、ダッシュボードにおいて収集されたデータと存在する場合は潜在的なアラートを確認して、ディスク領域の使用がデータストア オブジェクトに準拠しているかどうかを確認します。

開始する前に

- ポリシーを使用する目的を理解します。「[ポリシー \(P. 105\)](#)」を参照してください。
- vRealize Operations Manager インスタンスが正常に機能することを確認します。
- 1 つまたは複数のカスタム オブジェクト グループおよびグループ タイプが vRealize Operations Manager インスタンスに存在していることを確認します。「[VMware vRealize Operations Manager でのカスタム オブジェクト グループの管理 \(P. 162\)](#)」を参照してください。
- vRealize Operations Manager インスタンスにデフォルト ポリシーと 1 つまたは複数の他のポリシーが含まれていることを確認します。「[vRealize Operations Manager におけるデフォルト ポリシー \(P. 127\)](#)」を参照してください。

- デフォルト ポリシーにおける属性、アラート、症状の定義などの各セクションと要素について、またポリシーが選択したベース ポリシーの設定をどのように継承するかについて理解します。[「vRealize Operations Manager のポリシー ワークスペース \(P. 130\)」](#) を参照してください。
- デフォルト ポリシーにおける残り容量、ホストと仮想マシンへのストレスなどの分析設定について、またベース ポリシーから継承された設定をオーバーライドするアクションについて理解します。vRealize Operations Manager インフォメーション センターを参照してください。

手順

- 1 [データストア オブジェクトのグループ タイプの作成 \(P. 113\)](#)
グループ タイプを作成し、データストア オブジェクトを分類できるようにします。
- 2 [データストア オブジェクトのオブジェクト グループの作成 \(P. 114\)](#)
オブジェクト グループを作成し、環境内のデータストア オブジェクトを 1 つのオブジェクト グループとして編成します。
- 3 [ポリシーを作成してベース ポリシーを選択する \(P. 115\)](#)
ポリシーを作成し、その新しいポリシーの設定をオーバーライドするために使用するベース ポリシーを選択します。
- 4 [データストア オブジェクトの分析設定のオーバーライド \(P. 115\)](#)
新しいポリシーで監視するデータストア オブジェクトの分析設定を表示してオーバーライドします。
- 5 [データストア オブジェクトのディスク領域属性の有効化 \(P. 116\)](#)
本番データストア オブジェクトのディスク領域を監視する vRealize Operations Manager の属性を有効にします。
- 6 [データストア オブジェクトのアラート定義とシンプトム定義のオーバーライド \(P. 116\)](#)
データストア オブジェクトのアラート定義とシンプトムの定義をオーバーライドします。
- 7 [データストア オブジェクト グループへのデータストア ポリシーの適用 \(P. 117\)](#)
データストア オブジェクトの新しいグループにポリシーを適用すると、vRealize Operations Manager は、これらのオブジェクトを監視し、そのディスク領域レベルがポリシー設定に準拠しているかどうかを確認します。これは、環境に設定されたサービス レベル アグリーメントとビジネス優先順位をサポートするために行われます。
- 8 [データストア オブジェクトのディスク使用量のダッシュボードの作成 \(P. 118\)](#)
ダッシュボードを作成して、データストア オブジェクトのディスク使用量を監視し、潜在的な問題が通知されるようにします。

新しい本番のデータストア オブジェクトに適用するポリシーを作成しました。このポリシーでは、vRealize Operations Manager にこれらのオブジェクトを監視させてディスク領域レベルがポリシーの設定に準拠するようにして、サービス内容合意書および環境用に確立されたビジネスの優先順位に対応することが可能になります。vRealize Operations Manager は、新しいポリシーの設定を使用してダッシュボード、ビュー、レポートにデータストア オブジェクトのディスク使用量を表示し、データ収集時のサービス レベルを強化します。

次に進む前に

このシナリオが終了したら、vRealize Operations Manager によって環境内のオブジェクトのデータが収集されるまで待機する必要があります。その後で、データストア オブジェクトのディスク使用量を確認します。

データストア オブジェクトのグループ タイプの作成

グループ タイプを作成し、データストア オブジェクトを分類できるようにします。

このステップでは、グループ タイプを作成し、それを vCenter Server データストア オブジェクトを整理するために作成する新しいカスタム オブジェクト グループに適用できるようにします。

開始する前に

このシナリオのコンテキストを理解していることを確認します。[「ユーザー シナリオ：本番の vCenter Server データストア オブジェクトの運用ポリシーの作成 \(P. 112\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 ナビゲーション ペインで [内容] をクリックし、[グループ タイプ] をクリックします。
- 2 プラス記号をクリックして新しいグループ タイプを追加し、「**本番データストア**」と入力して、[OK] をクリックします。
グループ タイプのリストに新しいグループ タイプが表示されます。

次に進む前に

オブジェクト グループを作成し、環境内のデータストア オブジェクトを 1 つのオブジェクト グループとして編成できるようにします。

データストア オブジェクトのオブジェクト グループの作成

オブジェクト グループを作成し、環境内のデータストア オブジェクトを 1 つのオブジェクト グループとして編成します。

このステップでは、新しいオブジェクト グループを作成してデータストア オブジェクトを整理し、作成したポリシーをそのオブジェクト グループに適用できるようにします。

開始する前に

オブジェクト タイプを作成します。[「データストア オブジェクトのグループ タイプの作成 \(P. 113\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 [環境] を選択し、[カスタム グループ] をクリックします。
- 2 [グループ] タブで、プラス記号をクリックして新しいグループを追加し、オブジェクト グループの名前を入力します。
- 3 [グループ タイプ] ドロップダウン メニューから、新しいグループ タイプを選択します。
- 4 [ポリシー] ドロップダウン メニューから、現在のデフォルト ポリシーを選択します。
環境に追加された新しいデータストア オブジェクトを vRealize Operations Manager で識別するには、[グループ メンバーシップを最新に保つ] チェック ボックスを選択し、このグループを動的にして常に最新の状態にします。
- 5 [メンバーシップ条件の定義] ペインのドロップダウン メニューから、[vCenter アダプタ > データストア] オブジェクト タイプを選択します。
- 6 [プロパティの選択] テキスト ボックス内をクリックし、[ディスク領域] - [テンプレート] - [使用済み仮想マシン (GB)] を選択します。
- 7 隣接するテキスト ボックスのドロップダウン矢印をクリックし、[が次より小さい] を選択します。
- 8 [プロパティ値] テキスト ボックスに「**10**」と入力します。

vRealize Operations Manager は、この条件を使用して、このグループ内のデータストア オブジェクトを監視し、データストア オブジェクトの残りのスペースが 10 GB 未満になると通知します。

- 9 [常に含めるオブジェクト] ペインで、データストア オブジェクト用に作成したオブジェクト グループを選択します。次に、[追加] をクリックし、選択したペインにそのグループを移動して、[オブジェクト グループ] チェック ボックスを選択します。

[常に除外するオブジェクト] ペインでは、除外するオブジェクトを選択しません。

- 10 [OK] をクリックして、新しいグループを保存します。

次に進む前に

ポリシーを作成し、その新しいポリシーの設定をオーバーライドするために使用するベース ポリシーを選択します。

ポリシーを作成してベース ポリシーを選択する

ポリシーを作成し、その新しいポリシーの設定をオーバーライドするために使用するベース ポリシーを選択します。

このステップでは、データストア オブジェクトの分析と監視を行う vRealize Operations Manager のポリシーを作成し、この新しいポリシーの設定の継承およびオーバーライド元となるポリシーを選択します。

開始する前に

データストア オブジェクトのカスタム オブジェクト グループを作成します。[「データストア オブジェクトのオブジェクト グループの作成 \(P. 114\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 ポリシー領域にアクセスして、ポリシーを作成します。
 - a [管理] をクリックして、[ポリシー] をクリックします。
[アクティブなポリシー] タブと [ポリシー ライブラリ] タブが表示されます。
 - b [ポリシー ライブラリ] タブをクリックし、プラス記号をクリックしてポリシーを追加します。
 - c [はじめに] ポリシー ワークスペースでポリシーの名前と説明を入力します。
 - d [次で開始する] 領域で、ベース ポリシーから設定を継承する [デフォルト ポリシー] を選択します。
- 2 新しいポリシーの設定をオーバーライドするために使用するベース ポリシー、オブジェクト、およびポリシーを選択します。
 - a ポリシー ワークスペースで [基本ポリシーの選択] をクリックします。
 - b データストア オブジェクトの現在のポリシー構成を表示するには、[変更を表示] ドロップダウン メニュー、[vCenter アダプター - データストア]、[オブジェクト タイプの表示] フィルタの順にクリックします。
データストアのポリシー構成が右側のペインに表示されます。

次に進む前に

新しいポリシーで監視するデータストア オブジェクトの分析設定を表示してオーバーライドします。

データストア オブジェクトの分析設定のオーバーライド

新しいポリシーで監視するデータストア オブジェクトの分析設定を表示してオーバーライドします。

このステップでは、vRealize Operations Manager がアラートをトリガーして、データストア オブジェクトの容量に関する問題を通知するように、新しいポリシーの残り容量と残り時間をオーバーライドし、容量スコア症状のしきい値をオーバーライドします。

開始する前に

ポリシーを作成し、その新しいポリシーの設定を継承およびオーバーライドするためのベース ポリシーを選択します。[「ポリシーを作成してベース ポリシーを選択する \(P. 115\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 ポリシー ワークスペースで [分析設定] をクリックします。
- 2 [変更を表示] ドロップダウン メニュー、[vCenter Adapter - Datastore (vCenter アダプター - データストア)]、[オブジェクト タイプの表示] フィルタの順にクリックします。
[オブジェクト タイプ] リストに [vCenter アダプター - データストア] オブジェクト タイプが表示され、右側のペインにデータストア オブジェクトの分析設定が表示されます。ポリシー要素には、すべての分析機能（ワークロード、負荷、使用可能な容量など）のしきい値と設定が含まれます。

- 3 残り容量および残り時間要素のポリシー要素オーバーライド ボタンをクリックし、このポリシー要素をオンにします。
ボタンがチェック マークに変化した後、ポリシー要素がアクティブになり、設定をオーバーライドできるようになります。
- 4 [容量スコア症状のしきい値] スライドの設定をクリックしてドラッグし、警告（赤色）は 10%、注意（オレンジ色）は 15%、正常（緑色）は 20% にします。
ご使用の環境のデータストア オブジェクトでこれらのしきい値の違反が発生すると、vRealize Operations Manager は、アラートをトリガーして、データストア オブジェクトの容量に関する問題を通知します。
- 5 使用可能な容量要素のポリシー要素オーバーライド ボタンをクリックしてこのポリシー要素をオンにした後、矢印をクリックしてポリシー要素ビューを展開し、[高可用性 (HA) 構成の使用] チェック ボックスを選択します。
高可用性を使用するときは、vRealize Operations Manager が提供するデータストア オブジェクトのリソースが十分で、スループットやデータ消失に対応できることを確認します。

次に進む前に

データストア オブジェクトのディスク領域属性を有効にします。

データストア オブジェクトのディスク領域属性の有効化

本番データストア オブジェクトのディスク領域を監視する vRealize Operations Manager の属性を有効にします。

このステップでは、環境内のデータストア オブジェクトのディスク領域プロパティ属性を vRealize Operations Manager で監視および収集できるようにします。

開始する前に

データストア オブジェクトの分析設定をオーバーライドします。[\[データストア オブジェクトの分析設定のオーバーライド \(P. 115\)\]](#) を参照してください。

手順

- 1 ポリシー ワークスペースで [属性のオーバーライド] をクリックします。
- 2 [オブジェクト タイプ] ドロップダウン メニューから [vCenter アダプタ] - [データストア] を選択します。
vRealize Operations Manager は、リストをフィルタリングし、データストア オブジェクトに適用される属性のみを表示します。
- 3 [属性タイプ] ドロップダウン メニューをクリックして [プロパティ] を選択し、他の属性を選択解除します。
- 4 **検索** テキスト ボックスに「[space]」と入力し、検索ボタンをクリックします。
vRealize Operations Manager は、リストをフィルタリングし、データストア オブジェクトに関連付けられたディスク領域プロパティのみを表示します。
- 5 [Disk Space|Template|Virtual Machine used (GB)] プロパティ属性について、[状態] ドロップダウン メニューをクリックし、[ローカル] をクリックします。
この属性がローカル ポリシーで有効になると、vRealize Operations Manager は、環境内のデータストア オブジェクトからこのディスク領域プロパティ属性を収集します。

次に進む前に

データストア オブジェクトのアラート/シンプトムの定義をオーバーライドします。

データストア オブジェクトのアラート定義とシンプトム定義のオーバーライド

データストア オブジェクトのアラート定義とシンプトムの定義をオーバーライドします。

このステップでは、アラート定義とシンプトムの定義をオーバーライドして、データ収集時にデータストア オブジェクトのディスク領域が不足し始めたら vRealize Operations Manager がアラート通知をトリガーするようにします。

開始する前に

環境内のデータストア オブジェクトのディスク領域プロパティ属性を vRealize Operations Manager で監視および収集できるようにします。[「データストア オブジェクトのディスク領域属性の有効化 \(P. 116\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 ポリシー ワークスペースで [アラート/シンプトム定義] をクリックします。
- 2 [アラートの定義] ペインの [オブジェクト タイプ] ドロップダウン メニューから [vCenter アダプタ] - [データストア] を選択します。
- 3 **検索** テキスト ボックスに 「[space]」 と入力し、検索ボタンをクリックします。
- 4 **Datastore is running out of disk space** という名前のアラート定義について、[状態] ドロップダウン メニューをクリックし、[ローカル] をクリックします。

このアラート定義をローカル ポリシーで有効にすると、vRealize Operations Manager は、データ収集時にデータストア オブジェクトのディスク領域が不足し始めたときに、このアラート定義を使用して、アラート通知をトリガーします。
- 5 [シンプトムの定義] ペインの [オブジェクト タイプ] ドロップダウン メニューから [vCenter アダプタ] - [データストア] を選択します。
- 6 **検索** テキスト ボックスに 「[space]」 と入力し、検索ボタンをクリックします。
- 7 データストア オブジェクトの領域使用に対する重大、緊急、および警告のシンプトムの定義を有効にするには、[アクション] をクリックし、[すべて選択] をクリックした後、しきい値を設定します。

表 3-4. シンプトムの定義のしきい値設定

選択内容	設定
データストア領域使用量がクリティカル上限に到達しています	>90
データストア領域使用量が緊急上限に到達しています	>85
データストア領域使用量が警告上限に到達しています	>80

次に進む前に

データストア オブジェクトにポリシーを適用します。

データストア オブジェクト グループへのデータストア ポリシーの適用

データストア オブジェクトの新しいグループにポリシーを適用すると、vRealize Operations Manager は、これらのオブジェクトを監視し、そのディスク領域レベルがポリシー設定に準拠しているかどうかを確認します。これは、環境に設定されたサービス レベル アグリーメントとビジネス優先順位をサポートするために行われます。

このステップでは、本番データストア オブジェクトに新しいポリシーを適用し、vRealize Operations Manager でこれらのオブジェクトを監視し、オブジェクトの適切なディスク領域レベルが確保されるようにします。

開始する前に

データストア オブジェクトのアラート定義とシンプトムの定義をオーバーライドします。[「データストア オブジェクトのアラート定義とシンプトム定義のオーバーライド \(P. 116\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 [ポリシー] ワークスペースで [グループへのポリシーの適用] をクリックし、データストア オブジェクト用に作成した新しいオブジェクト グループを選択します。
- 2 [保存] をクリックし、新しいポリシー設定を保存します。

vRealize Operations Manager は、新しいポリシーの設定を使用して、データストア オブジェクトのディスク使用量をダッシュボード、ビュー、およびレポートに表示し、データ収集時のサービス レベルが維持されるようにします。

次に進む前に

データストア オブジェクトのディスク使用量を表示する新しいダッシュボードを作成します。

データストア オブジェクトのディスク使用量用のダッシュボードの作成

ダッシュボードを作成して、データストア オブジェクトのディスク使用量を監視し、潜在的な問題が通知されるようにします。

このステップでは、新しいダッシュボードを作成し、そのダッシュボードにウィジェットを追加し、本番データストア オブジェクトを監視できるようにそのウィジェットを構成します。

開始する前に

データストア オブジェクトの新しいグループにポリシーを適用します。[「データストア オブジェクト グループへのデータストア ポリシーの適用 \(P. 117\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 [ホーム] をクリックします。
- 2 [アクション]-[ダッシュボードを作成する] をクリックします。
- 3 新しいダッシュボードを構成します。
 - a [新規ダッシュボード] ワークスペースの [ダッシュボードの構成] ペインで、新規ダッシュボードの名前「**本番データストア**」を入力します。
 - b [デフォルト] では [はい] を選択します。
- 4 新しいダッシュボードにウィジェットを追加します。
 - a ワークスペースで [ウィジェット リスト] をクリックします。
 - b ウィジェットのリストから [オブジェクト リスト] ウィジェットをクリックし、それを右側のペインにドラッグします。
 - c [容量] ウィジェットをクリックし、それを右側のペインにドラッグします。
 - d [残り時間] ウィジェットをクリックし、それを右側のペインにドラッグします。
 - e [アラート リスト] ウィジェットをクリックし、それを右側のペインにドラッグします。
- 5 ウィジェットの相互作用を構成します。
 - a ワークスペースで [ウィジェットの相互作用] をクリックします。
 - b オブジェクト リスト ウィジェットの相互作用で、[選択したオブジェクトおよび選択したアラート] のドロップダウン メニューをクリックし、選択項目をクリアします。
 - c アラート リスト ウィジェットの相互作用で、ドロップダウンをクリックし、[オブジェクト リスト] を選択します。
 - d 容量ウィジェットの相互作用で、ドロップダウンをクリックし、[オブジェクト リスト] を選択します。
 - e 残り時間ウィジェットの相互作用で、ドロップダウンをクリックし、[オブジェクト リスト] を選択します。
 - f [相互作用の適用] をクリックします。
- 6 オブジェクト リスト ウィジェットを構成します。
 - a オブジェクト リスト ウィジェットで鉛筆をクリックします。
 - b [内容の更新] で [オン] を選択します。

- c [更新間隔] で矢印をクリックし、[30] 秒を選択します。
- d [モード] で [親] を選択します。
- e [最初の行を自動選択] で [オフ] を選択します。
- f 下側のペインでプラス記号をクリックしてタグのリストを展開し、[本番データストア] を展開します。次に、[本番データストア (n)] を選択し、[OK] をクリックします。

[本番データストア] オブジェクト グループ内のオブジェクトがオブジェクト リスト ウィジェットに表示されます。

7 容量ウィジェットを構成します。

- a 容量ウィジェットで鉛筆をクリックします。
- b [内容の更新] で [オン] を選択します。
- c [更新間隔] で矢印をクリックし、[30] 秒を選択します。
- d [セルフ プロバイダ] で [オン] を選択します。
- e [選択したオブジェクト] の [検索] テキスト ボックスに「**グループ**」と入力し、リストから [本番データストア] グループを選択します。
[選択したオブジェクト] テキスト ボックスに [本番データストア] グループが表示されます。
- f [OK] をクリックします。

容量ウィジェットにスコアとグラフが表示され、残りの計算オブジェクトが総消費容量に対する割合として示されます。

8 残り時間ウィジェットを構成します。

- a 残り時間ウィジェットで鉛筆をクリックします。
オブジェクト リソースが消費されるまでの残り時間が、残り時間ウィジェットに表示されます。
- b [内容の更新] で [オン] を選択します。
オブジェクト リソースが消費されるまでの残り時間が、残り時間ウィジェットに表示されます。
- c [更新間隔] で矢印をクリックし、[30] 秒を選択します。
- d [セルフ プロバイダ] で [オン] を選択します。
- e [選択したオブジェクト] の [検索] テキスト ボックスに「**グループ**」と入力し、リストから [本番データストア] グループを選択します。
[選択したオブジェクト] テキスト ボックスに [本番データストア] グループが表示されます。
- f [OK] をクリックします。

残り時間ウィジェットにスコアとグラフが表示され、オブジェクト リソースが消費されるまでの残り時間が示されます。

9 アラート リスト ウィジェットを構成します。

- a アラート リスト ウィジェットで鉛筆をクリックします。
- b [内容の更新] で [オン] を選択します。
- c [更新間隔] で矢印をクリックし、[30] 秒を選択します。
- d [選択したオブジェクト] の [検索] テキスト ボックスに「**グループ**」と入力し、リストから [本番データストア] グループを選択します。
[選択したオブジェクト] テキスト ボックスに [本番データストア] グループが表示されます。
- e 下側のペインでプラス記号をクリックしてタグのリストを展開し、[本番データストア] を展開します。次に、[本番データストア (n)] を選択し、[OK] をクリックします。

オブジェクトに対して構成されたアラートがアラート リスト ウィジェットに表示されます。本番データストア オブジェクトのディスク領域を監視するダッシュボードを作成しました。[本番データストア] オブジェクト グループ内のオブジェクトのデータを vRealize Operations Manager が分析および収集した後、その結果を新しいダッシュボードに表示できます。

ポリシーを作成して本番データストア オブジェクトに適用し、vRealize Operations Manager がデータを収集するときに、それらのオブジェクトを監視するようにしました。これにより、環境のサービス レベルを監視および維持できるようになりました。vRealize Operations Manager は、新しいポリシーの設定を使用して、データストア オブジェクトの容量、残り時間、および潜在的なアラートについての情報を表示します。新しいポリシーを適用することにより、本番データストア オブジェクトのディスク領域レベルを、本番環境に設定されたポリシーに確実に準拠させることができます。

ポリシーのタイプ

デフォルト ポリシー、カスタム ポリシー、および vRealize Operations Manager で提供されるポリシーの 3 つのタイプのポリシーがあります。

カスタム ポリシー

使用する環境の vRealize Operations Manager に含まれるデフォルト ポリシーおよびベース ポリシーをカスタマイズできます。その後、カスタム ポリシーを、クラスタ内のオブジェクトなどのオブジェクトのグループまたは仮想マシンやホスト、または一意のオブジェクトや特定の基準を含めるために作成したグループに適用できます。

ユーザー インターフェイスに表示されるデータを理解するには、ポリシーについて熟知している必要があります。これは、ポリシーが vRealize Operations Manager のダッシュボード、ビュー、およびレポートに表示される結果を提供するためです。

運用ポリシーをカスタマイズしてそれらをお使いの環境に適用する方法を決定するには、事前に計画が必要です。例：

- CPU の割り当てを追跡する必要がありますか? CPU を割り当て超過する場合は、本番オブジェクトとテスト オブジェクトに適用する割合はどれくらいですか?
- メモリまたはストレージを割り当て超過する予定ですか? 高可用性を使用する場合、どのパッファを使用する必要がありますか?
- 論理的に定義されたワークロード（本番クラスタ、テスト クラスタまたは開発クラスタ、バッチ ワークロードに使用されるクラスタなど）をどのように分類しますか? または、すべてのクラスタを 1 つのワークロードに含めますか?
- ピーク使用時間やシステム アクティビティの急増をどのようにキャプチャしますか? 場合によっては、それらが有効になるように、ポリシーの適用時にアラートを減らす必要もあります。

割り当てられたロールによりユーザー アカウントに適用された権限がある場合には、ポリシーを作成および変更して、それらをオブジェクトに適用できます。例：

- 既存のベース ポリシーからポリシーを作成し、ベース ポリシーの設定を継承し、特定の設定をオーバーライドしてオブジェクトを分析および監視します。
- ポリシーを使用して vCenter Server オブジェクトおよび vCenter Server 以外のオブジェクトを分析および監視します。
- すべてのオブジェクト タイプについての分析設定のカスタムしきい値を設定して、vRealize Operations Manager にワークロード、異常、障害、容量、負荷などについて報告させます。
- メトリック、プロパティ、およびスーパー メトリックなどの収集用の特定の属性を有効にします。
- カスタム ポリシーの設定でアラート定義および症状の定義を有効または無効にします。
- カスタム ポリシーをオブジェクト グループに適用します。

既存のポリシーを使用してカスタム ポリシーを作成する場合、ニーズに合うようにポリシー設定をオーバーライドします。割り当てと需要、CPU とメモリのオーバーコミットの比率、容量リスクおよびバッファのしきい値を設定します。環境で実際に使用しているものを割り当ておよび構成するには、割り当てモデルと需要モデルを一緒に使用します。本番環境やテストまたは開発環境などの監視する環境のタイプに応じて、過剰割り当てをすべて行うか、どの程度まで行うかは、ワークロードおよびポリシーを適用する環境により異なります。割り当てのレベルについては、テスト環境ではより保守的になり、本番環境ではあまり保守的にならなくてもよい場合もあります。

vRealize Operations Manager は、[アクティブなポリシー] タブに表示されている優先順位でポリシーを適用します。ポリシーの優先順位を確立すると、vRealize Operations Manager は、ポリシー内の構成済みの設定をポリシー順位に従って適用し、オブジェクトの分析とレポート作成を実行します。ポリシーの優先順位を変更するには、ポリシー行をクリックしてドラッグします。デフォルト ポリシーは常に優先順位リストの一番下に置かれます。残りのアクティブなポリシーのリストは、最高優先順位のポリシーを示す優先順位 1 から始まります。複数のオブジェクト グループのメンバーとなるようにオブジェクトを割り当てて、各オブジェクト グループに異なるポリシーを割り当てた場合、vRealize Operations Manager はそのオブジェクトに最高ランクのポリシーを関連付けます。

ポリシーは環境に固有です。ポリシーは vRealize Operations Manager に環境内のオブジェクトを監視させるので、それらは読み取り専用になり、オブジェクトの状態を変更しません。このため、使用している環境に対して有効な結果や影響を与える結果が vRealize Operations Manager に表示されるまで、ポリシー設定をオーバーライドしてそれらを微調整できます。たとえば、ポリシーの容量バッファ設定を調整し、ダッシュボードに表示されたデータを見て、ポリシー設定の影響を確認できます。

ユーザー シナリオ：vSphere 本番環境のカスタム運用ポリシーの作成

vRealize Operations Manager のシステム管理者には、vSphere 環境のオブジェクトが特定のポリシーを満たすことを確認する責任があります。オブジェクトに十分なメモリおよび CPU が割り当てられ、テスト、開発、本番環境をサポートすることを確認する必要があります。

大規模な IT 環境では、オブジェクト タイプに応じて組織化され、各領域にマイナー ポリシーが適用されている 4 ～ 6 の本番環境が含まれる場合があります。通常、こうした大規模環境には、デフォルト ポリシー、環境全体に適用される単一の本番ポリシー、専用領域用の個別ポリシーが含まれます。

通常、環境のほとんどのオブジェクトにはデフォルト ポリシーを適用します。vRealize Operations Manager でオブジェクトの専用グループを監視および分析するには、オブジェクト グループごとに個別のポリシーを作成し、そのポリシーの設定に少しの変更を加えます。たとえば、vSphere 本番環境のすべてのオブジェクトにデフォルトの運用ポリシーを適用できますが、キャパシティ レベルといった SQL Server インスタンスの健全性とリスクを厳密に追跡する必要もあります。vRealize Operations Manager で仮想 SQL Server インスタンスのみを分析するには、個別の専用ポリシーを作成し、そのポリシーをオブジェクトの該当グループに適用します。仮想 SQL Server インスタンスを監視するために作成したポリシーの設定はメインの本番ポリシーとほとんど変わりはありません。

このシナリオでは、複数のポリシーを使用して特定のオブジェクトを分析および監視し、継続的な運用を確実に実現する方法を示します。このシナリオでは、vSphere 本番環境は本番環境全体の一部です。vSphere 本番環境で仮想 SQL Server オブジェクトを監視するには、カスタム運用ポリシーを作成する必要があります。

開始する前に

- ポリシーを使用する目的を理解します。[\[ポリシー \(P. 105\)\]](#) を参照してください。
- vRealize Operations Manager インスタンスが正常に機能することを確認します。
- vRealize Operations Manager インスタンスにデフォルト ポリシーおよび 1 つ以上のその他のポリシーが含まれていることを確認します。[\[vRealize Operations Manager におけるデフォルト ポリシー \(P. 127\)\]](#) を参照してください。
- 属性、アラートおよび症状の定義などのポリシーのセクションと要素、ポリシーが選択した基本ポリシーから設定を継承する仕組みを理解します。[\[vRealize Operations Manager のポリシー ワークスペース \(P. 130\)\]](#) を参照してください。
- ホストおよび仮想マシンの残り容量および負荷などのポリシーの分析設定、基本ポリシーから継承した設定をオーバーライドするために使用する操作を理解します。vRealize Operations Manager インフォメーション センターを参照してください。

手順

1 [vSphere の運用要件を決定します \(P. 122\)](#)

仮想 SQL Server マシンの容量レベルを継続的に監視し、vRealize Operations Manager でこれらのオブジェクトのパフォーマンスの低下が通知されるようにする必要があります。これらのオブジェクトの容量レベルに関する問題が発生し始める 60 日前に vRealize Operations Manager で通知されるようにします。

2 [vSphere の運用ニーズを満たすポリシーの作成 \(P. 123\)](#)

メイン本番ポリシーと唯一異なる設定を持つ仮想 SQL Server インスタンスの運用ポリシーを作成します。このポリシーでは、特定のオブジェクトのメモリおよび CPU 設定を変更します。次に、仮想 SQL Server でパフォーマンスが低下したときにアラートを送信するように vRealize Operations Manager を構成します。

3 [vSphere オブジェクトの分析とレポート生成を行うためのカスタム ポリシー設定の構成 \(P. 125\)](#)

開発環境、テスト環境、および本番環境で別々のポリシー要件を使用します。これにより、vRealize Operations Manager の特定のポリシー設定を構成し、仮想 SQL Server などのオブジェクトの分析とレポート作成を行うことができます。

4 [vSphere オブジェクト グループへのカスタム ポリシーの適用 \(P. 126\)](#)

オブジェクト グループ タイプを作成して仮想 SQL Server マシンを分類します。次に、SQL Server マシンを含むオブジェクト グループを作成し、カスタム ポリシーを SQL Server 仮想マシン オブジェクトのこのグループに適用します。

次に進む前に

このシナリオを完了したら、vRealize Operations Manager で環境のオブジェクトからデータが収集されるまで待機する必要があります。ポリシーのしきい値の違反が発生すると、vRealize Operations Manager はアラートを送信して問題を通知します。オブジェクトの状態を継続的に監視する場合、環境のオブジェクトの状態を常に把握しているため、vRealize Operations Manager によるアラートの送信を待機する必要はありません。

カスタム ダッシュボードを作成して、仮想 SQL Server オブジェクトを監視し、発生する問題に対処できるようにします。「[ダッシュボード \(P. 172\)](#)」を参照してください。

vSphere の運用要件を決定します

仮想 SQL Server マシンの容量レベルを継続的に監視し、vRealize Operations Manager でこれらのオブジェクトのパフォーマンスの低下が通知されるようにする必要があります。これらのオブジェクトの容量レベルに関する問題が発生し始める 60 日前に vRealize Operations Manager で通知されるようにします。

インフラストラクチャの VP が本番環境のすべてのオブジェクトに対するデフォルトの運用ポリシーとメインの本番ポリシーを定義し、IT ディレクタがこれらのポリシーを本番環境に適用しました。ほとんどのオブジェクトについての運用監視のニーズはメインの本番ポリシーで対応できますが、マネージャは本番仮想 SQL Server マシンのパフォーマンスが低下したときにユーザーに通知されることを要求しています。仮想 SQL Server の容量レベルを vRealize Operations Manager で継続的に監視し、発生した問題に対処できるようにします。仮想 SQL Server の容量レベルに関する問題が発生し始める 60 日前に vRealize Operations Manager で通知されるようにします。

IT 部門がオブジェクトを専用のグループに分割し、それぞれのグループが開発、テスト、本番の各領域をサポートするようにしました。vRealize Operations Manager を使用して、これらの各領域のオブジェクトの健全性とリスクを継続的に追跡し、評価する必要があります。

このシナリオでは、運用管理ポリシーを作成して、オブジェクトを分析、監視、トラブルシューティングします。その後、その結果をカスタム ダッシュボードで監視します。

ポリシーに必要な分析設定を理解するために、最初に vSphere 運用要件を決定する必要があります。次に、仮想 SQL Server オブジェクトを監視するためのポリシーを作成し、メインの本番ポリシーの軽微な設定の違いが含まれるようにカスタム ポリシーを構成します。

カスタム ポリシーを作成して仮想 SQL Server の分析と監視を行うときは、vRealize Operations Manager が特定のオブジェクトを分析し、その結果をダッシュボードに報告するように分析設定を構成します。次に、そのポリシーを仮想 SQL Server オブジェクトのグループに適用します。

開始する前に

以下の条件が満たされていることを確認してください:

- このシナリオのコンテキストを理解している。[「ユーザー シナリオ: vSphere 本番環境のカスタム運用ポリシーの作成 \(P. 121\)」](#) を参照してください。
- vSphere の本番環境のすべてのオブジェクトに、デフォルト ポリシーとメインの本番ポリシーが適用されている。

手順

- 1 vSphere 本番環境の運用要件を決定します。

このシナリオでは、環境に以下の要件が適用されます。

- 2 環境内のオブジェクトを分析および監視するための要件を満たすカスタム運用ポリシーを作成することを計画します。
 - a 仮想 SQL Server のメモリと CPU 容量が常に充分であることを確認します。
 - b 本番仮想 SQL Server でメモリがオーバーコミットされていないことを確認します。
 - c SQL Server の CPU のごく一部のみをオーバーコミットします。
このシナリオでは、値を 2 に設定します。本番環境によっては、標準的な値が 4 になることがあります。
 - d 仮想 SQL Server の容量が定義済みのしきい値を下回った場合に vRealize Operations Manager が警告を表示することを確認します。
 - e 本番仮想 SQL Server の相互停止値を許容レベルに設定し、CPU のスケジュール競合による遅延が SQL Server で発生しないようにします。
 - f 特定の比率で計算リソースをオーバーコミットするかどうかを決定します。

カスタム ポリシー要件を計画した後、ポリシーを実装できます。

次に進む前に

仮想 SQL Server インスタンスの運用ポリシーを作成します。

vSphere の運用ニーズを満たすポリシーの作成

メイン本番ポリシーと唯一異なる設定を持つ仮想 SQL Server インスタンスの運用ポリシーを作成します。このポリシーでは、特定のオブジェクトのメモリおよび CPU 設定を変更します。次に、仮想 SQL Server でパフォーマンスが低下したときにアラートを送信するように vRealize Operations Manager を構成します。

この手順では、仮想 SQL Server オブジェクトのサブセットに対する専用ポリシーを作成し、仮想 SQL Server インスタンスのメモリおよび CPU のキャパシティの設定を変更します。このシナリオの現段階では、カスタム ポリシーは本番ポリシーとほぼ同じです。

メインの本番ポリシーと仮想 SQL Server ポリシーの違いは、コンピューティングリソースのオーバーコミットにあります。SQL Server ポリシーの場合、コンピューティングリソースのオーバーコミットは行いません。仮想 SQL Server に直接適用するキャパシティ設定を変更する以外は、本番ポリシー全体から設定のほとんどを SQL サーバーに継承させます。

メインの本番ポリシーを本番環境全体に適用した後に、専用ポリシーの作成、メイン ポリシーからの設定の継承、仮想 SQL サーバーのキャパシティ レベルを調整するための専用ポリシーの設定変更を行います。

このポリシーを作成するには、データ センターを含むクラスタおよびこのポリシーを使用する vCenter Server を選択します。クラスタ、データ センター、ホスト システム、リソース プール、仮想マシンのリソース コンテナを含むすべてのオブジェクトにマイナー チェンジを加えます。

開始する前に

以下の条件が満たされていることを確認してください:

- vSphere の運用要件を理解します。[「vSphere の運用要件を決定します \(P. 122\)」](#) を参照してください。
- デフォルト ポリシーは、vSphere オブジェクトの本番環境全体に対して有効です。

手順

- 1 vRealize Operations Manager で、[管理] - [ポリシー] を選択します。
[アクティブなポリシー] タブに現在有効なポリシーが表示されます。
- 2 [ポリシー ライブラリ] タブをクリックし、プラス記号をクリックしてカスタム ポリシーを追加します。
- 3 ワークスペース ナビゲーション ペインで、[はじめに] をクリックし、ポリシーの基本情報を定義します。
 - a [名前] テキスト ボックスに、**vSphere Production Virtual SQL Servers** と入力します。
 - b [説明] テキスト ボックスに、**Analyze capacity of virtual SQL Servers** と入力します。
 - c 基本ポリシーから作業を開始するには、[開始] ドロップダウン メニューから [デフォルト ポリシー] を選択します。
- 4 ポリシー構成設定を表示します。
 - a ポリシー ワークスペースで [基本ポリシーの選択] をクリックします。
 - b 仮想マシンのオブジェクトのポリシー構成を表示するには、[変更を表示] ドロップダウン メニュー、[vCenter アダプタ - 仮想マシン]、[オブジェクト タイプの表示] フィルタの順にクリックします。
仮想マシンのポリシー構成が右側のペインに表示されます。
 - c 設定を継承するには、[ポリシーのプレビュー] ペインで [基本ポリシーから継承された構成] をクリックします。
- 5 ワークスペース ナビゲーションで、[分析設定] をクリックします。
- 6 ワークスペース ナビゲーションで、次のオブジェクト タイプをリストに追加して、それらの設定を変更できるようにします。
 - a ドロップダウンの矢印をクリックし、[vCenter アダプタ - クラスタ コンピューティング リソース] をクリックして、フィルタをクリックします。
 - b ドロップダウンの矢印をクリックし、[vCenter アダプタ - データ センター] をクリックして、フィルタをクリックします。
 - c ドロップダウンの矢印をクリックし、[vCenter アダプタ - ホストシステム] をクリックして、フィルタをクリックします。
 - d ドロップダウンの矢印をクリックし、[vCenter アダプタ - リソース プール] をクリックして、フィルタをクリックします。
 - e ドロップダウンの矢印をクリックし、[vCenter アダプタ - 仮想マシン] をクリックして、フィルタをクリックします。
 これらのオブジェクト タイプの分析設定が右側のペインに表示されます。
- 7 [クラスタ コンピューティング リソース] バーで、二重の矢印をクリックして分析設定のリストを展開します。
- 8 [残りキャパシティ、残り時間] を見つけ、ロック ボタンをクリックして変更を有効にします。
- 9 vRealize Operations Manager が SQL Server ポリシー用のこれらのオブジェクトをオーバーコミットしないように、リソース テーブルでメモリ割り当てのオーバーコミット値を **0** に設定します。
- 10 vRealize Operations Manager が各 SQL Server で CPU 割り当てを 2:1 の比率でオーバーコミットするように、リソース テーブルで CPU 割り当てのオーバーコミット率を **2** に設定します。
- 11 右側のペインに追加した各オブジェクト タイプについて [手順 7](#) から [手順 10](#) を繰り返します。
- 12 [保存] をクリックします。

ポリシーを作成し、設定を少し変更して、vRealize Operations Manager が SQL Server オブジェクトを分析し、レポートを作成できるようにしました。

次に進む前に

SQL Server ポリシーに関するアラート定義および症状定義を構成します。ポリシーを SQL Server オブジェクト グループに適用します。

vSphere オブジェクトの分析とレポート生成を行うためのカスタム ポリシー設定の構成

開発環境、テスト環境、および本番環境で別々のポリシー要件を使用します。これにより、vRealize Operations Manager の特定のポリシー設定を構成し、仮想 SQL Server などのオブジェクトの分析とレポート作成を行うことができます。

このシナリオで示すいくつかの一般的なケースでは、開発環境、テスト環境、および本番環境のポリシー要件の区別が必要な場合があります。

- 開発環境およびテスト環境の場合、これらの環境のオブジェクトについてネットワーク冗長性が失われても問題ない場合がありますが、オブジェクトに障害が発生した場合は対処する必要があります。障害が発生した場合は、物理 NIC リンク状態のアラート定義を探し、その状態をダブルクリックして無効に設定します。
- テスト環境の場合、仮想マシンが要求するメモリおよび CPU 容量が実際の構成値より大きくても問題ない場合があります。テスト環境ではワークロードが変動する場合がありますためです。
- 本番環境で仮想マシンが要求するメモリが構成値より大きいことがあります。この場合、本番環境のパフォーマンスと信頼性に問題が生じる可能性があります。

この手順では、仮想マシンの相互停止パフォーマンスに対する症状の定義のしきい値をオーバーライドします。

開始する前に

以下の条件が満たされていることを確認してください:

- 仮想 SQL Server のカスタム ポリシーを作成した。[\[vSphere の運用ニーズを満たすポリシーの作成 \(P. 123\)\]](#) を参照してください。
- 仮想マシンの相互停止 CPU パフォーマンス メトリックを理解している。このメトリックは、仮想マシンの実行準備が整っているが、同等の仮想 CPU とのスケジューリング競合が原因で遅延が生じている時間の割合を表します。相互停止は、仮想マシンの複数のパフォーマンス メトリックの 1 つです。仮想マシンのパフォーマンス メトリックには、実行、待機、準備完了も含まれます。
- 仮想マシンという名前のアラート定義に、相互停止によって生じる高い CPU 競合が存在する。
- 仮想マシンの重大レベル、即時レベル、および警告レベルの CPU 相互停止を追跡する症状の定義が存在していること。たとえば、仮想マシン CPU の競合が時間の 15% を超える場合、その重大レベルは、デフォルトで 15% に設定されています。これは、相互停止メトリックによって測定されます。デフォルトのしきい値レベルは、即時の場合は 10%、警告の場合は 5% です。ただし、本番仮想マシンの本番ポリシーでは、3% の重大レベルを管理します。

手順

- 1 [ポリシー ライブラリ] タブで vSphere の本番仮想 SQL Server ポリシーを探し、このポリシーを編集するために鉛筆をクリックします。
[監視ポリシーの編集] ワークスペースが表示されます。
- 2 このワークスペースで [アラート/症状定義のオーバーライド] をクリックします。
- 3 [アラートの定義] ペインで相互停止アラート定義を有効にし、仮想マシン CPU の競合が高い場合に通知されるようにします。
 - a [オブジェクト タイプ] ドロップダウン メニューで [vCenter アダプタ] と [仮想マシン] を選択します。
 - b [検索] テキスト ボックスに **stop (停止)** と入力し、仮想マシンの相互停止パフォーマンス メトリックに関連するアラート定義のみを表示します。
 - c **Virtual machine has high CPU contention caused by Co-Stop** という名前のアラート定義について、[State (状態)] ドロップダウン メニューをクリックし、[Enabled (有効化)] をクリックします。

- 4 [シンプトムの定義] ペインで仮想マシンの重大相互停止レベルを変更し、このシンプトムに定義されたしきい値レベルに基づいて vRealize Operations Manager がアラートをトリガーするようにします。
 - a [オブジェクトタイプ] ドロップダウン メニューで [vCenter アダプタ] と [仮想マシン] をクリックします。
 - b [検索] テキスト ボックスに「**停止**」と入力し、仮想マシンの相互停止パフォーマンス メトリックに適用されるシンプトムの定義を表示します。
 - c **Virtual Machine CPU Co-stop is at Critical level** という名前のシンプトムの定義について、[状態] ドロップダウン メニューをクリックし、[有効化] をクリックします。
 - d [条件] ドロップダウン メニューをクリックし、[オーバーライド] をクリックします。
本番ポリシーの場合、一般的な重大しきい値は **>3** です。開発環境またはテスト環境のポリシーの場合、一般的な重大しきい値は **>10** です。
 - e [シンプトムしきい値の上書き] ダイアログ ボックスで「**>3**」と入力してしきい値を変更し、[適用] をクリックします。
- 5 仮想マシンの即時相互停止レベルを変更します。
 - a **Virtual Machine CPU Co-stop is at Immediate level** という名前のシンプトムの定義について、[状態] ドロップダウン メニューをクリックし、[有効化] をクリックします。
 - b [条件] ドロップダウン メニューをクリックし、[オーバーライド] をクリックします。
 - c [シンプトムしきい値の上書き] ダイアログ ボックスで「**>2**」と入力してしきい値を変更し、[適用] をクリックします。
- 6 仮想マシンの警告相互停止レベルを変更します。
 - a **Virtual Machine CPU Co-stop is at Warning level** という名前のシンプトムの定義について、[状態] ドロップダウン メニューをクリックし、[有効化] をクリックします。
 - b [条件] ドロップダウン メニューをクリックし、[オーバーライド] をクリックします。
 - c [シンプトムしきい値の上書き] ダイアログ ボックスで「**>1**」と入力してしきい値を変更し、[適用] をクリックします。
- 7 [保存] をクリックして、ポリシーを保存します。

仮想マシンの相互停止 CPU パフォーマンス メトリックを変更し、CPU スケジュール競合による SQL Server 仮想マシンの遅延が最小になるようにしました。

次に進む前に

仮想 SQL Server グループの分類のために使用するグループ タイプを作成し、仮想 SQL Server を含むオブジェクト グループを作成して、そのオブジェクト グループにポリシーを適用します。

vSphere オブジェクト グループへのカスタム ポリシーの適用

オブジェクト グループ タイプを作成して仮想 SQL Server マシンを分類します。次に、SQL Server マシンを含むオブジェクト グループを作成し、カスタム ポリシーを SQL Server 仮想マシン オブジェクトのこのグループに適用します。

vRealize Operations Manager でカスタム ポリシーのパフォーマンス条件に応じて SQL Server マシンを分析するには、SQL Server オブジェクトのグループにカスタム ポリシーを適用する必要があります。

このシナリオでは、SQL Server 仮想マシンを含む静的オブジェクト グループを作成します。使用している環境によっては、動的オブジェクト グループを作成して、vRealize Operations Manager で分析およびレポート作成できるようになった新しい SQL Server インスタンスを検出しなければならない場合があります。

開始する前に

仮想 SQL Server マシンのカスタム ポリシー設定は既に作成しています。[\[vSphere オブジェクトの分析とレポート生成を行うためのカスタム ポリシー設定の構成 \(P. 125\)\]](#) を参照してください。

手順

- 1 仮想 SQL Server のグループ タイプを作成するには、左側のペインで [内容] をクリックし、[グループ タイプ] をクリックします。
- 2 プラス記号をクリックして新しいオブジェクト グループ タイプを追加し、**vSphere Production Virtual Machines** と入力します。
このグループ タイプを使用して、分析する SQL Server 仮想マシンを分類します。
- 3 左側のペインで [環境] をクリックし、[カスタム グループ] をクリックします。
先ほど作成したグループ タイプに対応するフォルダがリストに表示されます。
- 4 [vSphere Production Virtual Machines] という名前のフォルダをクリックし、プラス記号をクリックして新しいオブジェクト グループを追加します。
- 5 [新規グループ] ダイアログ ボックスで、SQL Server 仮想マシンを追加します。
 - a [名前] テキスト ボックスに、**vSphere Production SQL Server Virtual Machines** と入力します。
 - b [グループ タイプ] ドロップダウン メニューから [vSphere Production Virtual Machines] を選択します。
 - c [ポリシー] ドロップダウン メニューから [vSphere Production Virtual SQL Servers] を選択します。
 - d [メンバーシップ基準の定義] ペインの [オブジェクト タイプ] ドロップダウン メニューで、[vCenter アダプタ] を展開し、[仮想マシン] をクリックします。
- 6 [OK] をクリックして、オブジェクト グループを保存します。
vRealize Operations Manager でデータが収集されると、[グループ] タブにオブジェクト グループ内の仮想マシンの健全性、リスク、効率の状態が表示されます。

vRealize Operations Manager で SQL Server 仮想マシンの状態の分析およびレポート作成を行うオブジェクト タイプとオブジェクト グループを作成しました。

次に進む前に

カスタム ダッシュボードを作成して、仮想 SQL Server の状態を表示し、発生する問題に対処できるようにします。[「ダッシュボード \(P. 172\)」](#) を参照してください。

本番仮想 SQL Server のキャパシティ計画シナリオを含むモデル プロジェクトを構成して、vRealize Operations Manager にこれらのオブジェクトのキャパシティ傾向を監視させ、仮想 SQL Server がキャパシティの問題が発生する 60 日前に通知させます。vRealize Operations Manager インフォメーション センターを参照してください。

定期的に CPU 使用率およびメモリ使用率に関するレポートを vRealize Operations Manager に作成させ、そのレポートを送信させます。

vRealize Operations Manager におけるデフォルト ポリシー

デフォルト ポリシーは、ユーザーのオブジェクトのほとんどに適用される一式のルールです。

デフォルト ポリシーは、[アクティブなポリシー] タブの [優先順位] 列で文字 D が付けられて示されます。デフォルト ポリシーは、あらゆるオブジェクトに適用できます。

デフォルト ポリシーは、そのポリシーがオブジェクト グループに関連付けられていない場合でもポリシー リストの最後に表示されます。オブジェクト グループにポリシーが適用されていない場合、vRealize Operations Manager はデフォルト ポリシーをそのグループに関連付けます。

ポリシーはデフォルト ポリシーの設定を継承でき、それらの設定はいくつかの条件のもとでさまざまなオブジェクトに適用できます。

[デフォルト] に設定されているポリシーは、常に優先度が最も低くなります。2つのポリシーをデフォルト ポリシーに設定することを試みた場合には、まず [デフォルト] に設定する最初のポリシーが最も低い優先度に設定されます。2 番目のポリシーを [デフォルト] に設定する時点で、そのポリシーが最も低い優先度となり、先に [デフォルト] に設定したポリシーが 2 番目に低い優先度に設定されます。

デフォルト ポリシーをベース ポリシーとして使用し、独自のカスタム ポリシーを作成できます。デフォルト ポリシーの設定を変更し、分析ニーズや監視ニーズを満たすポリシーを作成します。デフォルト ポリシーから開始する場合、新しいポリシーはデフォルトのベース ポリシーの設定をすべて継承します。続いて、新しいポリシーをカスタマイズし、これらの設定をオーバーライドできます。

vRealize Operations Manager でインストールされるデータ アダプタとソリューションは、すべてのオブジェクトに適用される集成的な基本設定グループを提供します。[ポリシー ライブラリ] タブ上のポリシー ナビゲーション ツリーでは、これらの設定は基本設定と呼ばれます。デフォルト ポリシーは、デフォルトですべての基本設定を継承します。

vRealize Operations Manager で提供されるポリシー

vRealize Operations Manager に含まれる一連のポリシーは、環境を監視するために、および独自ポリシー作成の開始点として使用できます。

vRealize Operations Manager で提供されるポリシーをよく理解し、独自の環境で使用したり、作成する新しいポリシーに設定を組み込んだりできるようにします。

vRealize Operations Manager ポリシーで提供されるポリシーを確認できる場所

[管理] をクリックし、[ポリシー] をクリックし、[ポリシー ライブラリ] タブをクリックします。

vRealize Operations Manager で提供されるポリシーを表示するには、基本設定ポリシーを展開します。

vRealize Operations Manager に含まれるポリシー

vRealize Operations Manager インスタンスにインストールされているデータ アダプタとソリューションはすべてのオブジェクトに適用される基本設定の集成的グループを提供するので、すべてのポリシーは基本設定の下に存在します。[ポリシー ライブラリ] タブのポリシー ナビゲーション ツリーでは、これらの設定は基本設定と呼ばれます。

基本設定ポリシーは他のすべてのポリシーに対する包括的ポリシーであり、ポリシー ライブラリのポリシー リストの先頭に表示されます。vRealize Operations Manager インスタンスにインストールされているデータ アダプタとソリューションはすべてのオブジェクトに適用される基本設定の集成的グループを提供するので、他のすべてのポリシーは基本設定の下に存在します。

構成ウィザード ベースのポリシー セットには、オブジェクトについてレポートするためにオブジェクトの特定の設定に対して使用する vRealize Operations Manager で提供されるポリシーを含みます。構成ウィザード ベースのポリシー セットには、複数の種類のポリシーが含まれます。

- ネットワーク I/O およびストレージ I/O に対する容量管理ポリシー
- インフラストラクチャ オブジェクトおよび仮想マシンに対する効率アラート ポリシー
- インフラストラクチャ オブジェクトおよび仮想マシンに対する健全性アラート ポリシー
- CPU およびメモリに対するオーバーコミット ポリシー
- インフラストラクチャ オブジェクトおよび仮想マシンに対するリスク アラート ポリシー

デフォルト ポリシーには、大部分のオブジェクトに適用されるルールのセットが含まれます。

VMware 管理ポリシー セットには、テストや開発ではなく本番などの環境の種類に使用するポリシーが含まれます。これらのポリシーには、ピーク期間、バッチおよび対話式ワークロード、需要および割り当てモデルを監視する設定が含まれます。vRealize Operations Manager で提供される VMware 管理ポリシー セットには、次のポリシーが含まれます。

表 3-5. VMware 管理ポリシーの機能

VMware 管理ポリシー	機能
VMware 過剰サイズ分析を除外	過剰サイズの仮想マシンから節約可能なキャパシティを計算しません
VMware 15 分間のピーク時間用に最適化	15 分間急増したワークロードに対して容量アラートを生成するように構成されています。
VMware 30 分間のピーク時間用に最適化	30 分間急増したワークロードに対して容量アラートを生成するように構成されています。
VMware バッチ ワークロード用ポリシー	実行時間が 4 時間未満のバッチ ワークロード用に最適化されています。
VMware 対話式ワークロード用ポリシー	大きいバッファの 15 分ピークに基づいてデスクトップや Web サーバなどの対話式ワークロードに対して敏感なように構成されています。
VMware 本番ポリシー (需要のみ)	ほとんどの容量を取得するために、割り当て制限を使用しないで、本番負荷用に最適化されています。
VMware 本番ポリシー (割り当てあり)	需要および割り当て容量モデルを必要とする本番負荷用に最適化されています。
VMware 本番ポリシー (割り当てなし)	需要容量モデルを必要とする本番負荷用に最適化されており、競合なしで最高のオーバーコミットを提供します。
VMware テストおよび開発ポリシー (割り当てなし)	仮想マシン レベルでの容量計画を含まないので、大きな競合を発生させないで容量を最大化するように開発およびテスト環境用に最適化されています。

監視ポリシー ワークスペースを使用した、運用ポリシーの作成および変更

監視ポリシー ワークスペースでワークフローを使用して、ローカル ポリシーをすばやく作成し、既存のポリシーの設定を更新できます。ローカル ポリシー設定のソースとして使用する基本ポリシーを選択し、環境内のオブジェクト グループのデータの分析および収集に使用するしきい値や設定を変更します。ローカル設定が定義されていないポリシーは、基本ポリシーから設定を継承し、関連付けられたオブジェクト グループに適用します。



運用ポリシーのカスタマイズ (http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_customize_policies_vrom)

開始する前に

vRealize Operations Manager がデータを分析および収集するためのオブジェクト グループが存在していることを確認し、存在していない場合は作成します。[「VMware vRealize Operations Manager でのカスタム オブジェクト グループの管理 \(P. 162\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 [管理] をクリックして、[ポリシー] をクリックします。
- 2 [ポリシー ライブラリ] をクリックし、プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、ポリシーを選択して鉛筆をクリックし既存のポリシーを編集します。

[ポリシー ライブラリ] タブでポリシーを追加および編集し、特定のポリシーを削除できます。自分で作成した他のポリシーの設定に、基本設定ポリシーまたはデフォルト ポリシーをルート ポリシーとして使用できます。どのポリシーもデフォルト ポリシーに設定できます。
- 3 [はじめに] ワークスペースで、名前と説明をポリシーに割り当てます。

すべてのユーザーがポリシーの目的を把握できるように、分かりやすい名前と説明をポリシーに割り当てます。
- 4 [ベース ポリシーの選択] をクリックし、ワークスペースで、ベースラインとして使用するベース ポリシーを 1 つ以上選択し、新しいローカル ポリシー用の設定を定義します。

新しいポリシーを作成する場合、新しいポリシー設定のベースライン ソースとして、vRealize Operations Manager にある任意のポリシーを使用できます。

- 5 [分析設定のオーバーライド] をクリックし、ワークスペースで、オブジェクト タイプをフィルタリングして、このポリシーを関連付けるオブジェクトのポリシーをカスタマイズします。

オブジェクト タイプをフィルタリングして、これらのオブジェクト タイプの設定を変更し、vRealize Operations Manager でダッシュボードやビューで想定されるデータが収集および表示されるようにします。

- 6 [属性のカスタマイズ] をクリックし、ワークスペースで、ポリシーに含めるメトリック、プロパティ、またはスーパー メトリック属性を選択します。

vRealize Operations Manager は、ポリシーに含めるメトリック、またはプロパティ、スーパー メトリック属性に基づいて、環境内のオブジェクトからデータを収集します。

- 7 [アラート/シブトム定義のオーバーライド] をクリックし、ワークスペースで、ポリシーのアラート定義およびシブトム定義を有効または無効にします。

vRealize Operations Manager は、問題とみなされる状態が発生すると、環境内のオブジェクトの問題を特定してアラートをトリガーします。

- 8 [グループへのポリシーの適用] をクリックし、ワークスペースで、ポリシーを適用するグループを 1 つ以上選択します。

VMware vRealize Operations Manager は、オブジェクト グループに適用されたポリシーの設定に応じてオブジェクトを監視し、しきい値に違反した場合にアラートをトリガーして、結果をダッシュボード、ビュー、およびレポートで報告します。1 つ以上のオブジェクト グループにポリシーを割り当てない場合、VMware vRealize Operations Manager はそのポリシー内の設定をどのオブジェクトにも割り当てず、ポリシーは有効になりません。割り当てられたポリシーがないオブジェクト グループには、VMware vRealize Operations Manager がオブジェクト グループをデフォルト ポリシーに関連付けます。

- 9 [保存] をクリックして、ローカル ポリシーに定義した設定を保持します。

次に進む前に

vRealize Operations Manager が環境内のオブジェクトからデータを分析および収集した後、ダッシュボードおよびビューでデータを確認します。データが期待されたものでない場合、ダッシュボードに必要なデータが表示されるまで、ローカル ポリシーを編集して設定をカスタマイズおよびオーバーライドします。

vRealize Operations Manager のポリシー ワークスペース

ポリシー ワークスペースを使用すると、ポリシーの作成や変更をすばやく行うことができます。新しいポリシーを作成する場合、既存のポリシーから設定を継承できます。また、適切な権限がある場合は、既存のポリシーの設定を変更できます。新しいポリシーの作成または既存ポリシーの編集を行った後、1 つ以上のオブジェクト グループにポリシーを適用できます。

ポリシー ワークスペースの機能

すべてのポリシーは一連のパッケージを含み、これらのパッケージ内の定義された問題、症状、メトリック、およびプロパティを使用して環境内の特定のオブジェクト グループに適用します。ベース ポリシーから継承した設定の詳細を表示したり、特定のオブジェクト タイプのある設定を表示したりできます。他のポリシーの設定をオーバーライドしたり、オブジェクト タイプに適用する追加のポリシー設定を含めることもできます。たとえば、本番（クリティカル）ポリシーには、使用量、使用可能なリソースとその残り時間、ストレスがどの程度かかるのかを特定するオブジェクト グループのリソース要求、および CPU、ディスク I/O、ネットワーク I/O の節約可能なキャパシティをトラックする設定を含めます。

新しいポリシーを作成したり既存のポリシーを編集したりするには、[追加] と [編集] オプションを使用します。



運用ポリシーのカスタマイズ (http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_customize_policies_vrom)

ポリシーを作成および変更する場所

ポリシーの作成と変更を行うには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックし、ポリシーを追加する場合はプラス記号を、ポリシーを編集する場合は鉛筆アイコンをクリックします。ポリシー ワークスペースは、ベース ポリシーの選択や、分析、メトリック、プロパティ、アラート定義、シンプトム定義などの設定のカスタマイズとオーバーライドを行う場所です。このワークスペースでは、ポリシーをオブジェクト グループに適用できます。

リストからポリシーを削除するには、ポリシーを選択して赤い X 印をクリックします。

ポリシー ワークスペースのオプション

ポリシー ワークスペースには、ポリシーを作成して編集し、そのポリシーをカスタム オブジェクト グループに適用するための具体的なワークフローが含まれています。

■ [導入の詳細 \(P. 132\)](#)

ポリシーを作成するときは、ポリシーに分かりやすい名前と説明を付けて、そのポリシーの目的が分かるようにする必要があります。

■ [ベース ポリシーの選択の詳細 \(P. 132\)](#)

新しいポリシーを作成するとき、vRealize Operations Manager で提供されているポリシーのいずれかを、ポリシー設定のベースライン ソースとして使用できます。ポリシーの内容エリアでは、ベース ポリシーおよび設定をオーバーライドするために選択した追加のポリシーのパッケージと要素を表示し、ポリシー間の設定の違いを強調表示して比較できます。表示する設定とオブジェクト タイプを選択します。

■ [分析設定の詳細 \(P. 133\)](#)

オブジェクト タイプをフィルタリングして設定を変更すると、それらの設定が vRealize Operations Manager で適用されます。これにより、必要なデータがダッシュボードとビューに表示されます。

■ [ワークロード自動化の詳細 \(P. 142\)](#)

ポリシーのワークロード自動化オプションを設定して、vRealize Operations Manager が定義に従って環境内のワークロードを調整できるようにします。

■ [メトリックとプロパティの詳細の収集 \(P. 143\)](#)

属性タイプを選択してポリシーに含め、vRealize Operations Manager が環境内のオブジェクトからデータを収集可能にすることができます。属性タイプには、メトリック、プロパティ、およびスーパー メトリックが含まれます。各メトリックを有効化または無効化し、ワークスペースで選択したベース ポリシーからメトリックを継承するかどうかを決定します。

■ [アラートとシンプトムの定義の詳細 \(P. 144\)](#)

環境内のオブジェクトに関する問題を vRealize Operations Manager で特定し、問題とみなされる条件が満たされた場合にアラートをトリガするため、アラートおよび症状の定義を有効または無効にできます。アラートは自動化できます。

■ [カスタム プロファイルの詳細 \(P. 148\)](#)

カスタム プロファイルを使用すると、利用可能なキャパシティやオブジェクト構成に応じて、指定したオブジェクトが環境にあといくつ収まるかがわかります。ポリシーのカスタム プロファイルを有効または無効にできます。

■ [ポリシーのグループ詳細への適用 \(P. 148\)](#)

ローカル ポリシーを 1 つまたは複数のオブジェクト グループに割り当て、VMware vRealize Operations Manager がポリシー内の設定に基づいてオブジェクトを分析し、定義されたしきい値レベルに違反した場合にはアラートをトリガして、ダッシュボード、ビュー、およびレポートに結果を表示できるようにします。

導入の詳細

ポリシーを作成するときは、ポリシーに分かりやすい名前と説明を付けて、そのポリシーの目的が分かるようにする必要があります。

ポリシー名と説明を割り当てる場所

ポリシーに名前と説明を追加するには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。次にプラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[はじめに] をクリックします。名前と説明がワークスペースに表示されます。

表 3-6. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースでの名前と説明のオプション

オプション	説明
名前	監視ポリシー ワークスペースの追加または編集ウィザード、およびカスタム グループなどオブジェクトにポリシーを適用する領域に表示されるポリシーの名前。
説明	ポリシーの分かりやすい説明。たとえば、この説明を使用して、継承されるポリシー、およびそのポリシーと 1 つ以上のオブジェクト グループの関係を理解するためにユーザーが必要とする特定の情報を説明します。
次で開始する	開始点として使用する基本ポリシー。基本ポリシーの設定はすべて、新しいポリシーにデフォルト設定として継承されます。この設定をオーバーライドして、新しいポリシーをカスタマイズできます。新規ポリシーの開始点として設定を継承する基本ポリシーを選択します。

ベース ポリシーの選択の詳細

新しいポリシーを作成するとき、vRealize Operations Manager で提供されているポリシーのいずれかを、ポリシー設定のベースライン ソースとして使用できます。ポリシーの内容エリアでは、ベース ポリシーおよび設定をオーバーライドするために選択した追加のポリシーのパッケージと要素を表示し、ポリシー間の設定の違いを強調表示して比較できます。表示する設定とオブジェクト タイプを選択します。

[ベース ポリシーの選択] ワークスペースの仕組み

ポリシーを作成するには、新しいカスタム ポリシーが設定を継承するベース ポリシーを選択します。お使いの環境のサービス レベル アグリーメント (SLA) の要件に合わせて基本ポリシーの一部の設定をオーバーライドする場合は、個別のポリシーを選択および適用して管理パック ソリューションを作成します。オーバーライド ポリシーには、オーバーライドするオブジェクトのタイプごとに定義された固有の設定が含まれます。オーバーライドは、手動で実行するか、vRealize Operations Manager にアダプタが組み込まれている場合はアダプタによって実行されます。選択した基本ポリシーの設定は、オーバーライド ポリシーの設定によって上書きされます。

ベース ポリシーからポリシーを継承する設定を上書きする場合、左側のペインのポリシーを選択して適用すると、右側のペインの [適用済みポリシー履歴] リストにそのポリシーが表示されます。

右側のペインには、継承されたポリシー構成の各タブ、および作成中のポリシーが表示され、[ポリシーのプレビュー] ペインで [選択したポリシーのプレビュー] タブが表示されます。ポリシー タブの 1 つを選択すると、有効化または無効化されたアラート定義、症状定義、メトリックとプロパティの数、および有効化または無効化された変更の数が表示されます。

右側のペインでは、表示するオブジェクトを選択して、オブジェクト タイプに適用するポリシー要素を確認できます。たとえば、StorageArray オブジェクト タイプを選択し、タブをクリックしてポリシーの構成設定を表示すると、[ポリシーのプレビュー] ペインにポリシーのローカル パッケージ、およびオブジェクト グループタイプと各グループのポリシー要素数が表示されます。

プレビュー表示の対象として、すべてのオブジェクト タイプのポリシー設定、ローカルで変更された設定を持つオブジェクト タイプのみのポリシー設定、または自分でリストに追加した新規のオブジェクト タイプ (StorageArray ストレージ デバイスなど) のポリシー設定を選択できます。

ベース ポリシー設定を選択およびオーバーライドできる場所

自分で作成するポリシーの開始点として使用するベース ポリシー、および自分のポリシーがベース ポリシーから継承する 1 つ以上の設定をオーバーライドするポリシーを選択するには、[管理] - [ポリシー] - [ポリシーライブラリ] 順にクリックしてから、プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆アイコンをクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、ポリシーの名前を追加し、[ベース ポリシーの選択] をクリックします。ポリシーの構成、オブジェクト、およびプレビューがワークスペースに表示されます。

表 3-7. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースにおける基本ポリシーとオーバーライドの設定

オプション	説明
次の変更を表示	<p>オブジェクトを選択して変更内容を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ すべてのオブジェクト タイプ。有効化および無効化されたアラート定義、症状定義の数およびメトリックとプロパティ、有効化および無効化された変更の数、オブジェクト タイプ グループおよび各グループのローカルのポリシー要素の数を表示します。 ■ オーバーライドを持つすべてのオブジェクト タイプ。変更が適用されたオブジェクト タイプ、およびオーバーライド対象として選択されたオブジェクト タイプを表示します。ドロップダウンメニューを使用してオブジェクト タイプを選択します。[フィルタ] ボタンをクリックして選択したオブジェクト タイプをリストに追加し、設定をプレビューおよび構成できるようにします。 ■ オブジェクトの新規セットに対して設定を追加。オブジェクト タイプの一覧を表示します。この一覧で、[ストレージ デバイス] - [SAN] などのオブジェクト タイプを選択し、選択したオブジェクトを [オブジェクト タイプ] リストに追加できます。
追加ポリシーからの設定のオーバーライド	1 つ以上のポリシーを選択および適用して、自分のポリシーが基本ポリシーから継承した設定をオーバーライドします。
適用	自分のポリシーにオーバーライド ポリシーを適用し、適用されたポリシー履歴にオーバーライド ポリシーを一覧表示します。
適用済みポリシー履歴	自分のポリシーの設定をオーバーライドするために選択したポリシーを表示します。
基本ポリシーから継承された構成	選択すると、[ポリシーのプレビュー] ペインに、継承されたポリシー構成のプレビューが表示されます。
このポリシーで定義されている構成設定	選択すると、[ポリシーのプレビュー] ペインに、ポリシー構成のプレビューが表示されます。
ポリシーのプレビュー	<p>ローカル パッケージとオブジェクト グループ タイプに関するサマリ情報を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ パッケージ (ローカル) 有効化および無効化されたアラート定義、症状定義、およびメトリックとプロパティの数、各オブジェクト グループのポリシー要素の数を表示します。 ■ オブジェクト タイプ グループ。関連付けられたオブジェクト グループを表示します。 ■ パッケージと設定のドロップダウン矢印。表示されるポリシーのパッケージと設定を表示します。

分析設定の詳細

オブジェクト タイプをフィルタリングして設定を変更すると、それらの設定が vRealize Operations Manager で適用されます。これにより、必要なデータがダッシュボードとビューに表示されます。

[分析設定] ワークスペースの仕組み

ポリシーの分析設定をオンにして構成することにより、vRealize Operations Manager がアラートのトリガやデータの表示に使用するポリシー要素の設定をオーバーライドできます。このタイプの設定には、アラートに基づくバジスコア、症状しきい値、残り容量や残り時間を計算するための状況設定 (コミットされたプロジェクトなど)、その他の詳細な設定があります。

ポリシー要素設定を展開して、特定のポリシーを取得するための値を構成します。たとえば、容量を解放するには、容量の割合を設定し、リソースが過剰サイズ状態、アイドル状態、またはパワーオフ状態になったときに、vRealize Operations Manager によってその旨が通知されるようにします。

ポリシーの適用対象はオブジェクトとオブジェクト グループです。ローカル ポリシーのポリシー要素設定を構成する場合、オブジェクト タイプ、および予期通りにダッシュボードとビューに表示する結果を考慮する必要があります。設定をまったく変更しないと、ローカル ポリシーは、選択したベース ポリシーから継承した設定をそのまま保持します。

ポリシー分析設定を設定できる場所

ポリシーの分析設定を設定するには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。次にプラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[分析設定] をクリックします。ワークスペースへの表示対象として選択したホストシステム、仮想マシン、その他のオブジェクト タイプの分析設定。

表 3-8. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースでの分析設定

オプション	説明
次の変更を表示	<p>オブジェクトを選択して変更内容を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ すべてのオブジェクト タイプ。有効化および無効化されたアラート定義、症状定義の数およびメトリックとプロパティ、有効化および無効化された変更の数、オブジェクト タイプ グループおよび各グループのローカルのポリシー要素の数を表示します。 ■ オーバーライドを持つすべてのオブジェクト タイプ。変更が適用されたオブジェクト タイプ、およびオーバーライド対象として選択されたオブジェクト タイプを表示します。ドロップダウン メニューを使用してオブジェクト タイプを選択します。[フィルタ] ボタンをクリックして選択したオブジェクト タイプをリストに追加し、設定をプレビューおよび構成できるようにします。 ■ オブジェクトの新規セットに対して設定を追加。オブジェクト タイプの一覧を表示します。この一覧で、[ストレージ デバイス] - [SAN] などのオブジェクト タイプを選択し、選択したオブジェクトを [オブジェクト タイプ] リストに追加できます。
右側のペイン - オブジェクト タイプの分析設定	<p>右側のペインには、左側のペインで選択したオブジェクト タイプの一覧が表示されます。オブジェクト タイプのポリシー要素と設定のビューを展開して、vRealize Operations Manager にオブジェクト タイプを分析させることができます。</p> <p>オブジェクト タイプのビューを展開して、次のポリシー要素のしきい値設定を表示または変更できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ワークロード ■ 異常 ■ 障害 ■ 残りの容量と時間 ■ 負荷 ■ コンプライアンス ■ 解放可能な容量 ■ 密度 ■ 時間の範囲 <p>各要素の右側にあるロック アイコンをクリックして、設定をオーバーライドし、ポリシーのしきい値を変更します。</p>

ポリシーのワークロード要素

ワークロードとは、オブジェクトでのリソースの需要の測定値のことです。ポリシーで、オブジェクト タイプのワークロード要素の設定を有効にして構成できます。その後、設定をオーバーライドして、vRealize Operations Manager で、設定に応じて、CPU 使用量およびメモリ使用量を計算し、選択したオブジェクトのリソース需要を表示できるようになります。

ワークロード要素の仕組み

ワークロード要素により、vRealize Operations Manager で、選択されたオブジェクト グループで使用するリソースのレポート方法が決定します。オブジェクト グループで利用できるリソースは、構成済みリソース量および使用可能なリソース量によって異なります。

- 特定の物理メモリ量はホストシステムの構成済みリソースで、特定の CPU 数は仮想マシンの構成済みリソースです。
- オブジェクトまたはオブジェクト グループの使用可能なリソースは、構成済みの量のサブセットであり、構成済みの量と等しくなる場合があります。

- リソースの構成済みの量および使用可能な量は、リソースのタイプや必要な仮想化オーバーヘッド量（ESX ホストマシンでホストシステムを実行するために必要なメモリなど）によって異なる可能性があります。オーバーヘッドを考慮する場合、仮想マシンまたは高可用性バッファには予約が必要となるため、オーバーヘッドに必要なリソースは使用可能であるとはみなされません。

ポリシーのワークロード要素をオーバーライドする場所

ポリシーのワークロード分析設定を表示してオーバーライドするには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースで、[分析設定] をクリックし、左側ペインで1つまたは複数のオブジェクトを選択します。選択したオブジェクトタイプのワークロード設定が、右側のペインに表示されます。

ワークロード ポリシー要素を表示して、ポリシーの設定を構成します。

このポリシー要素を構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

表 3-9. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースのポリシーのワークロード要素の設定

オプション	説明
ロック アイコン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
[ワークロード] ドロップダウン メニュー	展開すると、リソース コンテナのリストが表示されます。ワークロード計算のためのリソース コンテナを有効または無効にすることができます。
バッジ スコア症状のしきい値	環境の基準を満たすようにバッジスコアを更新するレベルに、ポリシー要素の症状しきい値を設定します。vRealize Operations Manager は、症状しきい値を使用して [アラートの概要] と [ダッシュボード] のスコアに表示されるアラートをトリガーします。 [環境] - [オブジェクト] - [分析] - [ワークロード] を選択して、選択されたオブジェクトの負荷ポリシー設定のバッジ スコア症状のしきい値を表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。

表 3-10. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースのポリシーのワークロード要素の設定

オプション	説明
ロック アイコン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
[ワークロード] ドロップダウン メニュー	展開すると、リソース コンテナのリストが表示されます。ワークロード計算のためのリソース コンテナを有効または無効にすることができます。
バッジ スコア症状のしきい値	環境の基準を満たすようにバッジスコアを更新するレベルに、ポリシー要素の症状しきい値を設定します。vRealize Operations Manager は、症状しきい値を使用して [アラートの概要] と [ダッシュボード] のスコアに表示されるアラートをトリガーします。 [環境] - [オブジェクト] - [分析] - [ワークロード] を選択して、選択されたオブジェクトの負荷ポリシー設定のバッジ スコア症状のしきい値を表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。

ポリシーの異常要素

異常とは、オブジェクトに発生する異例または正常ではないイベントのことです。ポリシーのオブジェクトタイプに対する異常要素設定を有効にして構成することにより、設定をオーバーライドし、vRealize Operations Manager で、設定を基にメトリック履歴データに従ってオブジェクトの異常な動作の許容レベルを判断できます。

ポリシーの異常要素をオーバーライドする場所

ポリシーの異常分析設定を表示してオーバーライドするには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースで、[分析設定] をクリックし、左側ペインで1つまたは複数のオブジェクトを選択します。選択したオブジェクトタイプの異常設定が、右側のペインに表示されます。

ポリシーの異常要素を表示し、ポリシーの設定を構成します。

このポリシー要素を構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

表 3-11. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースでのポリシーの異常要素設定

オプション	説明
ロック アイコン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
バッジ スコア症状のしきい値	環境の基準を満たすようにバッジスコアを更新するレベルに、ポリシー要素の症状しきい値を設定します。vRealize Operations Manager は、症状しきい値を使用して [アラートの概要] と [ダッシュボード] のスコアに表示されるアラートをトリガーします。 [環境] - [オブジェクト] - [分析] - [異常] を選択して、異常ポリシー設定のバッジ スコア症状のしきい値を表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。

ポリシーの障害要素

障害とは、仮想マシンの **Guest file system out of space**、ホストシステムの **Host connectivity** などのオブジェクトベースのエラー状態のことです。ポリシーのオブジェクトタイプで障害要素の設定をオンにして構成し、設定をオーバーライドして、選択したオブジェクトで発生する問題の重要度をユーザーの設定に基づいて vRealize Operations Manager が決定して計測できるようにします。

ポリシーの障害要素をオーバーライドする場所

ポリシーの障害分析設定を表示してオーバーライドするには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースで、[分析設定] をクリックし、左側ペインで 1 つまたは複数のオブジェクトを選択します。選択したオブジェクトタイプの障害設定が、右側のペインに表示されます。

障害ポリシー要素を表示し、ポリシーの設定を構成します。

このポリシー要素を構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

表 3-12. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースにおけるポリシーの障害要素の設定

オプション	説明
オーバーライド ボタン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
バッジ スコア症状のしきい値	環境の基準を満たすようにバッジスコアを更新するレベルに、ポリシー要素の症状しきい値を設定します。vRealize Operations Manager は、症状しきい値を使用して [アラートの概要] と [ダッシュボード] のスコアに表示されるアラートをトリガーします。 [環境] - [オブジェクト] - [分析] - [障害] を選択して、選択されたオブジェクトの障害ポリシー設定のバッジ スコア症状のしきい値を表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。

ポリシーの残り容量および残り時間要素

容量とは、オブジェクトのためのメモリ量、CPU、およびディスク領域の測定値のことです。残り時間とは、オブジェクトが容量不足となるまでに残された時間の測定値のことです。ポリシーに指定されたオブジェクトタイプの残り容量および残り時間要素をオンにして構成することで、この設定をオーバーライドすることにより、vRealize Operations Manager は、設定に基づいて、リソースが不足するまでの使用可能な残り容量および残り時間について報告ようになります。

残り容量および残り時間要素の仕組み

容量および残り時間要素により、vRealize Operations Manager で、特定のオブジェクトタイプグループのリソースが不足するまでの使用可能な容量と時間についてどのように報告するかが決まります。

- 残り容量は、環境に新規仮想マシンに対応する余地があるかどうかを示します。vRealize Operations Manager は、選択したオブジェクトにデプロイ可能な仮想マシンの総数と比較した、仮想マシン数の残りの全容量の割合として残り容量を計算します。

- 残り時間は、オブジェクトグループがすべてのリソースを消費するまで残り時間を示します。vRealize Operations Manager は、すべての容量が消費されるまでの残り日数からプロビジョニングバッファに割り当てられている日数を減算することで、残り時間を計算します。
- 使用可能な容量とは、空き容量から、高可用性を使用し、メモリ、CPU、ネットワーク、データストア、およびディスク領域のバッファに設定する容量バッファ量を設定する場合に影響を受ける容量を差し引いたパーセントの測定値です。オーバーコミット値を設定する場合、使用可能な容量の測定値により、使用可能な空き容量にその容量が追加されます。
- 高可用性を使用するように使用可能な容量設定を変更できます。これにより、スループットおよび潜在的なデータ損失に対応できるだけの十分なオブジェクトやリソースが vRealize Operations Manager から提供されるようになります。計算タイプやバッファルールを変更することもできます。
- 分析で、リソース コンテナの容量設定を有効または無効にします。メモリ、CPU、およびディスク領域リソース コンテナの場合、需要と割り当てを有効または無効にできます。ネットワーク I/O リソース コンテナの場合、データ転送速度、データ受信速度、および使用速度を有効または無効にできます。データストア I/O リソース コンテナの場合、未処理の I/O 要求数、1 秒あたりの読み込み回数と書き込み回数、および読み込み速度と書き込み速度を有効または無効にできます。vSphere の構成限界も有効または無効にできます。
- ピーク考慮設定により、vRealize Operations Manager で、容量のピーク使用に負荷設定が考慮されます。
- vRealize Operations Manager で、オブジェクトの今後の容量を計画できるようにするために定義した、コミットされたプロジェクトを考慮することができます。コミットされたプロジェクトはオブジェクトの今後の容量を予測するシナリオであるため、コミットされたプロジェクトを考慮することにより、残り時間スコアが影響を受けます。
- プロビジョニング時間バッファとして設定される日数は、環境内でオブジェクトをプロビジョニングするのに必要となる時間（オブジェクトを注文してからデプロイするまでの時間）を基にしています。残り時間スコアがゼロにならないようにするため、オブジェクトには、プロビジョニング時間バッファよりも長い使用可能な容量の日数が必要です。

ポリシーの残り容量および残り時間要素をオーバーライドする場所

ポリシーの残りキャパシティと残り時間の分析設定を表示してオーバーライドするには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシーライブラリ] タブの順にクリックします。プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースで、[分析設定] をクリックし、左側ペインで 1 つまたは複数のオブジェクトを選択します。ワークスペースで選択したオブジェクトタイプの容量および残り時間設定が右側のペインに表示されます。

残り容量および残り時間ポリシー要素を表示して、ポリシーの設定を構成します。

このポリシー要素を構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

表 3-13. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースのポリシーの残り容量および残り時間要素の設定

オプション	説明
ロック アイコン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
残り時間スコアおよび容量スコアの症状しきい値	<p>環境の基準を満たすようにバジスコアを更新するレベルに、ポリシー要素の症状しきい値を設定します。vRealize Operations Manager は、症状しきい値を使用して [アラートの概要] と [ダッシュボード] のスコアに表示されるアラートをトリガーします。</p> <p>残り容量および残り時間ポリシー設定のバジスコア症状のしきい値は、選択したオブジェクトの次のタブに表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [環境] - [オブジェクト] - [分析] - [残り容量] ■ [環境] - [オブジェクト] - [分析] - [残り時間]

表 3-13. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースのポリシーの残り容量および残り時間要素の設定 (続き)

オプション	説明
リソース コンテナの使用可能な容量設定	<p>分析に含めるように選択したリソース コンテナやリソース、リソース（メモリや CPU など）のオーバーコミット タイプや値、および各リソース コンテナの容量バッファの割合が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 容量バッファ %。仮想マシンでそのすべてのリソースを消費しないように、仮想マシンで予約される容量の割合を定義します。容量バッファは、一部のリソースをフェイルオーバーのために確保するため、クラスタ オブジェクトとホスト オブジェクトで定義されます。 ■ オーバーコミット。メモリや CPU などのオーバーコミット タイプが表示されます。 ■ 値。容量リソースのオーバーコミット量が表示されます。 <p>この設定を変更するには、リソース コンテナを選択し、変更する値をダブルクリックします。</p>
残り時間計算と残りキャパシティ計算に影響を与えるその他の設定	<p>利用可能な設定は、選択するオブジェクト タイプにより異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ■ 高可用性。選択すると、vRealize Operations Manager は、オブジェクト タイプ グループの使用可能なキャパシティについて報告します。 <p>vRealize Operations Manager で高可用性 (HA) 設定を考慮することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ピーク時の考慮事項。選択すると、vRealize Operations Manager で、残り容量および残り時間の計算に負荷要素が含まれるようになります。 ■ コミットされたプロジェクト。選択すると、vRealize Operations Manager で、コミットされたプロジェクトが残り容量および残り時間の計算に考慮されるようになります（将来の容量要件を計画するために、1 つのオブジェクト タイプで 1 つ以上のプロジェクトをコミットし、これらのプロジェクトに容量シナリオを追加している場合）。 ■ キャパシティの計算。vRealize Operations Manager が報告の対象とするステータスを示します。容量分析の基準として、現在の値または値の傾向を選択できます。 ■ プロビジョニング時間バッファ。物理リソースまたは仮想リソースをプロビジョニングできる日数を示します。vRealize Operations Manager は、この数値を使用して、リソース タイプの残り容量および残り時間を計算し、残り時間スコアを差し引きます。 <p>適用されるポリシーで定義されたピーク時の考慮事項、コミットされたプロジェクト、およびプロビジョニング バッファの設定は、選択したオブジェクトの次のタブに表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [環境] - [オブジェクト] - [分析] - [残り容量] ■ [環境] - [オブジェクト] - [分析] - [残り時間]

ポリシーの負荷要素

負荷とは、ある一定時間でのオブジェクトに対するワークロードの測定値であり、CPU、メモリ、ネットワーク I/O、およびデータストア I/O が含まれます。ポリシーのオブジェクト タイプの負荷要素設定を有効にし、構成することにより、設定をオーバーライドし、vRealize Operations Manager でオブジェクトまたはオブジェクト タイプの一定期間におけるリソース使用量を分析して、設定に基づくワークロード履歴をレポートすることができます。

負荷要素の仕組み

負荷要素により、一定期間中のリソースおよび使用可能容量に対する需要に関する vRealize Operations Manager のレポート方法を決定します。

- ポリシーに負荷要素を含めると、負荷スコアを使用して、追加リソースを必要とするホストやマシン、および仮想マシンをそれほど必要としないホストを識別して、ご使用の環境におけるパフォーマンス問題を回避することができます。
- 容量および残り時間要素の [ピーク時の考慮事項] を選択した場合、vRealize Operations Manager により負荷要素が使用され、容量使用率のピークが表示されます。

- 負荷とは、負荷が負荷のノイズラインを上回る場合の、ある時間にわたる需要のパーセントです。たとえば、負荷ラインを需要の超過に使用される設定に基づき、ある一定時間でのワークロードの 70% に設定できます。vRealize Operations Manager が残り容量と残り時間を計算するとき、これらのスパイクとピークを考慮に入れることが必要となる場合があります。

負荷設定を設定するには、負荷分析設定を使用します。負荷の設定は、インフラストラクチャの監視用ポリシーと仮想マシンの監視用ポリシーとで異なることが必要となる場合があります。たとえば、インフラストラクチャ ポリシーの場合、負荷設定の推奨レベルは 10（警告）、30（緊急）、および 50（重大）です。仮想マシンの場合、負荷設定は 5（警告）、10（緊急）、および 20（重大）です。テスト用ポリシーと開発用ポリシーの場合、vRealize Operations Manager で、レベルが 10% に達するとアラートがトリガーされることが望ましいことがあります。本番用ポリシーの場合、通常はピーク使用のための十分な容量が存在することを確認する必要があります。

ポリシーの負荷要素をオーバーライドする場所

ポリシーの負荷分析設定を表示してオーバーライドするには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースで、[分析設定] をクリックし、左側ペインで 1 つまたは複数のオブジェクトを選択します。選択したオブジェクト タイプの負荷設定が、右側のペインに表示されます。

ポリシーの負荷要素を表示し、ポリシーの設定を構成します。

このポリシー要素を構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

表 3-14. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースでのポリシーの負荷要素設定

オプション	説明
ロック アイコン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
残り時間スコアおよび容量スコアの症状しきい値	<p>環境の基準を満たすようにバジスコアを更新するレベルに、ポリシー要素の症状しきい値を設定します。vRealize Operations Manager は、症状しきい値を使用して [アラートの概要] と [ダッシュボード] のスコアに表示されるアラートをトリガーします。</p> <p>[環境] - [オブジェクト] - [分析] - [負荷] を選択して、選択されたオブジェクトの負荷ポリシー設定のバジスコア症状のしきい値を表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。</p>
リソース コンテナの負荷設定	<p>リソース コンテナおよびポリシーの時間要素で定義された時間範囲の需要超過に対する設定を表示します。</p> <p>[環境] - [オブジェクト] - [分析] - [負荷] を選択して、選択されたオブジェクトの需要超過のパーセントを表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。</p> <p>ストレスを分析するウィンドウで、vRealize Operations Manager が負荷をチェックする時間を定義します。このチェックは、定義された時間（分）または時間ポリシー要素でデータ範囲に対して定義される全体範囲で行われ、ピーク負荷の時間を監視します。設定を変更するには、リソース コンテナ設定 ([ディスク領域] - [使用量] など) を選択し、[ストレスを分析するウィンドウ設定] をダブルクリックして、[任意]、[全範囲] のいずれかを選択します。設定が [任意] の場合、vRealize Operations Manager がオブジェクトを監視し、負荷のピーク時間を通知する間隔（分）の値を [分間のピーク時] で変更できます。</p>

ポリシーのコンプライアンス要素

コンプライアンスとは、環境内のオブジェクトが業界、政府、規制、または社内の標準に満たすようにするための測定です。ポリシーで、オブジェクト タイプのコンプライアンス要素の設定をロック解除して構成できます。基本ポリシー設定をオーバーライドして、vRealize Operations Manager で、仮想マシンとホストの比率、メモリ デマンド、CPU デマンドなどの仮想マシンと関連オブジェクトのコンプライアンス結果についてレポートできるようにします。

ポリシーのコンプライアンス要素をオーバーライドする場所

ポリシーのコンプライアンス分析設定を表示してオーバーライドするには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースで、[分析設定] をクリックし、左側ペインで 1 つまたは複数のオブジェクトを選択します。選択したオブジェクト タイプのコンプライアンス設定が、右側のペインに表示されます。

コンプライアンス ポリシー要素を表示して、ポリシーの設定を構成します。

このポリシー要素を構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

表 3-15. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースのポリシーのコンプライアンス要素の設定

オプション	説明
ロック アイコン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
バッジ スコア症状のしきい値	<p>環境の基準を満たすようにバッジスコアを更新するレベルに、ポリシー要素の症状しきい値を設定します。vRealize Operations Manager は、症状しきい値を使用して [アラートの概要] と [ダッシュボード] のスコアに表示されるアラートをトリガーします。</p> <p>[環境] - [オブジェクト] - [分析] - [コンプライアンス] を選択して、選択されたオブジェクトのコンプライアンス ポリシー設定のバッジ スコア シンptomのしきい値を表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。</p>

ポリシーの解放可能な容量の要素

解放可能な容量とは、オブジェクトのための CPU、メモリ、およびディスク領域のうち、無駄として指定された部分の測定値のことです。ポリシーのオブジェクト タイプで解放可能な容量要素の設定をオンにして構成し、設定をオーバーライドして、vRealize Operations Manager が、未使用または十分に使用されていないオブジェクトから、解放できる容量を分析して、報告できるようにします。その後、設定に基づいて、解放された容量を環境内の別のオブジェクトにプロビジョニングできます。

解放可能な容量の要素の機能

解放可能な容量の要素では、vRealize Operations Manager が環境内の各オブジェクトの CPU、メモリ、ディスク容量などのオブジェクトの解放可能な容量をレポートする方法を決定します。

解放可能な容量の要素をポリシーに含めると、解放可能な容量のスコアを使用して、解放可能であり、他のオブジェクトにプロビジョニング可能なリソース量を特定することができます。

ポリシーの解放可能な容量の要素をオーバーライドする場所

ポリシーの節約可能なキャパシティ分析設定を表示してオーバーライドするには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースで、[分析設定] をクリックし、左側ペインで 1 つまたは複数のオブジェクトを選択します。選択したオブジェクトタイプの解放可能な容量設定が、右側のペインに表示されます。

解放可能な容量ポリシー要素を表示し、ポリシーの設定を構成します。

このポリシー要素を構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

表 3-16. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースにおけるポリシーの解放可能な容量の要素の設定

オプション	説明
ロック アイコン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
バッジ スコア症状のしきい値	<p>環境の基準を満たすようにバッジスコアを更新するレベルに、ポリシー要素の症状しきい値を設定します。vRealize Operations Manager は、症状しきい値を使用して [アラートの概要] と [ダッシュボード] のスコアに表示されるアラートをトリガーします。</p> <p>[環境] - [オブジェクト] - [分析] - [解放可能な容量] を選択して、選択されたオブジェクトの解放可能な容量ポリシー設定のバッジ スコア症状のしきい値を表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。</p>
リソース コンテナの解放可能な容量の設定	<p>リソースが過剰サイズ、アイドル、またはパワーオフと判定されるときに vRealize Operations Manager がレポートするために使用する構成可能な割合を表示します。</p> <p>[環境] > [オブジェクト] > [分析] > [解放可能な容量] を選択して、選択されたオブジェクトのディスクと CPU のアイドル レベルの設定、およびリソースが過剰サイズ、アイドル、またはパワーオフであるとみなすのに使用されるパーセントを表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。</p> <p>選択されたオブジェクトの過剰サイズ、アイドル、パワーオフ、および未使用の容量設定を設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 推奨される容量が現在の容量の定義されているパーセントを下回ると、オブジェクトは過剰サイズであるとみなされます。たとえば、仮想マシンの過剰サイズ設定が 50% である場合、仮想マシンの容量が現在使用可能な容量の半分になると、その仮想マシンは過剰サイズであるとみなされます。 ■ オブジェクトの動作が、定義された時間の割合でアイドル レベルを下回ると、オブジェクトはアイドル状態であるとみなされます。たとえば、仮想マシンの CPU アイドルレベルが 100MHz に設定され、アイドル レベルのフラグが 90% に設定されている場合、CPU の速度がある時間の 90% で 100 MHz を下回ると、仮想マシンはアイドル状態であるとみなされます。 ■ オブジェクトが、定義された割合の時間パワーダウンされている場合、オブジェクトはパワーオフ状態であるとみなされます。たとえば、パワーオフ フラグが 90% に設定されている場合、仮想マシンが少なくとも 90% の時間パワーダウンされていると、その仮想マシンはパワーオフ状態であるとみなされます。 ■ 定義された日数の間、タイムスタンプ属性が変更されない、つまりオブジェクトがアクセスされない場合、オブジェクトは未使用であるとみなされます。たとえば、仮想マシンのディスク領域の解放可能なスナップショット領域のフラグが 60 日に設定されている場合、仮想マシンまたは仮想マシン上のファイルが 60 日間アクセスされないと、仮想マシンは未使用であるとみなされます。

ポリシーの密度要素

密度とは、需要に対する使用可能な CPU、および需要に対する使用可能メモリを基にした、オブジェクトのサイズ比の測定値です。ポリシーで、オブジェクトタイプの密度要素の設定をロック解除して構成できます。基本ポリシー設定をオーバーライドして、vRealize Operations Manager で、仮想マシンとホストの比率、メモリ デマンド、CPU デマンドなどの仮想マシンと関連オブジェクトの密度結果についてレポートできるようにします。たとえば、ホストマシンで仮想マシンの密度を軽減するには、一部の仮想マシンを別のホストに移動します。

ポリシーの密度要素をオーバーライドする場所

ポリシーの密度分析設定を表示してオーバーライドするには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースで、[分析設定] をクリックし、左側ペインで 1 つまたは複数のオブジェクトを選択します。選択したオブジェクトタイプの密度設定が、右側のペインに表示されます。

ポリシーの密度要素を表示し、ポリシーの設定を構成します。

このポリシー要素を構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

表 3-17. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースでのポリシーの密度要素設定

オプション	説明
ロック アイコン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
バッジ スコア症状のしきい値	<p>環境の基準を満たすようにバッジスコアを更新するレベルに、ポリシー要素の症状しきい値を設定します。vRealize Operations Manager は、症状しきい値を使用して [アラートの概要] と [ダッシュボード] のスコアに表示されるアラートをトリガーします。</p> <p>[環境] - [オブジェクト] - [分析] - [密度] を選択して、選択されたオブジェクトの密度ポリシー設定のバッジ スコア症状のしきい値を表示します。値はオブジェクトに適用されるポリシーで定義されます。</p>

ポリシーの時間要素

時間とは、オブジェクトのリソースの使用、定期的で繰り返し実施されるメンテナンス向けに選択されたメンテナンス スケジュールを vRealize Operations Manager が監視するスケジュールと日時の範囲のことを示します。ポリシーに含まれるオブジェクト タイプの時間要素の設定をオンにして構成すると、設定をオーバーライドし、指定した時刻に vRealize Operations Manager で、グループについてメトリックのレポートや分析の計算を行うことができます。

時間要素の仕組み

時間要素により、vRealize Operations Manager で特定のオブジェクト タイプのリソースをいつどのように追跡するかが決まります。

ポリシーの時間要素をオーバーライドする場所

ポリシーの時間分析設定を表示してオーバーライドするには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックして選択したポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースで、[分析設定] をクリックし、左側ペインで 1 つまたは複数のオブジェクトを選択します。選択したオブジェクト タイプの時間設定が、右側のペインに表示されます。

ポリシーの時間要素を表示し、ポリシーの設定を構成します。

このポリシー要素を構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

表 3-18. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの [ポリシーの時間要素] 設定

オプション	説明
ロック アイコン	ポリシー要素の設定をオーバーライドできます。これにより、ポリシーをカスタマイズして、ユーザーの環境内のオブジェクトを監視することができます。
使用量の追跡	<p>vRealize Operations Manager が、容量分析の計算を実行するタイミングを決定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [常時]。1 日 24 時間、週 7 日、追跡時間を監視します。 ■ [特定の日時]。使用時間を追跡するタイミングを選択します。
データ範囲	使用時間の分析に含める日数を設定します。
メンテナンス スケジュール	メンテナンス タスクを実行する時刻を設定します。メンテナンス時間中、vRealize Operations Manager では分析は計算されません。

ワークロード自動化の詳細

ポリシーのワークロード自動化オプションを設定して、vRealize Operations Manager が定義に従って環境内のワークロードを調整できるようにします。

[ワークロード自動化] ワークスペースの仕組み

ロック アイコンをクリックして、ポリシーに固有のワークロード自動化オプションのロックを解除し、構成します。ロック アイコンをクリックしてオプションのロックを解除すると、ポリシーは親ポリシーの設定を継承します。右側のグラフィックが更新され、変更内容が反映されます。

ポリシーのワークロード自動化を設定できる場所

ポリシーのワークロード自動化を設定するには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。次にプラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[ワークロード自動化] をクリックします。

表 3-19. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースでのワークロード自動化

オプション	説明
ワークロードの調整	vRealize Operations Manager がワークロードを調整する方法を選択します。 ポピュレーションが安定している場合は [積極的] 調整を選択します。競合が最小限に抑えられる一方で、ワークロードの移動が増えて、停止を引き起こすことがあります。 ポピュレーションが動的な場合は [保守的] 調整を選択します。潜在的な競合が表面化しますが、ワークロードの移動が減ります。
ワークロードの統合	vRealize Operations Manager がワークロードを統合する方法を選択します。統合ポリシー設定はクラスタ間の仮想マシンの配置に影響を与えません。 <ul style="list-style-type: none"> ■ デマンドが安定しているポピュレーションの場合、統合の度合いを高くします。この場合、ワークロードは可能な限り少ない数のホストに配置され、ライセンスと電力のコストが軽減されます。ただし、このアプローチでは、キャパシティの応答性が低下する可能性があります。 ■ デマンドが不規則なポピュレーションの場合、統合の度合いを低くします。この場合、すべての使用可能なホストが使用され、デマンドの急増への余地が広がります。ただし、このアプローチでは、ライセンスと電力のコストが増大します。
詳細設定	[詳細設定] をクリックして、ワークロードに対処するために vRealize Operations Manager が最初に移動する仮想マシンのタイプを選択します。

メトリックとプロパティの詳細の収集

属性タイプを選択してポリシーに含め、vRealize Operations Manager が環境内のオブジェクトからデータを収集可能にすることができます。属性タイプには、メトリック、プロパティ、およびスーパー メトリックが含まれます。各メトリックを有効化または無効化し、ワークスペースで選択したベース ポリシーからメトリックを継承するかどうかを決定します。

[メトリックとプロパティの収集] ワークスペースの仕組み

ポリシーを作成またはカスタマイズするときに、基本ポリシー設定をオーバーライドして、vRealize Operations Manager でアラートを生成するために使用するデータを収集したり、ダッシュボードスコアで結果をレポートできるようにします。








ポリシーを使用して vRealize Operations Manager で収集されるメトリックの編集
http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_editing_metrics_with_policy_in_vrom

[内容] - [症状の定義] で、メトリックとスーパーメトリック症状、メトリック イベント症状、プロパティ症状を定義します。

ポリシー属性をオーバーライドする場所

ポリシーのアラートの属性とプロパティ設定をオーバーライドするには、[管理] を選択し、[ポリシー] をクリックして、[ポリシー ライブラリ] タブをクリックし、プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆アイコンをクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[メトリックとプロパティの収集] をクリックします。選択したオブジェクト タイプの属性とプロパティ設定がワークスペースに表示されます。

表 3-20. [メトリックとプロパティの収集] のオプション

オプション	説明
アクション	1 つ以上の属性を選択し、[有効化]、[無効化]、または [継承] を選択してこのポリシーの状態と KPI を変更します。
フィルタ オプション	<p>[属性タイプ]、[状態]、[KPI]、[動的しきい値] ドロップダウン メニューでオプションの選択を解除し、属性のリストを絞り込みます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■  有効化。属性が計算されることを示しています。 ■  有効化 (強制)。依存性に帰因する状態の変化を示しています。 ■  無効化。属性が計算されないことを示しています。 ■  継承済み。この属性の状態が基本ポリシーから継承され、計算されることを示しています。 ■  継承済み。この属性の状態が基本ポリシーから継承され、計算されないことを示しています。 <p>[KPI] では、vRealize Operations Manager がダッシュボードに収集されたデータをレポートするときに、メトリック、プロパティ、またはスーパー メトリック属性を主要なパフォーマンス インジケータ (KPI) としてみなすかどうかを指定します。KPI の状態をフィルタリングし、KPI が有効、無効、または継承のいずれであるかに基づいて、ポリシーの属性を表示します。</p>
オブジェクト タイプ	オブジェクト タイプで属性のリストをフィルタします。
ページ サイズ	1 ページあたりに一覧表示する属性の数。
属性データ グリッド	<p>特定のオブジェクト タイプの属性を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 名前。選択したオブジェクト タイプのメトリックまたはプロパティの名前を特定します。 ■ タイプ。メトリック、プロパティ、またはスーパー メトリックのいずれかになる属性のタイプを区別します。 ■ アダプタ タイプ。選択したオブジェクト タイプ (ストレージ デバイスなど) に基づいて使用するアダプタを特定します。 ■ オブジェクト タイプ。環境内のオブジェクトのタイプ (StorageArray など) を特定します。 ■ 状態。メトリック、プロパティ、またはスーパー メトリックが基本ポリシーから継承されているかどうかを示します。 ■ KPI。主要なパフォーマンス インジケータが基本ポリシーから継承されているかどうかを示します。KPI の違反が発生すると、vRealize Operations Manager がアラートを生成します。 ■ 動的しきい値。動的しきい値 (DT) が基本ポリシーから継承されているかどうかを示します。

アラートとシンプトムの定義の詳細

環境内のオブジェクトに関する問題を vRealize Operations Manager で特定し、問題とみなされる条件が満たされた場合にアラートをトリガするため、アラートおよび症状の定義を有効または無効にできます。アラートは自動化できます。

[アラート/シンプトム定義] ワークスペースの仕組み

vRealize Operations Manager では、オブジェクトのデータが収集され、収集されたデータが、そのオブジェクト タイプのアラートの定義および症状の定義と比較されます。アラートの定義には、関連付けられた症状の定義が含まれ、属性、プロパティ、メトリック、イベントに関する条件が特定されます。

選択するベース ポリシーからアラートの定義を継承するローカル ポリシーを構成したり、ローカル ポリシーのアラートの定義と症状の定義をオーバーライドしたりできます。

ポリシーのアラートの定義およびシンプトムの定義を追加またはオーバーライドする前に、使用可能なアラートとシンプトムについて理解しておく必要があります。

- 使用可能なアラートの定義を表示するには、[内容] を選択し、[アラートの定義] をクリックします。
- 使用可能な症状の定義を表示するには、[内容] を選択し、[症状の定義] をクリックします。症状の定義は、メトリック、プロパティ、メッセージ、障害、早期警告スマート アラート、および外部イベントで使用できます。

有効または無効になっている問題とシンプトムの件数の概要、および基本ポリシーと比較したときの問題とシンプトムの変化の違いは、ポリシー ワークスペースの [分析設定] ペインに表示されます。

アラートの定義および症状の定義をオーバーライドする場所

ポリシーのアラートの定義および症状の定義をオーバーライドするには、[管理] を選択し、[ポリシー] をクリックして、[ポリシー ライブラリ] タブをクリックし、プラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆アイコンをクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[アラート/シンプトム定義] をクリックします。ワークスペースに定義が表示されます。

ポリシーのアラートの定義および症状の定義

ポリシーごとに、アラートの定義および症状の定義をオーバーライドできます。

■ ポリシーのアラート定義 (P. 145)

各ポリシーにはアラート定義が含まれています。各アラートは、症状と推奨の組み合わせを使用して、ある問題を障害や過負荷などに分類するための条件を識別します。ポリシーのアラート定義は有効または無効にできます。また、アラートがトリガされたときのアクションを自動化するように設定できます。

■ ポリシーに含まれる症状の定義 (P. 146)

各ポリシーには、症状の定義のパッケージが含まれています。各症状は、プロパティ、メトリック、またはイベントに対する明確なテスト条件を表します。ポリシー内の症状の定義を有効または無効にできます。

ポリシーのアラート定義

各ポリシーにはアラート定義が含まれています。各アラートは、症状と推奨の組み合わせを使用して、ある問題を障害や過負荷などに分類するための条件を識別します。ポリシーのアラート定義は有効または無効にできます。また、アラートがトリガされたときのアクションを自動化するように設定できます。

ポリシー アラート定義の仕組み

vRealize Operations Manager は、問題を使用してアラートを起動します。問題によって、いつオブジェクトに対し一連の症状が現れたのかが明らかになり、その問題への対処が必要になります。アラートは環境内の問題を示します。vRealize Operations Manager は、オブジェクトに関する収集データとそのオブジェクト タイプのアラート定義を比較して、定義済みの症状が当てはまるときにアラートを生成します。アラートが発生すると、vRealize Operations Manager はユーザーがアクションを実行するためのトリガーとなる症状を提示します。

一部のアラート定義には定義済みの症状が含まれます。アラート定義に症状を含めて、アラートを有効にすると、症状が当てはまるときにアラートが生成されます。

[アラートの定義] ペインには、アラートの名前、定義されている症状の数、アダプタ、ホストやクラスタなどのオブジェクト タイプ、アラートが有効かどうか ([ローカル] で示されます)、無効かどうか ([非ローカル] で示されます)、継承されているかどうかが表示されます。デフォルトでは、アラートは有効であることを示す緑色のチェックマーク付きで継承されます。

優先順位の最も高い推奨事項に関連アクションがある場合は、ポリシーのアラート定義を自動化できます。

特定のアラート一式を表示するには、バッジタイプ、重要度タイプ、およびアラートの状態を選択し、ビューにフィルタを適用します。たとえば、仮想マシンの障害アラートを送信するポリシーを設定します。

ポリシー アラート定義を変更する場所

ポリシーに関連付けるアラートを変更するには、左側のペインで [管理]、[ポリシー] をクリックし、[ポリシー ライブラリ] タブを選択してからプラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[アラート/シンプトム定義] をクリックします。選択されたオブジェクト タイプに関するアラートの定義および症状の定義がワークスペースに表示されます。

表 3-21. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースに対するアラート定義

オプション	説明
アクション	1 つ以上のアラート定義を選択し、[有効化]、[無効化]、または [継承] を選択してこのポリシーの状態を変更します。
フィルタ オプション	<p>[ファイルタイプ] および [状態] ドロップダウン メニューでオプションの選択を解除し、シンプトム定義のリストを絞り込みます。</p> <p>[影響] は、アラートが適用される健全性、リスク、効率のバッジを示します。</p> <p>[クリティカル度] は、アラート定義が適用される情報、クリティカル、緊急、警告、自動のクリティカル度の各タイプを示します。</p> <p>[自動化] は、アラートがトリガされたときに自動化が有効になっているアクションを示したり、無効なアクションまたは継承されているアクションを示します。自動化が有効になっているアクションは、緑色のチェックマーク付きで継承として表示されることがあります。これは、ポリシーが互いに設定を継承できるからです。たとえば、ベース ポリシーの自動化の設定が緑色のチェックマークの付いた [ローカル] である場合、この設定を継承する他のポリシーにはこの設定が緑色のチェックマーク付きで継承と表示されます。</p>
オブジェクト タイプ	オブジェクト タイプでアラートの定義リストをフィルタします。
ページ サイズ	1 ページあたりに一覧表示するアラート定義の数。
フィルタ	アラートの定義リストのデータを特定します。
アラート定義データ グリッド	<p>オブジェクト タイプのアラートの定義に関する情報が表示されます。アラート定義名の上にマウスを置くと、アラート定義のフルネームと重要度アイコンがツールチップに表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 名前。アラート定義のわかりやすい名前。 ■ 症状の定義。アラートに定義されている症状の数。 ■ 実行可能な推奨事項。優先順位が最も高いアクションを含んだ推奨のみ。自動化できるのは、その推奨だけです。 ■ 自動化。アクションが [ローカル] に設定されている場合、そのアクションではアラートがトリガされたときの自動化が有効です。自動化が有効になっているアクションは、緑色のチェックマーク付きで継承として表示されることがあります。これは、ポリシーが互いに設定を継承できるからです。たとえば、ベース ポリシーの自動化の設定が緑色のチェックマークの付いた [ローカル] である場合、この設定を継承する他のポリシーにはこの設定が緑色のチェックマーク付きで継承と表示されます。 ■ アダプタ。アラートが定義されているデータ ソース タイプ。 ■ オブジェクト タイプ。アラートが適用されるオブジェクトのタイプ。 ■ 状態。アラート定義の状態。有効 ([ローカル] によって示されます)、無効 ([非ローカル] によって示されます)、またはベース ポリシーからの継承です。

このパッケージを構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。

ポリシーに含まれる症状の定義

各ポリシーには、症状の定義のパッケージが含まれています。各症状は、プロパティ、メトリック、またはイベントに対する明確なテスト条件を表します。ポリシー内の症状の定義を有効または無効にできます。

ポリシーに含まれる症状の定義の仕組み

vRealize Operations Manager では、有効になっている症状を使用してアラートを生成します。アラート定義で使用された症状が当てはまり、アラートが有効になっている場合、アラートが生成されます。

オブジェクトに症状があるときは、問題が存在するため、その問題を解決するための対策を取る必要があります。アラートが発生すると、vRealize Operations Manager にトリガーとなる症状（これにより環境内のオブジェクトを評価できます）、およびアラートの解決方法に関する推奨が提示されます。

オブジェクトの症状を評価するために、メトリック、スーパー メトリック、プロパティ、メッセージ イベント、および障害について、症状のパッケージをポリシーに含めることができます。ポリシーが適用されるオブジェクトから収集されたデータの評価に使用される基準を決定するための症状を、有効または無効にできます。しきい値、重要度、待機サイクル、およびキャンセル サイクルを上書きすることもできます。


[症状] ペインには、症状の名前、関連付けられた管理バックのアダプタ、オブジェクトタイプ、メトリックまたはプロパティタイプ、トリガーの定義（CPU 使用量、症状の状態、トリガー条件など）が表示されます。パッケージ内の特定の症状セットを表示するときは、アダプタタイプ、オブジェクトタイプ、メトリックまたはプロパティタイプ、症状の状態を選択できます。

アラートで症状が要求されると、症状の状態は有効になりますが、薄く表示されるため変更できません。要求された症状の状態には、情報アイコンが含まれています。この情報アイコンの上にマウスを置くと、この症状を要求したアラートを特定できます。

ポリシーに含まれる症状の定義を変更できる場所

症状のポリシー パッケージを変更するには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。次にプラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[アラート/シムptom定義] をクリックします。選択されたオブジェクトタイプに関するアラートの定義および症状の定義がワークスペースに表示されます。

表 3-22. [監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの症状の定義

オプション	説明
アクション	1 つ以上のシムptom定義を選択し、[有効化]、[無効化]、または [継承] を選択してこのポリシーの状態を変更します。
フィルタ オプション	<p>[ファイルタイプ] および [状態] ドロップダウン メニューでオプションの選択を解除し、シムptom定義のリストを絞り込みます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■  有効化。シムptomの定義が含まれることを示しています。 ■  有効化（強制）。依存性に帰因する状態の変化を示しています。 ■  無効化。シムptom定義が含まれないことを示しています。 ■  継承済み。このシムptom定義の状態が基本ポリシーから継承され、含められることを示しています。 ■  継承済み。このシムptom定義の状態が基本ポリシーから継承され、含められないことを示しています。 <p>[ファイルタイプ] では、HT および DT メトリック、プロパティ、メッセージ、障害、およびメトリックなどのイベント、およびスマート早期警告に適用するシムptom定義をリストに表示するかどうかを指定します。</p> <p>[状態] では、有効化、無効化、および継承されたシムptom定義をシムptom定義リストに表示するかどうかを指定します。</p>
オブジェクトタイプ	オブジェクトタイプでシムptom定義リストをフィルタします。
ページサイズ	1 ページあたりに一覧表示する症状の定義の数。
フィルタ	症状の定義リストのデータを特定します。
症状定義データ グリッド	<p>オブジェクトタイプの症状の定義に関する情報が表示されます。症状の定義名の上にマウスを置くと、症状の定義のフルネームがツールチップに表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 名前。[内容] 領域で症状の定義リストに定義された症状の定義名。 ■ アダプタ。アラートが定義されているデータ ソースタイプ。 ■ オブジェクトタイプ。アラートが適用されるオブジェクトのタイプ。 ■ タイプ：症状の定義を評価する必要があるオブジェクトタイプ。 ■ トリガー。症状の定義の数、選択したオブジェクトタイプおよびメトリック、症状の定義に割り当てられた数値、症状の重要度、症状の定義に適用される待機サイクルおよびキャンセル サイクルの回数に基づく、静的または動的しきい値。 ■ 状態。症状の定義の状態。有効、無効、またはベース ポリシーからの継承です。 ■ 条件。しきい値でのアクションを有効にします。[オーバーライド] に設定すると、しきい値を変更できます。それ以外の場合はデフォルトに設定します。 ■ しきい値。しきい値を変更するには、[状態] を [有効]、[条件] を [オーバーライド] に設定して、[シムptomしきい値の上書き] ダイアログボックスに新しいしきい値を設定する必要があります。

このパッケージを構成しないと、選択したベース ポリシーの設定が継承されます。






カスタム プロファイルの詳細

カスタム プロファイルを使用すると、利用可能なキャパシティやオブジェクト構成に応じて、指定したオブジェクトが環境にあといくつ収まるかがわかります。ポリシーのカスタム プロファイルを有効または無効にできます。

ポリシーのカスタム プロファイルを設定できる場所

ポリシーをオブジェクト グループに適用するには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。次にプラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[カスタム プロファイル] をクリックします。

表 3-23. カスタム プロファイルのオプション

オプション	説明
アクション	1 つ以上のプロファイルを選択し、[有効化]、[無効化]、または [継承] を選択してこのポリシーの状態を変更します。
フィルタ オプション	<p>[状態] ドロップダウン メニューでオプションの選択を解除し、属性のリストを絞り込みます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■  有効化。プロファイルが計算されることを示しています。 ■  有効化 (強制)。依存性に帰因する状態の変化を示しています。 ■  無効化。プロファイルが計算されないことを示しています。 ■  継承済み。このプロファイルの状態が基本ポリシーから継承され、計算されることを示しています。 ■  継承済み。このプロファイルの状態が基本ポリシーから継承され、計算されないことを示しています。
オブジェクト タイプ	オブジェクト タイプでプロファイルのリストをフィルタします。

ポリシーのグループ詳細への適用

ローカル ポリシーを 1 つまたは複数のオブジェクト グループに割り当て、VMware vRealize Operations Manager がポリシー内の設定に基づいてオブジェクトを分析し、定義されたしきい値レベルに違反した場合にはアラートをトリガして、ダッシュボード、ビュー、およびレポートに結果を表示できるようにします。

[ポリシーのグループへの適用] ワークスペースの仕組み

ポリシーを作成するとき、または既存のポリシーの設定を変更するときに、ポリシーを 1 つまたは複数のオブジェクト グループに適用します。VMware vRealize Operations Manager はポリシー内の設定を使用し、関連するオブジェクトのデータを分析および収集して、データをダッシュボード、ビュー、およびレポートに表示します。

ポリシーをグループに適用する場所

ポリシーをオブジェクト グループに適用するには、[管理]、[ポリシー]、[ポリシー ライブラリ] タブの順にクリックします。次にプラス記号をクリックしてポリシーを追加するか、鉛筆をクリックしてポリシーを編集します。[監視ポリシーの追加] または [監視ポリシーの編集] ワークスペースの左側で、[ポリシーのグループへの適用] をクリックします。

[ポリシーのグループへの適用] のオプション

ポリシーをオブジェクトのグループに適用するには、ワークスペースでオブジェクト グループのチェック ボックスを選択します。

これで、ポリシーに関連付けられた各オブジェクト グループの詳細を表示できます。[ポリシー] - [アクティブ ポリシー] - [関連オブジェクト] - [グループ] を選択し、グループのリスト内のオブジェクト グループをクリックして、[詳細] ペインにサマリを表示します。

スーパー メトリックの構成

スーパー メトリックとは、1 つ以上のメトリックを含む数式です。スーパー メトリックはユーザー自身が設計するカスタム メトリックで、メトリックの組み合わせを単一のオブジェクトまたは複数のオブジェクトから追跡する場合に便利です。環境の動作に関して把握しておかなければならない内容が 1 つのメトリックで理解できない場合に、スーパー メトリックを定義できます。

定義したスーパー メトリックを 1 つ以上のオブジェクトタイプに割り当てます。この操作により、そのオブジェクトタイプのオブジェクトのスーパー メトリックが算出されるため、メトリックの表示が簡素化されます。たとえば、すべての仮想マシンの平均 CPU 使用率を計算するスーパー メトリックを定義し、そのスーパー メトリックをクラスタに割り当てると、そのクラスタのすべての仮想マシンの平均 CPU 使用率がクラスタのスーパー メトリックとして報告されます。

ポリシーでスーパー メトリック属性を有効にしている場合は、ポリシーに関連付けられているオブジェクトのグループからスーパー メトリックを収集することもできます。

スーパー メトリックの数式は複雑なため、スーパー メトリックを構築する前に計画してください。予測されるオブジェクト動作についてのアラートを送信するスーパー メトリックを作成するために重要なのは、自身のエンタープライズとデータを把握しておくことです。スーパー メトリックの構成を開始する前に、このチェックリストを使用して、自身の環境の最も重要な側面を特定してください。

表 4-1. スーパー メトリック設計のチェックリスト

<input type="checkbox"/> 追跡する動作に関与するオブジェクトを判別します。	使用するメトリックの定義時に、特定のオブジェクトまたはオブジェクトタイプのいずれかを選択できます。たとえば、特定のオブジェクト VM001 と VM002 を選択することも、オブジェクトタイプ「仮想マシン」を選択することもできます。
<input type="checkbox"/> スーパー メトリックに含めるメトリックを決定します。	ネットワークを介したパケット転送を追跡する場合は、受信パケットと送信パケットの比が主眼となるため、受信パケットと送信パケットがメトリックとなります。もう 1 つのスーパー メトリックの一般的な利用法では、選択したオブジェクトタイプの平均的 CPU 使用量または平均的メモリ使用量がメトリックとなる場合もあります。
<input type="checkbox"/> メトリックをどのように組み合わせるか、あるいは比較するかを決定します。	たとえば、受信パケットと送信パケットの比を把握するには、2 つのメトリックを分割する必要があります。オブジェクトタイプの CPU 使用量を追跡する場合は、平均使用量を特定したい場合もあれば、そのタイプの任意のオブジェクトの使用量の最高値または最低値を特定したい場合もあります。より複雑なシナリオでは、定数や三角関数を使用する数式が必要な場合もあります。
<input type="checkbox"/> スーパー メトリックをどこに割り当てるかを決定します。	スーパー メトリックで追跡するオブジェクトを定義し、追跡されるオブジェクトが含まれるオブジェクトタイプにそのスーパー メトリックを割り当てます。グループ内のオブジェクトをすべて監視するには、ポリシーでスーパー メトリックを有効にし、オブジェクトグループにそのポリシーを適用します。

表 4-1. スーパー メトリック設計のチェックリスト (続き)

<input type="checkbox"/> スーパー メトリックを追加するポリシーを決定します。	スーパー メトリックを作成したら、ポリシーに追加します。詳細については、 「vRealize Operations Manager のポリシー ワークスペース (P. 130)」 を参照してください。
<input type="checkbox"/> 操作と機能について十分に理解します。	演算子と機能については、 スーパー メトリックの関数と演算子 を参照してください。

スーパー メトリックで他にできること

- システム監査レポートを生成し、環境内のスーパー メトリックを確認します。詳細については、[vRealize Operations Manager のシステム監査](#)を参照してください。
- スーパー メトリックに基づいてシンプトムを定義し、アラート定義を作成して、環境内のオブジェクトのパフォーマンスを通知します。詳細については、[「メトリック症状およびスーパー メトリック症状について \(P. 71\)」](#)を参照してください。
- ポリシーのスーパー メトリックの利用法について理解します。詳細については、[「vRealize Operations Manager のポリシー ワークスペース \(P. 130\)」](#)を参照してください。
- OPS CLI コマンドを使用して、スーパー メトリックをインポート、エクスポート、構成および削除します。詳細については、OPS CLI のドキュメントを参照してください。
- メトリックのカスタム セットを作成して、メトリック関連のウィジェットを作成します。構成されたメトリックおよび選択されたオブジェクトタイプに基づいてサポートされたウィジェットが表示されるように、特定のアダプタおよびオブジェクトタイプに対してさまざまなメトリックのセットを定義する 1 つ以上のファイルを構成できます。詳細については、[「メトリック構成の管理 \(P. 168\)」](#)を参照してください。

この章では次のトピックについて説明します。

- [スーパー メトリックの作成 \(P. 150\)](#)
- [スーパー メトリックを拡張する \(P. 153\)](#)
- [スーパー メトリックのエクスポートとインポート \(P. 154\)](#)

スーパー メトリックの作成

環境の健全性を確認したい場合で、分析を実行するために適切なメトリックが見つからないときは、スーパー メトリックを作成します。

手順

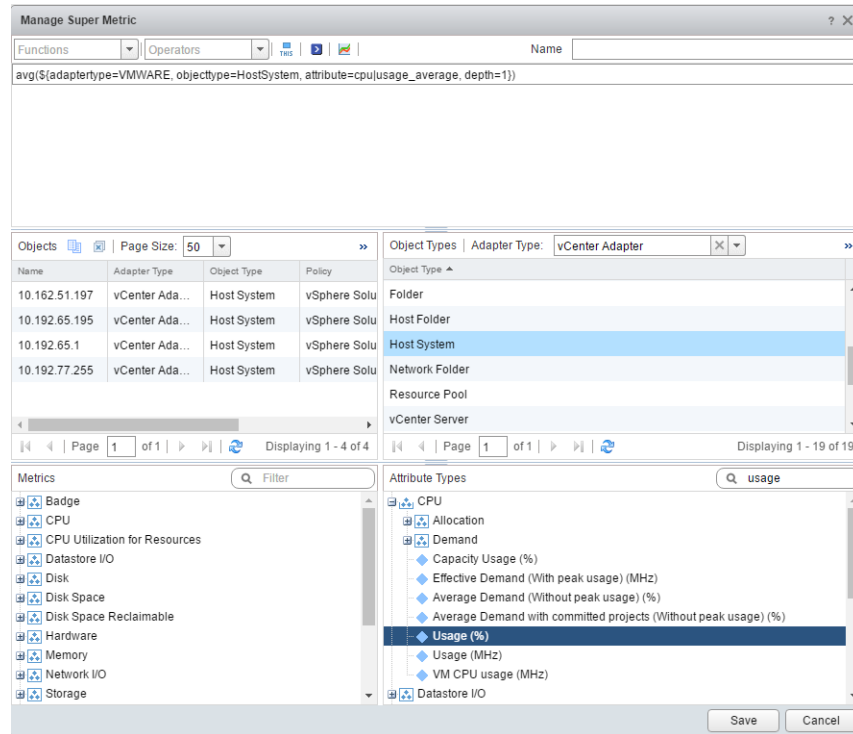
- 1 [内容] - [スーパー メトリック]を選択し、[追加] アイコンをクリックします。
- 2 [名前] テキスト ボックスに、**SM-AvgVMCPUUsage%**のような、意味のあるスーパー メトリックの名前を入力します。
- 3 スーパー メトリックの数式を定義します。

使用する各関数や演算子を選択し、さらに各関数や演算子で使用するメトリックや属性のタイプを選択します。たとえば、すべての仮想マシンの平均 CPU 使用率を取り込むスーパー メトリックを追加するには、次のタスクを実行します。

- a 関数については、[avg] を選択します。
- b [演算子] テキスト ボックスで、左丸かっこを選択してから、右丸かっこを選択します。2 つのかっこの間をクリックして、数式にカーソルを置きます。
- c [オブジェクト タイプ] ペインの [アダプタ タイプ] テキスト ボックスで、[vCenter アダプタ] を選択します。

- d [このオブジェクト] アイコンをクリックし、オブジェクト タイプのリストから、[仮想マシン] を選択します。
- [このオブジェクト] アイコンが選択されていない場合、スーパー メトリック関数で長い説明のオブジェクトが表示されます。
- e [属性タイプ] ペインで、CPU カテゴリを展開し、スクロール ダウンして [使用率 (%)] メトリックをダブルクリックします。

数式が数学関数として表示されます。この数式をテキスト形式で表示するには、[数式説明の表示] アイコンをクリックします。数式の構文が誤っている場合は、エラー メッセージが表示されます。この数式の最後は **depth=1** です。**depth=1** で、関係チェーンにおいて仮想マシンの 1 つ上のレベルのオブジェクト タイプにスーパー メトリックを割り当て、スーパー メトリックがオブジェクト タイプのメトリックとして表示されるようにします。**depth=2** によって、2 レベル上の仮想マシンであるオブジェクト タイプ（たとえばクラスタ）にスーパー メトリックを割り当



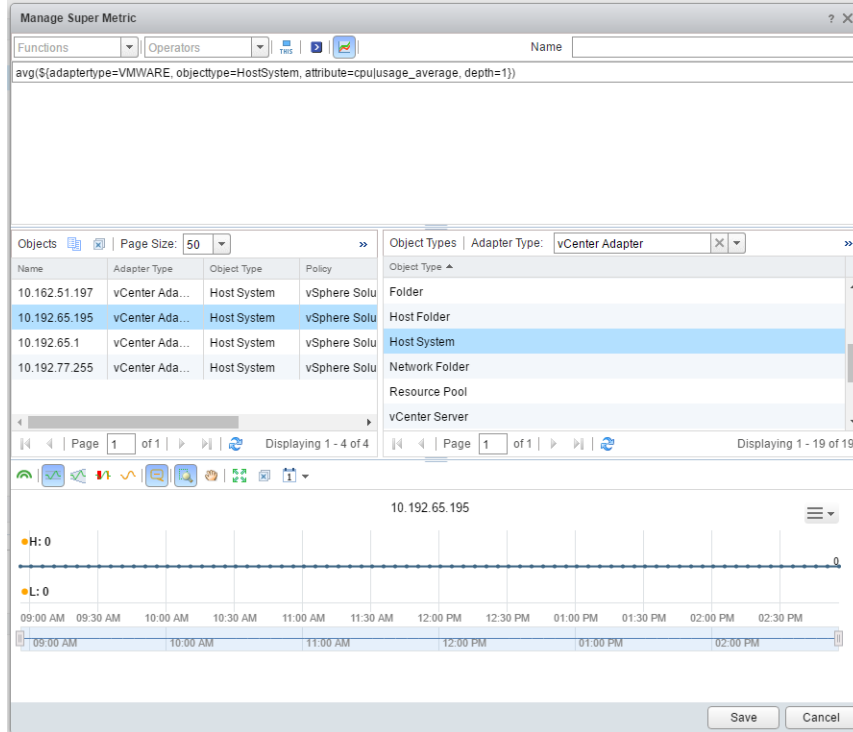
てます。

- 4 **depth=1** のオブジェクト タイプにスーパー メトリックを割り当てるには、**1** ではなく **2** を入力して、**depth=2** を表示します。

- 5 スーパー メトリックの数式が正しく作成されたことを確認します。

- [スーパーメトリックの可視化] アイコンをクリックします。
- [オブジェクト] ペインで、リストされたオブジェクトのいずれかをダブルクリックします。

メトリック グラフが表示され、オブジェクトに対して収集されたメトリックの値が表示されます。グラフに時間の経過に伴う値が表示されていることを確認します。



- [保存] をクリックします。
- スーパー メトリックをオブジェクト タイプに割り当て、vRealize Operations Manager がターゲット オブジェクトのスーパー メトリックを計算して、そのオブジェクト タイプのメトリックとして表示するようにします。
 - スーパー メトリック ワークスペースで、スーパー メトリックを選択します。
 - [オブジェクト タイプ] タブで、[追加] アイコンをクリックします。
 - [オブジェクト タイプの選択] テキスト ボックスで、必要なオブジェクトを選択します。たとえば、[vCenter アダプタ] の下でホストシステムに対するスーパー メトリックを作成した場合は、[vCenter アダプタ] を展開し、[ホストシステム]を選択します。
 - [選択] をクリックします。

1 回の収集サイクルの完了後、指定したオブジェクト タイプの各オブジェクトについてスーパー メトリックが表示されます。たとえば、すべての仮想マシンの平均 CPU 使用率を計算するスーパー メトリックを定義し、このスーパー メトリックをホストシステムのオブジェクト タイプに割り当てた場合などです。1 回の収集サイクルが完了すると、このスーパー メトリックが各ホストのスーパー メトリックとして表示されます。

次に進む前に

[ポリシー] - [ポリシーの編集] > [属性] ワークスペースで、ユーザーは各スーパー メトリックを選択して、有効にする必要があります。[\[カスタム ポリシー \(P. 120\)\]](#) を参照してください。スーパー メトリックがデータの収集と処理を開始するために、少なくとも 1 つ収集サイクルの間待機します。次に、[すべてのメトリック] タブでスーパー メトリックを確認します。

スーパー メトリックを拡張する

vRealize Operations Manager では、句やリソース エントリ エイリアスを使用して、スーパー メトリックを拡張することができます。

where 句

where 句は、スーパー メトリックに特定のメトリック値を使用するべきかをチェックします。この句を使用して、**where = "metric_group|my_metric > 0** のように、同じオブジェクトの異なるメトリックを参照できます。

例、

```
count({$adaptype = ExampleAdapter, objecttype = ExampleObject, metric = ExampleGroup|Rating, depth=2, where = "==1"})
```

リソース エントリ エイリアス

リソース エントリは、スーパー メトリックの計算で、vRealize Operations Manager からメトリック データを取得するために使用します。リソース エントリを含む式は、**\$** で始まり、その後に **{...}** ブロックが続きます。スーパー メトリックの計算では、同じリソース エントリが複数回必要になる場合があります。計算の変更が必要な場合は、それぞれすべてのリソース エントリに変更を加える必要があります。エラーが起きる可能性があります。式を書き直すには、リソース エントリ エイリアスを使用してください。

次の例では、リソース エントリを 2 回使用しています。

```
(min({$adapterkind=VMWARE, resourcekind=HostSystem, attribute= cpu|demand|active_longterm_load, depth=5, where=">=0"}) + 0.0001)/(max({$adapterkind=VMWARE, resourcekind=HostSystem, attribute=cpu|demand|active_longterm_load, depth=5, where=">=0"}) + 0.0001)"
```

リソース エントリ エイリアスを使用することで、式は次のように記述できます。ともに式の出力は同じです。

```
(min({$adapterkind=VMWARE, resourcekind=HostSystem, attribute= cpu|demand|active_longterm_load, depth=5, where=">=0"} as cpuload) + 0.0001)/(max(cpuload) + 0.0001)"
```

リソース エントリ エイリアスを使用するときは、次のガイドラインに従ってください。

- エイリアスを作成するため、リソース エントリに **as** と **alias:name** を続けます。例、**[\${...}] as alias_name]**
- エイリアスには、**()[]+-*/%|&! =<>.,?:\$** の特殊文字を含めることはできず、数字で始めることはできません。
- エイリアスの名前には、スーパー メトリック式のすべての名前と同じように、大文字と小文字を区別します。
- エイリアス名の使用はオプションです。定義したエイリアスは、式で使わなくてもかまいません。
- 同じエイリアス名を複数指定することはできません。例、**`\${resource1,...} as r1 + `\${resource2,...} as R1**
- 同じリソース エントリに複数のエイリアスを指定できます。例、**[\${...}] as a1 as a2]**。

条件式 ? の 3 項演算子

式で 3 項演算子を使用して、条件式を実行することができます。

例、**expression_condition ? expression_if_true : expression_if_false**

条件式の結果は、数に変換されます。値が 0 以外の場合、条件は true とみなされます。

例：**-0.7 ? 10 : 20** の結果は 10 です。**2 + 2 / 2 - 3 ? 4 + 5 / 6 : 7 + 8** の結果は 15 (7 + 8) です。

条件に応じて、**expression_if_true** または **expression_if_false** が実行されますが、両方は実行されません。このため、次のような式を作成できます。**`${this, metric=cpu|demandmhz} as a != 0 ? 1/a : -13`** 項演算子では、他の 3 項演算子を含め、他の演算子をすべての式に含めることができます。

例、**`! 1 ? 2 ? 3 : 4 : 5`** の結果は 5 です。

スーパー メトリックのエクスポートとインポート

スーパー メトリックを vRealize Operations Manager インスタンスからエクスポートし、別の vRealize Operations Manager インスタンスにインポートすることができます。たとえば、テスト環境でスーパー メトリックを開発した後に、テスト環境からエクスポートし、本番環境でできるようにインポートできます。

インポートするスーパー メトリックにターゲット インスタンスに存在しないオブジェクトへの参照が含まれる場合、インポートが失敗します。vRealize Operations Manager は簡単なエラー メッセージを返し、詳細情報をログ ファイルに書き込みます。

手順

- 1 スーパー メトリックをエクスポートします。
 - a [内容]-[スーパー メトリックス] の順に選択します。
 - b エクスポートするスーパー メトリックを選択し、[選択したスーパー メトリックのエクスポート] アクション アイコンをクリックします。

vRealize Operations Manager によって、スーパー メトリック ファイル (**SuperMetric.json** など) が作成されます。
 - c スーパー メトリック ファイルをコンピュータにダウンロードします。
- 2 スーパー メトリックをインポートします。
 - a [内容]-[スーパー メトリック] を選択し、[スーパー メトリックのインポート] アクション アイコンをクリックします。
 - b (任意)。インポートするスーパー メトリックと同じ名前を持つスーパー メトリックがターゲット インスタンスに存在する場合は、既存のスーパー メトリックを上書きすることも、またはインポートをスキップすることもできます (インポートのスキップがデフォルト)。

オブジェクトの構成

メトリックやアラートを含む、オブジェクト管理の機能（ダッシュボードとポリシーに事前に組み込まれている機能や、カスタム監視ツールに統合する機能など）を使用すると、稼働し続ける必要があるオブジェクト、アプリケーションおよびシステムに注意することができます。

vRealize Operations Manager は、環境内のオブジェクトを検出して、それらを使用できるようにします。vRealize Operations Manager が提供する情報から、オブジェクトにすばやくアクセスして構成できます。たとえば、データストアが接続されているか、データを提供しているかどうか、または仮想マシンをパワーオンできるかどうかを確認できます。

オブジェクトの検出

オブジェクトの検出では、システムの環境内のオブジェクトのデータを監視して収集できるため、vRealize Operations Manager は、システムの稼働時間を維持し、仮想マシンからアプリケーション、ストレージまで、物理、仮想およびクラウド インフラストラクチャ全体にわたるすべてのシステム リソースの良好な健全性を継続するための不可欠なツールになります。

監視可能なオブジェクトの例は次のとおりです。

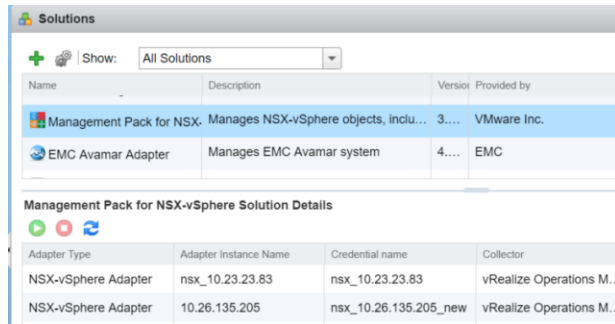
- vCenter Server
- 仮想マシン
- サーバ/ホスト
- コンピューティング リソース
- リソース プール
- データセンター
- ストレージ コンポーネント
- スイッチ
- ポート グループ
- データストア

アダプタ – オブジェクト検出の鍵

vRealize Operations Manager は、管理バックの中心コンポーネントであるアダプタを使用して、オブジェクトからデータとメトリックを収集し、vRealize Operations Manager ソリューションを構成します。たとえば、vSphere Solution を構成する場合は、一意の名前やポート番号など、環境に合わせてカスタマイズしたアダプタ インスタンスを作成します。アダプタ インスタンスは、デプロイ内の vCenter Server ごとに作成する必要があります。

UI で既存のアダプタを特定するには、[[ホーム] > [管理] > [ソリューション]] の順に選択します。

スクリーンショットに示すように、[ソリューション] 画面の上部には、利用可能なソリューションのリストが表示されます。ソリューションを選択すると、利用可能なアダプタが画面の下半分に表示されます。各アダプタに関連する既存のアダプタ インスタンスは 2 番目の列に表示されます。



管理パックとアダプタの構成の詳細については、[第 1 章「データ ソースへの vRealize Operations Manager の接続 \(P. 9\)」](#)を参照してください。

新しいアダプタ インスタンスを作成すると、アダプタで指定されたオブジェクトからデータの検出と収集が開始され、それらの間の関係が記録されます。これにより、オブジェクトの管理を開始できます。

オブジェクトについて

オブジェクトとは、ミッションクリティカルな IT アプリケーションの構造的コンポーネントで、オブジェクトの例には、仮想マシン、データストア、仮想スイッチ、ポート グループがあります。

ダウンタイムはコスト（リソースの未使用とビジネス機会の損失）と同等であるため、環境内のオブジェクトを正常に特定、監視および追跡することは極めて重要です。目標は、何かおかしいとユーザーが気付く前でも、問題をプロアクティブに隔離、トラブルシューティングおよび修正することです。

ユーザーが問題を実際に報告した場合は、迅速で総合的な解決策を提供してください。

vRealize Operations Manager で定義されるオブジェクトの完全なリストについては、[「オブジェクトの検出 \(P. 155\)」](#)を参照してください。

vRealize Operations Manager では、パフォーマンス情報と環境内のポジティブまたはネガティブ イベントに関連付ける単一のインターフェイスにより、物理、仮想およびクラウド インフラストラクチャ全体にわたる、アプリケーション、ストレージ、ネットワークなどのオブジェクトを可視化できます。

オブジェクトの管理

大規模なインフラストラクチャを監視する場合、特にインフラストラクチャのより多くの部分に動的な監視とアラートを拡張するソリューションを追加すると、vRealize Operations Manager ではオブジェクトおよび対応するメトリックの数が急速に増加します。vRealize Operations Manager では、イベントと問題を常時把握するアンプル ツールを提供しています。

オブジェクトの追加およびオブジェクト関係の構成

アダプタ インスタンスを作成すると、vRealize Operations Manager はオブジェクトとオブジェクトの関係を自動的に検出します。vRealize Operations Manager によって記録された接続ではなく、抽象概念を使用し、監視対象のオブジェクトを手動で追加してオブジェクト関係を構成することもできます。vRealize Operations Manager では、オブジェクト間の従来の親子関係を検出する場合がありますが、通常は関連付けられる可能性のないオブジェクト間の関係を作成できます。たとえば、会社の部門をサポートするすべてのデータストアが関連付けられるように構成することもできます。

オブジェクトが関連付けられると、1 つのオブジェクトの問題が関連するオブジェクトでアノマリとして表示されます。そのため、オブジェクトの関係は環境内の問題をすばやく特定することに役立ちます。作成するオブジェクト関係はカスタム グループと呼ばれます。

カスタム グループ

自動化された管理システムを作成するには、すぐに把握できるようにオブジェクトを構成する方法が必要です。カスタム グループを使用すると、高度なレベルの自動化を達成できます。監視戦略をサポートするカスタム グループ属性の複数のオプションがあります。

静的になるように、または指定するメンバーシップ基準で自動的に更新されるようにグループを指定できます。OS の種類が Linux でパワーオン状態のすべての仮想マシンの静的でないグループを考慮します。新しい Linux 仮想マシンをパワーオンすると、自動的にグループに追加され、ポリシーが適用されます。

柔軟性を向上するために、特定のカスタム グループに常に含まれるようにしたり、除外されるように個別のオブジェクトを指定することもできます。または、本番環境とテスト環境で異なるセットのアラートとキャパシティ計算を含めることができます。

アプリケーションの管理

vRealize Operations Manager では、さまざまな構成階層で仮想マシンのグループまたはその他のオブジェクトを含めることができるコンテナまたはオブジェクト作成できます。この新アプリケーションは、単一のオブジェクトとして管理可能で、グループの子オブジェクトから健全性バッジとアラートを集計できます。

たとえば、トレーニング環境の Web、アプリケーションおよびデータベース層を監視するように、オンライン トレーニング システムのシステム管理者から要請された場合は、それぞれの層の関連するトレーニング オブジェクトをグループ化するアプリケーションを構築してください。いずれかのオブジェクトで問題が発生すると、その問題がアプリケーションの表示に強調表示され、問題の原因を調査できます。

オブジェクト管理の機能

メトリックやアラートを含む、オブジェクト管理の機能（ダッシュボードとポリシーに事前に組み込まれている機能や、カスタム監視ツールに統合する機能など）を使用すると、稼働し続ける必要があるオブジェクト、アプリケーションおよびシステムに注意することができます。

環境内のオブジェクトの管理

オブジェクトは、vRealize Operations Manager がルータ、スイッチ、データベース、仮想マシン、ホスト、vCenter Server インスタンスなどのデータを収集する、環境内の個々の管理対象項目です。

vRealize Operations Manager では、各オブジェクトに関する固有の情報が必要です。アダプタ インスタンスの構成時に、vRealize Operations Manager はオブジェクトの検出を実行して、そのアダプタと通信するオブジェクトからデータの収集を開始します。

オブジェクトは、データベースなどの単一のエンティティの場合もあれば、他のオブジェクトを保持するコンテナの場合もあります。たとえば、複数の Web サーバを利用している場合、各 Web サーバについて 1 つのオブジェクトを定義することもできれば、Web サーバ オブジェクトのすべてを保持する個別のコンテナ オブジェクトを定義することもできます。グループとアプリケーションは、コンテナのタイプです。

後で検索やグループ化、フィルタリングが容易になるように、タグを使用してオブジェクトを分類します。タグのタイプには、複数のタグ値を含めることができます。ユーザーまたは vRealize Operations Manager がオブジェクトをタグ値に割り当てます。タグ値を選択すると、そのタグに関連付けられたオブジェクトが vRealize Operations Manager によって表示されます。たとえば、タグのタイプがライフサイクルで、タグ値が開発、テスト、本番前、本番の場合、環境内の仮想マシン オブジェクト VM1、VM2、または VM3 を、仮想マシンの機能に応じてこれらのタグ値のいずれか（複数可）に割り当てることができます。

環境へのオブジェクトの追加

オブジェクトの情報を vRealize Operations Manager に提供してオブジェクトを追加する場合があります。たとえば、ソリューションの中には、監視対象の可能性のあるすべてのオブジェクトを検出できないものもあります。このようなソリューションには、手動検出を使用するか、手動でオブジェクトを追加する必要があります。

個別オブジェクトを追加するときは、接続に使用するアダプタの種別、接続方法など、当該リソースについての具体的な情報を提供します。たとえば、SNMP アダプタは、監視する SNMP デバイスの場所を認識しません。手動検出を使って IP 範囲内のポートのスキャンを実行することができます。セキュリティ上の理由からポート スキャンがネットワーク上で許可されていない場合は、デバイスを手動で追加する必要があります。

開始する前に

追加するオブジェクトのアダプタが存在していることを確認します。『vRealize Operations Manager vApp デプロイおよび構成ガイド』を参照してください。

手順

- 1 [管理] - [インベントリ エクスプローラ] を選択します。
- 2 ツールバーでプラス記号をクリックします。
- 3 必要な情報を提供します。

オプション	説明
表示名	オブジェクトの名前を入力します。たとえば、 SNMP-Switch1 と入力します。
説明	説明を入力します。たとえば、 SNMP アダプタで監視されているスイッチ と入力します。
アダプタ タイプ	アダプタ タイプを選択します。たとえば、[SNMP アダプタ] を選択します。
アダプタ インスタンス	アダプタ インスタンスを選択します。
オブジェクト タイプ	オブジェクト タイプを選択します。SNMP アダプタには MIB ファイルを選択します。vRealize Operations Manager は MIB ファイルを使用して、スイッチで使用可能なデータを決定します。オブジェクト タイプを選択すると、ダイアログ ボックスの選択項目にユーザーが提供した情報が含まれるようになり、vRealize Operations Manager が選択したオブジェクト タイプを見つけて接続できるようにになります。
ホスト IP アドレス	ホスト IP を入力します。たとえば、スイッチの IP アドレスを入力します。
ポート番号	デフォルトのポート番号をそのまま使用するか、新しい値を入力します。SNMP アダプタの場合、このポートは SNMP 管理ポート番号になります。
認証情報	認証情報を選択するか、プラス記号をクリックしてオブジェクトの新しいロゲイン認証情報を追加します。
収集間隔	収集間隔を分単位で入力します。たとえば、スイッチが 5 分ごとにパフォーマンスデータを生成することが予測される場合は、収集間隔を 5 分に設定します。
動的しきい値。	デフォルトの [はい] を受け入れます。

- 4 [OK] をクリックしてオブジェクトを追加します。

SNMP-Switch1 が SNMP アダプタ タイプの MIB オブジェクト タイプとしてインベントリ エクスプローラに表示されません。

次に進む前に

vRealize Operations Manager は、新規オブジェクトごとに、そのコレクタとオブジェクト タイプのためのタグ値を割り当てます。別のタグを割り当てる必要がある場合があります。

オブジェクトの関係の構成

vRealize Operations Manager には、環境内のオブジェクト間の関係が表示されます。ほとんどの関係は、インストール済みのアダプタによりオブジェクトが検出されると自動的に作成されます。また、vRealize Operations Manager を使用して、通常は関連付けられないことのないオブジェクト間に関係を作成することもできます。

オブジェクトは、物理的、論理的、または構造的に関連付けられます。

- 物理的關係は、オブジェクトが物理環境でどのように接続されているかを表します。たとえば、ホストで実行されている仮想マシン同士は、物理的に関連付けられています。
- 論理的關係は、ビジネス サイロを表します。たとえば、環境内のすべてのストレージオブジェクトは、互に関連付けられています。
- 構造的關係は、ビジネス バリューを表します。たとえば、データベースをサポートするすべての仮想マシンは、構造的に関連付けられています。

ソリューションは、物理的關係の変更が vRealize Operations Manager に反映されるように、アダプタを使用して環境内のオブジェクトを監視します。論理的關係または構造的關係を維持するため、vRealize Operations Manager を使用してオブジェクトの關係を定義できます。オブジェクトが関連付けられると、1 つのオブジェクトの問題が関連するオブジェクトでアノマリとして表示されます。そのため、オブジェクトの關係は環境内の問題をすばやく特定することに役立ちます。

タグの作成および割り当て

大企業の場合、vRealize Operations Manager 内で何千ものオブジェクトが定義されている場合があります。オブジェクト タグとタグ値を作成すると、vRealize Operations Manager 内のオブジェクトおよびメトリックを見つけやすくなります。オブジェクト タグを使用し、オブジェクトに割り当てられたタグ値を選択して、そのタグ値に関連付けられたオブジェクトのリストを表示します。

タグとは、アダプタ タイプなどの情報のタイプのことです。アダプタ タイプは vRealize Operations Manager で事前定義されているタグです。タグの値は、その情報のタイプの個別のインスタンスです。たとえば、vRealize Operations Manager は vCenter Adapter を使用しているオブジェクトを検出すると、すべてのオブジェクトをアダプタ タイプ タグの下に vCenter Adapter タグ値に割り当てます。

各タグ値に任意の数のオブジェクトを割り当てることができます。また、任意の数のタグのタグ値に単一オブジェクトを割り当てることができます。一般的には、そのアダプタ タイプ、そのオブジェクト タイプ、および考えられるその他のタグの下を確認してオブジェクトを探します。

オブジェクト タグがロックされている場合、そのタグにオブジェクトを追加することはできません。ロックされたオブジェクト タグは、vRealize Operations Manager によって保持されます。

■ 事前定義されたオブジェクト タグ (P. 160)

vRealize Operations Manager には、事前定義されたオブジェクト タグがいくつか含まれます。これらのタグのほとんどに値が作成され、値にオブジェクトが割り当てられます。

■ オブジェクト タグを追加してオブジェクトをタグに割り当てる (P. 161)

オブジェクト タグは、情報タイプであり、タグ値は、その情報タイプの個別インスタンスです。事前定義されたオブジェクト タグが自分のニーズを満たさない場合、オブジェクト タグを独自に作成して、環境内のオブジェクトを分類し管理できます。たとえば、クラウドオブジェクトにタグを追加して、異なるクラウド名にタグ値を追加できます。その後、オブジェクトをクラウド名に割り当てることができます。

■ タグを使用してオブジェクトを検索する (P. 161)

vRealize Operations Manager でオブジェクトを検索する最も迅速な方法は、タグを使用することです。タグを使用すると、オブジェクト リスト全体を検索するよりも効率的です。

事前定義されたオブジェクト タグ

vRealize Operations Manager には、事前定義されたオブジェクト タグがいくつか含まれます。これらのタグのほとんどに値が作成され、値にオブジェクトが割り当てられます。

たとえば、オブジェクトを追加する場合、vRealize Operations Manager は、オブジェクトが使用するコレクタのタグ値とオブジェクトの種類にオブジェクトを割り当てます。タグの値がない場合は作成されます。

事前定義済みのタグに値がない場合、そのタグ タイプのオブジェクトは存在しません。たとえば、vRealize Operations Manager インスタンスでアプリケーションが 1 つも定義されていない場合、アプリケーション タグにはタグ値がありません。

各タグ値は、そのタグを持つオブジェクトの数とともに表示されます。オブジェクトが 1 つもないタグ値には値 0 が示されます。事前定義されたタグと vRealize Operations Manager によって作成されるタグ値は削除できません。

表 5-1. 定義済みタグ

タグ	説明
コレクタ (フル セット)	定義済みの各コレクタは、タグの値です。各オブジェクトは、vRealize Operations Manager に追加されるときに、それ自体が使用するコレクタのタグ値に割り当てられます。デフォルト コレクタは vRealize Operations Manager Collector-vRealize です。
アプリケーション (フル セット)	定義済みの各アプリケーションはタグ値です。階層をアプリケーションに追加、またはオブジェクトをアプリケーションの階層に追加すると、階層がタグの値に割り当てられます。
メンテナンス スケジュール (フル セット)	定義された各メンテナンス スケジュールはタグの値であり、オブジェクトを追加や編集してスケジュールを作成すると、オブジェクトが値に割り当てられます。
アダプタ タイプ	各アダプタ タイプはタグ値であり、そのアダプタ タイプを使用する各オブジェクトにはこのタグ値が与えられます。
アダプタ インスタンス	各アダプタ インスタンスはタグ値であり、各オブジェクトにはメトリックが収集されるアダプタ インスタンスのタグ値が割り当てられます。
オブジェクト タイプ	各オブジェクト タイプはタグ値であり、オブジェクトを追加すると、各オブジェクトがそのタイプのタグ値に割り当てられます。
最近追加されたオブジェクト	最終日、7 日、10 日、30 日には、タグの値があります。タグ値がそれらに該当する場合、オブジェクトにこのタグ値があります。
オブジェクトのステータス	データを受け取っていないオブジェクトに割り当てられるタグ値
収集状態	割り当てられるタグ値は、オブジェクトの収集状態（「収集中」や「収集中でない」など）を示します。
健全性の範囲	良好（緑色）、警告（黄色）、緊急（オレンジ色）、クリティカル（赤色）、および不明（青色）の健全性ステータスにはタグ値があります。各オブジェクトには、その現在の健全性ステータスの値が割り当てられます。
エンタープライズ全体	タグ値は、エンタープライズ アプリケーション全体です。このタグ値は各アプリケーションに割り当てられます。
ライセンス	タグ値は、[管理] - [ライセンスにあるライセンス グループです。オブジェクト]は、vRealize Operations Manager のインストール中にライセンス グループに割り当てられます。
タグの解除	タグ割り当てを削除するには、このタグにオブジェクトをドラッグします。

オブジェクト タグを追加してオブジェクトをタグに割り当てる

オブジェクトタグは、情報タイプであり、タグ値は、その情報タイプの個別インスタンスです。事前定義されたオブジェクト タグが自分のニーズを満たさない場合、オブジェクト タグを独自に作成して、環境内のオブジェクトを分類し管理できます。たとえば、クラウド オブジェクトにタグを追加して、異なるクラウド名にタグ値を追加できます。その後、オブジェクトをクラウド名に割り当てることができます。

開始する前に

事前定義されたオブジェクト タグについてよく理解してください。

手順

- 1 [管理] - [インベントリ エクスプローラ] を選択します。
- 2 タグのリストの上の [タグの管理] アイコンをクリックします。
- 3 [新規タグの追加] アイコンをクリックして、新しい行を追加し、その行にタグ名を入力します。
たとえば、**Cloud Objects** と入力し、[更新] をクリックします。
- 4 新しいタグを選択し、[新規タグ値の追加] アイコンをクリックして、新しい行を追加し、その行にタグ値の名前を入力します。
たとえば、**Video Cloud** と入力し、[更新] をクリックします。
- 5 [OK] をクリックしてタグを追加します。
- 6 オブジェクトを追加するタグをクリックして、オブジェクト タグ値のリストを表示します。
たとえば、[クラウド オブジェクト] をクリックして、Video Cloud オブジェクト タグ値を表示します。
- 7 インベントリ エクスプローラの右側のペインのリストからオブジェクトをタグ値名にドラッグします。
Ctrl キーを押しながらクリックして複数の個別のオブジェクトを選択するか、Shift キーを押しながらクリックしてオブジェクトの範囲を選択できます。
たとえば、vCenter Adapter を通じて接続されているデータセンターを割り当てる場合、検索フィルタに **vCenter** と入力して追加するデータセンター オブジェクトを選択します。

タグを使用してオブジェクトを検索する

vRealize Operations Manager でオブジェクトを検索する最も迅速な方法は、タグを使用することです。タグを使用すると、オブジェクト リスト全体を検索するよりも効率的です。

また、タグになり得るタグ値は Applications と Object Types です。たとえば、Object Types タグには、環境内のすべての仮想マシンを含む Virtual Machine などの、vRealize Operations Manager にある各オブジェクトの値があります。これらの仮想マシンのそれぞれが、Virtual Machine タグのタグ値でもあります。タグ値のリストを展開して、確認するオブジェクトの値を選択できます。

手順

- 1 [管理] - [インベントリ エクスプローラ] を選択します。
- 2 中央ペインのタグ リストで、割り当てられた値を持つオブジェクトのタグをクリックします。
タグをクリックすると、タグの下に値のリストが表示されます。各値に関連付けられているオブジェクトの数は、タグ値の隣に表示されます。
タグ値の隣りの「+」記号は、その値もまたタグであり、他のタグ値が含まれることを示します。「+」記号をクリックするとサブ値を表示できます。
- 3 タグ値を選択します。
そのタグ値を持つオブジェクトが、右側のペインに表示されます。複数のタグ値を選択すると、リスト上のオブジェクトは、選択した各値に依存します。

タグ値の選択	表示されるオブジェクト
同一タグに対する複数の値	リストには、どちらかの値をとるオブジェクトが表示されます。たとえば、Object Types タグの 2 つの値 (Datacenter と Host System など) を選択した場合、リストにはいずれかの値を持つオブジェクトが表示されます。
2 つ以上の異なるタグに対する値	リストには、選択した値をすべて持つオブジェクトのみが表示されます。たとえば、Object Types タグの 2 つの値 (Datacenter と Host System など) を選択し、さらに vCenter アダプタ インスタンス タグの vC-1 などのアダプタ インスタンスを選択した場合、vC-1 に関連付けられたデータセンターとホスト システム オブジェクトのみがリストに表示されます。他のアダプタ インスタンスに関連付けられたデータセンターまたはホスト システムのオブジェクト、およびデータセンターまたはホスト システムのオブジェクトではないオブジェクトは、リストに表示されません。

- 4 リストからオブジェクトを選択します。

VMware vRealize Operations Manager でのカスタム オブジェクト グループの管理

カスタム オブジェクト グループは、1 つまたは複数のオブジェクトを含むコンテナです。vRealize Operations Manager では、カスタム グループを使用することでグループ内のオブジェクトからのデータを収集し、そして収集したデータに関するレポートを作成します。

カスタム オブジェクト グループを使用する理由

グループを使用してオブジェクトを分類し、vRealize Operations Manager でオブジェクトのグループからデータを収集し、定義したデータ表示方法に従って結果をダッシュボードとビューに表示します。

静的なオブジェクト グループを作成することも、環境に追加された新しいオブジェクトから vRealize Operations Manager がデータを検出して収集する際にグループ メンバーシップを決定する基準を使用して動的なグループを作成することもできます。

vRealize Operations Manager は、ワールド、環境、およびライセンスなどの一般的に使用されるオブジェクト グループ タイプを備えています。vRealize Operations Manager では、オブジェクト グループ タイプを使用して、オブジェクトのグループを分類します。各グループにグループ タイプを割り当てると、作成したオブジェクト グループを分類して整理することができます。

カスタム オブジェクト グループのタイプ

カスタム グループを作成するときに、オブジェクトの動的メンバーシップをグループに適用するルールを使用することも、オブジェクトを手動でグループに追加することもできます。vRealize Operations Manager にアダプタを追加すると、vRealize Operations Manager でアダプタに関連付けられたグループが使用できるようになります。

- 動的グループ メンバーシップ。グループ内のオブジェクトのメンバーシップを動的に更新するには、グループを作成するときにルールを定義します。vRealize Operations Manager では、定義した条件に基づいてグループにオブジェクトが追加されます。
- 動的および手動を含む混合メンバーシップ。
- 手動グループ メンバーシップ。オブジェクトのインベントリから、メンバーとしてグループに追加するオブジェクトを選択します。
- アダプタに関連付けられたグループ。各アダプタがグループのメンバーシップを管理します。たとえば、vCenter Server アダプタは、vSphere インベントリのコンテナ オブジェクトに、データストア、ホスト、ネットワークなどのグループを追加します。これらのグループを変更するには、このアダプタで操作する必要があります。

vRealize Operations Manager の管理者は、カスタム グループに詳細な権限を設定できます。グループを作成する権限を持つユーザーは、オブジェクトのカスタム グループを作成でき、vRealize Operations Manager で各グループにポリシーを適用して、オブジェクトからのデータ収集とダッシュボードおよびビューでの結果報告が行われます。

カスタム グループを作成し、そのグループにポリシーを割り当てると、vRealize Operations Manager は適用されたポリシーで定義された条件を使用することにより、グループ内のオブジェクトからデータを収集して分析できます。vRealize Operations Manager は、ポリシーの設定に基づいてこれらのオブジェクトのステータス、問題、および推奨事項に関するレポートを作成します。

注意 vRealize Operations Manager からエクスポートまたは vRealize Operations Manager にインポートできるのは、ユーザーが明示的に定義したカスタム グループのみです。ユーザーは、複数のカスタム グループをエクスポートまたはインポートできます。インポート機能が実行されたら、ユーザーは、インポートしたグループにポリシーを関連付ける必要があるかどうかをチェックして判断する必要があります。エクスポート/インポート操作は、ユーザー定義（ユーザーが明示的に作成）のカスタム グループのみに使用可能です。

ポリシーが、vRealize Operations Manager のオブジェクト グループに関するレポートに役立つ仕組み

vRealize Operations Manager は、オブジェクト グループ内のオブジェクトを分析し、さまざまな属性の中でも特にオブジェクト グループのワークロード、容量、負荷、異常、および障害に関するレポートを作成します。

オブジェクト グループにポリシーを適用すると、vRealize Operations Manager は、グループ内のオブジェクトからデータを収集するためのポリシーで有効なしきい値設定、メトリック、スーパー メトリック、属性、プロパティ、アラートの定義、および問題の定義を使用して、ダッシュボードとビューに結果を表示します。

新しいオブジェクト グループを作成するときは、そのグループにポリシーを適用するオプションを選択できます。

- カスタム オブジェクト グループにポリシーを関連付けるには、グループ作成ウィザードでポリシーを選択します。
- オブジェクト グループに特定のポリシーを関連付けない場合は、ポリシーの選択をブランクのままにします。カスタム オブジェクト グループは、デフォルト ポリシーに関連付けられます。デフォルト ポリシーを変更した場合、このオブジェクト グループは、新しいデフォルト ポリシーに関連付けられます。

vRealize Operations Manager は、[アクティブなポリシー] タブに表示されている優先順位でポリシーを適用します。ポリシーの優先順位を確立すると、vRealize Operations Manager は、ポリシー内の構成済みの設定をポリシー順位に従って適用し、オブジェクトの分析とレポート作成を実行します。ポリシーの優先順位を変更するには、ポリシー行をクリックしてドラッグします。デフォルト ポリシーは常に優先順位リストの一番下に置かれます。残りのアクティブなポリシーのリストは、最高優先順位のポリシーを示す優先順位 1 から始まります。複数のオブジェクト グループのメンバーとなるようにオブジェクトを割り当てて、各オブジェクト グループに異なるポリシーを割り当てた場合、vRealize Operations Manager はそのオブジェクトに最高ランクのポリシーを関連付けます。

ユーザー シナリオ：カスタム オブジェクト グループの作成

システム管理者は、クラスタ、ホスト、および仮想マシンのキャパシティを監視する必要があります。

vRealize Operations Manager は、これらのオブジェクトが IT 部門のために確立されているポリシーに準拠していることを異なるサービス レベルで監視し、環境に追加される新しいオブジェクトを検出して監視する必要があります。

vRealize Operations Manager で、ポリシーをオブジェクト グループに適用するための設定、およびキャパシティレベルのステータスを分析、監視、およびレポートするための設定を行います。

vRealize Operations Manager で、オブジェクトのキャパシティレベルを監視し、サービス レベルのポリシーに準拠していることを確認するには、確立されたサービス階層に対応できるようにオブジェクトをプラチナ、ゴールド、シルバーのオブジェクト グループに分類します。

グループタイプを作成し、各サービスレベルの動的オブジェクトグループを作成します。vRealize Operations Manager でオブジェクトのメンバーシップを最新の状態に保つために、各動的オブジェクトグループのメンバーシップ基準を定義します。動的オブジェクトグループごとに、グループタイプを割り当て、グループ内のオブジェクトのメンバーシップを維持するための基準を追加します。カスタム オブジェクト グループにポリシーを関連付けるには、グループ作成ウィザードでポリシーを選択します。

開始する前に

- 環境内のオブジェクトおよびそれがサポートするサービス レベルを把握する。
- オブジェクトの監視に必要なポリシーを理解する。

- vRealize Operations Manager に、オブジェクトのキャパシティを監視するポリシーが含まれていることを確認する。

手順

- 1 サービス レベルの監視を識別するためのグループ タイプを作成するには、[内容] を選択し、[グループ タイプ] をクリックします。
- 2 [グループ タイプ] ツールバーで、プラス記号をクリックし、グループ タイプに **Service Level Capacity** と入力します。
リストにグループ タイプが表示されます。
- 3 [環境] を選択し、[カスタム グループ] をクリックします。
ナビゲーション ペインのカスタム グループのリストに Service Level Capacity という名前のフォルダが表示され、[環境概要] に [グループ] タブが表示されます。
- 4 新しいオブジェクト グループを作成するには、[グループ] ツールバーのプラス記号をクリックします。
動的グループのデータおよびメンバーシップ基準を定義する [新規グループ] ワークスペースが表示されます。
 - a [名前] テキスト ボックスに分かりやすいオブジェクト グループの名前 (**Platinum_Objects** など) を入力します。
 - b [グループ タイプ] ドロップダウン メニューで、[Service Level Capacity] を選択します。
 - c (オプション) [ポリシー] ドロップダウン メニューで、オブジェクトのキャパシティを監視するためのしきい値が設定されているサービス レベル ポリシーを選択します。
カスタム オブジェクト グループにポリシーを関連付けるには、グループ作成ウィザードでポリシーを選択します。オブジェクト グループに特定のポリシーを関連付けない場合は、ポリシーの選択をブランクのままにします。カスタム オブジェクト グループは、デフォルト ポリシーに関連付けられます。デフォルト ポリシーを変更した場合、このオブジェクト グループは、新しいデフォルト ポリシーに関連付けられます。
 - d vRealize Operations Manager が基準を満たすオブジェクトを検出し、これらのオブジェクトをグループに追加できるように、[グループ メンバーシップを最新に保つ] チェック ボックスを選択します。
- 5 新しい動的オブジェクト グループの仮想マシンのメンバーシップを、プラチナ オブジェクトとして監視するように定義します。
 - a [オブジェクトの選択] ドロップダウン メニューから [vCenter アダプタ] を選択し、[仮想マシン] を選択します。
 - b 基準の空のドロップダウン メニューから、[メトリック] を選択します。
 - c [メトリックの選択] ドロップダウン メニューから [ディスク領域] を選択し、[現在のサイズ] をダブルクリックします。
 - d 条件値のドロップダウン メニューから、[が次より小さい] を選択します。
 - e [メトリック値] ドロップダウン メニューで、**10** と入力します。
- 6 新しい動的オブジェクト グループのホスト システムのメンバーシップを、プラチナ オブジェクトとして監視するように定義します。
 - a [別の基準セットの追加] をクリックします。
 - b [オブジェクトの選択] ドロップダウン メニューから [vCenter アダプタ] を選択し、[ホスト システム] を選択します。
 - c 基準の空のドロップダウン メニューから、[メトリック] を選択します。
 - d [メトリックの選択] ドロップダウン メニューから [ディスク領域] を選択し、[現在のサイズ] をダブルクリックします。

- e 条件値のドロップダウン メニューから、[が次より小さい] を選択します。
 - f [メトリック値] ドロップダウン メニューで、**100** と入力します。
- 7 新しい動的オブジェクト グループのクラスタ コンピューティング リソースのメンバーシップを定義します。
- a [別の基準セットの追加] をクリックします。
 - b [オブジェクトの選択] ドロップダウン メニューから [vCenter アダプタ] を選択し、[クラスタ コンピューティング リソース] を選択します。
 - c 基準の空のドロップダウン メニューから、[メトリック] を選択します。
 - d [メトリックの選択] ドロップダウン メニューから [ディスク領域] を選択し、[capacityRemaining] をダブルクリックします。
 - e 条件値のドロップダウン メニューから、[が次より小さい] を選択します。
 - f [メトリック値] ドロップダウン メニューで、**1000** と入力します。
 - g [プレビュー] をクリックして、オブジェクトがすでにこの基準に適合しているかどうかを判断します。
- 8 [OK] をクリックして、グループを保存します。
- 新しい動的グループを保存すると、Service Level Capacity フォルダと [グループ] タブのグループのリストにグループが表示されます。
- 9 vRealize Operations Manager によって環境内のオブジェクトからデータが収集されるまで 5 分間待機します。

vRealize Operations Manager は、グループで定義したメトリック、およびグループに適用されたポリシーで定義されているしきい値に応じて、環境内のクラスタ コンピューティング リソース、ホストシステム、および仮想マシンからデータを収集し、オブジェクトに関する結果をダッシュボードとビューに表示します。

次に進む前に

プラチナ オブジェクトのキャパシティレベルを監視するには、ダッシュボードを作成し、ウィジェットをダッシュボードに追加します。[「ダッシュボード \(P. 172\)」](#) を参照してください。

アプリケーション グループの管理

アプリケーションとは、ユーザーのビジネスをサポートする具体的な機能を実行する、相互依存する一連のハードウェアおよびソフトウェア コンポーネントを表すコンテナ構造です。vRealize Operations Manager は、アプリケーションに含まれる 1 つまたは複数のコンポーネントに問題が発生したときに環境がどのような影響を受けるのかを判断し、アプリケーションの総合的な健全性とパフォーマンスを監視するためのアプリケーションを構築します。アプリケーション内のオブジェクト メンバーシップは動的ではありません。アプリケーションを変更するには、コンテナ内のオブジェクトを手動で変更します。

アプリケーションを使用する理由

vRealize Operations Manager は、アプリケーション内のコンポーネントからデータを収集し、任意またはすべてのコンポーネントのリアルタイム分析を行い、各アプリケーションのサマリ ダッシュボードに結果を表示します。コンポーネントに問題が発生した場合、アプリケーション内のどこで問題が発生したのかを確認し、その他のオブジェクトに問題がどのように拡散していくのかを判断できます。

ユーザー シナリオ：アプリケーションの追加

オンライン トレーニング システムのシステム管理者は、ご使用の環境の **Web** 層、アプリケーション層、およびデータベース層のコンポーネントのうち、システムのパフォーマンスに影響を及ぼす可能性のあるものを監視する必要があります。また、それぞれの層の関連するオブジェクトをグループ化するアプリケーションを構築してください。いずれかのオブジェクトで問題が発生すると、その問題がアプリケーションの表示に反映されます。サマリを開くと、問題の原因を詳細に調査できます。

アプリケーションで、トレーニングシステムのデータを格納する DB 関連オブジェクトを 1 つの層に追加し、ユーザーインターフェイスを実行する **Web** 関連オブジェクトを 1 つの層に追加し、トレーニングシステムのデータを処理するアプリケーション関連オブジェクトを 1 つの層に追加します。ネットワーク層は不要な場合があります。このモデルは、アプリケーションを開発するときに使用します。

手順

- 1 左側のペインで [環境] をクリックします。
- 2 [アプリケーション] タブをクリックし、プラス記号をクリックします。
- 3 [基本的な n 層 Web アプリケーション] をクリックし、[OK] をクリックします。
表示される [アプリケーション管理] ページには、2 つの行があります。下部の行からオブジェクトを選択し、上部の行の層に追加します。
- 4 [アプリケーション] テキスト ボックスに分かりやすい名前を入力します (**オンライン トレーニング アプリケーション**など)。
- 5 一覧表示された各 Web 層、アプリケーション層、およびデータベース層で [階層のオブジェクト] セクションにオブジェクトを追加します。
 - a 層の名前を選択します。これは追加する層です。
 - b オブジェクトの行の左側でオブジェクト タグを選択し、そのタグ値を持つオブジェクトを対象にフィルタリングを実行します。タグ名を 1 回クリックすると、リストからそのタグが選択されます。タグ名をもう 1 回クリックすると、リストからそのタグが選択解除されます。複数のタグを選択した場合、表示されるオブジェクトは、選択した値によって異なります。
名前を基準にオブジェクトを検索することもできます。
 - c オブジェクトの行の右側で、層に追加するオブジェクトを選択します。
 - d オブジェクトを [階層のオブジェクト] セクションにドラッグします。
- 6 [保存] をクリックしてアプリケーションを保存します。

[環境の概要アプリケーション] ページのアプリケーションのリストに新規アプリケーションが表示されます。いずれかの層のいずれかのコンポーネントで問題が発生した場合は、アプリケーションに黄色または赤色のステータスが表示されます。

次に進む前に

問題の原因を調査するには、アプリケーション名をクリックし、オブジェクトのサマリ情報を評価してください。『vRealize Operations Manager ユーザー ガイド』を参照してください。

データ表示の構成

ビュー、レポート、ダッシュボード、ウィジェットを使用して、必要な情報に応じて vRealize Operations Manager のコンテンツを構成します。

オブジェクトタイプに基づいてデータを表示するビュー。さまざまなビュータイプから選択して、異なる観点からデータを確認することができます。ビューは再利用可能なコンポーネントで、レポートやダッシュボードに含めることができます。レポートには、事前定義済みまたはカスタムのビューとダッシュボードを指定した順番で含めることができます。レポートを作成して、環境内のオブジェクトやメトリックを表します。表紙、目次、フッターを追加して、レポートのレイアウトをカスタマイズできます。必要に応じて参照できるよう、レポートを PDF または CSV ファイル形式でエクスポートできます。

ダッシュボードを使用して、仮想インフラストラクチャ内のオブジェクトのパフォーマンスと状態を監視します。ウィジェットは、ダッシュボードの構成要素で、構成済みの属性、リソース、アプリケーション、または環境内の全般的なプロセスに関するデータを表示します。vRealize Operations Manager 表示ウィジェットを使用して、ダッシュボードにビューを組み込むこともできます。

この章では次のトピックについて説明します。

- [ウィジェット \(P. 167\)](#)
- [ダッシュボード \(P. 172\)](#)
- [表示 \(P. 185\)](#)
- [レポート \(P. 198\)](#)

ウィジェット

ウィジェットは、ダッシュボード上のペインです。ダッシュボードにウィジェットを追加して、ダッシュボードを作成します。ウィジェットには、属性、リソース、アプリケーションまたは環境内のプロセス全体に関連する情報が表示されます。

ウィジェットは、特定のニーズを反映するように構成できます。使用可能な構成オプションは、ウィジェットのタイプによって異なります。一部のウィジェットは、データを表示する前に構成する必要があります。多くのウィジェットは、1 つ以上のウィジェットにデータを提供したり、そこからデータを取得したりできます。この機能を使用して 1 つのウィジェットからのデータをフィルタとして設定し、関連する情報を 1 つのダッシュボードに表示できます。



ウィジェットの構成 (http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_configure_widgets_vrom)

ウィジェットの相互作用

ウィジェットの相互作用とは、あるウィジェットから受信側のウィジェットに対して情報が提供される、ダッシュボードのウィジェット間で構成された関係のことです。ダッシュボードでウィジェットを使用する場合、1つのウィジェットでデータを選択し、別のウィジェットでデータの表示を制限すると、小規模なデータのサブセットに焦点を絞ることができます。

相互作用の仕組み

ウィジェット間の相互作用をダッシュボード レベルで構成した場合、提供元のウィジェットで1つ以上のオブジェクトを選択し、受信側のウィジェットで表示されるデータをフィルタリングすることで、オブジェクトに関するデータに焦点を絞ることができます。

ダッシュボードでウィジェット間の相互作用オプションを使用するには、相互作用をダッシュボード レベルで構成します。相互作用を構成しないと、ウィジェットの一般構成に基づいてデータがウィジェットに表示されます。

ウィジェットの相互作用を構成する場合は、受信側のウィジェットに対して提供元のウィジェットを指定します。一部のウィジェットについては、提供元のウィジェットを2つ定義でき、それぞれを受信側のウィジェットでのデータのフィルタリングに使用できます。

たとえば、オブジェクト リスト ウィジェットをトップ N ウィジェットの提供元のウィジェットとして構成した場合、オブジェクト リスト ウィジェットで1つ以上のオブジェクトを選択して、選択したオブジェクトのデータのみをトップ N ウィジェットに表示できます。

一部のウィジェットについては、提供元のウィジェットを複数定義できます。たとえば、メトリック提供元のウィジェットとオブジェクト提供元のウィジェットからデータを受信するメトリック チャート ウィジェットを構成することができます。この場合、2つの提供元ウィジェットで選択されたすべてのオブジェクトのデータがメトリック チャート ウィジェットに表示されます。

メトリック構成の管理

ウィジェットを表示する一連のカスタム メトリックを作成できます。構成されたメトリックおよび選択されたオブジェクト タイプに基づいてサポートされたウィジェットが表示されるように、特定のアダプタおよびオブジェクト タイプに対してさまざまなメトリックのセットを定義する1つ以上のファイルを構成できます。

メトリック構成の機能

[メトリック構成] ページから、サポートされるウィジェットで一連のメトリックを表示する XML ファイルを作成します。サポートされるウィジェットは、メトリック チャート、プロパティ リスト、ローリング ビュー グラフ、スコアボード、スパークライン グラフ、およびトポロジ グラフです。メトリック構成を使用するには、ウィジェットのセルフ プロバイダを [オフ] に設定し、提供元のウィジェットに対するウィジェットの相互作用を作成する必要があります。

メトリック構成を確認できる場所

メトリック構成を管理するには、左側のペインで [内容] - [メトリック構成の管理] を選択します。

表 6-1. [メトリック構成の管理] のツールバー オプション

オプション	説明
構成の作成	選択したフォルダ内に空の XML ファイルを作成します。
構成の編集	選択した XML ファイルをアクティブ化し、右側のテキスト ボックスで編集できるようにします。
構成の削除	選択した XML ファイルを削除します。
テキスト ボックス	選択した XML ファイルを表示します。XML ファイルを編集するには、XML ファイルを選択し、[編集] をクリックする必要があります。

リソース相互作用 XML ファイルの追加

リソース相互作用ファイルとは、このオプションをサポートするウィジェットに表示するメトリックのカスタム セットのことです。構成されたメトリックおよび選択されたオブジェクト タイプに基づいてサポートされたウィジェットが表示されるように、特定のオブジェクト タイプに対してさまざまなメトリックのセットを定義する 1 つ以上のファイルを構成できます。

次のウィジェットでリソース相互作用モードをサポートしています。

- メトリック チャート
- プロパティ リスト
- ローリング ビュー グラフ
- スコアボード
- スパークライン グラフ
- トポロジ グラフ

XML ファイルで定義したメトリックのセットを表示するメトリック構成を使用するには、ダッシュボードおよびウィジェットの構成が次の基準を満たしている必要があります。

- ダッシュボードの [ウィジェットの相互作用] オプションが、別のウィジェットがターゲット ウィジェットにオブジェクトを提供するように構成されている。たとえば、オブジェクト リスト ウィジェットでは、チャート ウィジェットにオブジェクト相互作用を提供する。
- ウィジェットの [セルフ プロバイダ] オプションが [オフ] に設定されている。
- [メトリック構成] ドロップダウン メニューのカスタムの XML ファイルが `/usr/lib/vmware-vcops/tools/opscli` ディレクトリにあり、インポート コマンドを使用して、グローバル記憶領域にインポートされている。

XML ファイルを追加し、後でそれを修正する場合、変更は有効にならない場合があります。

開始する前に

- vRealize Operations Manager に対してインストールされたファイルにアクセスし、ファイルを追加するのに必要な権限があることを確認します。
- 既存の例に基づいて新しいファイルを作成します。例は次の場所にあります。
 - vApp または Linux の場合。XML ファイルは、`/usr/lib/vmware-vcops/tomcat-web-app/webapps/vcops-web-ent/WEB-INF/classes/resources/reskndmetrics` にある。

手順

- 1 メトリックのセットを定義する XML ファイルを作成します。

例：

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" standalone="yes"?>
<AdapterKinds>
  <AdapterKind adapterKindKey="VMWARE">
    <ResourceKind resourceKindKey="HostSystem">
      <Metric attrkey="sys:host/vim/vmvisor/slp|resourceMemOverhead_latest" />
      <Metric attrkey="cpu|capacity_provisioned" />
      <Metric attrkey="mem|host_contention" />
    </ResourceKind>
  </AdapterKind>
</AdapterKinds>
```

この例では、ホスト システムに対して表示されたデータは指定されたメトリックに基づいています。

- 2 vRealize Operations Manager インスタンスのオペレーティング システムに基づいて次のディレクトリのいずれかに XML ファイルを保存します。

オペレーティング システム	ファイルの場所
vApp または Linux	/usr/lib/vmware-vcops/tools/opscli

- 3 インポート コマンドを実行します。

オペレーティング システム	ファイルの場所
vApp または Linux	./ops-cli.py file import reskndmetric YourCustomFilename.xml

ファイルはグローバル記憶領域にインポートされ、サポートされているウィジェットからアクセスできます。

- 4 既存のファイルをアップデートして、ファイルを再インポートする必要がある場合、上記のインポート コマンドに **--force** を追加して実行します。

たとえば、`./vcops-cli.py file import reskndmetric YourCustomFilename.xml --force` など。

次に進む前に

XML ファイルがインポートされたことを確認するには、サポートされているウィジェットのいずれかを構成し、その新しいファイルがドロップダウン メニューに表示されることを確認します。

ウィジェット定義リスト

ウィジェットとは、構成済みの属性、リソース、アプリケーション、または環境内の全般的なプロセスに関する情報を含む、ダッシュボード上のペインのことです。ウィジェットは、企業内のすべてのオブジェクトとアプリケーションの健全性の総合的なエンド ツー エンド ビューを提供できます。お使いのユーザー アカウントに必要なアクセス権があれば、ウィジェットをダッシュボードに追加したり、ダッシュボードから削除できます。

表 6-2. ウィジェットの概要

ウィジェット名	説明
アラート リスト	ウィジェットが監視するように構成された、オブジェクトのアラートのリストを表示します。オブジェクトが構成されない場合は、リストには環境内のすべてのアラートが表示されます。
アラート ボリューム	監視用に構成されたオブジェクトに対して生成されたアラートの過去 7 日間のトレンド レポートを表示します。
異常	過去 6 時間の異常数チャートを表示します。
アノマリの内訳	選択したリソースの症状について考えられる根本原因を表示します。
キャパシティ	過去 7 日間の特定のリソースの [容量] 値のチャートを表示します。
キャパシティ使用率	オブジェクトのキャパシティまたはワークロード使用率を表示し、キャパシティやワークロードの問題を特定できるようにします。低使用率、最適な使用率、高使用率のオブジェクトを示し、それらが制約されている理由を示します。
コンテナの詳細	選択した単一のコンテナの各階層での健全性およびアラート カウントを表示します。
コンテナ オブジェクト リスト	すべての定義済みリソースとオブジェクト タイプのリストを表示します。
コンテナの概要	1 つまたは複数のコンテナの全体的な健全性および各階層の健全性を表示します。
現在のポリシー	カスタム グループに適用されている優先順位が最高のポリシーを表示します。
データ収集結果	選択されたオブジェクト固有のすべてのサポートされたアクションのリストを表示します。
密度	特定のリソースの過去 7 日間のチャートとして密度の内訳を表示します。
DRS クラスタ設定	利用可能なクラスタおよび関連するホストのワークロードを表示します。
効率	監視用に構成されたオブジェクトの効率に関連するアラートのステータスを表示します。効率は、環境内の生成された効率アラートに基づきます。

表 6-2. ウィジェットの概要 (続き)

ウィジェット名	説明
環境	オブジェクトごとのリソース数の一覧表示や、オブジェクト タイプによるグループ分けを行います。
環境概要	仮想環境におけるオブジェクトのパフォーマンス ステータスおよびオブジェクトの関係を表示します。オブジェクトをクリックしてその関連オブジェクトを強調表示したり、オブジェクトをダブルクリックしてその [リソース詳細] ページを表示できます。
環境の状態	監視下の環境全体についての統計を表示します。
障害	選択したリソースの使用可能性および構成の問題のリストを表示します。
フォレンジックス	所定の期間でのメトリックにおける特定値の頻発度をすべての値のパーセンテージとして表示します。2 つの期間のパーセンテージを比較することもできます。
GEO	構成で GEO 場所のオブジェクト タグに値が割り当てられている場合は、オブジェクトの場所が世界地図上で示されます。
健全性	監視用に構成されたオブジェクトの健全性に関連するアラートのステータスを表示します。健全性は、環境内の生成された健全性アラートに基づきます。
健全性チャート	選択したリソースまたは選択したタグを持つすべてのリソースの健全性情報を表示します。
ヒート マップ	選択したリソースのパフォーマンス情報のヒート マップを表示します。
マッシュアップ チャート	リソースに関する断片的な情報を集約します。主要なパフォーマンス インジケータ (KPI) の健全性チャート、異常カウント グラフおよびメトリック グラフを表示します。通常、このウィジェットはコンテナ用に使用します。
メトリック チャート	選択したメトリックに基づいたオブジェクトのワークロードの推移を含むチャートを表示します。
メトリック ピッカー	選択したリソースの使用可能なメトリックのリストを表示します。リソース ID を提供できるウィジェットと共に使用します。
オブジェクト リスト	すべての定義済みリソースのリストを表示します。
オブジェクトの関係	選択されたオブジェクトの階層ツリーを示します。
オブジェクトの関係図 (詳細)	選択されたオブジェクトの階層ツリーを示します。詳細構成オプションが提供されます。
プロパティ リスト	選択したオブジェクトのプロパティおよびそれらの値を表示します。
解放可能な容量	コンシューマのある特定のリソースの節約可能なキャパシティの量を示す割合チャートを表示します。
推奨アクション	vCenter Server インスタンスの問題を解決するための推奨事項を表示します。推奨事項に従って、データセンター、クラスタ、ホスト、および仮想マシンに対するアクションを実行できます。
リスク	監視用に構成されたオブジェクトのリスクに関連するアラートのステータスを表示します。リスクは、環境内の生成されたリスク アラートに基づきます。
ローリング ビュー グラフ	定義した間隔で選択したメトリックを介してサイクルし、1 度に 1 つずつのメトリック グラフを表示します。選択したすべてのメトリックについて、展開可能な小さなグラフがウィジェットの下部に表示されます。
スコアボード	選択したメトリックの値 (通常 KPI) を定義済みの値範囲を色分けして表示します。
スコアボードの健全性	選択したリソースの色分けされた健全性およびワークロード スコアを表示します。
スパークライン グラフ	オブジェクトのメトリックを含むグラフを表示します。スパークライン グラフ ウィジェット内のすべてのメトリックが、別のウィジェットで提供されるオブジェクトに関するものである場合、そのオブジェクト名がウィジェットの右上に表示されます。
負荷	特定のリソースの過去 6 週間の平均負荷のウェザー マップを表示します。
タグ ピッカー	すべての定義済みリソース タグを一覧表示します。
テキスト表示	Web ページまたはテキスト ファイルからテキストを読み込み、そのテキストをユーザー インターフェイスに表示します。
残り時間	過去 7 日間の特定のリソースの [残り時間] 値のチャートを表示します。
トップ アラート	構成されたアラート タイプおよびオブジェクトに基づいて、環境に悪影響を与える可能性が最も高いアラートを一覧表示します。

表 6-2. ウィジェットの概要 (続き)

ウィジェット名	説明
トップ N	最高または最低の健全性スコアを示す 5 つのアプリケーションのように、さまざまなカテゴリでの上位または下位 N 個のメトリックまたはリソースを表示します。
トポロジ グラフ	ノード間の複数のリソースのレベルを表示します。
表示	構成されたリソースに応じて、定義されたビューを表示します。
ウェザー マップ	複数のリソースについて、選択したメトリックの一定期間の動作を色の変化で表します。
ワークロード	選択したリソースのワークロード情報を表示します。

ウィジェットの詳細については、vRealize Operations Manager のヘルプを参照してください。

ダッシュボード

ダッシュボードには、パフォーマンスに関する視覚的な概要と、仮想インフラストラクチャにおけるオブジェクトの状態が表示されます。ダッシュボードによって、環境にすでに存在する問題および生じ得る問題の特性と時間枠を判断できます。ダッシュボードにウィジェットを追加し、構成することによりダッシュボードを作成します。

vRealize Operations Manager は、企業内の監視対象のソフトウェアおよびハードウェア リソースからパフォーマンスデータを収集し、予測分析、および問題に関するリアルタイムの情報を提供します。データと分析は、構成可能なダッシュボード、事前定義済みのページ、およびいくつかの事前定義済みのダッシュボードに、アラートを通じて表示されます。

- vRealize Operations Manager に用意されたいくつかの事前定義のダッシュボードから始めることができます。
- ウィジェット、ビュー、バッジ、フィルタを使用して特定のニーズに合った追加のダッシュボードを作成して情報の焦点を変更することができます。
- 事前定義のダッシュボードに対してクローン作成、編集を行うことも、ゼロから作成することもできます。
- 依存関係を示すデータを表示する場合、ダッシュボードにウィジェットの相互作用を追加することができます。
- ロールベースのアクセスをさまざまなダッシュボードに提供することで、チームの協力が高まります。

表 6-3. vRealize Operations Manager ホーム ページのメニュー

メニュー	説明
ダッシュボード リスト	ホーム ページに表示できるすべてのダッシュボードの一覧を表示します。このメニューを使用してダッシュボード間をすばやく移動できます。
アクション	作成、編集、削除、デフォルト設定など、使用可能なダッシュボード アクション。これらのアクションは、表示されているダッシュボードに直接適用されます。



カスタム ダッシュボードの作成 (http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_create_dashboards_vrom)

ダッシュボードのタイプ

事前定義されたダッシュボードを使用するか、または vRealize Operations Manager で独自のカスタム ダッシュボードを作成できます。

事前定義されたダッシュボード

vRealize Operations Manager には事前定義されたダッシュボードが用意されており、仮想マシンのトラブルシューティング、ホスト、クラスタ、データストアのワークロード分布、データセンターのキャパシティ、仮想マシンに関する情報などの主な疑問に対する答えを知ることができます。詳細をログに記録することもできます。

事前定義されたダッシュボードは、ホーム ページからアクセスできます。[ダッシュボード リスト] - [vSphere ダッシュボード ライブラリ] の順にクリックするか、[ダッシュボード リスト] をクリックします。

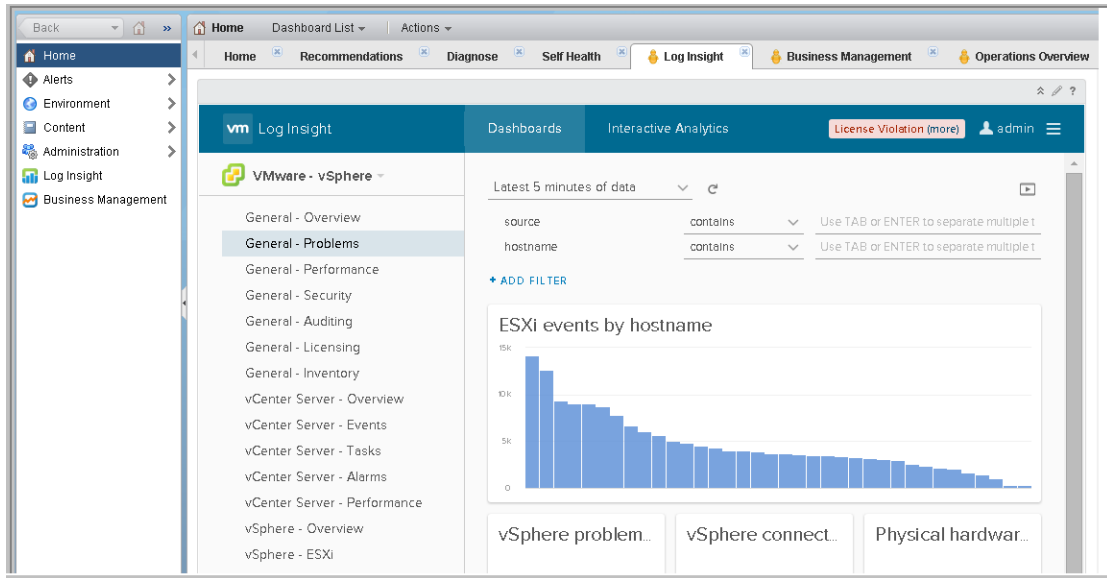
vRealize Operations Manager で追加されている、事前定義されたダッシュボードは次のとおりです。

- Log Insight
- ビジネス管理
- はじめに
- Operations 概要
- キャパシティ概要
- 仮想マシンのトラブルシューティング
- 仮想マシン ダッシュボード
 - ヘビー ヒッター仮想マシン
 - 仮想マシン構成
 - 仮想マシン使用量
- インフラストラクチャ ダッシュボード
 - クラスタ構成
 - クラスタ パフォーマンス
 - データストア キャパシティ
 - データストア パフォーマンス
 - ESXi の設定
 - ネットワーク構成

[Log Insight] ダッシュボード

vRealize Operations Manager が vRealize Log Insight と統合されている場合、[Log Insight] ダッシュボードからカスタム ダッシュボードとコンテンツ バック ダッシュボードにアクセスできます。環境内のログ イベントのグラフを表示、またはウィジェットのカスタム セットを作成して、最も重要な情報にアクセスできます。

Log Insight の詳細については、[vRealize Log Insight のドキュメント](#)を参照してください。



vRealize Operations Manager から [Log Insight] ダッシュボードにアクセスするには、次のいずれかの操作を実行する必要があります。

- vRealize Operations Manager インターフェイスから vRealize Log Insight アダプタを構成する
- vRealize Operations Manager を vRealize Log Insight に構成する。

構成の詳細については、[「vRealize Operations Manager で vRealize Log Insight を構成する \(P. 63\)」](#) を参照してください。

ビジネス管理ダッシュボード

vRealize Operations Manager が vRealize Business for Cloud に統合されている場合、ビジネス管理ダッシュボードと [ビジネス管理] ページでインフラストラクチャとコスト情報を表示できます。

インフラストラクチャとコストの情報を表示するには、vRealize Business for Cloud アダプタを構成する必要があります。このアダプタの構成については、[「vRealize Business for Cloud アダプタの構成 \(P. 65\)」](#) を参照してください。

スタート ガイド ダッシュボード

スタート ガイド ダッシュボードには、事前定義されたダッシュボードが 1 ページに表示されます。このダッシュボードを使用して、それぞれのダッシュボードで答えが得られる主な問題点を知ることができます。

新しい定義済みのダッシュボードの使い方が分かったら、[アクション]-[メニューからダッシュボードを削除]をクリックしてダッシュボードを無効にすることができます。

Operations 概要ダッシュボード

Operations 概要ダッシュボードには、担当する各種データセンターの概要が示され、基盤インフラストラクチャでの問題発生を防止するためのアラート対応に役立ちます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [インベントリ サマリ]：環境のインベントリ全体の要約を表示します。
- [データセンターの選択]：運用状況を確認したいデータセンターを選択します。フィルタを使用して、複数のパラメータでリストを絞り込みます。表示したいデータセンターを見つけたら選択します。ダッシュボードに関連データが自動的に表示されます。
- [全クラスタのアップタイム]：選択したデータセンターのクラスタ全般の健全性を表示します。このメトリック値は、1 つのホストを HA ホストとして、それぞれの ESXi ホストのアップタイムをもとに計算されます。数値が 100% 未満の場合、その期間にクラスタの少なくとも 2 つのホストが稼働していなかったことを意味します。

- [アラート ボリューム]：重要度をもとにアラートのトレンドの内訳を表示します。
- [トップ N]：過去 24 時間に CPU 競合、メモリ使用量、ディスク遅延が最大であった 15 個の仮想マシンのリストも表示できます。特定のデータを取得するため、問題の発生時間に手動で設定ができます。時間を設定するには、ウィジェットのタイトル バーの [ウィジェットの編集] アイコンをクリックして、[期間の長さ] ドロップダウン メニューを編集します。

キャパシティ概要ダッシュボード

キャパシティ概要ダッシュボードには、環境内のデータセンターのキャパシティに関する概要が表示されます。それぞれのデータセンターを参照し、オブジェクトの状況を確認して、データセンター間でリソース キャパシティの再調整が必要かどうかを知ることができます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [環境を選択]：このウィジェットを使ってデータセンターを選択します。フィルタを使用して、複数のパラメータでリストを絞り込みます。表示したいデータセンターを見つけたら選択します。ダッシュボードに関連データが表示されます。
- [キャパシティ合計]：高可用性 (HA) に割り当てられたキャパシティを含む環境の物理キャパシティ合計を表示します。HA とパフファを考慮すると、実際のキャパシティは表示される合計キャパシティよりも少なくなります。
- [節約可能なキャパシティ]：パワーオフ状態の仮想マシンを削除して解放できるリソース量を確認します。アイドル状態の仮想マシン、アクティブな仮想マシン、実体のない仮想マシン、仮想マシン以外からキャパシティを解放することができます。ただし、このウィジェットでは、パワーオフ状態の仮想マシンから解放できるキャパシティが強調表示されます。パワーオフ状態のマシンとは、監視期間の最小パーセンテージの間、パワーオフ状態にある仮想マシンです。デフォルトの最小パーセンテージは、過去 30 日で 90% です。この設定は、ポリシーで変更可能です。
- [メモリ容量の使用率トレンド]：メモリ容量の全体のトレンドを表示します。このウィジェットには、現在の物理リソースの合計が表示されます。物理リソースには、HA パフファと使用率パフファが含まれます。このウィジェットには、仮想マシンに割り当てられたメモリの合計も表示されます。この数値が物理容量の合計に近い場合は、仮想マシンのメモリ競合が発生することがあります。競合レベルが顧客に提示した条件に収まることを確認してください。チャートには、メモリ容量の実際の使用率も含まれます。実際の使用量は、アクティブなメモリに基づいています。仮想マシンは通常、ある時点で最大量の RAM にアクセスすることはないので、これは低めの値になる傾向があります。
- [CPU キャパシティの使用率トレンド]：CPU キャパシティの全体のトレンドを表示します。このウィジェットには、現在の物理リソースの合計が表示されます。物理リソースには、HA パフファと使用率パフファが含まれ、これには合計キャパシティが反映されます。このウィジェットには、仮想マシンに割り当てられた CPU キャパシティの合計も表示されます。この数が物理キャパシティの合計に近い場合は、仮想マシンの CPU 競合が発生することがあります。競合レベルが顧客に提示した条件に収まることを確認してください。チャートには、CPU の実際の使用率も含まれます。実際の使用率は CPU の需要カウンタに基づいており、これには仮想マシンに代わり I/O の実行に使用される CPU が考慮されます。ESXi ホストは仮想マシンに代わりストレージ I/O とネットワーク I/O を実行し、これは仮想マシンを実行するものと異なるコアで実行されます。このため、CPU 需要には仮想マシンの CPU 使用量がより正確に反映されます。
- [ディスク容量キャパシティの使用率トレンド]：仮想マシンに割り当てられたディスク容量と実際の使用量を表示します。この情報は、シン プロビジョニングを計画するときに役立ちます。
- [キャパシティの使用率分布 - 超過または過小]：データセンターのオブジェクト使用の超過と過小を表示します。これをもとに、過剰に使用されるオブジェクトに適切なアクションを実行できます。

仮想マシンのトラブルシューティング ダッシュボード

仮想マシンのトラブルシューティング ダッシュボードを使用して、単一の仮想マシンのパフォーマンスの問題を解決します。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [トラブルシューティングする VM を検索する]：環境内のすべての仮想マシンを表示します。トラブルシューティングを行う仮想マシンを選択できます。名前、フォルダ名、関連するタグ、ホスト、vCenter Server など、フィルタを使用して複数のパラメータでリストを絞り込みます。トラブルシューティングを行う仮想マシンを見つけたら選択します。ダッシュボードに関連データが自動的に表示されます。

- [仮想マシンについて]：仮想マシンのコンテキストを知ることができます。このウィジェットでは、問題の根本原因の分析や可能な緩和策に関する洞察も得られます。
- [クリティカル アラートが存在するかどうか]：クリティカル アラートを表示します。クリティカル以外のアラートを見るには、仮想マシン オブジェクトをクリックします。
- [関連オブジェクト]：現在仮想マシンを実行している ESXi ホストを表示します。このホストは、過去に仮想マシンが実行していた ESXi ホストでない場合があります。その他の関連オブジェクトを表示して、問題に関連していないかどうかを確認することができます。
- [仮想マシンのデマンドの急増またはアノマリがあるかどうか]：CPU、メモリ、ネットワークなどのリソースに対する仮想マシン要求のピークを確認します。要求のピークは、仮想マシンの異常な動作や、仮想マシンのサイズが過小であることを示す場合があります。メモリ使用率は、ゲスト OS メトリックをもとにしています。VMware Tools 10.0.0 以降と vSphere 6 Update 1 以降が必要です。これらの製品がない場合、メトリックは空白になります。
- [仮想マシンの競合が発生しているかどうか]：仮想マシンに競合が発生しているかどうかを確認します。仮想マシンに競合が発生している場合、基盤インフラストラクチャに仮想マシンのニーズに応える十分なリソースがないことが考えられます。
- [親クラスタに競合があるかどうか]：クラスタ内の仮想マシンの最大 CPU 競合のトレンドを表示します。このトレンドは、クラスタ内で絶えず続く競合を示す場合があります。競合がある場合は仮想マシンの問題ではないので、クラスタの問題を解決する必要があります。
- [親データストアに遅延があるかどうか]：データストア レベルの遅延と仮想マシン全体の遅延を相関させることができます。仮想マシンに遅延のスパイクがあり、データストアにピークが見られない場合は、仮想マシンの問題である可能性があります。またデータストアに遅延があれば、トラブルシューティングを行ってデータストアでピークが発生した原因を見つけることができます。
- [親ホスト]/[親クラスタ]：これらのウィジェットで、仮想マシンが存在するホストとクラスタを表示します。

仮想マシン ダッシュボード

仮想マシン ダッシュボードは、仮想マシンの構成と動作に関する洞察を提供する一連のダッシュボードです。

ヘビー ヒッター仮想マシン

ヘビー ヒッター仮想マシン ダッシュボードには、所定のクラスタで先週に最高の IOPS とネットワーク スループットを発生した仮想マシンに関する情報が表示されます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [クラスタを選択]：このウィジェットでクラスタを選択します。フィルタを使用して、複数のパラメータでリストを絞り込みます。表示したいクラスタを見つけたら選択します。ダッシュボードに関連データが自動的に表示されます。
- [クラスタ IOPS] と [クラスタ ネットワーク スループット]：クラスタの IOPS とネットワーク スループットを表示します。
- ダッシュボードの他のウィジェットを使用して、クラスタのどの仮想マシンで最高のネットワーク スループットと IOPS が発生したかを知ることができます。仮想マシンの情報をクラスタの結果と比較して、トレンドの相関を見ることができます。データを表示する期間を手動で設定できます。

仮想マシン構成ダッシュボード

仮想マシン構成ダッシュボードには、アノマリのある構成の仮想マシンのリストが表示されます。削除可能な大きなスナップショットのある仮想マシンを表示できます。環境内で削除可能な実体のない仮想マシンもリストに表示されます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [大きな仮想マシン] ウィジェットには、CPU、RAM、ディスク容量の多い仮想マシンがグラフィカルに表示されます。
- 制限のある仮想マシン、大きなスナップショット、実体のない仮想マシン、NIC が複数ある仮想マシン、非標準のオペレーティングシステムの仮想マシンを表示できます。これらの仮想マシンは、割り当てられたリソースをすべて使用していなくても、環境の他の仮想マシンのパフォーマンスに影響を与えます。

ウィジェットのビューはカスタマイズが可能です。

- 1 ウィジェットのタイトル バーの [ウィジェットの編集] アイコンをクリックします。[ウィジェットの編集] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 2 [ビュー] セクションで [編集ビュー] アイコンをクリックします。[編集ビュー] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 3 左ペインの [プレゼンテーション] オプションをクリックして、変更を加えます。

仮想マシン使用量ダッシュボード

仮想マシン使用量ダッシュボードを仮想マシンの所有者と共有することで、仮想マシンの潜在的な問題を確認するのに役立ちます。これには、仮想マシンの基本データが収集されます。このダッシュボードにはインフラストラクチャに関連するデータは表示されないで、インフラストラクチャ関連のメトリックを共有せずに、他のチームとダッシュボードのデータを共有することができます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [使用量をレポートする仮想マシンを検索]：トラブルシューティングを行う仮想マシンを選択します。フィルタを使用して、複数のパラメータでリストを絞り込みます。表示したい仮想マシンを見つけたら選択します。ダッシュボードに関連データが自動的に表示されます。
- [仮想マシンについて]：選択した仮想マシンとその詳細を表示します。[使用量をレポートする仮想マシンを検索] で仮想マシンを選択します。
- [仮想マシンの使用率トレンド: CPU、メモリ、IOPS、ネットワーク]：CPU の使用率と割り当てのトレンド、メモリ ワークロード、1 秒あたりのディスク コマンド、ネットワーク使用率に関する情報を確認できます。

インフラストラクチャ ダッシュボード

インフラストラクチャ ダッシュボードは、クラスタ、データストア、ESXi ホストの構成に関する洞察を提供する一連のダッシュボードです。

クラスタ構成ダッシュボード

クラスタ構成ダッシュボードには、環境内のクラスタにおける不一致が表示されます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [vMotion はすべてのホストで設定されていますか]：クラスタ内の vMotion と HA の構成に不一致がないかを判別します。クラスタ内のすべての ESXi ホストは、構成が矛盾してはなりません。クラスタの構成の一貫性を維持することで、運用がしやすくなり、パフォーマンスの予測が可能になります。
- [全クラスタのホスト カウント]：環境内のすべてのクラスタを表示します。クラスタでホストの数に矛盾がなければ、表示されるボックスは等しい大きさになります。この表示により、クラスタ サイズに大きな偏りがあるか、ホストが 4 つ未満の小さなクラスタが存在するか、または大きなクラスタが存在するかを知ることができます。運用を考慮し、クラスタは一貫して適度なサイズに維持してください。
- [選択したクラスタ内の ESXi ホストの属性]：クラスタ内のホストの構成の詳細を表示します。
- [すべてのクラスタ プロパティ]：ウィジェットのすべてのクラスタのプロパティを表示します。

クラスタ パフォーマンス ダッシュボード

クラスタ パフォーマンス ダッシュボードでは、仮想マシンでメモリ競合や CPU 競合が発生しているクラスタを確認することができます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [クラスタ]：パフォーマンスの詳細を確認するクラスタを選択します。フィルタを使用して、複数のパラメータでリストを絞り込みます。表示したいクラスタを見つけたら選択します。ダッシュボードに関連データが自動的に表示されます。
- [クラスタ (クリティカル アラートで色分け、ホスト数でサイズ調整)]：クリティカル アラートのみを表示します。
- 仮想マシンの最大と平均の CPU、メモリ、ディスク、ディスク遅延を表示します。仮想マシンに競合が発生している場合、基盤インフラストラクチャに仮想マシンのニーズに応える十分なリソースがないことが考えられます。

- CPU、メモリ、ディスク遅延の競合が発生している 10 個の仮想マシンのリストを表示します。これによって、トラブルシューティングを実行して、問題解決のステップに進めます。

データストア キャパシティ ダッシュボード

データストア キャパシティ ダッシュボードの情報をもとに、環境内のデータストアのキャパシティを再調整する必要があります。あるかどうかを知ることができます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [データストアのサイズと使用量分布]：過剰に使用されているデータセンターと過小に使用されているデータセンターを見つけます。また、データストアのサイズが等しいかどうかを確認できます。このウィジェットでデータストアを選択すると、ダッシュボードに関連データが自動で表示されます。
- [選択したデータストア内の仮想マシン]：選択したデータストアをもとに仮想マシンのリストを表示します。仮想マシンがパワーオンであるかどうかや、スナップショットを使用する場合はそのサイズなど、関連する詳細も確認できます。
- [選択したデータストアの使用率トレンド]：選択したデータストアで使用されるキャパシティと利用可能なキャパシティの合計を比べて、トレンドを知ることができます。
- [環境内のすべての共有データストア]：環境内で共有されるデータストアのリストを表示します。このウィジェットに表示される情報は、使用量に基づきデータストアのキャパシティの再調整が必要かどうかを適切に判断するのに役立ちます。

データストアのパフォーマンス ダッシュボード

データストアのパフォーマンス ダッシュボードには、遅延が大きいデータストアとそのトレンド ラインが表示されます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [データストアを選択]：パフォーマンスの詳細を確認したいデータストアを選択します。フィルタを使用して、複数のパラメータでリストを絞り込みます。表示したいデータストアを見つけたら選択します。ダッシュボードに関連データが自動的に表示されます。
- [選択したデータストアの仮想マシンの現在の IOPS と遅延]：選択したデータストアの仮想マシンの現在の IOPS と遅延を表示します。
- [高遅延かつ実行中 IO の多いデータストア]：遅延が多いデータストアと実行中のディスク I/O のトレンドを表示します。データストアには、実行中のディスク I/O がないのが望ましい状態です。
- ダッシュボードのその他のウィジェットを使用して、選択したデータストアのディスク遅延、実行中の I/O、IOPS、スループットのトレンドを確認できます。
- [選択した仮想マシンの IOPS トレンド履歴] ウィジェットと [選択した仮想マシンの遅延トレンド履歴] ウィジェット：選択したデータストアの仮想マシンの IOPS と遅延のトレンド履歴を表示します。[選択したデータストアの仮想マシンの現在の IOPS と遅延] ウィジェットから、トレンド履歴を表示する仮想マシンを選択します。

ESXi 構成ダッシュボード

ESXi 構成ダッシュボードには、環境内の ESXi ホストの構成と分布に関する情報が表示されます。非推奨の設定で構成されたホストがないかも確認できます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- このウィジェットを使用して、環境内のハードウェア モデル、BIOS バージョン、ESXi バージョンの分布が分かります。
- このウィジェットを使用して、ホストの構成に非推奨の設定（切断状態の ESXi ホスト、メンテナンス モードの ESXi ホスト、ネットワーク速度が 10 GB 以下のホストなど）が使用されていないかどうかを確認できます。
- [すべての ESXi 設定]：このウィジェットを使用して、ホスト構成の不一致を識別します。

ネットワーク構成ダッシュボード

ネットワーク構成ダッシュボードは、特定のスイッチと使用する ESXi ホストと仮想マシンを見つけるのに役立ちます。

ダッシュボード ウィジェットはさまざまな使い方ができます。

- [分散スイッチ]：パフォーマンスの詳細を確認したいスイッチを選択します。フィルタを使用して、複数のパラメータでリストを絞り込みます。表示したいスイッチを見つけたら選択します。ダッシュボードに関連データが自動的に表示されます。
- [スイッチの分散ポート グループ]：スイッチのポート グループ、各スイッチのポート数、使用状況の詳細を表示します。
- [選択したスイッチを使用している ESXi ホスト/仮想マシン]：選択したスイッチを使用する ESXi ホストと仮想マシンを見つけます。選択したスイッチを使用する ESXi ホストと仮想マシンに関する構成情報も表示できます。

カスタム ダッシュボード

vRealize Operations Manager には、事前定義されたダッシュボードがあります。ユーザーの環境のニーズを満たすダッシュボードを作成することもできます。

[ダッシュボード] と vRealize Operations Manager ホーム ページを管理するには、左側のペインの [内容] アイコンをクリックし、[ダッシュボード] をクリックします。

ダッシュボード上のウィジェットの追加、削除、配置、新規ダッシュボードのクローン作成と作成、他のインスタンスからのダッシュボードのインポートおよびエクスポート、ウィジェット構成オプションの編集、ウィジェットの相互作用の構成をアクセス権限に基づいて行うことができます。

表 6-4. ダッシュボードのオプション

オプション	説明	使用法
テンプレートとして保存	ダッシュボード定義内のすべての情報が含まれます。	任意のダッシュボードを使用して、テンプレートを作成できます。
ダッシュボードのエクスポート	ダッシュボードをエクスポートすると、vRealize Operations Manager は JSON 形式でダッシュボード ファイルを作成します。	ダッシュボードを vRealize Operations Manager インスタンスからエクスポートし、別のインスタンスにインポートすることができます。
ダッシュボードのインポート	vRealize Operations Manager からのダッシュボード情報が含まれる JSON ファイル。	別の vRealize Operations Manager インスタンスからエクスポートされたダッシュボードをインポートすることができます。vRealize Operations Manager 5.x インスタンスからは、XML ファイルでダッシュボードをインポートすることができます。
ダッシュボードをホームに追加する	vRealize Operations Manager ホーム ページでダッシュボードが使用可能になります。	任意のダッシュボードを vRealize Operations Manager ホーム ページに追加できます。
ダッシュボードをホームから削除する	vRealize Operations Manager ホーム ページからダッシュボードを削除します。	任意のダッシュボードを vRealize Operations Manager ホーム ページに追加できます。
ダッシュボードの順序変更/自動切り替え	vRealize Operations Manager ホーム ページでのダッシュボード タブの順序を変更します。	あるダッシュボードから別のダッシュボードへ切り替えるよう、vRealize Operations Manager を構成することができます。
サマリー ダッシュボードの管理	選択されたオブジェクト、グループ、またはアプリケーションの状態の概要を提供します。	[サマリー] タブをダッシュボードと切り替え、特定の必要なデータを取得することができます。

表 6-4. ダッシュボードのオプション (続き)

オプション	説明	使用法
タブ グループの管理	フォルダでダッシュボードをグループ化します。	ダッシュボード フォルダを作成し、自分にとってわかりやすいようにダッシュボードをグループ化することができます。
ダッシュボードの共有	他のユーザーまたはユーザー グループがダッシュボードを使用できるようになります。	1 つまたは複数のユーザー グループで 1 つのダッシュボードまたはダッシュボード テンプレートを共有できます。

ダッシュボード リストは、アクセス権限によって異なります。

ダッシュボードの作成と構成

vRealize Operations Manager のすべてのオブジェクトのステータスを表示するには、ウィジェットを追加してダッシュボードを作成します。ダッシュボードを作成して変更し、環境のニーズに合わせて構成できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックして、[ダッシュボード] をクリックします。
- 2 [ダッシュボードの作成] アイコンをクリックしてダッシュボードを作成および構成します。
- 3 左側のペインで手順を完了して、次の操作を実行します。
 - a ダッシュボードの名前を入力します。
[「名前と説明の詳細 \(P. 180\)」](#)
 - b ウィジェットをダッシュボードに追加します。
[「ウィジェット リストの詳細 \(P. 181\)」](#)
 - c ウィジェットの相互作用を構成します。
[「ウィジェットの相互作用の詳細 \(P. 181\)」](#)
 - d ダッシュボードのナビゲーションを作成します。
[「ダッシュボード ナビゲーションの詳細 \(P. 182\)」](#)
- 4 [保存] をクリックします。
- 5 [ダッシュボード] パネルから、[ダッシュボードの編集] をクリックして、ダッシュボードを変更します。

名前と説明の詳細

vRealize Operations Manager ホーム ページに表示されるとき、ダッシュボードの名前および表示。

ダッシュボードを構成する場所

ダッシュボードを作成または編集するには、左側のペインで [内容] - [ダッシュボード] を選択します。ダッシュボード ツールバーで、プラス記号をクリックしてダッシュボードを追加するか、鉛筆をクリックして選択したダッシュボードを編集します。ワークスペースの左側にある、[ダッシュボードの構成] をクリックします。

表 6-5. ダッシュボード ワークスペースのダッシュボード構成オプション

オプション	説明
名前	ホーム ページのタブの最上部およびダッシュボードのリストに表示されるとき、ダッシュボードの名前。 名前の入力時にスラッシュを使用すると、スラッシュがグループの区切り記号として扱われ、その名前が存在しない場合にはダッシュボード リストで、指定した名前のフォルダが作成されます。たとえば、ダッシュボードに clusters/hosts という名前を指定した場合、グループ clusters の下でダッシュボードに hosts という名前が付けられます。
説明	ダッシュボードの説明。
デフォルトです	[はい] を選択すると、ログインしたときにホーム ページにダッシュボード名が表示されます。

ウィジェット リストの詳細

vRealize Operations Manager には、使用環境内のオブジェクトの特定のメトリックとプロパティを監視するためにダッシュボードに追加することができるウィジェットのリストが表示されます。

ウィジェットをダッシュボードに追加する場所

ウィジェットをダッシュボードに追加するには、左側のペインで [内容] - [ダッシュボード] を選択します。ダッシュボード ツールバーで、プラス記号をクリックしてダッシュボードを追加するか、鉛筆アイコンをクリックして選択したダッシュボードを編集します。ワークスペースの左側で、[ウィジェット リスト] をクリックします。ダッシュボードを作成する場合は、ワークスペースに関する必要な手順を完了しておきます。

ウィジェットをダッシュボードに追加する方法

ワークスペースの左側に、事前定義されているすべての vRealize Operations Manager ウィジェットのリストが表示されます。ダッシュボードにウィジェットを追加するには、右側のコンテンツ領域にウィジェットをドラッグします。

ウィジェットを見つけるには、[フィルタ] オプションにウィジェットの名前または名前の一部を入力します。たとえば、**キャパシティ** と入力すると、リストにフィルタが適用されて、残りキャパシティ ウィジェット、キャパシティ使用率ウィジェット、節約可能なキャパシティ ウィジェットが表示されます。その後、必要なウィジェットを選択できます。

情報を表示するため、ほとんどのウィジェットを個別に構成する必要があります。各ウィジェットの構成方法の詳細については、[「ウィジェット \(P. 167\)」](#) を参照してください。

ダッシュボードでウィジェットを配置する方法

必要に応じてダッシュボードのレイアウトを変更できます。最初に追加するウィジェットは、配置した位置に関係なくデフォルトで自動的に水平方向に配置されます。ウィジェットは、幅に基づいて、ダッシュボードの最上部まで移動されます。

- ウィジェットの位置を変更するには、レイアウト内の目的の場所へウィジェットをドラッグします。他のウィジェットが自動的に再配置されて場所が確保されます。
- ウィジェットのサイズを変更するには、ウィジェットの右下隅をドラッグします。

ウィジェットの相互作用の詳細

ウィジェットどうしを接続し、表示される情報を相互依存させることができます。

ウィジェットの相互作用を作成する場所

ダッシュボードでウィジェットについて、ウィジェットの相互作用を作成するには、左側のペインで [内容] - [ダッシュボード] を選択します。ダッシュボード ツールバーで、プラス記号をクリックしてダッシュボードを追加するか、鉛筆をクリックして選択したダッシュボードを編集します。ワークスペースの左側で、[ウィジェットの相互作用] をクリックします。新しいダッシュボードを作成する場合は、ワークスペースに関する必要な手順を完了させておきます。

ウィジェットの相互作用を作成する方法

使用可能なウィジェットの相互作用のリストは、ダッシュボードにあるウィジェットによって異なります。ウィジェットは、提供、受け取り、および提供と受け取りの両方を実行できます。ウィジェットによっては、複数の提供元が存在するものもあります。

相互作用を作成するには、指定したウィジェットの [選択したオブジェクト] ドロップダウン メニューをクリックし、提供元のウィジェットを選択します。アラート、メトリック、またはタグを提供するウィジェットがあります。[選択したアラート]、[選択したメトリック]、または [選択したタグ] ドロップダウン メニューをクリックして、アラート、メトリック、またはタグに固有の提供元のウィジェットを選択します。すべての相互作用を使用する準備ができたなら、[相互作用を適用] をクリックします。相互作用の動作の仕組みの詳細については、[「ウィジェットの相互作用 \(P. 168\)」](#) を参照してください。

ダッシュボード ナビゲーションの詳細

ダッシュボードのナビゲーションを使用して、あるダッシュボードから別のダッシュボードに移動したり、あるダッシュボードのセクションやコンテキストを別のダッシュボードに適用したりできます。ウィジェットを別のダッシュボードのウィジェットと接続することにより、問題の調査や与えられた情報の効果的な解析が可能です。

ダッシュボードのナビゲーションの追加を行う場所

ダッシュボードにダッシュボードのナビゲーションを作成するには、左側のペインで、[内容]-[ダッシュボード]を選択します。ダッシュボード ツールバーで、プラス記号をクリックしてダッシュボードを追加するか、鉛筆をクリックして選択したダッシュボードを編集します。ワークスペースの左側で、[ダッシュボードのナビゲーション] をクリックします。新しいダッシュボードを作成する場合は、ワークスペースに関する必要な手順を完了させておきます。


ダッシュボードのナビゲーションの動作

ダッシュボードのナビゲーションは、提供元のウィジェット用にのみ作成できます。提供元のウィジェットはターゲットウィジェットに情報を送信します。ダッシュボードのナビゲーションを作成すると、ターゲットウィジェットは、受信可能な情報タイプに基づいてフィルタリングされます。

ダッシュボードのナビゲーションをダッシュボードに追加する方法

使用可能なダッシュボードのナビゲーションは、使用可能なダッシュボードと現在のダッシュボード内のウィジェットによって異なります。ナビゲーションを追加するには、指定したウィジェットの [ターゲットダッシュボード] ドロップダウンメニューをクリックし、移動先のダッシュボードとウィジェットを選択します。適用可能なウィジェットを複数選択できます。[ナビゲーションの適用] をクリックして、接続を適用します。

注意 ホーム ページで使用できないダッシュボードには、ダッシュボードのナビゲーションを追加できません。

ダッシュボードのナビゲーションが使用可能な場合、[ダッシュボードのナビゲーション] アイコン  が各ウィジェットの上部メニューに表示されます。複数のオブジェクトを選択し、あるダッシュボードの選択項目またはコンテキストを別のダッシュボードに適用できます。複数のオブジェクトを個々に選択するには、Ctrl キーを押しながらオブジェクトをクリックします。オブジェクトの範囲を選択するには、Shift キーを押しながらオブジェクトをクリックします。

ダッシュボードの管理

ダッシュボードのタブの順序の変更する、vRealize Operations Manager をダッシュボード間で切り替える、フォルダを作成して、ダッシュボードをわかりやすくグループ化する、ダッシュボードまたはダッシュボード テンプレートを 1 つ以上のユーザー グループと共有することができます。

ダッシュボードの順序変更と切り替え

ホーム ページで、ダッシュボード タブの順序を変更できます。あるダッシュボードから別のダッシュボードへ切り替えるよう、vRealize Operations Manager を構成することができます。この機能は、自社のパフォーマンスの様々な側面を表示する複数のダッシュボードがあり、それぞれを交互に表示したいというときに便利です。

ダッシュボードの順序と自動切り替えを構成する場所

ダッシュボードの切り替えの順序変更および構成を行うには、左側のペインで [内容] - [ダッシュボード] を選択し、歯車アイコンをクリックして、[ダッシュボードの順序変更/自動切り替え] を選択します。

ダッシュボードの順序を変更する方法

リストには、ダッシュボードの順序のとおりダッシュボードが表示されます。ダッシュボードを上下にドラッグし、ホーム ページでのダッシュボードの順序を変更します。

ダッシュボードの自動切り替えを構成する方法

- 1 リストから、構成するダッシュボードをダブルクリックします。
- 2 [自動移行] ドロップダウン メニューから、[オン] を選択します。
- 3 切り替え間隔を秒単位で選択します。
- 4 切り替え先のダッシュボードを選択し、[更新]をクリックします。
- 5 [保存] をクリックして、変更を保存します。

指定した間隔を過ぎると、ホーム ページで現在のダッシュボードから定義済みのダッシュボードに切り替わります。

サマリ ダッシュボードの管理

[サマリ] タブには、選択したオブジェクト、グループ、またはアプリケーションの状態の概要が表示されます。[サマリ] タブをダッシュボードと切り替え、特定の必要なデータを取得することができます。

[サマリ] タブ ダッシュボードを構成する場所

サマリ ダッシュボードを管理するには、左側のペインで [内容] - [ダッシュボード] を選択し、歯車アイコンをクリックして、[サマリ ダッシュボードの管理] を選択します。

[サマリ] タブ ダッシュボードを管理する方法

表 6-6. [サマリ ダッシュボードの管理] のオプション

オプション	説明
アダプタ タイプ	サマリ ダッシュボードの構成対象のアダプタ タイプ。
フィルタ	単語検索を使用して、リストに表示されるアダプタ タイプの数を限定します。
名前	使用可能なオブジェクトすべてのリスト。
デフォルトの使用アイコン	vRealize Operations Manager のデフォルトの [サマリ] タブを使用する場合にクリックします。

表 6-6. [サマリ ダッシュボードの管理] のオプション (続き)

オプション	説明
詳細ページ	選択したオブジェクトの場合に使用する [サマリ] タブの種類を表示します。
[ダッシュボードの割り当て] アイコン	クリックして表示される [ダッシュボード リスト] ダイアログ ボックスに、使用可能なすべてのダッシュボードがリストされます。

オブジェクトの [サマリ] タブを変更するには、左パネルでオブジェクトを選択し、[ダッシュボードの割り当て] アイコンをクリックします。[ダッシュボード リスト] ダイアログ ボックスでダッシュボードを選択し、[OK] をクリックします。[サマリ ダッシュボードの管理] ダイアログ ボックスで、[保存] をクリックします。オブジェクト詳細ページの [サマリ] タブに移動すると、オブジェクト タイプに関連付けたダッシュボードが表示されます。

タブ グループの管理

ダッシュボード フォルダを作成し、自分にとってわかりやすいようにダッシュボードをグループ化することができます。

ダッシュボード グループを構成する場所

ダッシュボード グループを管理するには、左側のペインで [内容] - [ダッシュボード] を選択し、歯車アイコンをクリックして、[タブ グループの管理] を選択します。

[ダッシュボード] タブを管理する方法

表 6-7. [タブ グループの管理] のオプション

オプション	説明
タブ グループ	使用可能なグループ フォルダすべてで構成される階層ツリー。
ダッシュボード タブ	使用可能なダッシュボードすべてのリスト。

新しいダッシュボード グループ フォルダを作成するには、[タブ グループ] フォルダか別のフォルダを右クリックして、[追加] をクリックします。ダッシュボードを追加するには、追加するダッシュボードを [ダッシュボード タブ] リストからフォルダにドラッグします。

ダッシュボードの共有

1 つまたは複数のユーザー グループで 1 つのダッシュボードまたはダッシュボード テンプレートを共有できます。ダッシュボードを共有すると、選択するユーザー グループ内のすべてのユーザーが利用できるようになります。ダッシュボードは、共有するユーザー全員に同じように表示されます。共有ダッシュボードを編集する場合、すべてのユーザーに対してダッシュボードが変更されます。他のユーザーは、共有ダッシュボードを表示することしかできません。変更することはできません。

ダッシュボードを共有するための場所

ダッシュボードを共有するには、左側のペインで [内容] - [ダッシュボード] を選択し、歯車アイコンをクリックして、[ダッシュボードの共有] を選択します。

表 6-8. ダッシュボードの共有のオプション

オプション	説明
アカウント グループ	ダッシュボードの共有相手とすることができるすべてのグループ。
共有ダッシュボード	共有できるすべてのダッシュボードとテンプレート。[ダッシュボード タブ/テンプレートの共有] アイコンをクリックすることで、ダッシュボード タブとダッシュボード テンプレート間を切り替えることができます。

[共有ダッシュボード] タブの管理方法

ダッシュボードタブを共有するには、[共有ダッシュボード] のリストで該当のダッシュボードに移動し、それを左側にある共有相手のグループにドラッグします。

グループとのダッシュボードの共有を停止するには、左パネルで該当のグループをクリックし、右パネルでダッシュボードに移動して、リストの上にある [共有の停止] アイコンをクリックします。

複数のグループとのダッシュボードの共有を停止するには、左パネルで [グループ化されていません] という名前をクリックし、右パネルでダッシュボードに移動して、リストの上にある [共有の停止] アイコンをクリックします。

表示

vRealize Operations Manager には、いくつかのビュータイプがあります。それぞれのビュータイプを使用することで、アラート、症状など、さまざまな監視対象オブジェクトのメトリック、プロパティ、ポリシーをさまざまな切り口で見ることができます。vRealize Operations Manager のビューには、使用環境におけるアダプタの情報も表示されます。

vRealize Operations Manager のビューを設定して、変換、予測、トレンド計算を表示することができます。

- 変換タイプによって、値の集約方法が決定されます。
- トrend オプションによって、値が履歴データ、Raw データに基づきどのように変化するのが示されます。トレンド計算は、変換タイプとロールアップ間隔によって異なります。
- 予測オプションによって、将来の値が履歴データのトレンド計算に基づきどのようにになるのが示されます。



ビューの作成 (http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_create_views_in_vrom)

vRealize Operations Manager のビューは、vRealize Operations Manager のさまざまな領域において使用できます。

- すべてのビューを管理するには、[内容] - [ビュー] を選択します。
- ビューによって特定のオブジェクト用に提供されるデータを表示するには、[詳細] タブをクリックし、[ビュー] をクリックします。
- ビューによってダッシュボードに提供されるデータを表示するには、ダッシュボードに表示ウィジェットを追加します。
- 詳細な分析のセクションでビューにリンクを設定するには、ビューのワークスペースにおける可視性の手順で [詳細な分析] オプションを選択します。

ビューおよびレポートの所有権

事前定義されたすべてのビューおよびテンプレートのデフォルトの所有者は System です。これらが編集された場合、その編集者が所有者になります。事前定義された元のビューまたはテンプレートを保持する場合は、それらのクローンを作成する必要があります。クローン作成すると、そのクローンの所有者になります。

ビュー、テンプレート、またはスケジュールを最後に編集したユーザーがその所有者になります。たとえば、ビューを作成した場合、その所有者としてリストされます。別のユーザーがビューを編集すると、そのユーザーが所有者になって [所有者] 列に表示されます。

ビューまたはテンプレートをインポートしたユーザーがその所有者になります。これは、最初に別の誰かがそのビューを作成している場合も同様です。たとえば、<User 1> がテンプレートを作成してエクスポートします。裏で <User 2> がインポートすると、テンプレートの所有者は <User 2> になります。

誰がテンプレートを所有しているかに関係なく、レポートを生成したユーザーがその所有者になります。レポートがスケジュールから作成されている場合、スケジュールを作成したユーザーが、生成されるレポートの所有者になります。たとえば、<User 1> がテンプレートを作成して <User 2> がこのテンプレートのスケジュールを作成している場合、生成されるレポートの所有者は <User 2> になります。

ビューの概要

ビューは、収集したオブジェクトに関する情報を、ビュー タイプに応じた方法で表示します。それぞれのビュー タイプを使用することで、アラート、症状など、さまざまな監視対象オブジェクトのメトリック、プロパティ、ポリシーをさまざまな切り口で見ることができます。

[ビュー] ページは、左側のペインの [内容] アイコンをクリックして、[ビュー] をクリックすると表示されます。

[ビュー] ページでは、ビューの作成、編集、削除、クローン作成、エクスポート、インポートを実行できます。

一覧表示されたビューは、名前、タイプ、説明、件名、または所有者により並べ替えることができます。

パネルの右上からフィルタを追加すると、ビューのリストを制限できます。

表 6-9. フィルタ グループ

フィルタ グループ	説明
名前	ビュー名によるフィルタリング。たとえば my view と入力すると、名前に「my view」という言葉が含まれるビューがすべてリストされます。
タイプ	ビュー タイプによるフィルタリング。
説明	ビューの説明によるフィルタリング。たとえば my view と入力すると、説明に「my view」という言葉が含まれるビューがすべてリストされます。
件名	サブジェクトによるフィルタリング。

ビューおよびレポートの所有権

ビュー、レポート、テンプレート、またはスケジュールの所有者は変更される可能性があります。

事前定義されたすべてのビューおよびテンプレートのデフォルトの所有者は **System** です。これらが編集された場合、その編集者が所有者になります。事前定義された元のビューまたはテンプレートを保持する場合は、それらのクローンを作成する必要があります。クローン作成すると、そのクローンの所有者になります。

ビュー、テンプレート、またはスケジュールを最後に編集したユーザーがその所有者になります。たとえば、ビューを作成した場合、その所有者としてリストされます。別のユーザーがビューを編集すると、そのユーザーが所有者になって [所有者] 列に表示されます。

ビューまたはテンプレートをインポートしたユーザーがその所有者になります。これは、最初に別の誰かがそのビューを作成している場合も同様です。たとえば、<User 1> がテンプレートを作成してエクスポートします。裏で <User 2> がインポートすると、テンプレートの所有者は <User 2> になります。

誰がテンプレートを所有しているかに関係なく、レポートを生成したユーザーがその所有者になります。レポートがスケジュールから作成されている場合、スケジュールを作成したユーザーが、生成されるレポートの所有者になります。たとえば、<User 1> がテンプレートを作成して <User 2> がこのテンプレートのスケジュールを作成している場合、生成されるレポートの所有者は <User 2> になります。

ビューの作成と構成

特定のオブジェクトの情報を収集および表示するために、カスタム ビューを作成できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックして、[表示] をクリックします。
- 2 [ビューの作成] アイコンをクリックし、ビューを作成します。

- 3 左側のペインで次の手順を実行します。
 - a ビューの名前と説明を入力します。
「名前と説明の詳細 (P. 187)」
 - b ビューのプレゼンテーションを変更します。
「プレゼンテーションの詳細 (P. 187)」
 - c ビューのベース オブジェクト タイプを選択します。
「サブジェクトの詳細 (P. 189)」
 - d ビューにデータを追加します。
「データの詳細 (P. 192)」
 - e ビューの可視性を変更します。
「可視性の詳細 (P. 195)」
- 4 [保存] をクリックします。
- 5 ダッシュボード パネルから、[編集ビュー] をクリックしてビューを変更します。

名前と説明の詳細

[ビュー] ページのビューのリストに表示されるビューの名前と説明です。

名前と説明をビューに追加するには、左側のペインで [内容] - [ビュー] を選択します。[ビュー] ツールバーで、プラス記号をクリックしてビューを追加するか、鉛筆をクリックして選択したビューを編集します。ワークスペースの左側で、[名前と説明] をクリックします。

表 6-10. ビューのワークスペースでの名前と説明のオプション

オプション	説明
名前	[ビュー] ページに表示されるビューの名前。
説明	ビューの説明。

プレゼンテーションの詳細

プレゼンテーションは、オブジェクトについて収集された情報を表示する方法の 1 つです。各ビュー タイプで、メトリックとプロパティをさまざまな観点から解釈することができます。

ビューのプレゼンテーションを変更するには、左側のペインで [内容] - [ビュー] を選択します。[ビュー] ツールバーで、プラス記号をクリックしてビューを追加するか、鉛筆をクリックして選択したビューを編集します。ワークスペースの左側で、[プレゼンテーション] をクリックします。ビューを作成する場合は、前述の必要な手順を実行してください。

表 6-11. ビューのワークスペースでのプレゼンテーションのオプション

ビュー タイプ	説明
リスト	監視対象環境における特定のオブジェクトに関するデータを表形式で表示します。
概要	監視対象環境におけるリソースの使用状況に関するデータを表形式で表示します。
傾向	履歴データを利用して監視対象環境におけるリソースの使用状況と可用性の傾向および予測を生成します。
分布	監視対象環境におけるリソース展開に関する集約データを表示します。

表 6-11. ビューのワークスペースでのプレゼンテーションのオプション (続き)

ビュー タイプ	説明
テキスト	<p>入力されたテキストを挿入します。テキストは、動的なものにすることができ、メトリックとプロパティを含めることができます。</p> <p>テキストに書式を設定して、フォントのサイズや色の変更、テキストの強調表示、テキストの中央/右/左揃えを指定できます。また、選択したテキストを太字や斜体で表示したり、下線を引いたりもできます。</p> <p>デフォルトでは、レポート テンプレートを作成および変更する場合にのみ、テキスト ビューを使用できます。この設定は、ビューのワークスペースの [可視性] 手順で変更できます。</p>
イメージ	<p>静的イメージを挿入します。</p> <p>デフォルトでは、レポート テンプレートを作成および変更する場合にのみ、イメージ ビューを使用できます。この設定は、ビューのワークスペースの [可視性] 手順で変更できます。</p>

ビュー タイプのライブ プレビューは、サブジェクトとデータを選択する場合と、[プレビュー ソースの選択] を選択する場合に表示できます。

ビューのプレゼンテーションの構成方法

いくつかのビューのプレゼンテーションには、特定の構成設定があります。

表 6-12. ビューのワークスペースでのプレゼンテーションの構成オプション

ビュー タイプ	構成の説明
リスト	ページあたりのアイテム数を選択します。各アイテムが 1 行で表示され、そのメトリックとプロパティが列に表示されます。
概要	ページあたりのアイテム数を選択します。それぞれの行は、集約されたメトリックまたはプロパティです。
傾向	<p>プロット線の最大数を入力します。左上ペインのビュー タイプのライブ プレビューに表示されるオブジェクトについて、出力を制限します。表示されるプロット線は、プロット線の最大数として設定された値で決まります。</p> <p>たとえば、履歴データのプロットでプロット線の最大数を 30 に設定すると、30 個のオブジェクトが表示されます。履歴、傾向、予測の線のプロットで最大数を 30 に設定すると、オブジェクト当たり 3 本のプロット線が使用されるので、表示されるオブジェクトは 10 個のみになります。</p>
分布	<p>円グラフまたは棒グラフによる分布情報の表示を選択します。</p> <p>分布タイプを選択し、バケット カウントとサイズを構成します。</p> <p>vRealize Operations Manager の分布タイプについては、「ビューの分布タイプ (P. 189)」を参照してください。</p>

分布タイプ

vRealize Operations Manager ビューの分布タイプでは、監視対象環境におけるリソース分布に関して集約されたデータが表示されます。

動的分布

vRealize Operations Manager がデータをバケットに分布する方法を詳細に指定します。

表 6-13. 動的分布構成オプション

構成オプション	説明
バケット カウント	データ分布で使用するバケット数。
バケット サイズ間隔	バケット サイズは、指定のバケット数で分割された定義済みの間隔によって決まります。
バケット サイズの対数関数バケット	バケット サイズが対数的に増加するサイズに計算されます。これにより、指定されたバケット数で、範囲全体を途切れなくカバーできます。対数によるサイズ計算の底は、所定のデータによって決定されます。
バケット サイズの単純な最小/最大バケット	バケット サイズは測定された最小値と最大値の間で均等に分割されます。これにより、指定されたバケット数で、範囲全体を途切れなくカバーできます。

手動分布

バケット数および各バケットの最小値と最大値を指定します。

離散分布

vRealize Operations Manager がデータを分布するバケットの数を指定します。

ビューの分布タイプ

vRealize Operations Manager ビューの分布タイプでは、監視対象環境におけるリソース分布に関して集約されたデータが表示されます。

動的分布

vRealize Operations Manager がデータをバケットに分布する方法を詳細に指定します。

表 6-14. 動的分布構成オプション

構成オプション	説明
バケット カウント	データ分布で使用するバケット数。
バケット サイズ間隔	バケット サイズは、指定のバケット数で分割された定義済みの間隔によって決まります。
バケット サイズの対数関数バケット	バケット サイズが対数的に増加するサイズに計算されます。これにより、指定されたバケット数で、範囲全体を途切れなくカバーできます。対数によるサイズ計算の底は、所定のデータによって決定されます。
バケット サイズの単純な最小/最大バケット	バケット サイズは測定された最小値と最大値の間で均等に分割されます。これにより、指定されたバケット数で、範囲全体を途切れなくカバーできます。

手動分布

バケット数および各バケットの最小値と最大値を指定します。

離散分布

vRealize Operations Manager がデータを分布するバケットの数を指定します。

バケット数を増やすと、より詳細なデータを確認できます。

サブジェクトの詳細

サブジェクトは、ビューで情報を表示するための基本オブジェクト タイプです。

ビューのサブジェクトを指定するには、左側のペインで [内容] - [ビュー] を選択します。[ビュー] ツールバーで、プラス記号をクリックしてビューを追加するか、鉛筆をクリックして選択したビューを編集します。ワークスペースの左側で [サブジェクト] をクリックします。新しいビューを作成する場合は、前述の必要な手順を実行してください。

指定するサブジェクトによって、ビューを適用できる場所が決まります。複数のサブジェクトを選択すると、ビューをそれぞれのサブジェクトに適用できます。[可視性] 手順の [ブラックリスト] オプションを使用すると、ビューが表示されるレベルを制限できます。

ビューの可用性は、ビュー構成のサブジェクト、インベントリ ビュー、ユーザー権限、およびビューの可視性設定によって異なります。

ビューの適用の可否

リスト ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトの場所とオブジェクト コンテナの場所ですリスト ビューを確認できます。ただし、インベントリ ビューによっては、オブジェクト コンテナの場所にリスト ビューが表示されない場合があります。たとえば、ホスト システムのサブジェクトを持つリスト ビューを作成したとします。[環境] - [vSphere ホストおよびクラスタ] - [vSphere ワールド] に移動し、vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックすると、作成したリスト ビューが表示されます。しかし、[環境] - [vSphere Storage] - [vSphere ワールド] に移動し、同じ vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックしても、作成したリスト ビューは表示されません。vSphere Storage のインベントリ ビューにホスト システム オブジェクトが含まれないため、ホスト システムのサブジェクトを持つリスト ビューはありません。

サマリ ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトの場所とオブジェクト コンテナの場所ですサマリ ビューを確認できます。ただし、インベントリ ビューによっては、オブジェクト コンテナの場所にサマリ ビューが表示されない場合があります。たとえば、データストアのサブジェクトを持つサマリ ビューを作成したとします。[環境] - [vSphere Storage] - [vSphere ワールド] に移動し、vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックすると、作成したリスト ビューが表示されます。しかし、[環境] - [vSphere ネットワーク] - [vSphere ワールド] に移動し、同じ vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックしても、作成したサマリ ビューは表示されません。vSphere ネットワークのインベントリ ビューにデータストア オブジェクトが含まれないため、データストアのサブジェクトを持つリスト ビューはありません。

傾向ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトの場所でのみ傾向ビューを確認できます。たとえば、仮想マシンのサブジェクトを持つ傾向ビューを作成したとします。ナビゲーション ツリーで仮想マシンに移動すると、作成したビューが表示されます。

ディストリビューション ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトのオブジェクト コンテナの場所でのみディストリビューション ビューを確認できます。ただし、インベントリ ビューによっては、オブジェクト コンテナの場所にディストリビューション ビューが表示されない場合があります。たとえば、ホスト システムのサブジェクトを持つディストリビューション ビューを作成したとします。[環境] - [vSphere ホストおよびクラスタ] - [vSphere ワールド] に移動し、vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックすると、作成したディストリビューション ビューが表示されます。しかし、[環境] - [vSphere ネットワーク] - [vSphere ワールド] に移動し、同じ vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックしても、作成したディストリビューション ビューは表示されません。vSphere ネットワークのインベントリ ビューにホスト システム オブジェクトが含まれないため、ホスト システムのサブジェクトを持つディストリビューション ビューはありません。

テキスト ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトの場所でのみテキストビューを確認できます。たとえば、vCenter Server のサブジェクトを持つテキストビューを作成したとします。ナビゲーション ツリーで vCenter Server に移動すると、作成したビューが表示されます。サブジェクトを指定しなかった場合、作成したビューは環境内のすべてのサブジェクトで表示されます。

イメージ ビュー

イメージ ビューは環境内のすべてのオブジェクトに適用できます。

注意 ビューの適用の可否は、ユーザー権限およびビューの可視性構成によっても左右されます。

ビューの適用の可否

ビューは必ずしもユーザーの予想どおりの場所に表示されるとは限りません。ビューの適用の可否は、主にビューのサブジェクトとインベントリ ビューによって決まります。

リスト ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトの場所とオブジェクト コンテナの場所ですリストビューを確認できます。ただし、インベントリ ビューによっては、オブジェクト コンテナの場所にリスト ビューが表示されない場合があります。たとえば、ホストシステムのサブジェクトを持つリストビューを作成したとします。[環境] - [vSphere ホストおよびクラスタ] - [vSphere ワールド] に移動し、vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックすると、作成したリストビューが表示されます。しかし、[環境] - [vSphere Storage] - [vSphere ワールド] に移動し、同じ vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックしても、作成したリストビューは表示されません。vSphere Storage のインベントリ ビューにホストシステム オブジェクトが含まれないため、ホストシステムのサブジェクトを持つリストビューはありません。

サマリ ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトの場所とオブジェクト コンテナの場所ですサマリビューを確認できます。ただし、インベントリ ビューによっては、オブジェクト コンテナの場所にサマリ ビューが表示されない場合があります。たとえば、データストアのサブジェクトを持つサマリ ビューを作成したとします。[環境] - [vSphere Storage] - [vSphere ワールド] に移動し、vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックすると、作成したリストビューが表示されます。しかし、[環境] - [vSphere ネットワーク] - [vSphere ワールド] に移動し、同じ vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックしても、作成したサマリ ビューは表示されません。vSphere ネットワークのインベントリ ビューにデータストア オブジェクトが含まれないため、データストアのサブジェクトを持つリストビューはありません。

傾向ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトの場所でのみ傾向ビューを確認できます。たとえば、仮想マシンのサブジェクトを持つ傾向ビューを作成したとします。ナビゲーション ツリーで仮想マシンに移動すると、作成したビューが表示されます。

**ディストリビューション
ビュー**

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトのオブジェクト コンテナの場所でのみディストリビューション ビューを確認できます。ただし、インベントリ ビューによっては、オブジェクト コンテナの場所にディストリビューション ビューが表示されない場合があります。たとえば、ホストシステムのサブジェクトを持つディストリビューション ビューを作成したとします。[環境] - [vSphere ホストおよびクラスタ] - [vSphere ワールド] に移動し、vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックすると、作成したディストリビューション ビューが表示されます。しかし、[環境] - [vSphere ネットワーク] - [vSphere ワールド] に移動し、同じ vCenter Server を選択して、[詳細] タブをクリックしても、作成したディストリビューション ビューは表示されません。vSphere ネットワークのインベントリ ビューにホストシステム オブジェクトが含まれないため、ホストシステムのサブジェクトを持つディストリビューション ビューはありません。

テキスト ビュー

環境ツリー全体を移動すると、ビューの構成時に指定したサブジェクトの場所でのみテキストビューを確認できます。たとえば、vCenter Server のサブジェクトを持つテキストビューを作成したとします。ナビゲーション ツリーで vCenter Server に移動すると、作成したビューが表示されます。サブジェクトを指定しなかった場合、作成したビューは環境内のすべてのサブジェクトで表示されます。

イメージ ビュー

イメージ ビューは環境内のすべてのオブジェクトに適用できます。

注意 ビューの適用の可否は、ユーザー権限およびビューの可視性構成によっても左右されます。

データの詳細

データ定義プロセスには、アダプタから提供されるプロパティ、メトリック、ポリシー、データのビューへの追加が含まれます。これらは、vRealize Operations Manager でビューの情報を収集、計算および提供するために使用される項目です。

ビューにデータを追加するには、左側のペインで[内容] - [ビュー]を選択します。[ビュー] ツールバーで、プラス記号をクリックしてビューを追加するか、鉛筆をクリックして選択したビューを編集します。ワークスペースの左側で [データ] をクリックします。新しいビューを作成する場合は、前述の必要な手順を実行してください。

データをビューに追加する方法

複数のサブジェクトを選択している場合は、データを追加するサブジェクトを指定します。左側のパネルのツリーからデータをダブルクリックしてビューに追加します。サブジェクトごとに、追加できるデータが異なる場合があります。

データの変換を構成する方法

データ構成オプションは、ビューおよび選択するデータ タイプによって異なります。ほとんどのオプションがすべてのビューで使用可能です。

表 6-15. データ構成オプション

構成オプション	説明
メトリック名	デフォルトのメトリック名。 すべてのビューで使用可能。
メトリック ラベル	ビューまたはレポートに表示されるカスタマイズ可能なラベル。 すべてのビューで使用可能。
単位	追加されたメトリックまたはプロパティによって異なる。値を表示する単位を選択できます。例：CPU デマンド (MHz) の場合、[単位] ドロップダウン メニューで値を Hz、KHz、または GHz に変更できます。[自動] を選択した場合、スケーリングはわかりやすい単位に設定されます。 すべてのビューで使用可能。
並べ替え順	値を昇順または降順に並べ替えます。 リスト ビューおよび概要ビューで使用可能。

表 6-15. データ構成オプション (続き)

構成オプション	説明
変換	<p>Raw データに適用する計算方法を決定します。変換のタイプを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 最小値。選択した時間範囲のメトリックの最小値。 ■ 最大値。選択した時間範囲のメトリックの最大値。 ■ 平均値。選択した時間範囲のすべてのメトリック値の平均。 ■ 合計。選択した時間範囲のメトリック値の合計。 ■ 最新値。選択した時間範囲内で最も最近に受信したデータ以外のすべてのデータを無視します。 ■ 標準偏差。メトリック値の標準偏差。 ■ メトリック相関。他のメトリックが最小値または最大値のときに、値を表示します。たとえば、<code>cpu.usage</code> が最大値のときに、<code>memory.usage</code> の値を表示します。 ■ 予測。回帰分析を実行し、将来の値を予測します。選択した範囲の最新のメトリック値を表示します。 <p>トレンド以外のすべてのビューで使用可能。</p>
データ系列	<p>トレンド ビューの計算に履歴データ、履歴データのトレンド、および将来の予測を含めるかどうかを選択できます。</p> <p>トレンド ビューで使用可能。</p>
系列のロール アップ	<p>データがロール アップされる間隔。使用可能なオプションのいずれかを選択します。たとえば、変換として Sum を、ロール アップ間隔として 5 分を選択すると、5 分間隔値が選択されて加算されます。このオプションは変換構成オプションに適用されます。</p> <p>すべてのビューで使用可能。</p>
プロジェクト	<p>プロジェクトにはシナリオが含まれています。プロジェクトとは、特定の条件を変更した場合に容量と負荷がどう変化するかを、仮想インフラストラクチャに実際の変更を加えずに行う想定のことです。このプロジェクトを実装する場合、容量要件の内容を事前に確認してください。</p> <p>すべてのビューで使用可能。選択されたメトリックおよびプロパティによって異なる。</p>

時間設定を構成する方法

時間設定で、データ変換の時間間隔を選択します。これらのオプションは、イメージを除くすべてのビュー タイプで使用可能です。

過去の期間に対する時間範囲を設定したり、あるいは期間の終わりに未来の日付を設定することができます。未来の終了日を選択した際に利用可能なデータが存在しない場合、ビューには予測データが割り当てられます。

表 6-16. 時間設定のオプション

構成オプション	説明
時間範囲モード	<p>基本モードでは、日付範囲を選択することができます。</p> <p>詳細モードでは、相対または特定の開始日と終了日をあらゆる組み合わせで選択することができます。</p>
相対的な日付範囲	<p>データ変換の相対日付範囲を選択します。</p> <p>基本モードで使用可能です。</p>
特定の日付範囲	<p>データ変換の特定日付範囲を選択します。</p> <p>基本モードで使用可能です。</p>

表 6-16. 時間設定のオプション (続き)

構成オプション	説明
絶対日付範囲	<p>データ表示の日付または時間の範囲を、各月や各週などの単位で選択します。たとえば、毎月 3 日に前月に関するレポートを実行できます。表示されるのは前月の月初から月末までのデータで、前月 3 日から今月 3 日までのデータではありません。</p> <p>使用可能な期間の単位は [時間]、[日]、[週]、[月]、[年] です。</p> <p>期間の単位の開始と終了はシステムのロケール設定で決まります。たとえば、欧州諸国の大半で週は月曜始まりなのに対し、米国では日曜始まりです。</p> <p>基本モードで使用可能です。</p>
相対的な開始日	<p>データ変換の相対開始日を選択します。</p> <p>詳細モードで使用可能です。</p>
相対的な終了日	<p>データ変換の相対終了日を選択します。</p> <p>詳細モードで使用可能です。</p>
特定の開始日	<p>データ変換の特定開始日を選択します。</p> <p>詳細モードで使用可能です。</p>
特定の終了日	<p>データ変換の特定終了日を選択します。</p> <p>詳細モードで使用可能です。</p>
現在選択されている日付範囲	<p>選択されている日付と時刻の範囲が表示されます。たとえば、2016/5/01 から 2016/5/18 までの日付範囲を選択した場合は、May 1, 2016 12:00:00 AM to May 18, 2016 11:55:00 PM と表示されます。</p>

データを類別する方法

リスト ビューで [次でグループ分け] タブから間隔またはインスタンスの内訳列を追加して、データを類別することができます。

表 6-17. 次でグループ分けオプション

オプション	説明
間隔内訳列の追加 (列の設定については、データを参照)	<p>時間間隔で類別されたリソースを選択してデータを確認するには、このオプションを選択します。</p> <p>[データ] タブで [間隔内訳] を選択し、列を構成します。時間範囲のラベルを入力し、間隔内訳を選択することができます。</p>
インスタンス内訳列の追加 (列の設定については、データを参照)	<p>選択したリソースの全インスタンスのデータを確認するには、このオプションを選択します。</p> <p>[データ] タブで [インスタンス名] を選択し、列を構成します。ラベルを入力してメトリック グループを選択すると、グループの全インスタンスを類別することができます。[非インスタンス集計メトリックの表示] の選択を解除すると、個別のインスタンスのみを表示することができます。[インスタンス名のみ表示] の選択を解除すると、メトリック グループ名とインスタンスの内訳列のインスタンス名を表示することができます。</p> <p>たとえば、メトリック [CPU:0{使用量}] を選択して、CPU 使用量を表示するビューを作成することができます。インスタンスの内訳列を追加すると、[CPU:0{使用量}] 列に別の列の CPU インスタンスの使用量がすべて表示されます (0、1 など)。曖昧さを回避するために、[CPU:0{使用量}] のメトリック レベルを 使用量 に変更することができます。</p>

フィルタを追加する方法

フィルタ オプションを使用すると、ビューに表示される情報が多すぎるときに基準をさらに追加できます。たとえば、リスト ビューには仮想マシンの健全性に関する情報が表示されます。[フィルタ] タブで、50% より低いリスク メトリックを追加します。この操作の後、ビューには リスクが 50% より低いすべての仮想マシンの健全性が表示されます。

ビューにフィルタを追加するには、左側のペインで[内容]-[ビュー]を選択します。[ビュー] ツールバーで、プラス記号をクリックしてビューを追加するか、鉛筆をクリックして選択したビューを編集します。ワークスペースの左側で [データ] をクリックし、メイン パネルで [フィルタ] タブをクリックします。新しいビューを作成する場合は、前述の必要な手順を実行してください。

各サブジェクトには、別個のフィルタ ボックスがあります。アラート ロールアップ、アラート、症状サブジェクトの場合、すべての適用可能なメトリックがフィルタリング用にサポートされているわけではありません。

表 6-18. フィルタの追加オプション

オプション	説明
追加	基準セットに別の基準を追加します。フィルタによって、指定した条件のすべてを満たす結果が返されます。
別の基準の追加	別の基準セットを追加します。フィルタによって、何らかの基準セットを満たす結果が返されます。

概要行または概要列をビューに追加する方法

概要オプションは、リスト ビューおよび概要ビューでのみ使用可能です。概要ビューでは必須項目となります。複数の概要行または概要列を追加して、異なる集約が表示されるようにそれぞれを構成できます。概要構成パネルで、集約方法、計算に含めるデータまたは除外するデータを選択します。

ビューに概要行または概要列を追加するには、左側のペインで[内容]-[ビュー]を選択します。[ビュー] ツールバーで、プラス記号をクリックしてビューを追加するか、鉛筆をクリックして選択したビューを編集します。ワークスペースの左側で [データ] をクリックし、メイン パネルで [概要] タブをクリックします。新しいビューを作成する場合は、前述の必要な手順を実行してください。

リスト ビューの場合、概要行には指定したサブジェクトによって集約された情報が表示されます。

概要ビューの場合、概要列には [データ] タブの項目によって集約された情報が表示されます。

可視性の詳細

ビューの可視性では、vRealize Operations Manager 内でビューを表示できる場所を定義します。

ビューの可視性を変更するには、左側のペインで [内容]-[ビュー] を選択します。[ビュー] ツールバーで、プラス記号をクリックしてビューを追加するか、鉛筆をクリックして選択したビューを編集します。ワークスペースの左側で [可視性] をクリックします。新しいビューを作成する場合は、前述の必要な手順を実行してください。

表 6-19. ビューのワークスペースの可視性オプション

オプション	説明
可用性	vRealize Operations Manager 内で、このビューを表示する場所を選択します。ダッシュボードにビューを表示する場合は、チェックボックスを選択し、ビュー ウィジェットを追加して構成します。
詳しい分析	バッジを選択して、[詳しい分析] でビューが使用できるようにします。 [詳しい分析] セクションは、オブジェクトの [分析] タブに表示されます。バッジでビューを表示できるようにすると、そのバッジの [詳しい分析] セクションにビューへのリンクが表示されます。このリンクをクリックすると、提供された情報を分析できます。
ブラックリスト	このビューを表示しないサブジェクト レベルを選択します。 たとえば、サブジェクト仮想マシンにはリスト ビューがあります。このビューは、その任意の親オブジェクトを選択すると表示されます。ここで、データセンターをブラックリストに追加します。すると、データセンター レベルでは、ビューは表示されなくなります。

ビューの編集、クローン作成、および削除

ビューは、編集、クローン作成、および削除することができます。これらのアクションを実行する前に、その結果についてよく理解してください。

ビューを編集すると、そのビューが含まれるレポート テンプレートにすべての変更が適用されます。

ビューのクローンを作成する場合、クローンに対する変更はソース ビューに影響しません。

ビューを削除すると、ビューが含まれるすべてのレポート テンプレートからそのビューが削除されます。

ユーザー シナリオ：仮想マシンを追跡するための vRealize Operations Manager 表示の作成、実行、エクスポートおよびインポート

あなたは、仮想インフラストラクチャの管理者として、vRealize Operations Manager を使用して複数の環境を監視しています。各 vCenter Server インスタンスの仮想マシン数を把握する必要があります。特定の順序で情報を収集する表示を定義し、それをすべての vRealize Operations Manager 環境で使用します。

開始する前に

このタスクを実行するのに必要なアクセス権限があることを確認してください。vRealize Operations Manager 管理者が、実行できるアクションについての情報を提供できます。

分布表示を作成し、メイン vRealize Operations Manager 環境で実行します。その表示をエクスポートし、他の vRealize Operations Manager インスタンスにインポートします。

手順

- 1 [仮想マシンを管理するための vRealize Operations Manager のビューの作成](#) (P. 197)
vCenter Server 上の仮想マシンの数についてデータを収集、表示するには、カスタム ビューを作成します。
- 2 [vRealize Operations Manager ビューの実行](#) (P. 197)
ビューを確認して任意のポイントでの情報のスナップショットをキャプチャするには、特定のオブジェクトのビューを実行します。
- 3 [vRealize Operations Manager ビューのエクスポート](#) (P. 198)
別の vRealize Operations Manager でビューを使用する場合、コンテンツ定義の XML ファイルをエクスポートします。
- 4 [vRealize Operations Manager ビューのインポート](#) (P. 198)
他の vRealize Operations Manager 環境からビューを使用する場合、コンテンツ定義の XML ファイルをインポートします。

仮想マシンを管理するための vRealize Operations Manager のビューの作成

vCenter Server 上の仮想マシンの数についてデータを収集、表示するには、カスタム ビューを作成します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックして、[表示] をクリックします。
- 2 プラス記号をクリックして、新しいビューを作成します。
- 3 ビューの名前として **仮想マシンの分布** と入力します。
- 4 ビューのわかりやすい説明を入力します。

例： **仮想マシンのホストごとの分布を示すビュー。**

- 5 [プレゼンテーション] をクリックして、[分布] ビュー タイプを選択します。

ビュー タイプは情報を表示する方法です。

- a [表示] ドロップダウン メニューから [円グラフ] を選択します。
- b 分布タイプの設定から、[離散分布] を選択します。

各 vCenter Server インスタンス上のホスト数を把握していないため、[バケットの最大数] は選択解除のままにします。いくつかのバケットを指定する場合でホストがその数を上回っているとき、[その他] とラベル付けされた詳細不明の情報がスライスの 1 つによって表示されます。

- 6 [サブジェクト] をクリックして、ビューに適用されるオブジェクト タイプを選択します。

- a ドロップダウン メニューで、[ホストシステム] を選択します。

分布ビューは、ビューの設定時に指定したサブジェクトのオブジェクト コンテナに表示されます。

- 7 [データ] をクリックして、フィルタのテキスト ボックスに **VM の合計数** と入力します。
- 8 [サマリー] - [VM の合計数] を選択して、ダブルクリックしてメトリックを追加します。
- 9 デフォルトのメトリック構成を保持して、[保存] をクリックします。

vRealize Operations Manager ビューの実行

ビューを確認して任意のポイントでの情報のスナップショットをキャプチャするには、特定のオブジェクトのビューを実行します。

開始する前に

このタスクを実行するのに必要なアクセス権限があることを確認してください。vRealize Operations Manager 管理者が、実行できるアクションについての情報を提供できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] アイコンをクリックします。
- 2 vCenter Server インスタンスに移動して、[詳細] タブをクリックします。
リストされたビューは、すべて vCenter Server インスタンスに適用可能です。
- 3 左側の [すべてのフィルタ] ドロップダウン メニューから、[タイプ] - [分布] を選択します。
ビューのリストをフィルタリングして分布タイプのビューのみを表示します。
- 4 [仮想マシンの分布] ビューに移動し、クリックします。

下部のペインに、この vCenter Server に関する情報を示す分布ビューが表示されます。各スライスはホストを表し、左隅の数は仮想マシンの数を示します。

vRealize Operations Manager ビューのエクスポート

別の vRealize Operations Manager でビューを使用する場合、コンテンツ定義の XML ファイルをエクスポートします。

エクスポートしたビューに独自に作成されたメトリック（what-if、スーパーメトリック、カスタム アダプタ メトリックなど）が含まれる場合は、新しい環境でそれらをもう一度作成する必要があります。

開始する前に

このタスクを実行するのに必要なアクセス権限があることを確認してください。vRealize Operations Manager 管理者が、実行できるアクションについての情報を提供できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックして、[表示] をクリックします。
- 2 ビューのリストで、[仮想マシンの分布] ビューに移動し、クリックします。
- 3 [すべてのアクション] - [ビューのエクスポート]を選択します。
- 4 XML ファイルを保存するローカル システム上の場所を選択し、[保存] をクリックします。

vRealize Operations Manager ビューのインポート

他の vRealize Operations Manager 環境からビューを使用する場合、コンテンツ定義の XML ファイルをインポートします。

開始する前に

このタスクを実行するのに必要なアクセス権限があることを確認してください。vRealize Operations Manager 管理者が、実行できるアクションについての情報を提供できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックして、[表示] をクリックします。
- 2 [すべてのアクション] - [ビューのインポート]を選択します。
- 3 仮想マシン分布のコンテンツ定義の XML ファイルを参照して選択し、[インポート] をクリックします。

インポートされたビューに独自に作成されたメトリック（what-if、スーパーメトリック、カスタム アダプタ メトリックなど）が含まれる場合は、新しい環境でそれらをもう一度作成する必要があります。

注意 インポートされたビューは、同じ名前のビューが存在する場合は上書きします。既存のビューを使用するすべてのレポート テンプレートは、インポートされたビューで更新されます。

レポート

レポートは、ビューとダッシュボードのスケジュール設定されたスナップショットです。レポートを作成して、オブジェクトおよびメトリックを表現することができます。レポートには、目次、表紙、およびフッターが含まれます。

vRealize Operations Manager のレポート機能を使用すると、現在または予測されるリソースのニーズに関する詳細情報をキャプチャするレポートを生成できます。将来またはオフライン時に必要に応じて利用できるよう、レポートを PDF または CSV ファイル形式でダウンロードできます。



レポートの作成 (http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_reports_in_vrom)

[レポート テンプレート] タブ

[レポート テンプレート] タブでは、テンプレートの作成、編集、削除、クローン作成、実行、スケジュール設定、エクスポート、およびインポートを行うことができます。

左側のペインの [環境] タブからオブジェクトを選択し、[レポート]-[レポートテンプレート] をクリックすると、[レポート テンプレート] アイコンを使用できます。

[レポート テンプレート] タブには、選択したオブジェクトに適用されるすべてのテンプレートがリストされます。これらは、レポート名、件名、変更日、最終実行、または所有者ごとに並び替えることができます。

パネルの右側からフィルタを追加すると、テンプレート リストをフィルタリングできます。

表 6-20. 事前定義フィルタ グループ

フィルタ グループ	説明
名前	テンプレート名によるフィルタ。たとえば、 my template と入力すると、名前に <my template> を含むすべてのレポートをリストできます。
件名	別のオブジェクトによるフィルタ。別のタイプのオブジェクトに適用できる複数のビューがレポートに含まれている場合は、そのオブジェクトを基準にフィルタリングできます。

レポートの生成が完了するまで、vSphere ユーザーがログインしている必要があります。 ログアウトしたり、セッションの期限が切れた場合、レポートの生成が失敗します。

注意 テンプレートあたりの最大レポート数は 10 です。 生成されるすべての新規レポートで、vRealize Operations Manager は最も古いレポートを削除します。

[生成されたレポート] タブ

選択したオブジェクト用に生成されたすべてのレポートの一覧が [生成されたレポート] タブに表示されます。

[生成されたレポート] タブには、左側のペインの [環境] アイコンからオブジェクトを選択し、[レポート]-[生成されたレポート] をクリックすると表示されます。

レポートは、レポートの作成日時、レポート名、所有者、ステータス順に並べることができます。 レポートがスケジュールに基づいて生成された場合は、スケジュールを作成したユーザーが所有者になります。

注意 テンプレートあたりの最大レポート数は 10 です。 生成されるすべての新規レポートで、vRealize Operations Manager は最も古いレポートを削除します。

パネルの右側からフィルタを追加すると、レポート リストをフィルタリングできます。

表 6-21. 事前定義フィルタ グループ

フィルタ グループ	説明
レポート名	レポート テンプレート名を基準にフィルタリングします。たとえば、 my template と入力すると、名前に <my template> を含むすべてのレポートをリストできます。
テンプレート	レポート テンプレートを基準にフィルタリングします。このオブジェクトに適用可能なテンプレートのリストから、テンプレートを選択できます。
完了日時	日付、時間、または時間範囲を基準にフィルタリングします。

表 6-21. 事前定義フィルタ グループ (続き)

フィルタ グループ	説明
ステータス	レポートのステータスを基準にフィルタリングします。
件名	別のオブジェクトによるフィルタ。別のタイプのオブジェクトに適用できる複数のビューがレポートに含まれている場合は、そのオブジェクトを基準にフィルタリングできます。

レポートは、PDF または CSV 形式でダウンロードできます。レポート テンプレートにレポートが生成される際の形式を定義します。

レポート テンプレートの作成と変更

レポートを作成して、ビューとダッシュボードのスケジュール設定されたスナップショットを生成します。現在のリソースを追跡して、環境に対する潜在的リスクを予測できます。自動化されたレポートを定期的にスケジュール設定できます。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックして、[レポート] をクリックします。
- 2 [レポート テンプレート] タブで、[新規テンプレート] アイコンをクリックして、テンプレートを作成します。
- 3 左側のペインで手順を完了して、次の操作を実行します。
 - a レポート テンプレートの名前と説明を入力します。
[「名前と説明の詳細 \(P. 200\)」](#)
 - b ビューまたはダッシュボードを追加します。
[「ビューとダッシュボードの詳細 \(P. 201\)」](#)
 - c レポートの出力を選択します。
[「形式の詳細 \(P. 202\)」](#)
 - d レイアウト オプションを選択します。
[「レイアウト オプションの詳細 \(P. 202\)」](#)
- 4 [保存] をクリックします。
- 5 [レポート テンプレート] タブから、[テンプレートの編集] をクリックして、レポート テンプレートを変更します。

名前と説明の詳細

[レポート テンプレート] タブのテンプレート リストに表示されるレポート テンプレート名と説明。

名前と説明を追加する場所

レポート テンプレートを作成または編集するには、左側のペインで [内容] - [レポート] を選択します。レポート テンプレート ツールバーで、プラス記号をクリックしてテンプレートを追加するか、鉛筆アイコンをクリックして選択したテンプレートを編集します。ワークスペースの左側で、[名前と説明] をクリックします。

表 6-22. レポート テンプレートのワークスペースの [名前] オプションと [説明] オプション

オプション	説明
名前	[レポート テンプレート] タブに表示されるテンプレート名。
説明	テンプレートの説明。

ビューとダッシュボードの詳細

レポート テンプレートにはビューとダッシュボードが含まれます。ビューには、収集されたオブジェクトの情報が表示されます。ダッシュボードには、仮想インフラストラクチャ内のオブジェクトのパフォーマンスと状態の概要が視覚的に表示されます。ニーズに合わせてさまざまなビューやダッシュボードを組み合わせたり、表示順を変えたりできます。

ビューとダッシュボードを追加する場所

レポート テンプレートを作成または編集するには、左側のペインで [内容]-[レポート] を選択します。レポート テンプレート ツールバーで、プラス記号をクリックしてテンプレートを追加するか、鉛筆アイコンをクリックして選択したテンプレートを編集します。ワークスペースの左側で、[ビューとダッシュボード] をクリックします。新しいテンプレートを作成する場合は、ワークスペースに関する必要な手順を完了させておきます。

ビューとダッシュボードを追加する方法

レポート テンプレートにビューまたはダッシュボードを追加するには、左側のペインにあるリストからビューまたはダッシュボードを選択してメイン パネルにドラッグします。メイン パネルでビューやダッシュボードをドラッグして、順番を変えることができます。各ビューまたはダッシュボードのタイトルの横にあるドロップダウン メニューを使うと、横向きまたは縦向きを選択できます。

表 6-23. レポート テンプレート ワークスペースのビューおよびダッシュボード オプション

オプション	説明
データ タイプ	[ビュー] または [ダッシュボード] を選択して、テンプレートに追加できるビューまたはダッシュボードのリストを表示します。
ビューの作成	テンプレート ワークスペースから直接ビューを作成します。このオプションは、[データ タイプ] ドロップダウン メニューから [ビュー] を選択したときに表示されます。
ビューの編集	テンプレート ワークスペースから直接ビューを編集します。このオプションは、[データ タイプ] ドロップダウン メニューから [ビュー] を選択したときに表示されます。
ダッシュボードの作成	テンプレート ワークスペースから直接ダッシュボードを作成します。このオプションは、[データ タイプ] ドロップダウン メニューから [ダッシュボード] を選択したときに表示されます。
ダッシュボードの編集	テンプレート ワークスペースから直接ダッシュボードを編集します。このオプションは、[データ タイプ] ドロップダウン メニューから [ダッシュボード] を選択したときに表示されます。
検索	ビューまたはダッシュボードを名前で検索します。すべてのビューまたはダッシュボードのリストを表示するには、検索ボックスの内容を削除して Enter キーを押します。
ビューのリスト	テンプレートに追加可能なビューのリスト。このリストは、[データ タイプ] ドロップダウン メニューから [ビュー] を選択したときに表示されます。
ダッシュボードのリスト	テンプレートに追加可能なダッシュボードのリスト。このリストは、[データ タイプ] ドロップダウン メニューから [ダッシュボード] を選択したときに表示されます。
ビューおよびダッシュボードのプレビュー	メイン パネルに、追加するビューおよびダッシュボードのプレビューが表示されます。 環境内からオブジェクトのコンテキストにテンプレートを作成した場合は、ビューおよびダッシュボードのライブ プレビューが表示されます。

形式の詳細

形式は、レポート生成の出力に適用されます。

形式を追加する場所

レポート テンプレートを作成または編集するには、左側のペインで [内容] - [レポート] を選択します。レポート テンプレート ツールバーで、プラス記号をクリックしてテンプレートを追加するか、鉛筆をクリックして選択したテンプレートを編集します。ワークスペースの左側で [形式] をクリックし、レポート テンプレートの形式を選択します。新しいテンプレートを作成する場合は、ワークスペースに関する必要な手順を完了させておきます。

表 6-24. レポート テンプレートのワークスペースの [形式] オプション

オプション	説明
PDF	PDF 形式の場合、オンラインまたはオフラインでレポートを読むことができます。この形式では、印刷物のようにレポートが 1 ページずつ表示されます。
CSV	CSV 形式では、データが構造化された表形式のリストになっています。

レイアウト オプションの詳細

レポート テンプレートには表紙、目次、フッターのようなレイアウト オプションを含めることができます。

レイアウト オプションを追加する場所

レポート テンプレートを作成または編集するには、左側のペインで [内容] - [レポート] を選択します。レポート テンプレート ツールバーで、プラス記号をクリックしてテンプレートを追加するか、鉛筆アイコンをクリックして選択したテンプレートを編集します。ワークスペースの左側で [レイアウト オプション] をクリックします。新しいテンプレートを作成する場合は、テンプレートに関する必要な手順を完了させておきます。

表 6-25. [レポート テンプレート] ワークスペースのレイアウト オプション

オプション	説明
表紙	最大 5 MB のイメージを含めることができます。 デフォルトのレポート サイズは、8.5 x 11 インチです。イメージは、レポートの表紙に合わせてサイズ変更されます。
目次	レポート内の表示順序で整理されたテンプレート部品のリストが提供されます。
フッター	レポートの作成日、レポートが VMware vRealize Operations Manager によって作成されたことを示すメモ、およびページ番号が含まれます。

vRealize Operations Manager レポート用ネットワーク共有プラグインの追加

vRealize Operations Manager でレポートが共有の場所へ送られるように構成するには、ネットワーク共有プラグインを追加します。

開始する前に

ネットワーク共有の場所に対する読み取り、書き込み、削除の権限があることを確認します。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[管理] アイコンをクリックします。
- 2 [送信設定] をクリックし、プラス記号をクリックしてプラグインを追加します。

- 3 [プラグイン タイプ] ドロップダウン メニューから [ネットワーク共有プラグイン] を選択します。
ダイアログ ボックスが展開し、プラグイン インスタンス設定が表示されます。
- 4 [インスタンス名] を入力します。
これは、このインスタンスを識別する名前です。このインスタンスを、後で通知ルールを構成するときに選択します。
- 5 環境に適したネットワーク共有オプションを構成します。

オプション	説明
ドメイン	共有ネットワーク ドメイン アドレス。
ユーザー名	ネットワークとの接続に使用されるドメイン ユーザー アカウント。
パスワード	ドメイン ユーザー アカウントのパスワード。
ネットワーク共有ルート	レポートの保存先となるルート フォルダへのパス。発行のスケジュールを構成する際に各レポートのサブフォルダを指定できます。 IP アドレスを入力する必要があります。たとえば、\\<IP_address>\ShareRoot のように指定します。 vRealize Operations Manager ホストからアクセスされるときにホスト名が IPv4 に解決される場合は、IP アドレスの代わりにホスト名を使用できます。 注意 ターゲットとなるルート フォルダが存在していることを確認します。このフォルダがない場合、試行が 5 回失敗するとネットワーク共有プラグインによりログにエラーが記録されます。

- 6 指定されたパス、認証情報、権限を確認するには、[テスト] をクリックします。
テストには数分かかることがあります。
- 7 [保存] をクリックします。
このプラグインの送信サービスは自動的に開始されます。
- 8 (オプション) 送信サービスを停止するには、インスタンスを選択し、ツールバーの [無効] をクリックします。

ネットワーク共有プラグインのインスタンスが構成され、実行中になります。

次に進む前に

レポート スケジュールを作成し、レポートが共有フォルダに送信されるよう構成します。

ユーザー シナリオ：仮想マシンを監視するためのレポートの取り扱い

あなたは、仮想インフラストラクチャの管理者として、vRealize Operations Manager を使用して複数の環境を監視しています。サイズ超過および過負荷のすべての仮想マシンおよび現在のメモリ使用量およびその傾向を企業ロゴ付きのレポートとしてチームに提示する必要があります。事前定義されたレポート テンプレートを使用して、特定の順序で情報を収集してフォーマットします。

レポート テンプレートを作成し、ビューとダッシュボードを事前定義します。レポートを生成してテンプレートをテストし、隔週でレポートを生成するスケジュールを作成します。

開始する前に

このタスクを実行するのに必要なアクセス権限があることを確認してください。vRealize Operations Manager 管理者が、実行できるアクションについての情報を提供できます。

手順

- 1 [仮想マシンを監視するためのレポート テンプレートの作成](#) (P. 204)
過剰サイズの仮想マシンと負荷のかかった仮想マシン、およびそれらの仮想マシンのメモリ使用量を監視するには、レポート テンプレートを作成します。

2 レポートの生成 (P. 205)

レポートを生成するには、過剰サイズの仮想マシンと負荷のかかった仮想マシン、およびそれらの仮想マシンのメモリ使用量についての情報を表示する vCenter Server システムの仮想マシン レポート テンプレートを使用します。

3 レポートのダウンロード (P. 206)

情報が正常に表示されることを確認するには、仮想マシン レポート テンプレートから生成されたレポートをダウンロードします。

4 レポートのスケジュール設定 (P. 206)

選択した日付、時刻、繰り返しでレポートを生成するには、仮想マシンのレポート テンプレートのスケジュールを作成します。電子メール オプションを設定して、生成されたレポートをチームに送信します。

仮想マシンを監視するためのレポート テンプレートの作成

過剰サイズの仮想マシンと負荷のかかった仮想マシン、およびそれらの仮想マシンのメモリ使用量を監視するには、レポート テンプレートを作成します。

PDF および CSV で出力するレポート テンプレートを作成し、それにビュー、ダッシュボード、レイアウトのオプションを追加します。

開始する前に

- vRealize Operations Manager ビューの概念を理解してください。[「表示 \(P. 185\)」](#) を参照してください。
- 企業のロゴの場所を把握しておいてください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[内容] アイコンをクリックして、[レポート] をクリックします。
- 2 [レポート テンプレート] タブで、プラス記号をクリックしてテンプレートを作成します。
- 3 テンプレート名として「**仮想マシン レポート**」と入力します。
- 4 テンプレートの分かりやすい説明を入力します。

たとえば、「**過剰サイズの仮想マシンと負荷のかかった仮想マシン、およびそれらの仮想マシンのメモリ使用量のテンプレート**」のように入力します。

- 5 [ビューとダッシュボード] をクリックします。[データ タイプ] ドロップダウン メニューで、[ビュー] を選択したままにします。

現在構成されているビューが、[データ タイプ] ドロップダウン メニューの下のリストに表示されます。収集されたオブジェクトの情報が、ビュー タイプに応じて特定の方法でビューに表示されます。

- 6 検索ボックスに「**仮想マシン**」と入力します。

名前に「仮想マシン」が含まれるビューのみがリストに表示されるようになります。

- 7 ビューをダブルクリックしてテンプレートに追加します。

オプション	説明
仮想マシンの CPU、メモリ、ディスク領域の適正値化	過剰サイズの VM を監視します
仮想マシンの推奨 CPU およびメモリ サイズ	負荷のかかった VM を監視します

ビューがワークスペースのメイン パネルにサンプル データのプレビューとともに表示されます。

- 8 検索ボックスに「**VM**」と入力します。

名前に VM が含まれるビューのみがリストに表示されるようになります。

- 9 <仮想マシンのメモリ使用量 (%) の分布> ビューに移動し、このビューをダブルクリックしてテンプレートに追加します。

ビューがワークスペースのメイン パネルにサンプル データのプレビューとともに表示されます。

- 10 (オプション) ワークスペースのメイン パネルで、ビューを上下にドラッグして順序を変更します。

- 11 [データ タイプ] ドロップダウン メニューで、[ダッシュボード] を選択します。

現在構成されているダッシュボードが、[データ タイプ] ドロップダウン メニューの下のリストに表示されます。ダッシュボードには、仮想インフラストラクチャ内のオブジェクトのパフォーマンスと状態の概要が視覚的に表示されます。

- 12 [vSphere 仮想マシン メモリ]、[vSphere 仮想マシン CPU]、[vSphere 仮想マシン ディスクとネットワーク] の各ダッシュボードをダブルクリックしてテンプレートに追加します。

ダッシュボードがワークスペースのメイン パネルに表示されます。

- 13 [形式] をクリックし、[PDF] チェック ボックスと [CSV] チェック ボックスを選択したままにします。

- 14 [レイアウト オプション] をクリックし、[表紙] チェック ボックスと [フッター] チェック ボックスを選択します。

対応するペインがワークスペースのメイン パネルに表示されます。

- 15 [表紙] パネルで [参照] をクリックして、コンピュータ上のイメージに移動します。

デフォルトのレポートサイズは、8.5 x 11 インチです。イメージは、レポートの表紙に合わせてサイズ変更されます。

イメージがデータベースにアップロードされます。このイメージは、このテンプレートからレポートを生成するたびに、表紙に使用されます。

- 16 [保存] をクリックします。

レポート テンプレートが保存され、[内容] 管理タブの [レポート テンプレート] タブに表示されます。

次に進む前に

レポートを生成およびダウンロードして、その出力を確認します。を参照してください。 [「レポートの生成 \(P. 205\)」](#)

レポートの生成

レポートを生成するには、過剰サイズの仮想マシンと負荷のかかった仮想マシン、およびそれらの仮想マシンのメモリ使用量についての情報を表示する vCenter Server システムの仮想マシン レポート テンプレートを使用します。

開始する前に

レポート テンプレートを作成します。[「仮想マシンを監視するためのレポート テンプレートの作成 \(P. 204\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] アイコンをクリックします。

- 2 vCenter Server システムに移動します。

- 3 [レポート] タブをクリックし、[レポート テンプレート] をクリックします。

リストに表示されるレポート テンプレートには、現在のオブジェクトが関連付けられています。

- 4 [仮想マシンレポート] テンプレートに移動し、[テンプレートの実行] アイコンをクリックします。

レポートが生成され、[生成されたレポート] タブに表示されます。

次に進む前に

生成されたレポートをダウンロードして、その出力を確認します。[「レポートのダウンロード \(P. 206\)」](#) を参照してください。



レポートのダウンロード

情報が正常に表示されることを確認するには、仮想マシン レポート テンプレートから生成されたレポートをダウンロードします。

開始する前に

仮想マシン レポート テンプレートからレポートを生成します。[「レポートの生成 \(P. 205\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] アイコンをクリックします。
- 2 レポートをダウンロードするオブジェクトに移動します。
- 3 [レポート] タブをクリックし、[生成されたレポート] をクリックします。
現在のオブジェクトを一覧表示したレポートが生成されます。
- 4 PDF  アイコンまたは CSV  アイコンをクリックし、適切なファイル形式でレポートを保存します。

vRealize Operations Manager は、選択した場所にレポート ファイルを保存します。

次に進む前に

レポート生成をスケジュール設定し、電子メールのオプションを設定して、チームがレポートを受け取るようにします。[「レポートのスケジュール設定 \(P. 206\)」](#) を参照してください。

レポートのスケジュール設定


選択した日付、時刻、繰り返しでレポートを生成するには、仮想マシンのレポート テンプレートのスケジュールを作成します。電子メール オプションを設定して、生成されたレポートをチームに送信します。

生成されたレポートの日付の範囲は、レポートのスケジュール設定を行う時間または vRealize Operations Manager がレポートをキューに入れる時間ではなく、vRealize Operations Manager がレポートを生成する時間に基づきます。

開始する前に

- 生成されたレポートをダウンロードして、出力を確認します。
- 電子メール レポートの送信を有効にするには、送信アラート設定を設定している必要があります。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで、[環境] アイコンをクリックします。
- 2 オブジェクト vCenter Server に移動します。
- 3 [レポート] タブをクリックし、[レポート テンプレート] をクリックします。
- 4 リストから [仮想マシン レポート] テンプレートを選択します。
- 5 歯車アイコン  をクリックして、[レポートのスケジュール設定] を選択します。
- 6 レポートの生成を開始するタイム ゾーン、日付、時間を選択します。

vRealize Operations Manager は、スケジュール設定されたレポートを順次生成します。レポートの生成には数時間かかることがあります。このプロセスによって、前回のレポート生成の時間が長引いている場合は開始が遅れる場合もあります。

- 7 [繰り返し] ドロップダウン メニューから、[週単位] を選択し、レポートの生成を 2 週間に 1 回月曜日に実行されるよう設定します。

- 8 生成したレポートを電子メールで送信するには、[レポートを電子メールで送信] チェック ボックスを選択します。
 - a [電子メール アドレス] テキスト ボックスに、レポートを受信する電子メール アドレスを入力します。
 - b 送信ルールを選択します。このスケジュールに従って、レポートが生成されるたびに電子メールが送信されます。
- 9 [OK] をクリックします。

次に進む前に

レポート テンプレートは、編集、クローン作成、および削除することができます。これらのアクションを実行する前に、その結果についてよく理解してください。

レポート テンプレートを編集して削除すると、元のテンプレートと編集されたテンプレートから生成されたすべてのレポートが削除されます。レポート テンプレートのクローンを作成する場合、クローンに対する変更はソース テンプレートに影響しません。レポート テンプレートを削除すると、生成されたレポートもすべて削除されます。

管理設定の構成

vRealize Operations Manager がインストールおよび構成された後、管理設定を使用して環境を管理できます。vRealize Operations Manager インターフェイスの管理の選択で、最も管理の厳格な設定を確認します。

この章では次のトピックについて説明します。

- [vRealize Operations Manager でのユーザーとアクセス コントロールの管理 \(P. 209\)](#)
- [vRealize Operations Manager のパスワードと証明書 \(P. 220\)](#)
- [グローバル設定の変更 \(P. 224\)](#)
- [vRealize Operations Manager サポート バンドルの作成 \(P. 227\)](#)
- [アイコンのカスタマイズ \(P. 228\)](#)

vRealize Operations Manager でのユーザーとアクセス コントロールの管理

vRealize Operations Manager インスタンスにおけるオブジェクトのセキュリティ確保のため、システム管理者はユーザー アクセス コントロールをすべての面で管理できます。ユーザー アカウントを作成し、各ユーザーを 1 つ以上のユーザー グループに割り当て、各ユーザーまたはユーザー グループにロールを割り当てて権限を設定できます。

vRealize Operations Manager ユーザー インターフェイスの特定の機能にアクセスするには、権限が必要です。ユーザーとオブジェクトの両方に権限を割り当て、アクセス コントロールを定義します。1 つ以上のロールをユーザーに割り当てて有効にすることで、同じタイプのオブジェクトに異なる範囲のアクションが実行できます。たとえば、あるユーザーに仮想マシンを削除する権限を割り当て、さらに同じユーザーに別の仮想マシンの読み取り専用の権限を割り当てることができます。

ユーザー アクセス コントロール

vRealize Operations Manager でユーザー認証を行うには、いくつかの方法があります。

- vRealize Operations Manager にローカル ユーザー アカウントを作成します。
- VMware vCenter Server[®] ユーザーを使用します。vCenter Server が vRealize Operations Manager に登録された後、vRealize Operations Manager グローバル設定の vCenter Server ユーザー オプションを構成し、vCenter Server ユーザーが vRealize Operations Manager にログインできるようにします。vRealize Operations Manager へログインするときに、vCenter Server ユーザーは、vCenter Server で割り当てられた権限に従ってオブジェクトにアクセスします。
- インポートしたユーザーを認証する認証ソースを追加し、別のマシンに存在するユーザー グループ情報を追加します。
 - LDAP を使用して、LDAP サーバからユーザーまたはユーザー グループをインポートします。LDAP ユーザーは、LDAP 認証情報を使用して、vRealize Operations Manager にログインできます。

- シングルサインオンソースを作成し、シングルサインオンサーバからユーザーとユーザーグループをインポートします。シングルサインオンユーザーはシングルサインオン認証情報を使って vRealize Operations Manager および vCenter Server にログインできます。また、シングルサインオンの Active Directory を構成して、シングルサインオンソースを vRealize Operations Manager に追加すれば、シングルサインオンで Active Directory が使用できます。

ユーザーの環境設定

vRealize Operations Manager の表示オプション（画面や健全性チャートの色、表示するメトリックやグループの数、およびシステム時間をホストマシンと同期するかどうかなど）を決定するには、一番上のツールバーでユーザーの環境設定を構成します。

vRealize Operations Manager のユーザー

各ユーザーが vRealize Operations Manager にログインする際の認証に使用するアカウントを持っています。

ローカルユーザーと LDAP ユーザーのアカウントが設定されると、それらのアカウントは vRealize Operations Manager のユーザーインターフェイスに表示されます。vCenter Server とシングルサインオンユーザーのアカウントは、ユーザーが初めてログインしたときのみ、ユーザーインターフェイスに表示されます。各ユーザーは 1 つ以上のロールが割り当てられており、1 つ以上のユーザーグループでメンバーとして認証されています。

vRealize Operations Manager でのローカルユーザー

ローカルの vRealize Operations Manager インスタンスにユーザーアカウントを作成すると、vRealize Operations Manager はそのアカウントの認証情報をグローバルなデータベースに格納して、アカウントユーザーをローカルに認証します。

各ユーザーアカウントは一意的 ID を持つ必要があり、関連付けられたユーザー環境設定を含めることができます。

ローカルユーザーとして vRealize Operations Manager にログインしようとしていて、**パスワードが無効です** というメッセージを受信した場合は、次の回避策を試します。[ログイン] ページで、[認証ソース] を [すべての vCenter サーバ] に変更し、[ローカルユーザー] に戻し、再度ログインします。

vCenter Server ユーザー：vRealize Operations Manager

vRealize Operations Manager は、vCenter Server ユーザーをサポートします。vRealize Operations Manager にログインする場合、vCenter Server ユーザーが vCenter Server で有効になっている必要があります。

ロールと関連付け

vRealize Operations Manager にログインするには、vCenter Server ユーザーは vCenter Server Admin ロールまたはいずれかの vRealize Operations Manager 権限（vCenter Server でルートレベルで割り当てた PowerUser など）を持っている必要があります。vRealize Operations Manager では vCenter 権限（つまり vRealize Operations Manager ロール）のみがルートレベルで使用され、ユーザーがアクセス権を持つすべてのオブジェクトにそれが適用されます。ログイン後、vCenter Server ユーザーは vRealize Operations Manager にあるすべてのオブジェクトを確認できます。これらは vCenter Server ですでに確認できるものです。

vCenter Server インスタンスにログインしてオブジェクトにアクセスする

vCenter Server では、ユーザーは、vRealize Operations Manager へのログイン時に選択した認証ソースに応じて、単一の vCenter Server インスタンスまたは複数の vCenter Server インスタンスにアクセスできます。

- ユーザーが認証ソースとして単一の vCenter Server インスタンスを選択した場合、ユーザーはその vCenter Server インスタンス内のオブジェクトにアクセスする権限を持ちます。ユーザーがログインすると、特定の vCenter Server インスタンスを認証ソースとして、vRealize Operations Manager にアカウントが作成されます。

- ユーザーが認証ソースとして [すべての vCenter Server] を選択し、環境内のすべての vCenter Server に対して同一の認証情報を持つ場合、すべての vCenter Server インスタンスのすべてのオブジェクトが表示されます。環境内のすべての vCenter サーバによって認証されたユーザーのみがログインできます。ユーザーがログインすると、すべての vCenter Server インスタンスを認証ソースとして、vRealize Operations Manager にアカウントが作成されます。

vRealize Operations Manager では、リンクされた vCenter Server インスタンスはサポートされません。代わりに、各 vCenter Server インスタンスの vCenter Server アダプタを構成し、各 vCenter Server インスタンスを vRealize Operations Manager に登録する必要があります。

特定の vCenter Server インスタンスのオブジェクトのみが vRealize Operations Manager に表示されます。vCenter Server インスタンスにその他のリンクされた vCenter Server インスタンスがある場合、データは表示されません。

vCenter Server ロールと権限

vCenter Server では、vRealize Operations Manager のロールや権限を表示または編集できません。

vRealize Operations Manager は、vCenter Server のグローバル権限グループの一部として、vCenter Server へ権限としてロールを送信します。vCenter Server 管理者は、vRealize Operations Manager のロールを vCenter Server のユーザーに割り当てる必要があります。

vCenter Server の vRealize Operations Manager 権限では、ロールは名前に付加されます。たとえば、vRealize Operations Manager ContentAdmin ロール、vRealize Operations Manager PowerUser ロールなどです。

読み取り専用プリンシパル

vCenter Server ユーザーは、vRealize Operations Manager 内では読み取り専用プリンシパルです。つまり、vRealize Operations Manager のロールに関連付けられたロール、グループ、またはオブジェクトを変更できません。代わりに、それらを vCenter Server インスタンス内で変更する必要があります。ルート フォルダに適用されたロールは、ユーザーが権限を持つ vCenter Server 内のすべてのオブジェクトに適用されます。vRealize Operations Manager では、オブジェクトの個別のロールは適用されません。たとえば、ユーザーに vCenter Server ルート フォルダにアクセスする PowerUser ロールはあるが、仮想マシンに対しては読み取り専用アクセスしかない場合は、vRealize Operations Manager は、仮想マシンにアクセスするユーザーに対して PowerUser ロールを適用します。

権限の更新

vCenter Server で vCenter Server ユーザーの権限を変更した場合、そのユーザーは vRealize Operations Manager からログアウトし、再度ログインした上で、権限を更新して vRealize Operations Manager で更新結果を確認する必要があります。または、そのユーザーは vRealize Operations Manager が更新されるのを待つこともできます。権限は、**\$ALIVE_BASE/user/conf/auth.properties** ファイルで定義されたとおりに一定間隔で更新されます。デフォルトの更新間隔は 30 分です。必要な場合は、クラスタ内のすべてのノードに対してこの間隔を変更できます。

シングル サインオンと vCenter ユーザー

vCenter Server ユーザーがシングル サインオンで vRealize Operations Manager にログインすると、vRealize Operations Manager ユーザー アカウント ページに登録されます。シングル サインオンで vRealize Operations Manager にログインした vCenter Server ユーザー アカウントを削除するか、シングル サインオン グループからユーザーを削除した場合、ユーザー アカウント ページにはユーザー アカウント エントリが表示されたままになるため、手動で削除する必要があります。

レポートの生成

vCenter Server ユーザーは、vRealize Operations Manager でレポートを作成することや、スケジュールを設定することはできません。

vRealize Operations Manager での vCenter Server ユーザーの下位互換性

vRealize Operations Manager は、以前のバージョンの vRealize Operations Manager のユーザーに対する下位互換性を提供しています。そのため、古いバージョンの vCenter Server の権限を持つ vCenter Server のユーザーが、vRealize Operations Manager にログインすることが可能です。

vRealize Operations Manager を vCenter Server に登録すると、vCenter Server で特定のロールが使用可能になります。

- 以前のバージョンの vRealize Operations Manager の管理者アカウントは PowerUser ロールにマップされます。
- 以前のバージョンの vRealize Operations Manager のオペレータ アカウントは ReadOnly ロールにマップされます。

登録時、vRealize Operations Manager のすべてのロール（vRealize Operations Manager の管理者、メンテナンス、および移行を除く）が、vCenter Server で動的に使用可能になります。vCenter Server の管理者は、登録時にマップされる vRealize Operations Manager のすべてのロールを所有しますが、これらの管理者アカウントは、vCenter Server のルート フォルダの特定のロールが特別に割り当てられている場合に、そのロールのみを受け取ります。

vCenter Server に対する vRealize Operations Manager の登録はオプションです。ユーザーが vCenter Server に vRealize Operations Manager を登録しないことを選択した場合でも、vCenter Server 管理者は、そのユーザー名とパスワードを使用して vRealize Operations Manager にログインできます。ただし、そのユーザーは、vCenter Server のセッション ID を使用してログインすることはできません。この場合、一般的な vCenter Server ユーザーが vRealize Operations Manager にログインするには、1 つ以上の vRealize Operations Manager ロールが必要です。

vCenter Server の複数のインスタンスが vRealize Operations Manager に追加されると、すべての vCenter Server インスタンスに対してユーザー認証情報が有効になります。ユーザーが vRealize Operations Manager にログインするときに、ログイン時のすべての vCenter Server オプションを選択した場合、vRealize Operations Manager は、すべての vCenter Server インスタンスに対してユーザーの認証情報が有効であることを要求します。ユーザー アカウントが 1 つの vCenter Server インスタンスに対してのみ有効な場合、そのユーザーは、ログイン ドロップダウン メニューから vCenter Server インスタンスを選択して、vRealize Operations Manager にログインできます。

vCenter Server ユーザーが vRealize Operations Manager にログインするには、以下に示す vCenter Server のロールが 1 つ以上必要です。

- vRealize Operations コンテンツ管理ロール
- vRealize Operations 一般ユーザー ロール 1
- vRealize Operations 一般ユーザー ロール 2
- vRealize Operations 一般ユーザー ロール 3
- vRealize Operations 一般ユーザー ロール 4
- vRealize Operations PowerUser ロール
- vRealize Operations PowerUser ロール（修正アクションなし）
- vRealize Operations ReadOnly ロール

vCenter Server のユーザー、グループ、およびロールの詳細については、vCenter Server のドキュメントを参照してください。

vRealize Operations Manager での外部ユーザー ソース

外部ソースからユーザー アカウントを取得し、そのアカウントを vRealize Operations Manager インスタンスで使用できます。

外部ユーザー ID ソースには次の 2 つのタイプがあります。

- Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) : 認証ソースとして Active Directory または LDAP サーバを使用する場合は、LDAP ソースを使用します。LDAP ソースは、ドメイン A とドメイン B 間に双方向の信頼がある場合でも、複数のドメインをサポートしません。

- シングルサインオン (SSO) : vRealize Operations Manager などの vCenter シングルサインオン ソースをサポートしているアプリケーションでシングルサインオンを実行するには、シングルサインオン ソースを使用します。たとえば、スタンドアロンの vCenter Platform Services Controller (PSC) をインストールし、それを使用して Active Directory サーバと通信できます。Active Directory の設定が vRealize Operations Manager 内のシンプルな LDAP ソースに対して複雑すぎる場合、または LDAP ソースのパフォーマンスが低い場合、PSC を使用します。

vRealize Operations Manager でのロールと権限

vRealize Operations Manager では、権限をユーザーに割り当てる事前定義済みロールが複数用意されています。独自の役割を作成することもできます。

vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイス内の特定の機能にアクセスするための権限が必要です。ユーザー アカウントに関連付けられたロールによって、アクセスできる機能および実行できるアクションが決まります。

各事前定義済みロールには、ダッシュボード、レポート、管理、容量、ポリシー、問題、症状、アラート、ユーザー アカウント管理、アダプタなどのコンポーネントに対し、ユーザーが作成、読み取り、更新あるいは削除アクションを行うための権限一式が含まれています。

システム管理者	vRealize Operations Manager のすべての機能、オブジェクトおよびアクションに対する権限が含まれています。
PowerUser	ユーザーには、ユーザー管理とクラスタ管理権限を除く、管理者ロールのアクションを実行する権限があります。vRealize Operations Manager は、vCenter Server ユーザーをこのロールにマップします。
PowerUserMinusRemediation	ユーザーには、ユーザー管理、クラスタ管理および修正アクション権限を除く、管理者ロールのアクションを実行する権限があります。
ContentAdmin	ユーザーは、vRealize Operations Manager のすべてのコンテンツ（ビュー、レポート、ダッシュボード、カスタム グループなど）を管理できます。
AgentManager	ユーザーは、Endpoint Operations Management エージェントを展開および構成することができます。
GeneralUser-1 から GeneralUser-4	これらの事前定義済みテンプレート ロールは、最初に ReadOnly ロールと定義されます。vCenter Server 管理者は、これらのロールを構成して、ユーザーに複数タイプの権限を与えるロールの組み合わせを作成することができます。ロールは、登録中に一度 vCenter Server と同期されます。
ReadOnly	ユーザーは、読み取り専用でアクセスし、読み取りアクションを実行できますが、作成、更新または削除といった書き込みアクションは実行できません。

ユーザー シナリオ：ユーザー アクセス コントロールの管理

システム管理者または仮想インフラストラクチャ管理者は、vRealize Operations Manager でユーザー アクセス コントロールを管理することにより、オブジェクトのセキュリティを確保できます。新しい人員を雇用した企業では、新しいユーザーが vRealize Operations Manager の特定のコンテンツおよびオブジェクトにアクセス権を持つように、ユーザー アカウントを作成し、そのアカウントのロールを割り当てる必要があります。

このシナリオでは、ユーザー アカウントとロールを作成し、ビューおよびオブジェクトへのアクセス権限を指定するためにユーザー アカウントにロールを割り当てる方法について説明します。その後、それらのアカウントでの権限の意図した動作の実例を示します。

「Tom User」という新しいユーザー アカウントと、vRealize Operations クラスタ内のオブジェクトへの管理アクセス権限を持つ新しいロールを作成します。新しいロールをユーザー アカウントに適用します。

最後に、別のマシン上にある外部の LDAP ユーザー データベースからユーザー アカウントを vRealize Operations Manager にインポートし、インポートしたユーザー アカウントにロールを割り当てて、ユーザーの権限を構成します。

開始する前に

以下の条件が満たされていることを確認してください:

- vRealize Operations Manager がインストール済みで正常に動作しており、クラスタ、ホスト、仮想マシンなどのオブジェクトが含まれている。
- 1 つまたは複数のユーザー グループが定義されている。

次に進む前に

新しいロールを作成します。

新しいロールの作成

ロールを使用して、vRealize Operations Manager のユーザー アカウントのアクセス コントロールを管理します。

この手順では、新しいロールを追加して、そのロールに管理権限を割り当てます。

開始する前に

このシナリオのコンテキストを理解していることを確認します。[「ユーザー シナリオ: ユーザー アクセス コントロールの管理 \(P. 213\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで [管理] を選択して、[アクセス コントロール] をクリックします。
- 2 [ロール] タブをクリックします。
- 3 ツールバーの [追加] アイコンをクリックして、新しいロールを作成します。
[ロールの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 4 ロール名に **admin_cluster** と入力し、説明を入力して、[OK] をクリックします。
ロールのリストに、admin_cluster ロールが表示されます。
- 5 [admin_cluster] ロールをクリックします。
- 6 [詳細] グリッドの [権限] ペインで [編集] アイコンをクリックします。
[ロールへの権限の割り当て] ダイアログ ボックスが表示されます。
- 7 [管理アクセス - すべての権限] チェックボックスを選択します。
- 8 [更新] をクリックします。

このアクションにより、このロールには、環境内のすべての機能に対する管理権限が付与されます。

次に進む前に

ユーザー アカウントを作成し、そのアカウントにこのロールを割り当てます。

ユーザー アカウントの作成

システム管理者は、一意のユーザー アカウントを各ユーザーに割り当てて、ユーザーが vRealize Operations Manager を使用できるようにします。ユーザー アカウントのセットアップ時に、環境内でそのユーザーが実行できるアクティビティおよび対象オブジェクトを決定する権限を割り当てます。

この手順では、ユーザー アカウントを作成し、そのアカウントに **admin_cluster** ロールを割り当て、そのロールが割り当てられているユーザーがアクセスできるオブジェクトを関連付けます。vRealize Operations クラスタ内のオブジェクトへのアクセス権を割り当てます。その後、そのユーザー アカウントをテストして、指定したオブジェクトのみにユーザーがアクセスできることを確認します。

開始する前に

新しいロールを作成します。[「新しいロールの作成 \(P. 214\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager の左側のペインで [管理] を選択して、[アクセス コントロール] をクリックします。
- 2 [ユーザー アカウント] タブをクリックします。
- 3 [追加] アイコンをクリックして新しいユーザー アカウントを作成し、このアカウントに関する情報を入力します。

オプション	説明
ユーザー名	vRealize Operations Manager へのログインに使用するユーザー名を入力します。
パスワード	ユーザーのパスワードを入力します。
パスワードの確認	ユーザーのパスワードを確認するために、もう一度入力します。
名	ユーザーの名前を入力します。このシナリオでは、 Tom と入力します。
姓	ユーザーの姓を入力します。このシナリオでは、 User と入力します。
電子メールアドレス	(任意)。ユーザーの電子メール アドレスを入力します。
説明	(任意)。このユーザーの説明を入力します。
このユーザーを無効にする	このシナリオではこのユーザーを有効にしておくため、このチェック ボックスは選択しないでください。
次のログイン時にパスワードの変更を要求	このシナリオではユーザー パスワードを変更する必要はないため、このチェック ボックスは選択しないでください。

- 4 [Next] をクリックします。
ユーザー グループのリストが表示されます。
- 5 このユーザー アカウントをグループのメンバーとして追加するユーザー グループを選択します。
- 6 [オブジェクト] タブをクリックします。
- 7 ドロップダウン メニューから [admin_cluster] を選択します。
- 8 [このロールをユーザーに割り当てます] チェックボックスを選択します。
- 9 オブジェクト階層のリストで [vRealize Operations クラスタ] チェック ボックスをオンにします。
- 10 [終了] をクリックします。
vRealize Operations クラスタのすべてのオブジェクトにアクセスできるユーザー用の新しいユーザー アカウントが作成されました。新しいユーザーが、ユーザー アカウントのリストに表示されています。
- 11 vRealize Operations Manager からログアウトします。
- 12 vRealize Operations Manager に「Tom User」としてログインし、そのユーザー アカウントで vRealize Operations クラスタ階層内のすべてのオブジェクトにアクセスでき、環境内の他のオブジェクトにはアクセスできないことを確認します。
- 13 vRealize Operations Manager からログアウトします。

vRealize Operations クラスタ内のすべてのオブジェクトにアクセスする権限を「Tom User」というユーザー アカウントに割り当てるために、特定のロールを使用しました。

次に進む前に

別のマシンにある外部 LDAP ユーザー データベースからユーザー アカウントをインポートし、そのユーザー アカウントに権限を割り当てます。

ユーザー アカウントのインポートと権限の割り当て

別のマシン上にある LDAP データベースやシングル サインオン サーバなど、外部ソースからユーザー アカウントをインポートして、これらのユーザーが vRealize Operations Manager の特定の機能やオブジェクトにアクセスするための権限を付与することができます。

開始する前に

- 認証ソースを構成します。vRealize Operations Manager インフォメーション センターを参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager からログアウトしてから、システム管理者としてログインします。
- 2 vRealize Operations Manager で、[管理] を選択し、[アクセス コントロール] をクリックします。
- 3 ツールバーで [ユーザーのインポート] アイコンをクリックします。
- 4 認証ソースからユーザー アカウントをインポートするオプションを指定します。
 - a [ユーザーのインポート] ページで、[インポート元] ドロップダウン メニューから認証ソースを選択します。
 - b [ドメイン名] ドロップダウン メニューで、ユーザーをインポートするドメイン名を入力して [検索] をクリックします。
 - c インポートするユーザーを選択して、[次へ] をクリックします。
 - d [グループ] タブで、このユーザー アカウントを追加するユーザー グループを選択します。
 - e [オブジェクト] タブをクリックし、[admin_cluster] ロールを選択して、[このロールをユーザーに割り当てます] チェック ボックスを選択します。
 - f オブジェクト階層のリストで [vRealize Operations クラスタ] チェック ボックスをオンにし、[完了] をクリックします。
- 5 vRealize Operations Manager からログアウトします。
- 6 インポートしたユーザーとして、vRealize Operations Manager にログインします。
- 7 インポートしたユーザー アカウントで vRealize Operations クラスタ内のオブジェクトのみにアクセスできることを確認します。

外部のユーザー データベースやサーバから vRealize Operations Manager へユーザー アカウントをインポートしてロールを割り当て、このロールを持つユーザーがアクセスできるオブジェクトを割り当てました。

これでこのシナリオは終了です。

vRealize Operations Manager でのシングル サインオン ソースの構成

システム管理者または仮想インフラストラクチャ管理者は、シングル サインオンを使用して、SSO ユーザーが vRealize Operations Manager 環境に安全にログインできるようにします。

シングル サインオン ソースが構成されると、ユーザーは認証のために SSO ID ソースにリダイレクトされます。一度ログインすると、ユーザーは再度ログインしなくても、vCenter Server などの他の vSphere コンポーネントにアクセスできます。



シングル サインオン ソースの作成と vRealize Operations Manager のユーザー グループのインポート
(http://link.brightcove.com/services/player/bcpid2296383276001?bctid=ref:video_create_sso)

開始する前に

- シングル サインオン ソースと vRealize Operations Manager のサーバ システム時間が同期されていることを確認します。Network Time Protocol (NTP) の構成が必要な場合は、『vRealize Operations Manager vApp デプロイ および構成ガイド』または『vRealize Operations ManagerLinux 用 vRealize Operations Manager インストール および構成ガイド』のクラスタおよびノードのメンテナンスに関する情報を参照してください。
- vCenter Server によって Platform Services Controller にアクセスできることを確認します。詳細については、VMware vSphere 情報センターを参照してください。

手順

- 1 vRealize Operations Manager に管理者としてログインします。
- 2 [管理] - [認証ソース] を選択し、ツールバーの [追加] アイコンをクリックします。
- 3 [ユーザーおよびグループのインポートのソースを追加] ダイアログ ボックスで、シングル サインオン ソースの情報を指定します。

オプション	操作
ソースの表示名	インポートのソースの名前を入力します。
ソース タイプ	[SSO SAML] が表示されていることを確認します。
ホスト	シングル サインオン サーバが存在するホスト マシンの IP アドレスまたは FQDN を入力します。ホスト マシンの FQDN を入力した場合は、vRealize Operations Manager クラスタ内のすべての非リモート コレクタ ノードがシングル サインオン ホストの FQDN を解決できることを確認します。
ポート	シングル サインオン サーバのリスン ポートを設定します。デフォルトでは、このポートは 443 に設定されます。
ユーザー名	SSO サーバにログインできるユーザー名を入力します。
パスワード	パスワードを入力します。
今後の構成のために管理者ロールを vRealize Operations Manager に付与しますか？	vRealize Operations Manager のセットアップに変更を加えた場合に SSO ソースが自動的に再登録されるように、[はい] を選択します。[いいえ] を選択していて、vRealize Operations Manager のセットアップが変更された場合、シングル サインオン ソースを手動で再登録するまでシングル サインオン ユーザーはログインできなくなります。
vRealize Operation のシングル サインオン URL に自動的にリダイレクトしますか？	ユーザーが vCenter シングル サインオンのログイン ページにリダイレクトされるように、[はい] を選択します。[いいえ] を選択すると、ユーザーは認証のために SSO にリダイレクトされません。このオプションは vRealize Operations Manager のグローバル設定で変更できます。
現在のソースを追加した後、シングル サインオン ユーザー グループをインポートしますか？	SSO ソースのセットアップ完了時にウィザードが [ユーザー グループのインポート] ページにリダイレクトするように、[はい] を選択します。ユーザー アカウントをインポートする場合、またはユーザー グループを後の段階でインポートする場合は、[いいえ] を選択します。
詳細オプション	環境内でロード バランサーを使用している場合は、ロード バランサーの IP アドレスを入力します。

- 4 [テスト] をクリックしてソースの接続をテストし、[OK] をクリックします。
証明書の詳細が表示されます。
- 5 [この証明書を受け入れる] チェック ボックスをオンにし、[OK] をクリックします。

- 6 [ユーザー グループのインポート] ダイアログ ボックスで、別のマシン上の SSO サーバからユーザー アカウントをインポートします。

オプション	操作
インポート元	シングル サインオン ソースを構成するときに指定した、シングル サインオン サーバを選択します。
ドメイン名	ユーザー グループのインポート元のドメイン名を選択します。PSC で Active Directory が LDAP ソースとして構成されている場合、vCenter Server が同じドメイン内に置かれていれば、ユニバーサル グループとドメイン ローカル グループのみをインポートできます。
結果の最大表示件数	検索の実行時に表示する結果の件数を入力します。
検索プリフィックス	ユーザー グループの検索に使用するプリフィックスを入力します。

- 7 表示されるユーザー グループのリストで、1 つ以上のユーザー グループを選択し、[次へ] をクリックします。
- 8 [ロールおよびオブジェクト] ペインで、[ロールの選択] ドロップダウン メニューからロールを選択し、[このロールをグループに割り当てます] チェック ボックスを選択します。
- 9 グループのユーザーがこのロールを保有している場合にアクセスできるオブジェクトを選択します。
ユーザーが vRealize Operations Manager のすべてのオブジェクトにアクセスできるように権限を割り当てるには、[システムのすべてのオブジェクトへのアクセスを許可] チェック ボックスをオンにします。
- 10 [OK] をクリックします。
- 11 シングル サインオンについて十分に理解し、シングル サインオン ソースを正しく構成していることを確認します。
 - a vRealize Operations Manager からログアウトします。
 - b シングル サインオン サーバからインポートしたユーザー グループに属するユーザーのいずれかとして、vSphere Web Client にログインします。
 - c 新しいブラウザ タブで、vRealize Operations Manager 環境の IP アドレスを入力します。
 - d シングル サインオン サーバが正しく構成されていれば、ユーザー 認証情報を入力する必要なく vRealize Operations Manager にログインできます。

シングル サインオン ソースの編集

シングル サインオン ソースの管理に使用される管理者認証情報を変更する必要がある場合、またはソースのホストを変更した場合は、シングル サインオン ソースを編集します。

SSO ソースを構成するときは、シングル サインオン サーバが存在するホスト マシンの IP アドレスか FQDN を指定します。新しいホストを構成したい場合、つまり、ソースが設定されたときに構成したホスト マシンとは異なるホスト マシンにシングル サインオン サーバが配置されている場合、vRealize Operations Manager では、現在の SSO ソースが削除され、新しいソースが作成されます。この場合、新しい SSO ソースに関連付けるユーザーを再インポートする必要があります。

vRealize Operations Manager で現在のホストを識別する方法を変更したい場合、たとえば、IP アドレスから FQDN に変更する場合や、その逆を行う場合、または構成済み PSC の IP アドレスが変更されていれば PSC の IP アドレスを更新したい場合、vRealize Operations Manager では、現在の SSO ソースが更新されるため、ユーザーを再インポートする必要はありません。

手順

- 1 vRealize Operations Manager に管理者としてログインします。
- 2 [管理] を選択し、[認証ソース] を選択します。
- 3 シングル サインオン ソースを選択し、[編集] アイコンをクリックします。

- 4 シングル サインオン ソースに変更を行い、[OK] をクリックします。

新しいホストを構成している場合、[新しいシングル サインオン ソースが検出されました] ダイアログ ボックスが表示されます。

- 5 シングル サインオン ソースを設定したときに使用した管理者認証情報を入力し、[OK] をクリックします。

現在の SSO ソースが削除され、新しいソースが作成されます。

- 6 [OK] をクリックして証明書を受け入れます。

- 7 SSO ソースに関連付けるユーザーをインポートします。

vRealize Operations Manager のユーザーおよび環境の監査

vRealize Operations Manager 環境で発生した一連のアクティビティの証拠として、ドキュメントを提出することが必要になる場合があります。監査では、ユーザー、オブジェクト、および収集された情報を確認できます。保護が必要な機密データを含むビジネス上重要なアプリケーションなどの監査要件を満たすために、ユーザーのアクティビティ、ユーザーに割り当てられたオブジェクト アクセス権限、環境内のオブジェクト数およびアプリケーション数に関するレポートを生成できます。

監査レポートは、環境内のオブジェクトおよびユーザーのトレーサビリティを提供します。

ユーザー アクティビティ監査	このレポートを実行すると、ユーザー アクティビティ（ログイン、クラスタおよびノードのアクション、システム パスワードの変更、証明書のアクティブ化、ログアウトなど）の範囲を把握できます。
ユーザー権限の監査	このレポートを生成すると、ユーザー アカウントとそのロール、アクセス グループ、およびアクセス権限の範囲を把握できます。
システム監査	このレポートを実行すると、環境の規模を把握できます。このレポートには、構成済み/収集オブジェクトの数、アダプタのタイプや数、構成済み/収集メトリック、スーパー メトリック、アプリケーション、および既存の仮想環境オブジェクトが表示されます。このレポートは、環境内のオブジェクト数がサポートされている制限を超えているかどうかを判断するのに役立ちます。
システム コンポーネント監査	このレポートを実行すると、環境内のすべてのコンポーネントのバージョンのリストが表示されます。

環境を監査する理由

vRealize Operations Manager の監査は、次のような状況でデータ センター管理者の役に立ちます。

- 変更を開始した認証済みユーザーまたは変更を実行するジョブをスケジュール設定した認証済みユーザーの、各構成の変更を追跡する必要がある。たとえば、特定のオブジェクト識別子に関連付けられたオブジェクトが特定の時刻にアダプタによって変更されると、データ センター管理者は、この変更を開始した認証済みユーザーのプリンシパル識別子を特定できます。
- 一定期間にデータ センターを変更したユーザーを追跡して、特定の日に誰が何を変更したのかを調べる必要がある。vRealize Operations Manager にログインしてジョブを実行した認証済みユーザーのプリンシパル識別子を特定し、変更を開始したユーザーを確認できます。
- 一定期間に特定のユーザーの影響を受けたオブジェクトを調べる必要があります。
- イベントの関係と原因を視覚化できるように、データ センターで発生したイベントに関連付けて、これらのイベントを重ね合わせて表示する必要がある。イベントには、ログイン試行、システムの起動およびシャットダウン、アプリケーション障害、ウォッチドッグの再起動、アプリケーションの構成の変更、セキュリティ ポリシーの変更、要求、応答、成功のステータスなどが含まれます。
- 環境にインストールされているコンポーネントで最新バージョンが実行されていることを確認する必要があります。

システム コンポーネント監査

システム コンポーネント監査レポートには、システムにインストールされているすべてのコンポーネントのバージョンのリストが表示されます。

システム コンポーネントの監査場所

システム コンポーネントを監査するには、[管理] を選択し、[監査] をクリックして、[システム コンポーネント監査] タブをクリックします。環境にインストールされているコンポーネントのリストがページに表示されます。

表 7-1. システム コンポーネント監査アクション

オプション	説明
ダウンロード	新しいブラウザ ウィンドウにバージョン情報が表示されます。

vRealize Operations Manager のパスワードと証明書

vRealize Operations Manager の安全な運用のためには、パスワードや認証証明書の保守が必要になる場合があります。

- パスワードは、ユーザーが製品のユーザー インターフェイスにアクセスするため、またはクラスター ノードのコンソール セッションにアクセスするためのものです。
- 認証証明書は、vRealize Operations Manager 内で、または vRealize Operations Manager と他のシステムとの間で、マシン間通信を保護するためのものです。

vRealize Operations Manager 管理者パスワードの変更

デプロイのセキュリティ保護または保守の一環として、vRealize Operations Manager 管理者パスワードを変更する必要があることがあります。

手順

- 1 Web ブラウザで、vRealize Operations Manager 管理インターフェイス (<master-node-name-or-ip-address>/admin) に移動します。
- 2 マスター ノードの管理者のユーザー名とパスワードでログインします。
- 3 右上にある [admin] ドロップダウン メニューを選択して、[管理者パスワードの変更] をクリックします。
- 4 現在のパスワードを入力し、新しいパスワードを 2 回入力して正確性を確保します。

注意 管理者のユーザー名 admin は変更できません。

- 5 [OK] をクリックします。

vRealize Operations Manager パスフレーズの生成

ユーザーが vRealize Operations Manager クラスターにノードを追加する必要がある場合は、ユーザーにマスター管理者のログイン認証情報を教える代わりに、一時パスフレーズを生成します。管理者のログイン認証情報を教えるのはセキュリティ保護上問題があるからです。

一時パスフレーズは、1 回限りの使用に適しています。

開始する前に

マスター ノードを作成および構成します。

手順

- 1 Web ブラウザで、vRealize Operations Manager 管理インターフェイス (<master-node-name-or-ip-address>/admin) に移動します。

- 2 マスター ノードの管理者のユーザー名とパスワードでログインします。
- 3 クラスタ ノードのリストからマスター ノードを選択します。
- 4 リストの上部のツールバーにあるパスフレーズ生成オプションをクリックします。
- 5 パスフレーズの有効期限を時間数で入力します。
- 6 [生成] をクリックします。

ランダムな英数字文字列が表示されます。この文字列を、ノードを追加する必要があるユーザーに送信します。

次に進む前に

ノードの追加時にユーザーにパスフレーズを入力してもらいます。

vRealize Operations Manager のカスタム証明書

デフォルトでは、vRealize Operations Manager には独自の認証証明書が含まれています。デフォルトの証明書を使用した場合、vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイスに接続するとブラウザに警告が表示されます。

サイトのセキュリティ ポリシーによって別の証明書の使用が必要な場合や、デフォルトの証明書で発生する警告を避けたい場合があります。いずれの場合でも、vRealize Operations Manager は独自のカスタム証明書の使用をサポートしています。カスタム証明書のアップロードは、マスタ ノードの初期構成中または後から行うことができます。

vRealize Operations Manager のカスタム証明書の要件

vRealize Operations Manager で使用する証明書は、所定の要件を満たしている必要があります。カスタム証明書の使用は任意であり、vRealize Operations Manager の機能には影響を与えません。

カスタム証明書の要件

vRealize Operations Manager のカスタム証明書は次の要件を満たしている必要があります。

- 証明書ファイルに、ターミナル（リーフ）サーバ証明書、プライベート キー、およびすべての発行証明書（証明書が他の証明書のチェーンにより署名されている場合）が含まれている必要があります。
- ファイル内の証明書の順序については、リーフ証明書が先頭にあることが必要です。リーフ証明書の後の順序は任意です。
- ファイル内ではすべての証明書とプライベート キーが PEM 形式であることが必要です。
vRealize Operations Manager は、PFX、PKCS12、PKCS7 などの形式の証明書をサポートしていません。
- ファイル内ではすべての証明書とプライベート キーが PEM でエンコードされていることが必要です。
vRealize Operations Manager は、DER でエンコードされた証明書やプライベート キーをサポートしていません。

PEM エンコードは base-64 ASCII で、判読可能な BEGIN および END マーカーが含まれているのに対し、DER はバイナリ形式です。また、ファイル拡張子がエンコードと一致していないことがあります。たとえば、一般的な **.cer** 拡張子が PEM または DER に使用されていることがあります。エンコード形式を確認するには、テキスト エディタを使用して証明書ファイルを確認します。
- ファイル拡張子は **.pem** であることが必要です。
- プライベート キーは RSA または DSA アルゴリズムで生成されていることが必要です。
- マスタ ノード構成ウィザードや管理インターフェイスを使用して証明書をアップロードする場合は、プライベート キーがパスフレーズで暗号化されていないことが必要です。
- この vRealize Operations Manager リリースの REST API は、パスフレーズで暗号化されたプライベート キーをサポートしています。詳細については、VMware テクニカル サポートにお問い合わせください。
- 全ノードの vRealize Operations Manager Web サーバが同じ証明書ファイルを持つことになるので、全ノードで証明書が有効であることが必要です。証明書が複数のアドレスで有効になるようにする方法の 1 つは、サブジェクトの代替名 (SAN) エントリを複数使用することです。

- SHA1 証明書では、ブラウザの互換性の問題が発生します。そのため、作成されて vRealize Operations Manager にアップロードされているすべての証明書に、SHA2 以上を使用して署名する必要があります。
- vRealize Operations Manager は、キーの長さが最大 8192 ビットのカスタム セキュリティ証明書をサポートします。8192 ビットを超える強力なキーの長さで作成したセキュリティ証明書をアップロードしようとすると、エラーが表示されます。

vRealize Operations Manager のカスタム証明書の確認

カスタム証明書ファイルをアップロードすると、そのファイルに含まれているすべての証明書のサマリ情報が vRealize Operations Manager インターフェイスに表示されます。

有効なカスタム証明書ファイルでは、発行者とサブジェクトを対応付けることによって、最終的に発行者とサブジェクトが同じである自己署名証明書までさかのぼることができます。

次の例では、OU=MBU,O=VMware\, Inc.,CN=vc-ops-slice-32 は OU=MBU,O=VMware\, Inc.,CN=vc-ops-intermediate-32 によって発行されており、さらにこれは OU=MBU,O=VMware\, Inc.,CN=vc-ops-cluster-ca_33717ac0-ad81-4a15-ac4e-e1806f0d3f84 によって発行されています。最終的にこれは自身が発行者となっています。

```
Thumbprint: 80:C4:84:B9:11:5B:9F:70:9F:54:99:9E:71:46:69:D3:67:31:2B:9C
Issuer Distinguished Name: OU=MBU,O=VMware\, Inc.,CN=vc-ops-intermediate-32
Subject Distinguished Name: OU=MBU,O=VMware\, Inc.,CN=vc-ops-slice-32
Subject Alternate Name:
PublicKey Algorithm: RSA
Valid From: 2015-05-07T16:25:24.000Z
Valid To: 2020-05-06T16:25:24.000Z
```

```
Thumbprint: 72:FE:95:F2:90:7C:86:24:D9:4E:12:EC:FB:10:38:7A:DA:EC:00:3A
Issuer Distinguished Name: OU=MBU,O=VMware\, Inc.,CN=vc-ops-cluster-ca_33717ac0-ad81-4a15-ac4e-e1806f0d3f84
Subject Distinguished Name: OU=MBU,O=VMware\, Inc.,CN=vc-ops-intermediate-32
Subject Alternate Name: localhost,127.0.0.1
PublicKey Algorithm: RSA
Valid From: 2015-05-07T16:25:19.000Z
Valid To: 2020-05-06T16:25:19.000Z
```

```
Thumbprint: FA:AD:FD:91:AD:E4:F1:00:EC:4A:D4:73:81:DB:B2:D1:20:35:DB:F2
Issuer Distinguished Name: OU=MBU,O=VMware\, Inc.,CN=vc-ops-cluster-ca_33717ac0-ad81-4a15-ac4e-e1806f0d3f84
Subject Distinguished Name: OU=MBU,O=VMware\, Inc.,CN=vc-ops-cluster-ca_33717ac0-ad81-4a15-ac4e-e1806f0d3f84
Subject Alternate Name: localhost,127.0.0.1
PublicKey Algorithm: RSA
Valid From: 2015-05-07T16:24:45.000Z
Valid To: 2020-05-06T16:24:45.000Z
```

vRealize Operations Manager のカスタム証明書の内容例

トラブルシューティングを目的として、カスタム証明書ファイルをテキスト エディタで開いて内容を精査することができます。

PEM 形式の証明書ファイル

次に、典型的な PEM 形式の証明書ファイルの例を示します。

```
-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIF1DCCBLYgAwIBAgIKFYXYUwAAAAAGTANBgkqhkiG9w0BAQ0FADBhMRMwEQYK
CZImiZPyLGBGRYDY29tMRUwEwYKZCZImiZPyLGBGRYFdm13Y3MxGDAWBgoJkiaJ
<snip>
vKStQJNr7z2+pTy92M6FgJz3y+daL+9ddbaMNp9fVXjHBoDLGGaL0vyD+KJ8+xb
aGJfGf9ELXM=
-----END CERTIFICATE-----
-----BEGIN RSA PRIVATE KEY-----
MIIEowIBAAKCAQE4l5ffX694riI1RmdRLJwL6sOWa+Wf70HRoLtx21kZzbXbUQN
mQhTriidJ3Ro2gRbj/btSsI+OMUzotz5VRT/yeyoTC5l2uJEapld45RroUDHQWJ
<snip>
DAN9hQus3832xMkAuVP/jt76dHDYyviyIYbmzxMalX7LZy1MCQVg4hCH0vLsHtLh
Mlr0Asz62Eht/iB61AsVCCiN3gLRX7MKsYdxZcRVruGXSIh33ynA
-----END RSA PRIVATE KEY-----
-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIDnTCCAowGawIBAgIQY+j29InmdYNCs2cK1H4kPzANBgkqhkiG9w0BAQ0FADBh
MRMwEQYKZCZImiZPyLGBGRYDY29tMRUwEwYKZCZImiZPyLGBGRYFdm13Y3MxGDAW
<snip>
ukzUuqX7wEhc+QgJWgl41mWZBZ09gfsA9XuXBL0k17IpVHpEgwwrjQz8X68m4I99
dD5Pf1f/nLRJvR9jwXl62yk=
-----END CERTIFICATE-----
```

プライベート キー

プライベート キーの見た目の形式はさまざまですが、明示的に BEGIN マーカと END マーカで囲まれます。

有効な PEM セクションは次のマーカのどれかで開始されます。

```
-----BEGIN RSA PRIVATE KEY-----
-----BEGIN PRIVATE KEY-----
```

暗号化されたプライベート キーは次のマーカで開始されます。

```
-----BEGIN ENCRYPTED PRIVATE KEY-----
```

Bag Attributes

Microsoft の証明書ツールにより、証明書ファイルに Bag Attributes セクションが追加されることがあります。vRealize Operations Manager では BEGIN マーカと END マーカの外側の内容を無視しますが、それには Bag Attributes セクションも含まれます。

Bag Attributes

```
Microsoft Local Key set: <No Values>
localKeyID: 01 00 00 00
Microsoft CSP Name: Microsoft RSA SChannel Cryptographic Provider
friendlyName: le-WebServer-8dea65d4-c331-40f4-aa0b-205c3c323f62
Key Attributes
X509v3 Key Usage: 10
-----BEGIN PRIVATE KEY-----
MIICdwIBADANBgkqhkiG9w0BAQEFAASCAmEwgGJdAgEAAoGBAKHqyfc+qcQK4yxJ
om3PuB8dYZm34Qlt81GAANBPYe3B4Q/0ba6PV8GtWG2svIpc1/eflwGHgTU3zJxR
```

```

gkKh7I3K5tGESn81ipyKtKpYebh+aBMqPKrNNUEKlr0M9sa3WSc0o3350tCc1ew
5ZkNYZ4BRUVYwM0HogeGh0thRn2fAgMBAACgYABhPmGN3FSZKPDG6HJlARvTlBH
KAGVnBGHd0M0mMABghFBnBKXa8LwD1dgGBng1oOakEXTftkIjdB+uwkU5P4aRr07
vGuJUtRyRCU/4fjLBDuxQL/KpQfruAQaof9uWUwh5W9fEew3g26fzVL8AFZnbXS0
7Z0AL1H3LncLd5rp0QJBAnI7vFu06bFxFV+kq6Z0JFMx7x3K4VGxgg+PFFEBEPS
UJ2LuDH5/Rc63BaxFzM/q3B3Jhehvgw61mMyxU7QSSUCQC+VDuW3XEWJjSiU6KD
gEGpCyJ5SBePbLSukljPgidKkDnlkLgbWVytCVkTAmuoAz33kMwfqIiNcqQbUgVV
UnpzAkB7d0CPO0deSsy8kMdTmKXlkF4qSF0x55epYK/5MZhBYuA1ENrR6mmjW8ke
TDnc6IGm9sVvrFBz2n9kKYpWThrJAkEak5R69DtW0cbkLy5MqEzOHQauP36gDi1L
WMXPvUfzSYTQ5aM2rrY2/1FtSSkqUwfYh9sw8eDbqVpIV4rc6dDfcwJBALiIDPT0
tz86wySJNe0iUkQm36iXVF8AckPKT9TrbC3Ho7nC80zL7gElLEta4Zc86Z3wpcGF
BHHEDMHaihyuVgI=
-----END PRIVATE KEY-----
Bag Attributes
localKeyID: 01 00 00 00
1.3.6.1.4.1.311.17.3.92: 00 04 00 00
1.3.6.1.4.1.311.17.3.20: 7F 95 38 07 CB 0C 99 DD 41 23 26 15 8B E8
D8 4B 0A C8 7D 93
friendlyName: cos-oc-vcops
1.3.6.1.4.1.311.17.3.71: 43 00 4F 00 53 00 2D 00 4F 00 43 00 2D 00
56 00 43 00 4D 00 35 00 37 00 31 00 2E 00 76 00 6D 00 77 00 61 00
72 00 65 00 2E 00 63 00 6F 00 6D 00 00 00
1.3.6.1.4.1.311.17.3.87: 00 00 00 00 00 00 00 00 02 00 00 00 20 00
00 00 02 00 00 00 6C 00 64 00 61 00 70 00 3A 00 00 00 7B 00 41 00
45 00 35 00 44 00 44 00 33 00 44 00 30 00 2D 00 36 00 45 00 37 00
30 00 2D 00 34 00 42 00 44 00 42 00 2D 00 39 00 43 00 34 00 31 00
2D 00 31 00 43 00 34 00 41 00 38 00 44 00 43 00 42 00 30 00 38 00
42 00 46 00 7D 00 00 00 70 00 61 00 2D 00 61 00 64 00 63 00 33 00
2E 00 76 00 6D 00 77 00 61 00 72 00 65 00 2E 00 63 00 6F 00 6D 00
5C 00 56 00 4D 00 77 00 61 00 72 00 65 00 20 00 43 00 41 00 00 00
31 00 32 00 33 00 33 00 30 00 00 00
subject=/CN=cos-oc-vcops.eng.vmware.com
issuer=/DC=com/DC=vmware/CN=VMware CA
-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIFWTCCBEGgAwIBAgIKSJGT5gACAAAwKjANBgkqhkiG9w0BAQUFADBMRMwEQYK
CZImiZPyLQBGRYDY29tMRYwFAYK CZImiZPyLQBGRYGdm13YXJlMRIwEAYDVQQD
EwltWlTXdhcmUgQ0EwHhcNMTQwMjA1MTg1OTM2WhcNMTYwMjA1MTg1OTM2WjAmMSQw

```

グローバル設定の変更

グローバル設定は、vRealize Operations Manager のシステム設定（データ保持やシステム タイムアウトの設定など）を制御します。環境を監視しやすいように、1 つ以上の設定値を変更できます。これらの設定は全ユーザーに影響します。

グローバル設定は、メトリック相互作用、カラー インジケータ、またはその他のオブジェクト管理動作には影響を与えません。これらの動作はポリシー内で構成します。

vRealize Operations Manager によるオブジェクト管理に関連する設定は、[管理] - [インベントリ エクスプローラ] ページで確認できます。

各オプションのツールチップは [グローバル設定の編集] ダイアログ ボックスで確認できます。

グローバル設定のベスト プラクティス

設定のほとんどは、収集されたデータと処理されたデータを vRealize Operations Manager がどれだけの間保持するかに関係しています。

デフォルト値は共通の保持期間です。この期間は、必要に応じ、ローカル ポリシーやディスク容量に基づいて調整できます。

グローバル設定のリスト

グローバル設定は、vRealize Operations Manager でデータを保持したり、接続セッションを開いたままにしたりするなどさまざまな設定を決定します。これらは、全ユーザーに影響するシステム設定です。

表 7-2. グローバル設定のデフォルト値と説明

設定	デフォルト値	説明
アクション履歴	30 日	アクションの最近のタスク データを保持する日数。 データは、指定された日数が経過した後、システムから削除されます。
削除されたオブジェクト	168 時間	アダプタ データ ソースまたはサーバから削除されたオブジェクトを vRealize Operations Manager から削除する前に保持する時間。 アダプタ データ ソースから削除されたオブジェクトは、vRealize Operations Manager によって存在しないオブジェクトと識別されることがあります。この場合、vRealize Operations Manager はそのオブジェクトについてのデータをそれ以上収集できません。削除されたオブジェクトを vRealize Operations Manager が存在しないオブジェクトと識別するかどうかは、アダプタによって異なります。この機能は一部のアダプタには実装されていません。 たとえば、保持期間が 360 時間に設定されている状態で vCenter Server インスタンスから仮想マシンが削除された場合、その仮想マシンは vRealize Operations Manager で 15 日間オブジェクトとして留まり、その後削除されます。 この設定は、データ ソースまたはサーバから削除されたオブジェクトに適用されます。[インベントリ エクスプローラ] ページの vRealize Operations Manager から削除されたオブジェクトには適用されません。 値が -1 の場合、オブジェクトは直ちに削除されます。
削除スケジュールの間隔	24 時間	リソースの削除をスケジュールする頻度を指定します。この設定は、環境内に存在しなくなったオブジェクトを削除するために、[削除されたオブジェクト] 設定とともに機能します。vRealize Operations Manager は、[削除されたオブジェクト] で指定された時間の長さだけ存在しなかったオブジェクトを削除のために透過的にマークします。 vRealize Operations Manager はその後、マークされたオブジェクトを [削除スケジュールの間隔] で指定された頻度で削除します。
オブジェクト履歴	300 日	オブジェクト構成データ、関係データ、およびプロパティ データの履歴を保持する日数。 構成データは、メトリックのベースとなる監視対象オブジェクトから収集されるデータです。収集されたデータには、オブジェクトの構成に加えられた変更が含まれます。 データは、指定された日数が経過した後、システムから削除されます。
セッション タイムアウト	30 分	指定した時間の間 vRealize Operations Manager に対する接続がアイドル状態になると、アプリケーションからログアウトされます。 もう一度ログインするには、認証情報を指定する必要があります。
症状/アラート	45 日	キャンセルされたアラートと症状を保持する日数。 アラートと症状は、システムまたはユーザーによるキャンセルが可能です。

表 7-2. グローバル設定のデフォルト値と説明 (続き)

設定	デフォルト値	説明
タイム シリズ データ	6 か月	監視対象オブジェクトのために収集されて計算されたメトリック データを保持する月数。 使用可能なディスク領域が 10% 未満になると、vRealize Operations Manager は古いデータを消去しますが、指定された範囲全体は保持されない可能性があります。
動的しきい値計算	有効	すべてのオブジェクトについて通常レベルのしきい値違反を計算するかどうかを決定します。 この設定を無効にすると、vRealize Operations Manager の次の領域が動作しなくなるか、または表示されなくなります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 異常バッジが計算されない ■ 動的しきい値に基づいたアラート症状の定義が動作しない ■ 正常な動作を表示するメトリック チャートが存在しない この設定は、vRealize Operations Manager システムのリソース制約の管理に利用できるオプションが他にない場合だけ無効にしてください。
容量の計算	有効	すべてのオブジェクトについて、容量メトリックとバッジを計算するかどうかを決定します。 設定を無効にすると、次のバッジの値は計算されません。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 残りキャパシティ ■ 残り時間 ■ 負荷 ■ 解放可能な容量 ■ 密度
vCenter Server ユーザーのログイン許可		vCenter Server のユーザーによる vRealize Operations Manager へのログイン方法を指定します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイスで、vCenter Server のユーザーは個々の vCenter Server インスタンスにログインできます。デフォルトでは無効。 ■ vCenter Server のユーザーは vCenter Server クライアントからログインできます。デフォルトでは有効。 ■ vRealize Operations Manager のユーザー インターフェイスで、vCenter Server のユーザーはすべての vCenter Server インスタンスにログインできます。デフォルトでは有効。
カスタム エクスペリエンス改善プログラム	有効	カスタム エクスペリエンス改善プログラムに参加するかどうかを指定します。参加すると、vRealize Operations Manager は匿名の使用データを https://vmware.com に送信します。
自動アクション	有効または無効	vRealize Operations Manager によるアクションの自動化を許可するかどうかを指定します。アラートのトリガ時には、アラートから解決策が推奨されます。推奨事項がそのアラートで優先順位が最も高いものである場合は、アクションを自動化できます。実行可能なアラートはポリシーで有効にします。

グローバル設定

vRealize Operations Manager でデータを保持したり接続セッションをオープンしたままにしたりするさまざまな設定を管理する手段として、グローバル設定の値を変更できます。これらのシステム設定はすべてのユーザーに影響します。

グローバル設定を使用すると、オブジェクトを削除するまでの時間の設定、タイムアウトの設定、履歴データの保存、動的しきい値やキャパシティの計算の使用、vCenter Server ユーザーのログイン方法の指定ができます。自動アクションについては、アクションがアラートの推奨事項から自動的にトリガされるのを許可するかどうかを選択できます。

また、カスタム エクスペリエンス改善プログラムに参加するかどうかを選択できます。

グローバル設定を確認できる場所

左側のペインで、[管理]、[グローバル設定]の順にクリックします。

表 7-3. グローバル設定のオプション

オプション	説明
グローバル設定の編集	ツールバー オプションを使用して設定値を変更します。
設定	設定名。
値	設定の現在の値。 設定値を変更するには、[グローバル設定の編集]をクリックします。
説明	設定についての情報。マウスを設定の上に置くと、その設定の追加情報が表示されます。

vRealize Operations Manager サポート バンドルの作成

vRealize Operations Manager の問題をトラブルシューティングする際、vRealize Operations Manager サポート バンドルを作成して、ログおよび構成ファイルを収集します。

サポート バンドルを作成する場合、便利のよいように vRealize Operations Manager がクラスタ ノードから ZIP ファイルを収集します。

手順

- 1 左側のペインで、[管理] をクリックします。
- 2 [サポート] - [サポート バンドル] を選択します。
- 3 ツールバーからボタンをクリックして、サポート バンドルを追加します。
- 4 ライト サポート バンドルまたはフル サポート バンドルを作成するオプションを選択します。
- 5 サポート用に評価する必要があるクラスタ ノードを選択します。
選択したノードのログのみ、サポート バンドルに含まれます。
- 6 [OK] をクリックし、[OK] をクリックして、サポート バンドルの作成を確認します。
ログのサイズとノードの数によっては、vRealize Operations Manager がサポート バンドルを作成するのに時間がかかる場合があります。

次に進む前に

ツールバーを使用して、分析用にサポート バンドルの ZIP ファイルをダウンロードします。セキュリティのために、サポート バンドルをダウンロードするときに、vRealize Operations Manager から、認証情報の入力を求められます。

ログ ファイルでエラー メッセージを確認するか、トラブルシューティングの支援が必要な場合は、診断データを VMware テクニカル サポートに送ることができます。問題が解決または終了したら、ツールバーを使って、ディスク容量を節約するために古いサポート バンドルを削除してください。

アイコンのカスタマイズ

環境内のすべてのオブジェクトまたはアダプタにはアイコンが用意されています。アイコンの外観はカスタマイズできません。

vRealize Operations Manager によって、各オブジェクトタイプとアダプタタイプにデフォルトのアイコンが割り当てられています。環境内で、オブジェクトタイプとアダプタタイプは集散的にオブジェクトとして認識されます。アイコンは、UI でオブジェクトとして表現され、オブジェクトのタイプの識別に役立ちます。たとえば、ダッシュボードのトポロジグラフウィジェットでは、ラベル付きのアイコンによって、オブジェクト同士の接続方法が表示されます。アイコンを見れば、オブジェクトのタイプを即座に識別できます。

オブジェクトを区別する必要がある場合は、アイコンを変更します。たとえば、仮想マシンアイコンは総称的なアイコンです。vSphere 仮想マシンが提供するデータと Hypervisor 仮想マシンが提供するデータを絵的に区別したければ、それぞれに異なるアイコンを割り当てます。

オブジェクト タイプ アイコンのカスタマイズ

vRealize Operations Manager で使用可能なデフォルトのアイコンを使用するか、オブジェクトタイプに応じて独自の画像ファイルをアップロードできます。アイコンを変更すると、その変更はすべてのユーザーで有効となります。

開始する前に

自分独自のアイコンファイルを使用する場合は、それぞれの画像が PNG 形式であることと高さや幅が同じであることを確認してください。最善の結果を得るには、256x256 ピクセルの画像サイズを使用してください。

手順

- 1 [内容] - [アイコン] - [オブジェクト タイプ アイコン] を選択します。
- 2 オブジェクト タイプ アイコンを割り当てます。
 - a アイコンを変更するオブジェクトタイプをリストから選択します。
デフォルトでは、すべてのアダプタタイプのオブジェクトタイプが一覧表示されます。単一のアダプタタイプに対して有効なオブジェクトタイプのみが表示されるようにするには、ドロップダウンメニューからアダプタタイプを選択します。
 - b [アップロード] アイコンをクリックします。
 - c 使用するファイルがある場所に移動して、そのファイルを選択し、[完了]をクリックします。
- 3 (オプション) デフォルトのアイコンに戻すには、オブジェクトタイプを選択して、[デフォルト アイコンの割り当て] アイコンをクリックします。
元のデフォルト アイコンが表示されます。

アダプタ タイプ アイコンのカスタマイズ

vRealize Operations Manager で使用可能なデフォルトのアイコンを使用するか、アダプタタイプに応じて独自の画像ファイルをアップロードできます。アイコンを変更すると、その変更はすべてのユーザーで有効となります。

開始する前に

自分独自のアイコンファイルを使用する場合は、それぞれの画像が PNG 形式であることと高さや幅が同じであることを確認してください。最善の結果を得るには、256x256 ピクセルの画像サイズを使用してください。

手順

- 1 [内容] - [アイコン] - [アダプタ タイプ アイコン] を選択します。

- 2 アダプタ タイプ アイコンを割り当てます。
 - a アイコンを変更するアダプタ タイプをリストから選択します。
 - b [アップロード] アイコンをクリックします。
 - c 使用するファイルがある場所に移動して、そのファイルを選択し、[完了]をクリックします。
- 3 (オプション) デフォルトのアイコンに戻すには、アダプタ タイプを選択して、[デフォルト アイコンの割り当て] アイコンをクリックします。

元のデフォルト アイコンが表示されます。

OPS-CLI コマンドライン ツール

OPS-CLI ツールは、vRealize Operations Manager データベースの操作に使用できる Java アプリケーションです。VCOPS-CLI ツールと DBCLI ツールに置き換わるものです。

tools ディレクトリまたは <<VCOPS_BASE>>/tools/opsccli/ に実行ファイルがあります。

オペレーティング システム	ファイル名
Linux	ops-cli.sh
Python	ops-cli.py

どの OPS-CLI コマンドでも、**-h** パラメータを指定するとローカライズされた対話式ヘルプが表示されます。

control コマンドを **post_install.sh** スクリプトに追加すると、アダプタのインストールまたはアップグレード後に再記述プロセスがトリガされます。

```
control -h | redescrbe --force
```

サポートされる操作

OPS-CLI ツールでは、次のデータベース操作がサポートされています。

- [dashboard コマンドの動作](#) (P. 232)
dashboard コマンドは、ダッシュボードのデフォルト サマリのインポート、エクスポート、共有、共有解除、削除、順位設定、表示、非表示、設定に使用します。
- [template コマンドの動作](#) (P. 232)
template コマンドは、テンプレートのインポート、エクスポート、共有、共有解除、削除、順位設定に使用します。
- [supermetric コマンドの動作](#) (P. 233)
supermetric コマンドは、スーパー メトリックのインポート、エクスポート、構成、削除に使用します。
- [attribute コマンドの動作](#) (P. 234)
attribute コマンドは、1 つ以上のパッケージに含まれる特定のメトリックのプロパティを構成するために使用します。このメトリックがオブジェクト属性です。
- [reskind コマンドのオブジェクト タイプに関する動作](#) (P. 234)
reskind コマンドは、オブジェクト タイプのデフォルト設定を ResourceKind モデル要素によって定義されているとおりに構成するのに使用します。このコマンドでは、デフォルトの属性またはスーパーメトリック パッケージの設定、動的しきい値の有効化または無効化、早期警告スマート アラートの有効化または無効化ができます。
- [report コマンドの動作](#) (P. 234)
report コマンドは、レポートのインポート、エクスポート、構成、削除に使用します。

- [view コマンドの動作](#) (P. 235)

view コマンドは、ビュー定義のインポート、エクスポート、削除に使用します。

- [file コマンドの動作](#) (P. 235)

file コマンドは、データベース ファイルのインポート、エクスポート、リスト、削除に使用します。このコマンドは、メトリック、テキスト ウィジェット、トポロジ ウィジェット ファイルを扱います。

dashboard コマンドの動作

dashboard コマンドは、ダッシュボードのデフォルト サマリのインポート、エクスポート、共有、共有解除、削除、順位設定、表示、非表示、設定に使用します。

dashboard コマンドの構文は次のとおりです。

```
dashboard -h | import|defsummary|export|share|unshare|delete|reorder|show|hide
[parameters]
```

表 8-1. dashboard コマンドのオプション

コマンド名	説明	構文
dashboard import	ファイルからダッシュボードをインポートし、所有権をユーザー アカウントに割り当てます。	dashboard import -h user-name all group:group_name input-file [--force] [--share all group-name[{,group-name}]] [--retry maxRetryMinutes] [--set rank] [--default] [--create]
dashboard export	既存のダッシュボードをファイルにエクスポートします。	dashboard export -h user-name dashboard-name [output-dir]
dashboard defsummary	ファイルからダッシュボードをインポートし、所有権をユーザー アカウントに割り当てます。	dashboard defsummary -h input-file default --adapterKind adapterKind --resourceKind resourceKind
dashboard share	既存のダッシュボードを 1 つ以上のユーザー グループで共有します。	dashboard share -h user-name dashboard-name all group-name[{,group-name}]
dashboard unshare	指定したグループとのダッシュボードの共有を停止します。	dashboard unshare -h user-name dashboard-name all group-name[{,group-name}]
dashboard delete	ダッシュボードを永久に削除します。	dashboard delete -h user-name all group:group_name dashboard-name
dashboard reorder	ダッシュボードの順位を設定します。デフォルトに設定するオプションがあります。	dashboard reorder -h user-name all group:group_name dashboard-name [--set rank] [--default]
dashboard show	ダッシュボードを表示します。	dashboard show -h user-name all group:group_name {,dashbaordname} all
dashboard hide	ダッシュボードを非表示にします。	dashboard hide -h user-name all group:group_name {,dashboardname} all

template コマンドの動作

template コマンドは、テンプレートのインポート、エクスポート、共有、共有解除、削除、順位設定に使用します。

template コマンドの構文は次のとおりです。

```
template -h | import|export|share|unshare|delete|reorder [parameters]
```


表 8-2. template コマンドの動作

コマンド名	説明	構文
template import	ファイルからテンプレートをインポートします。	<code>template import -h input-file</code> <code>[--force] [--share all group-name[{,group-name}]]</code> <code>[--retry maxRetryMinutes] [--set rank] [--create]</code>
template export	既存のテンプレートをテンプレートファイルにエクスポートします。	<code>template export -h template-name [output-dir]</code>
template share	既存のテンプレートを 1 つ以上のユーザー グループで共有します。	<code>template share -h template-name all group-name[{,group-name}]]</code>
template unshare	指定したグループとのテンプレートとの共有を停止します。	<code>template unshare -h template-name all group-name[{,group-name}]]</code>
template delete	テンプレートを永久に削除します。	<code>template delete -h template-name</code>
template reorder	テンプレートの順位を設定します。順位は、作成されたテンプレートの順序を共有テンプレートに基づいて制御します。	<code>template reorder -h template-name [--set rank]</code>

supermetric コマンドの動作

supermetric コマンドは、スーパー メトリックのインポート、エクスポート、構成、削除に使用します。

supermetric コマンドの構文は次のとおりです。

supermetric -h | import|export|configure|delete [parameters]

表 8-3. supermetric コマンドの動作

コマンド名	説明	構文
supermetric import	ファイルからスーパー メトリックをインポートし、指定されたユーザー アカウントに所有権を割り当てます。	<code>supermetric import -h input-file</code> <code>[--force] [--policies all policy-name[{,policy-name}]]</code> <code>[--check (true false)] [--retry maxRetryMinutes] [--create]</code>
supermetric export	既存のスーパー メトリックをテンプレート ファイルにエクスポートします。	<code>supermetric export -h supermetric-name [output-dir]</code>

表 8-3. supermetric コマンドの動作 (続き)

コマンド名	説明	構文
supermetric configure	1 つ以上のスーパー メトリック パッケージ内のスーパー メトリックのプロパティを構成します。	<pre>supermetric configure -h supermetric-name --policies all policy-name[,{,policy-name}] --check (true false) --ht (true false) --htcriticality level-name --dtabove (true false) --dtbelow (true false) --thresholds threshold-def[,{,threshold-def}]</pre>
supermetric delete	スーパー メトリックを完全に削除します。	<pre>supermetric delete -h supermetric-name</pre>

attribute コマンドの動作

attribute コマンドは、1 つ以上のパッケージに含まれる特定のメトリックのプロパティを構成するために使用します。このメトリックがオブジェクト属性です。

attribute コマンドの構文は次のとおりです。

```
attribute configure -h | adapterkind-key:resourcekind-key attribute-key
--packages all|package-name[,{,package-name}] --check (true|false)
--ht (true|false) --htcriticality level-name
--dtabove (true|false) --dtbelow (true|false)
--thresholds threshold-def[,{,threshold-def}]
```

reskind コマンドのオブジェクト タイプに関する動作

reskind コマンドは、オブジェクトタイプのデフォルト設定を ResourceKind モデル要素によって定義されているとおりに構成するのに使用します。このコマンドでは、デフォルトの属性またはスーパーメトリック パッケージの設定、動的しきい値の有効化または無効化、早期警告スマート アラートの有効化または無効化ができます。

reskind コマンドの構文は次のとおりです。

```
reskind configure -h | adapterkind-key:resourcekind-key
--package package-name --smpackage smpackagename
--dt (true|false) --smartalert (true|false)
```

report コマンドの動作

report コマンドは、レポートのインポート、エクスポート、構成、削除に使用します。

report コマンドの構文は次のとおりです。

```
report -h | import|export|delete [parameters]
```

表 8-4. report コマンドのオプション

コマンド名	説明	構文
report import	ファイルからレポート定義をインポートします。	<pre>report import -h input-file [--force]</pre>
report export	1 つ以上のレポート定義をファイルにエクスポートします。	<pre>report export -h all report-name[,{,report-name}] [output-dir]</pre>
report delete	1 つ以上のレポート定義を永久に削除します。	<pre>report delete -h all report-name[,{,report-name}]</pre>

view コマンドの動作

view コマンドは、ビュー定義のインポート、エクスポート、削除に使用します。

view コマンドの構文は次のとおりです。

view -h | import|export|delete [parameters]

表 8-5. view コマンドの動作

コマンド名	説明	構文
view import	ファイルからビュー定義をインポートします。	view import -h input-file [--force]
view export	1 つ以上のビュー定義をファイルにエクスポートします。	view export -h all view-name[,{view-name}] [output-dir]
view delete	1 つ以上のビュー定義を永久に削除します。	view delete -h all view-name[,{view-name}]

file コマンドの動作

file コマンドは、データベース ファイルのインポート、エクスポート、リスト、削除に使用します。このコマンドは、メトリック、テキストウィジェット、トポロジウィジェット ファイルを扱います。

file コマンドの構文は次のとおりです。

file -h | import|export|delete|list [parameters]

表 8-6. file コマンドの動作

コマンド名	説明	構文
file import	ファイルからメトリックまたはウィジェットをインポートします。	file import -h reskndmetric textwidget topowidget input-file [--title title] [--force]
file export	1 つ以上のメトリックまたはテキストウィジェットをエクスポートするか、トポロジウィジェットをファイルにエクスポートします。	file export -h reskndmetric textwidget topowidget all title[,{title}] [output-dir]
file delete	メトリックまたはウィジェットを永久に削除します。	file delete -h reskndmetric textwidget topowidget all title[,{title}]
file list	すべてのメトリックまたはウィジェット ファイルをリストします。	file list -h reskndmetric textwidget topowidget

インデックス

A

アプリケーション、追加 166
attribute コマンドの動作 234

C

CPU 個数、パワーオフ可アクション 101

D

dashboard
 ウィジェット 170
 ウィジェットの相互作用 181
 ウィジェット リスト 181
 カスタム ダッシュボード 179
 共有 184
 グループ 184
 構成 180
 作成 180
 サマリ タブ 183
 自動切り替え 183
 順序変更 183
 ダッシュボードのナビゲーション 182
dashboard コマンドの動作 232

E

End Point Operations の管理 13, 52
Endpoint Operations Manager、エージェント ログ
 ファイル 59
Endpoint Operations Manager エージェント、イン
 ストールとデプロイ 13
EP Ops エージェント、インストールとデプロイ 13
ESXi 構成ダッシュボード事前定義されたダッシュボー
 ド、ESXi 構成ダッシュボード 178
[エクスポート]、スーパー メトリック 154
E メール、通知 84

F

file コマンドの動作 235

H

HTTP サービス、リモート監視 53

I

ICMP サービス、リモート監視 53, 56

J

JRE、場所の構成 20

L

Linux プラットフォーム、エージェントのインストー
 ル 14, 16
[Log Insight] ページ 62
Log Insight 62

O

Operations 概要ダッシュボード事前定義されたダッ
 シュボード、Operations 概要ダッシュボー
 ド 174
ops-cli ツール 231

P

パスワード、管理者アカウント 220

R

Realize Operations Manager、エージェントの前提条
 件 13
report
 フォーマット 202
 template
 削除 206
 編集 206
 概要 198
 所有者 186
 スケジュール 206
 ダウンロード 206
 名前と説明 200
 ビュー 201
 レイアウト オプション 202
 作成 204
 生成 205
レポート、レポート テンプレート 199
report コマンドの動作 234
reskind 234
reskind コマンドの動作 234
ResourceKind 234
REST
 送信アラート プラグイン 78
 通知 85
REST 通知プラグイン 76

S

Smarts Service Assurance Manager、送信アラート
 プラグイン 82
SMTP、送信アラート プラグイン 77
SNMP トラップ プラグイン 76

SNMP トラップ、送信アラート プラグイン 81
 SSL、構成 41
 supermetric コマンドの動作 233

T

TCP サービス、リモート監視 53, 57
 template コマンドの動作 232

V

vCenter Server アクション、ユーザー アクセス 12
 vCenter Server ユーザー、下位互換性 212
 vCenter Server ユーザーの下位互換性 212
 vCenter Server、ソリューション 9, 11
 vCenter Server 間での仮想マシンの移動 43
 vCenter アダプタ、インスタンスの追加 11
 view
 [エクスポート] 198
 ビューの概要 186
 インポート 198
 可視性 195
 サブジェクト 189
 所有者 186
 データ 192
 名前と説明 187
 ビューの適用の可否 191
 プレゼンテーション 187
 分布タイプ 189
 ワークスペース 187, 189, 192, 195
 作成 186, 197
 実行 197
 view コマンドの動作 235
 vMotion、vRealize Operations Manager での仮想マシンの削除 43
 VMware Tools、アクション 101
 vRealize Automation アクションの統合 100
 vRealize Automation とのアクションの統合 100
 vRealize Operations Manager で Log Insight を構成する 63
 vRealize Operations Manager、インストール 13
 vSphere、ソリューション 9
 vSphere オブジェクト グループへのポリシーの適用 126
 vSphere オブジェクトの分析とレポート作成を行うためのポリシー設定の構成 125
 vSphere の運用ニーズを満たすポリシーの作成 123
 vSphere 運用要件を決定するポリシー 122

W

Windows プラットフォーム
 エージェントのインストール 17, 18
 エージェントのサイレント インストール 19

あ

アイコン、アダプタの 228
 アイコン
 オブジェクト タイプ 228
 カスタマイズ 228
 アクション
 VMware Tools 101
 アラートの定義 97
 概要リスト 97
 仮想マシンのシャットダウン 97
 ゲスト OS のシャットダウン 97
 自動化が推奨される 99
 パワーオフ可 101
 ユーザー アクセス 12
 アクセス コントロール
 権限 209
 ユーザー シナリオ：ロールおよびユーザー アカウントの作成 214
 ユーザーシナリオ、ユーザー アカウントのインポート 216
 アクティブなポリシー 109
 アダプタ
 vCenter Server 11
 アイコン 228
 コレクタ グループ 67
 認証情報 66
 アップグレード、ポリシーに対する影響 105
 アップグレード：Endpoint Operations Management のアップグレード 48
 アプリケーション グループ
 環境概要 165
 管理 165
 アプリケーションの検索 166
 アラート、送信アラート プラグイン 78
 alert
 推奨 73
 送信アラート プラグイン 76, 77, 80–82
 送信設定プラグイン 76
 アラート グループ 95
 アラート定義でのアクションの自動化 145
 アラートの症状
 property 71
 障害 72
 メッセージ イベント 71
 メトリック 71
 メトリック イベント 72
 アラートの定義
 alert 97
 ネガティブなシンプトム 72
 ベスト プラクティス 74
 ポリシー用 145

い

異常、ポリシーの要素 135

インストール

Windows インストーラを使ったエージェントの 18, 19

エージェント 14

エージェント インストーラ 14

エージェントの、RPM から 14

エージェントの、アーカイブから 16, 17

プロパティ ファイルでのエージェントの構成 21

インフラストラクチャ ダッシュボード事前定義された
ダッシュボード、インフラストラクチャ ダッ
シュボード 177**う**

ウィジェット

構成 167

相互作用 168

メトリック構成の管理 168

リソース相互作用モード 169

え

エージェント

agent.properties ファイル 26

Linux コマンド ラインからの起動ツールの実行 42

Linux プラットフォームへのインストール 14, 16

Windows プラットフォームへのサイレント インス
トール 19Windows コマンド ラインからの起動ツールの実
行 42Windows プラットフォームへのインストール 17,
18

アンインストール 43-45

インストールとデプロイ 13

クライアント証明書 41

クラスタでの登録 50

コマンド ラインからの起動 42

サイレント インストール 26

同時に複数インストールする 46

登録 41

非同期 59

プラグインの管理 58

プロパティ 26

プロパティのオーバーライド 25

ログ 59

ログ ファイル 59

ログの構成 59

ログ レベルの構成 60

再インストール 43, 45

エージェント プロパティのオーバーライド 25

エージェントでの Java の前提条件 20

エージェントのアンインストール 44, 45

エージェントのインストール、Java の前提条件 20

エージェントの再インストール 45

エージェント プロパティ

agent.keystore.alias 29

agent.listenPort 30

agent.setup.camSecure プロパティ 33

agent.setup.resetupToken 33

sigar.mirror.procnets 40

sigar.pdh.enableTranslation 40

エージェントが開始する通信の構成 23

構成 21

サーバが開始する通信の構成 23

サイレント インストール 23

通信プロパティの有効化 22

複数のエージェントの 46

お

オブジェクト

OS オブジェクトの作成 50

管理 157

タグによる検索 161

タグの割り当て 159

未設定構成パラメータ 51

追加 158

オブジェクト、概要 156

オブジェクト グループ 111, 162, 163

オブジェクト タイプ、アイコン 228

オブジェクト タイプに関する動作 234

オブジェクト タグ

事前定義 160

追加 161

オブジェクト、データの収集 155

オブジェクトの関係 159

か

外部ユーザー ソース 212

外部ユーザーのソース 212

解放可能な容量、ポリシーの要素 140

概要、スーパー メトリック 149

確認

証明書 222

ポリシーの要素 139

カスタマイズ、アイコン 228

カスタム オブジェクト グループ 162

カスタム グループ 163

カスタム証明書 221

カスタム ポリシー 120

仮想マシン

CPU 設定アクション 97

オペレーティング システムへのマッピング 52

クローン作成 43

パワーオフ アクション 97

パワーオフ アクションの削除 97

- パワーオン アクション 97
- メモリ設定アクション 97
- 仮想マシン構成ダッシュボード事前定義されたダッシュボード、仮想マシン構成ダッシュボード 176
- 仮想マシン使用量ダッシュボード事前定義されたダッシュボード、仮想マシン使用量ダッシュボード 177
- 仮想マシン ダッシュボード 176
- 仮想マシンのクローン、エージェントの管理 43
- 仮想マシンのシャットダウン、アクション 97
- 仮想マシンのトラブルシューティング ダッシュボード事前定義されたダッシュボード、仮想マシンのトラブルシューティング ダッシュボード 175
- 環境概要、アプリケーション グループ 165
- 監視 7
- 管理
 - 管理者パスワードの変更 220
 - ポリシー 105
- 管理者 7
- 管理設定 209

き

- キーストア、構成 24
- 基本設定 127
- キャパシティ概要ダッシュボード事前定義されたダッシュボード、キャパシティ概要ダッシュボード 175

く

- クラスタ、エージェントの登録 50
- クラスタ構成ダッシュボード事前定義されたダッシュボード、クラスタ構成ダッシュボード 177
- クラスタ パフォーマンス ダッシュボード事前定義されたダッシュボード、クラスタ パフォーマンス ダッシュボード 177
- グループ 91, 111, 162
- グローバル設定
 - アクション履歴 226
 - 自動アクション 226
 - 編集 224
 - リスト 225

け

- ゲスト OS のシャットダウン、アクション 97
- 権限 49, 209, 213, 219

こ

- 構成
 - オブジェクトの未設定パラメータ 51
 - 管理設定 209
 - 構成ダイアログを使用したエージェントの 24
- コマンドの動作
 - attribute 234
 - dashboard 232

- file 235
- report 234
- reskind 234
- supermetric 233
- template 232
- view 235
- コレクタ グループ、アダプタ インスタンス 67

さ

- サポートされる構成、Hyperic 13
- サポート バンドル 227
- サマリ タブ、dashboard 183

し

- 時刻、ポリシーの要素 142
- システム コンポーネント監査 220
- システム メッセージ、エージェント ログにリダイレクトする 61
- システム監査レポート 219
- システム要件、Hyperic 13
- 事前定義されたダッシュボード 173
- 自動アクション設定 226
- 自動化、推奨アクション 99
- シナリオ
 - vSphere 本番環境のポリシーの作成 121
 - アプリケーションの追加 166
 - オブジェクト グループ 163
 - 環境の参照、ユーザーシナリオ:新しいアラート定義を作成する 73
 - 本番のデータストア オブジェクトの運用ポリシーの作成 112
 - ユーザー アクセス コントロール、ユーザー アカウントのインポート 216
 - ユーザー アクセス コントロール: ロールおよびユーザー アカウントの作成 214
- 障害、ポリシーの要素 136
- 障害症状、alert 72
- 使用可能な容量、ポリシーの要素 136
- 症状
 - property 71
 - 障害 72
 - 取り消した 72
 - メッセージ イベント 71
 - メトリック 71
 - メトリック イベント 72
- 症状の定義、ポリシー用 146
- 証明書
 - 確認 222
 - カスタム 221
 - 内容例 223
 - 要件 221
- 所有者
 - report 186
 - view 186

シングル サインオン 216
 シングル サインオン ソース、ソースの編集 218
 シンptom、ベスト プラクティス 74

す

推奨、アラート 73
 推奨事項、ベスト プラクティス 74
 スーパー メトリック
 [エクスポート] 154
 概要 149
 追加 150
 スーパー メトリックの演算子 153
 スタート ガイド ダッシュボード 174
 スナップショット、未使用アクションの削除 97
 スマート SAM 通知プラグイン 76

せ

セキュリティ、パスフレーズ 220
 接続、データ ソース 9
 設定、グローバル 224, 226
 前提条件
 Realize Operations Manager のインストール 13
 エージェントの Java 20

そ

送信アラート プラグイン
 REST プラグイン 78
 Smarts Service Assurance Manager 82
 SMTP 77
 SNMP トラップ 81
 標準の電子メール 77
 ログ ファイル 80
 送信レポート プラグイン、ネットワーク共有 80, 202
 ソリューション、vCenter Server 9, 11
 ソリューション アダプタ、認証情報 66

た

対象読者 7
 タグ、オブジェクト 159
 ダッシュボード 94, 167, 172
 ダッシュボード : Log Insight 173
 ダッシュボード タイプ 173
 ダッシュボードの管理 183
 ダッシュボードの作成 180
 ダッシュボードのタイプ 173

つ

通信
 CA 証明書 41
 SSL 41
 安全 41
 サムプリント 41
 通信プロパティ、有効化 22
 ツール、ops-cli 231

て

提供されるポリシー 128
 データストア オブジェクトにポリシーを適用する 117
 データストア オブジェクトのディスク使用量が表示されるダッシュボードの作成 118
 データストア オブジェクトのポリシー アラートおよびシンptomの定義のオーバーライド 116
 データストア オブジェクトのポリシー ディスク領域属性の有効化 116
 データストア オブジェクトのポリシー分析設定のオーバーライド 115
 データストア キャパシティ ダッシュボード事前定義されたダッシュボード、データストア キャパシティ ダッシュボード 178
 データストアのパフォーマンス ダッシュボード事前定義されたダッシュボード、データストアのパフォーマンス ダッシュボード 178
 データ ソース、接続 9
 データ保持 224, 226
 テクニカル サポート 227
 デフォルト ポリシー 127

と

トラブルシューティング、ユーザー シナリオ、新しいアラート定義の作成 73

に

認証情報、アダプタ 66
 認証ソース、シングル サインオン 216

ね

ネガティブなシンptom 72
 ネットワーク共有、送信レポート プラグイン 80, 202
 ネットワーク構成ダッシュボード事前定義されたダッシュボード、ネットワーク構成ダッシュボード 179
 ネットワーク共有プラグイン 76

の

ノード、パスフレーズ 220
 残りの容量と時間、ポリシーの要素 136

は

パスフレーズ 220
 パラメータ、オブジェクトの未設定 51
 パワーオフ可アクション
 CPU 個数 101
 メモリ 101

ひ

ビデオ、自動アクション 99
 非同期エージェント グループ 59
 ビューのインポート 198
 ビューのエクスポート 198
 ビューの可用性 191

create view 186, 197
 ビューの実行 197
 表示
 削除 196
 編集 196
 ビュー 167
 標準の電子メール、送信アラート プラグイン 77

ふ

filter、送信アラート 83
 負荷、ポリシーの要素 138
 複数のエージェント
 個別にインストール 47
 同時にインストール 46, 47
 標準のプロパティ ファイルの作成 46
 プラグイン
 エージェントと同期 59
 除外 58
 送信アラート 76–78, 80–82
 包含 58
 ロードの構成 58
 プラットフォーム
 Linux 14, 16
 Windows 17–19
 プロパティ
 agent.keystore.password 29
 agent.keystore.path 30
 agent.logDir 30
 agent.logFile 30
 agent.logLevel 31
 agent.logLevel.SystemErr 31
 agent.logLevel.SystemOut 31
 agent.proxyHost 31
 agent.proxyPort 31
 agent.setup.acceptUnverifiedCertificate 32
 agent.setup.camIP 32
 agent.setup.camLogin 32
 agent.setup.camPort 32
 agent.setup.camPword 33
 agent.setup.camSSLPort 33
 agent.setup.unidirectional 34
 agent.startupTimeOut 34
 autoinventory.defaultScan.interval.millis 34
 autoinventory.runtimeScan.interval.millis 34
 http.useragent 34
 log4j 35
 platform.log_track.eventfmt 36
 plugins.exclude 37
 plugins.include 37
 postgresql.database.name.format 37
 postgresql.index.name.format 37
 postgresql.server.name.format 38
 postgresql.table.name.format 38

scheduleThread.cancelTimeout 39
 scheduleThread.fetchLogTimeout 39
 scheduleThread.poolsize 39
 scheduleThread.queueSize 40
 snmpTrapReceiver.listenAddress 40
 値の暗号化 26
 エージェントの構成 21
 プロパティ症状、alert 71

へ

ベスト プラクティス
 アラートの定義 74
 シンプトム 74
 推奨事項 74
 ヘビー ヒッター仮想マシン ダッシュボード事前定義さ
 れたダッシュボード、ヘビー ヒッター仮想マ
 シン ダッシュボード 176
 編集、グローバル設定 224

ほ

方法
 アクションによるアラートの作成と自動化 99
 アラートと関連アクションの自動化 99
 自動化のアラートとアクションの使用 99
 保持、データ 224, 226
 保守 7
 ポリシー
 vSphere オブジェクト グループへのポリシーの適
 用 126
 [> SAN analysis settings (> SAN 分析設定)] ワー
 クスペース 133
 vSphere 本番環境のポリシーを作成するユーザー シ
 ナリオ 121
 アクティブなポリシー 109
 アップグレードの影響 105
 アラートの定義 145
 異常要素 135
 オーバーライドのアラートの定義および症状の定義
 のワークスペース 144
 解放可能な容量の要素 140
 カスタム 120
 管理 105
 権限 105
 コンプライアンス要素 139
 時間要素 142
 障害要素 136
 使用可能な容量の要素 136
 症状の定義の要素 146
 責任 107
 属性とプロパティのオーバーライド ワークスペー
 ス 143
 デフォルト 127
 残りの容量と時間要素 136
 負荷要素 138

- ベース ポリシーの選択ワークスペース 132
- ポリシーのグループへの適用ワークスペース 148
- 本番のデータストア オブジェクトの運用ポリシーを
作成するためのユーザー シナリオ 112
- 密度要素 141
- 目的 107
- 優先順位付け 109
- ライブラリ 107
- ワークスペース 130
- ワークスペースの概要 132
- ワークロード要素 134
- ポリシー、ワークスペース 129
- ポリシーのカスタム プロファイル、ワークスペース 148
- ポリシーの構成 105
- ポリシーのタイプ 120
- ポリシーの優先順位付け 109
- ポリシーのライブラリ 107
- ポリシーのワークロード自動化、ワークスペース 142
- ポリシーの新しいオブジェクト グループの作成 114
- ポリシーの新しいグループ タイプの作成 113

ま

- マッピング、仮想マシンをオペレーティング システム
に 52

み

- 密度、ポリシーの要素 141

め

- メッセージ イベント症状、alert 71
- メトリック イベント症状、alert 72
- メトリック構成、管理 168
- メトリック構成の管理 168
- メトリックの症状、alert 71
- メモリ、パワーオフ可 101

も

- 問題、ユーザーシナリオ:新しいアラート定義を作成す
る 73
- 問題への対応、ユーザーシナリオ:新しいアラート定義
を作成する 73

ゆ

- ユーザー
 - vCenter Server 210
 - アカウント 209
 - 下位互換性 212
 - 外部ソース 212
 - 権限 209
 - ローカル 210

- ロール 209
- 外部 210
- ユーザー アクセス
 - vCenter Server アクション 12
 - アクション 12
- ユーザー アカウントの管理 209
- ユーザー アクセス コントロール、権限 209
- ユーザー シナリオ
 - vSphere 本番環境のポリシーの作成 121
 - アクセス コントロール、ユーザー アカウントのイン
ポート 216
 - アクセス コントロール：ロールおよびユーザー アカ
ウントの作成 214
 - アクセス コントロール 213
 - ビュー 196
 - 本番のデータストア オブジェクトの運用ポリシーの
作成 112
 - ユーザー アカウントの作成 214
 - ユーザーシナリオ:新しいアラート定義を作成する 73
 - レポート 203
- ユーザー向けの外部ソース 209

よ

- 要件、証明書 221
- 用語集 7

り

- リソース相互作用モード、ウィジェット 169
- リモート監視
 - HTTP サービス 53
 - ICMP サービス 53, 56
 - TCP サービス 53, 57

る

- ループバック アドレス localhost 21

れ

- 例、証明書の内容 223
- レポート、生成されたレポート 199
- レポート テンプレート 200
- レポート テンプレートの作成 200
- レポートのスケジュール設定 206
- レポートのダウンロード 206
- レポートの作成 204

ろ

- ローカル ユーザー 210
- ロール 49, 209, 213
- ログ
 - エージェント ログの名前の構成 60
 - エージェント ログ ファイル 59
 - エージェントの場所または名前の構成 60
 - 構成 59

- システム メッセージをリダイレクトする 61
- ログ レベルの構成 60, 61
- ログ ファイル
 - Endpoint Operations Manager エージェント 59
 - 送信アラート プラグイン 80
- ログ ファイル プラグイン 76
- [ログ] タブ 63
- ログ ファイルの表示 49
- ログ ファイルへのアクセス 49

わ

- ワークスペース
 - ベース ポリシーの選択 132
 - ポリシー 129, 130
 - ポリシー オーバーライドのアラートの定義および症状の定義 144
 - ポリシーの概要 132
 - ポリシーのカスタム プロファイル 148
 - ポリシーのポリシーのグループへの適用 148
 - ポリシーのワークロード自動化 142
 - ポリシー分析設定 133
 - ポリシー メトリックとプロパティの収集 143
- ワークロード、ポリシーの要素 134